

## 愛知学院大学

## 教養部紀要

## 第59巻 第3・4合併号

## 教養部設立40周年記念特集

## 特別寄稿

- 稲垣 正 巳：教養教育——過去・現在・未来——…………… ( 1 )
- 吉田 道 興：愛知学院大学の宗教教育試論——「建学の精神」のルーツを探して——…………… ( 9 )
- 山口 正 人：自然科学・化学と教養教育…………… ( 27 )
- 近藤 勝 志：教養部の英語教育…………… ( 37 )

## 論 文

- 山野 明 男：石川県河北潟干拓地における営農展開の一考察…………… ( 43 )
- 久馬 栄 道：数学における数の実在論について…………… ( 65 )
- 清水 義 和：マルセル・デュシャンと寺山修司  
——レディ・メイドとコンセプチュアル・アート——…………… ( 73 )
- 清水 義 和：吉増剛造と寺山修司——詩人がイメージする映像論——…………… (103)
- 都築正喜・神谷厚徳：A Study of Isochrony Theories in English…………… (127)
- 都 築 正 喜：Palatalness and Palatalization of Sounds for Speech Therapists (Part 1)…………… (137)
- 河野 敏 宏：『三才図会』草木八巻～十一巻の出典——「証類本草」からの引用——…………… (236)
- 河野 敏 宏：『三才図会』草木八巻～十一巻の出典——『救荒本草』『茹草編』からの引用——  
…………… (222)
- 川 口 高 風：現代の仏教各宗の五条衣…………… (202)

## 資 料

- 川 口 高 風：名古屋の寺院に関する木版資料について(八)…………… (184)

- 研究業績 (2011年1月～12月)…………… (237)
- 第59巻総目次…………… (247)

2012

愛知学院大学教養部

# 教養教育——過去・現在・未来——

稲垣正巳

(現教養部長 平成20年度～)

愛知学院大学に教養部が設立されたのは、昭和46年(1971年)のこと。したがって、設立以来すでに40年を越える歳月が流れ、今年4月になると42年目に入ります。というわけで、教養教育研究会では、教養部設立40周年を記念して、『教養部紀要』の第58巻第4号を特集号として刊行することになりました。(残念ながら、第3号の原稿の集まりが悪く、3-4号の合併号になってしまいました……。)そこで、本学における教養部設立前から現在に至るまでの教養教育(一般教育)の変遷をたどり、現在の状況について述べるとともに、未来に向けて教養教育はどうあるべきかについて、私見を述べてみたいと思います。そして同時に、昭和22年(1947年)に新制大学がスタートして以来、文部省(のちに文部科学省)や世間が、教養教育を、あるいは教養部という組織をどのように考え、どのように扱ってきたかについても、触れてみたいと思います。

昭和46年に、本学に教養部が設立されたと申しましたが、何もなかったところからいきなり教養部という組織ができたわけではありません。新制大学が発足して以来、本学に限れば、昭和28年(1953年)に商学部が開設されて以来、「一般教養」に関する教育が実施されております。そして本学では、昭和40年(1965年)に一般教育部が設立されました。しかし、この一般教育部は学則上に規程もなく、したがって責任の所在も明確ではない仮の組織でしかなく、「一般教育部」という名称自体も、仮称でしかありませんでした。実質的には、教養部の前身として、一般教育部が機能していたものの、正式に教養教育(一般教育)を担う機関が本学において設立されたのは、くりかえしますが、今から41年前の昭和46年(1971年)のことです。

このような動きは、本学独自のものではなく、当時の大学設置基準に則った措置であり、また世の中の動きを反映したものであることは、言うまでもありません。そこで、昭和22年(1947年)の6・3・3・4制の発足以後、平成3年(1991年)の大学設置基準の大綱化に至るまでの新制大学に関する大学内外の動きを簡単にみておきたいと思います。

まず、昭和22年に新制大学がスタートしますが、その後、旧制大学のみならず、さまざまな旧制高等教育機関が「大学」に一元化されます。そして同時に、一般教育の理念が取り入れられます。一般教育の理念とは、専門的な知識の修得にとどまらず、学生に幅広い知識を身につけさせ、幅広いものの見方を修得させて自主的・総合的に考える力をつけさせるということであり、現在の教養教育がめざすところと大差はありません。その後、昭和31年(1956年)に、一般教育科目の中に、外国語、保健体育等の基礎教育科目が導入されます。そして、一般教育を担当する組織として、多くの大学に教養部が設置され、1～2年生が教養課程、そして3～4年生(医療系学部では3～6年生)が専門課程という時代が続きます。本学でも、この動きに沿って教養部が設置されたと言えます。

このように、高い理想をもって導入された一般教育ですが、やがて当初の理想から離れて一般教育は形骸化することになります。形骸化のひとつの原因として、多くの大学教員が研究こそ重要だと考え(研究優先主義さらには研究至上主義)、教育を軽視していたこと、あるいは教育に多大なエネルギーを費やしたところで、正当に評価されないといったことがあげられます。たとえば、昇任に際しても、研究業績のみが評価の対象となり、教育業績は全く評価されませんでした。その結果、一般教育は形骸化することになりますが、形骸化の例はいくらでもあげることができます。たとえば、私が本学に着任したころ、某名物教授の定期試験は、何を参照してもよいというだけではなく、答案用紙に何が書いてあっても単位は取れるというので、受講学生の多くは、新聞を持ち込んで新聞記事を丸写しにするなど、問題とは何の関係もないことを書いていました。一方、少数ながら、まともに解答をしている学生ももちろんおりましたが、本来あるべきこのような学生の答案よりも、問題とは何の関係もないことを書いている学生の方が良い成績がつくこともあったと、実際に受講していた当時の学生から聞いたことがあります。これと全く同じことが他でもみられたかどうかはわかりませんが、これに類することは本学に限ったことでもなければ、一般教育に限ったことでもありませんでした。私個人のことを申して恐縮ですが、私が大学生(教養課程ではなく専門課程)のころ、学部長になって忙しいからという理由で、本来は現在と同様に年間30回の授業をすることになっていたにもかかわらず、1年間の授業は合計5～6回のみ、後はすべて休講の連続といった豪傑や、登録さえすれば単位は取れるという噂があって、私はためしに登録だけをして授業に全く出なかったにもかかわらず、成績表をみると80点がついていたというような、今から考える

とありえないことが日常的にみられました。そして、それを誰も問題にすることはありませんでした。したがって、教育の軽視は当時のわが国の大学においては日常茶飯事であり、形骸化していたのは一般教育のみならず、大学教育全体であったと言えます。

このような教育の軽視以外にも、当時、「一般教養」が揶揄されて「パンキョウ」と呼ばれていたことが示すように、一般教育（教養教育）に対する世間の評価は低く、のみならず、大学内には、学部教員（専門科目担当教員）が「上」、一般教育（教養教育）担当教員が「下」というヒエラルキーがあり、したがって、大学内では一般教育（教養教育）担当教員は学部教員からの評価も低かったことが、一般教育あるいは教養教育の形骸化と無関係ではないように思われます。多くの学生にとっても、一般教育（教養教育）科目は専門教育科目以上に学ぶ動機も希薄で、定められた単位数を充たしさえすればよい科目であったと言えます。当時よく言われたことは、一般教育あるいは教養教育は高校の授業のくりかえしにすぎないということでもあります。科目によっては、というよりむしろ授業によってはそういうこともあったかもしれませんが、多くの授業は、高校の授業と同じということとはなかったはずです。また、学生の学ぶ動機が希薄であるということに関しては、新制大学がスタートして以後、ひとにぎりのエリートのものであった大学が、大衆化していったこととも関係があると思われます。大学が大衆化し、大学進学率が上昇することによって、自分が入学した専門学部とは直接関係がなさそうな授業には関心をもてない学生や、さらには卒業して、あるいは就職してすぐに役立つものにしか関心を示さない学生が増加するであろうことは、容易に推測できます。専門学部の教員や大衆化した学生の目には、彼らにとってもともと存在理由の弱い科目群は、実際に形骸化しているかどうかは別にして、形骸化しているように映るのではないのでしょうか。

このような動きに対して、あるいは世間の動きや文部省（当時）の方針に対して異を唱えるのは容易ではありませんが、少なくとも、学生に向けて、あるいは専門科目担当教員に向けて、一般教育あるいは教養教育の意義を説く努力は必要であり、また実際にそのような努力が全くなされなかったわけではありません。しかし、上で述べたように、授業はいいかげん、評価はでたらめ、というのでは説得力がないどころか、反論の余地もないと言わざるをえません。

一般教育あるいは教養教育がこのような状況にある中で、平成3年（1991年）2月に、大学審議会が出した答申「大学教育の改善について」は、特に大学関係者に大きなインパクトを与えました。この答申を受けて、同年6月に大学設置基準が改正されますが、その内容は、大綱化であります。すなわち、一般教育と専門教育の区分、そして一般教育内では、一般（人文・社会・自然）、外国語、保健体育といった科目の区分が必ずしも必要ではなく、それぞれの大学は、4年間（あるいは6年間）の学部教育を自由に行うことができるようになりました。

た。この大学設置基準の大綱化を機に、それ以前にもまして、一般に「教養部」は不要な存在とみなされ、世の中の動きは教養部の解体・改組へと進んでいきます。特に国立大学では東京医科歯科大学を除き、教養部はすべて廃止され、私立大学でも、多くの大学で教養部は姿を消しました。こうした流れは、専門教育を重視したカリキュラム編成へと進み、教養教育は、それまで以上に軽視されることとなります。

この大学設置基準の大綱化を受けて、本学でも平成6年度（1994年度）入学者より、新しいカリキュラムが適用されます。このカリキュラムにおいて、卒業要件単位数は若干減少しました（一部の学部を除き128単位）。そしてその内訳は、専門教育科目の卒業要件単位数についてはそれ以前とほとんど変更なく、教養教育科目の卒業要件単位数が減るとともに、新たにグレイゾーン（卒業要件単位の中で、教養教育科目と専門教育科目のいずれでも充足できる部分であり、一部の学部を除き16単位）が設定されるというものでした。このカリキュラムは、文部省（当時）と世間の意向に沿った専門教育重視・教養教育軽視のカリキュラムであり、大学大衆化による学力低下に対する考慮、すなわち学生の負担軽減と、さらに付け加えれば、大学経営上のメリットをあわせもつものだったと言えます。このように、本学においても教養教育を軽視するカリキュラムへと変更を余儀なくされたものの、本学の平成6年度以降の新しい教養教育のカリキュラムは、平成5年度以前の科目設定をそのまま引き継ぐものではありませんでした。新カリキュラムの設定を機に、セメスター制を取り入れたほか、学問への導入を目的とする「教養セミナー」、そして、ひとつのテーマについてさまざまな専門分野の視点から考察する総合科目や、特定の主題について深く考察する特定主題科目を設定するなど、新たな取り組みもしてまいりました。

こうして、大学設置基準の大綱化以後しばらく、専門教育重視・教養教育軽視の傾向は続くこととなります。しかし、平成10年（1998年）に大学審議会は「21世紀の大学像と今後の改革方策について」を出し、このころから、教養教育に関する世間の、あるいは国の考え方に変化がみられるようになります。「21世紀の大学像と今後の改革方策について」では、それまでの教養教育軽視を問題点として指摘し、21世紀に向けて教養教育が重要となるとの認識が示されており。そして、平成14年（2002年）2月に中央教育審議会答申「新しい時代における教養教育の在り方について」が出ます。この答申では、大学教育のみならず、「幼・少年期における教養教育」から「成人の教養の涵養」に至るまで、あらゆる世代にわたっての教養教育がとりあげられております。そして、大学教育に関しては、「大学教育には教養教育の抜本的充実が不可避であり、質の高い教育を提供できない大学は将来的に淘汰されざるを得ない」という覚悟で、教養教育の再構築に取り組む必要があるとして、教養教育の重要性を強調し、教養教育を再評価しているだけではなく、上で述べたような大学設置基準の大綱化以前の

教育軽視の具体例は論外だとしても、安易な気持ちで教養教育に臨むことへの警鐘を鳴らしています。

その後、平成22年（2010年）12月に中央教育審議会が、「学士課程教育の構築に向けて」と題して、文部科学省に答申をしました。本学では、平成6年度以降のカリキュラムにおいて、医療系学部を除き、それまでの「教養課程」と「専門課程」といった発想をやめて、不完全ながら「教養教育科目」と「専門教育科目」を有機的に配置した楔形カリキュラムになっていますが、この答申では、「教養教育科目」と「専門教育科目」の区別を重視するのではなく、両者をまとめて「学士課程教育」と称しております。そして、教養教育に関しては、「教養の意味・内容をめぐっては、多年にわたって様々な議論のあるところであるが、今回の参考指針は、学生の学習成果という観点から記述したものである。ここに挙げられたものは、教養を身に付けた市民として行動できる能力として位置付けることができる」と述べております。ここでは、「学士課程教育」の中の基盤としての「教養教育」という考え方が示されているものの、教養教育に関して詳述されているわけではありません。しかしこの答申の内容は、再び教養教育の軽視に向かったものではありません。そこでは「単位制度の実質化」や「成績評価」や「初年次における教育上の配慮」等、教養教育にとっても専門教育にとっても重要なことが取り上げられているほか、「教養を身に付けた市民として行動できる能力」をつけるために必要な、いわゆる初年次教育の重要性が示されております。

このように、大学設置基準の大綱化から約10年が経過した頃に、教養教育に対する国（文部科学省）の考え方に変化がみられ、それに合わせて、多くの大学は教養教育を重視する方向をめざし、あるいは「重視」とまでは言えないにしても、少なくとも教養教育に注目することになります。しかし、それ以後今日に至るまで、解体された教養部の復活の事例はまったくありません。これは、潰すことは比較的容易であっても、一旦潰したものを復活させるには多大のエネルギーを要すること、そして解体の当事者が、「教養部解体はまちがっていた」とは言いたくないからだと推察されます。（付言すれば、よく耳にする「共通教育」という言い方は、「教養教育」という言い方を避けるための便法ではないかと勘繰りたくなります。）それゆえ、文部科学省も教養教育は重要だとは言うものの、残念ながら、教養部の存在はまったく評価しておりません。（正当な評価をすれば、かつて文部省が教養部の解体・改組に向かうようにしむけたことと矛盾することになります。）しかし、文部科学省の方針はどうであれ、教養教育が重要だというのなら、教養部という組織が今も存在する本学としては、あるいはわれわれがその組織に属するのであってみれば、それを生かす方向で教養教育の充実を考えていく必要があるのではないのでしょうか。

ところで、平成22年の中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」にもあるように、教養教育の意味と内容に関しては、様々な議論があることは承知の上で、敢えて教養教育を分類すれば、リベラルアーツ教育（あるいは一般教育）と導入教育、そして後者は、高校から大学への導入教育と専門教育への導入教育とに分けることができるのではないのでしょうか。そして、リベラルアーツこそが本来の教養教育であると私は考えますが、もちろん、古代ローマの伝統、すなわち文法学、論理学、修辞学の三学（trivium）と代数学、幾何学、音楽、天文学の四科（quadrivium）をそのまま現代の大学でも行うべきだと言いたいわけではありません。それでは具体的に何かとたずねられれば、平成14年の中央教育審議会の答申がその答のヒントになると思われまふ。この答申において、教養教育の内容について述べられているところをまとめれば、つぎのような項目をあげることができます。

1. 社会とのかかわりの中で自己を位置づけ律していく力をつける。
2. 他者の立場に立って考えることができる想像力を身につける。
3. 我が国の伝統や文化、歴史等に対する理解を深める。
4. 異なる国や地域の伝統や文化を理解し、互いに尊重しあう資質・態度を身につける。
5. 自然や物の成り立ちを理解し、論理的に考える能力を身につける。
6. 全ての知的活動の基盤となる国語力を育成する。
7. 和漢洋の古典を重視し、豊かな情緒や感性を涵養する。

以上は、リベラルアーツ教育（あるいは一般教育）のみならず、導入教育にもかかわるところが多々あり、また、どの科目がどの項目に該当するかを、一対一の関係になるように振り分けることはできませんし、無理に振り分けることに意味があるとは思いません。しかし、これらの項目が示すところが、現代のリベラルアーツが目ざすべきところではないのでしょうか。

このようなりベラルアーツあるいは一般教育を基幹に据えて、そのほかに導入教育を行うことがこれからの教養教育の使命ではないかと思ひます。導入教育の中で、専門教育に向けての導入教育は、教養教育とも専門教育ともみなすことができるもの（教養教育科目に属することも専門教育科目に属することも可能なもの）であり、その内容については、〇〇学部向けの××学というように、学部ごとに差があつてよいわけですが、高校から大学への導入教育は、基本的には全学部共通に、いわゆる初年次教育として実施されるべきであると、私は考えます。そして、初年次教育の中でも、大学生としてのスキル、すなわちスチューデント・スキル（大学生としての在り方）およびスタディ・スキル（大学で必要とされる学習技術）が特に重要であり、大学に入ってくる新入生は、〇〇学部の学生である以前に、まず大学生であり、われわれ

としては、大学生として必要なスキルを教授することが、今や必要不可欠であると考えます。古き良き時代を知る人たちの中には、あるいはそうではない人たちの中にも、そんなものは必要ない、そんなことをするのは大学ではない、と言う人がいるかもしれませんが、大学が大衆化からユニバーサル化に向かい、さらに、現代の大学生がいわゆる「ゆとり教育」を受けてきた世代であることを考えれば、無視できるものではありません。

わが国の一般的な大学がおかれた以上のような状況をふまえて、本学教養部でも、本来、学問への導入をはかることを目的としていた教養セミナーⅠ・Ⅱという科目の中で、スケジュール・スキルおよびスタディ・スキルを中心に初年次教育を実施しています。しかし、十分な時間を確保することがむずかしい上に、担当者によって温度差があり、それは不十分であると言わざるをえません。今後は、別科目の設定も含めて初年次教育の充実をどうするのか、考えていく必要があるでしょう。そして、リベラルアーツに関しても、何でもよいかから担当者任せというのは、都合のよい言い訳にすぎません。こと細かく授業内容や授業方法を決めて画一化をめざす必要は全くありませんが、科目ごとに、あるいは全体を通じて、何をいかに教育していくかについて、ある程度の基本方針を定め、関係者のコンセンサスを得る必要があるのではないのでしょうか。多様な授業内容や授業方法、そして多様な人材、これが教養部のよいところであるという意見は一理ありますが、本当に何の統一性もないのならば、それは単なるカオスでしかありません。

一昨年、名古屋市営地下鉄の車内広告（K大学現代文化学部）で知ったことですが、心理学では「現状維持バイアス」ということばがあります。このことばは、よほど大きなメリットがない限り、変化は望まず、変化への動きを何とか止めようとする心の動きを意味します。改革のための改革は必要ありませんが、本当に必要な変化は受け入れなければ、あるいは改めるべきところは改めなければ、その昔パンキョウと揶揄された一般教育が形骸化していったように、教養教育は、動脈硬化に陥り孤立する恐れがあることを最後に申し添えておきます。



# 愛知学院大学の宗教教育試論

——「建学の精神」のルーツを探して——

吉 田 道 興

(平成12年度～平成15年度 教養部長)

## 構成

はじめに 「宗教教育」

一、本学の宗教教育

二、積尊に学ぶ 仏教の基本的「修道」

三、部派仏教(学派仏教)の「修道」

(1) 三学

(2) 三十七菩提分法

(3) 『俱舍論』と『成唯識論』の修道

四、大乘仏教の「修道」

(1) 「六波羅蜜多」と「四摂法」の布施

五、禪の修道

(1) 『学道用心集』

(2) 『正法眼蔵』

おわりに

## はじめに 「宗教教育」

周知のように本学は「私立」の範疇にはいるが曹洞宗の宗立大学である。本学の宗教教育は、教養部教養教育の中で必修科目「宗教学Ⅰ・Ⅱ」として設定しているものの、一種の「建前」(看板)としてあるだけで、後述するように十全なものとは言えない。

「宗教教育」に関し法律的には、戦前における「現人神(あらひとがみ)」「神国日本」の功罪による反省から、戦後になって政教分離となる。宗教は一応尊重され「信教の自由」(憲法20条3項)を保障されているが、国および国立の機関における宗教教育、その他の宗教活動は原則的に禁止されている(教育基本法15条2項〔旧9条2項〕)。すなわち公立学校における「宗教」は、社会の歴史分野の日本史A・B、世界史A・B、地理分野、倫理等の時間に哲学や思想の一種として取り上げられているにすぎない。つまり公立学校の宗教教育には、一定の規制が布かれているわけである。一方、私立学校における宗教教育は「道徳科目」と同じ位置づけで行われ、規制はほとんどないといえよう。

『学習指導要領』には、宗教教育に関して(一)宗教的知識教育と(二)宗教的情操教育、所謂「宗

教知識教育」と「宗教情操教育」の二種を挙げている。その他に私立学校における特定の宗教（仏教、キリスト教、イスラム、神道等）による「宗派教育」も可能である。その中「仏教教育」にしても宗教知識に属する「仏教一般教育（一般仏教教育）」、各「宗派教育」、宗教情操に属する「仏教情操教育」、「宗派情操教育」もあろう。宗教の基本的知識について教育を施す点に異論はないが、人格形成上有効とみなされる宗教情操教育に関しては教える側と教わる側の微妙な心情（信仰）に深く関わり、諸種の論議があつて容易に着点は見出されていない状況のようである。

## 一 本学の宗教教育

本学では、宗教学のテキストとして『宗教と人間』「《副題》真（まこと）の生き方を求めて」第二版〔愛知学院大学宗教研究会編《本学教員14名の執筆陣》、大東出版社、2005年3月〕を使用している。その冒頭に「建学の精神 伝統の中に躍動する本学の教育理念」（行学一体・報恩感謝。筆者稿、内容は割愛）を掲げる。本文には以下の三編の柱を立てた。

- (一) 宗教の世界 (1)現代人の生活形態と宗教、(2)宗教理解への道標、(3)世界の宗教、(4)現代人と宗教
- (二) 仏教の世界 (1)インド仏教、(2)中国仏教、(3)日本仏教
- (三) 禅の世界 (1)禅の概要、(2)中国の禅、(3)日本の禅、(4)現代と禅

以上の各編の後には「参考文献」を付す。その後に附録として(四)実践的人間学の勧め・(五)坐禅実習の心得と作法、末尾には地図（インド・中国）・禅宗法系図・索引がある。

学生が便利に利用できるように配慮工夫した。ただし、学生が喜んで受講しているかどうか、またわかり易くなっているかどうかは別問題であり、ここでは言及しない。なお、これとは別に上掲(五)坐禅実習とあるように春学期の終盤に永平寺の「一泊参禅」に備え、学内の坐禅堂で基礎的指導を行っている。テキストの使用と方法は、宗教学担当教員に一任しているが、「講義概要」のシラバスを見ると大半の担当者は「宗教知識教育」の線を実施していることが共通している。担当者の判断で曹洞宗の「宗派教育」にすべて当てることも可能であるにも関わらず、「宗派教育」の授業中に占める時間は、年間30時間中、何と1～6時間の範囲であり非常に少ない。筆者は両祖（道元・瑩山）の伝記等2時間ほどである。さらに数年前より大学自体の仏教儀式（降誕会・成道会・両祖忌・涅槃会）も教職員が参加して行うこともなくなり、内献と称して学院本部の講堂で一部の教職員で行っているだけである。教職員と学生が参加する仏教儀式は入学式、卒業式、開校記念式典の際、「三帰依文」（仏法僧の三宝に帰投依憑す）を唱え『般若心経』や『修証儀』をごく短い時間に限って読誦する程度である。全学的に

禅研究所および坐禅堂の学内外における有効活用も今いち。冒頭で「十全でない」と指摘したのはこのような面を含んでいる。

次に豊かな情緒や敬虔な心、平和を求める心を育み、時に感動的な「法話」等を伴う「宗教情操教育」の実態は、上記の担当者のシラバスを見る限り全く不明である。筆者の場合、授業にできるだけ各種の視聴覚教材を使用し、各宗教の開祖や宗祖の伝記や思想には感銘深いと思われる「逸話」類をいくつか盛り込むように努めている。特に釈尊の言行録として残る有名な『ダンマパダ』や『スッタニパータ』中に現代でも通ずる真理を含んでいる内容を採り上げ、解説を施し読み味をたうえに課した「感想文」中に感銘や共感を若干引き出した程度である。今後さらに多面的な工夫を加える必要を痛感している。

## 二 釈尊に学ぶ 仏教の基本的「修道」

「仏伝」史料において釈尊の「出家」の動機は、実母の死やシャカ族の支配者コーサラ国の圧迫、若き釈尊の感受性豊かな気質等の背景も考慮できるが、『(パーリ語) マハーパリニッバーナ・スッタタ』(漢訳「涅槃経」)によると名利(名誉・地位・財産・妻子)を捨て「善なるもの」(パーリ語「クサラ」)を求めて決意実行したものと伝えられる。自己愛が強く欲深い凡俗の到底及ぶところのものではない。

その「善」とは「自分のためにも他人のためになるもの(自利利他)」「(漢訳)義理」という意味である。大乘仏教でいえば、多くの人びとの利益幸福を実現するための実践である。また「出家」の逸話として一般的に知られている「四門出遊(遊観)」は、青年期の釈尊が生・老・病・死の「四苦」の克服(人生問題の解決)を目指したとされ、前掲の「善」を求めてと比較すると、おのれ自身のためにも思われるが、その先には「衆生済度(生きとし生けるものの救済)」の面を秘してのものと理解される。

一般に仏道修行(修学)は「証(さとり)」を得るためとされている。それは釈尊の「さとり」に由来し仏教の教理や教義が体系化されていく過程で形成された概念と思われる。「さとり」を表す語句が「(梵語) アヌツラーサンミヤクサンボーディ(音写)阿耨多羅三藐三菩提」(無上正等正覚。単に正覚とも)であり、その内容が「縁起(梵語) プラティートゥヤサムートパーダ」(共生)・「中道(梵語) マドゥヤマー・プラティパド」(不偏中正)・「空(梵語) シューニヤター」(無実体)など(以上の語句の内容割愛)である。その結果、釈尊は「ブツダ」(真理の覚醒者、覚者・智者・道者と漢訳)と称される。つまり出家後より「さとり」(=智慧)に至る六年間の次第(向上門)とその後の伝道四十五年間の集大成(=慈悲)から「自覚覚他(自ら悟り他を覚らせる)」「覚行円満(覚りと教導が完備)」(向下門)、つま

り前掲の「出家」を目指した「善」・「自利利他」の目的、「衆生済度」が達成したといえるであろう。釈尊の真骨頂は後半生における慈悲の実践にあるといえよう。

釈尊の教化伝道に関する逸話として有名な「次第説法（施論→戒論→生天論→四諦八正道）」、「対機説法（事火外道三迦葉への「燃える火の法門」・愛子を失った母キサ・ゴータミへの「芥子の実収集」・長者シンガーラカへの「六方礼」・長者夫人スジャータへの「七人の妻）」、「譬喩」（弟子ソーナへの「弹琴（琴の音）」・弟子マールンクヤへの「箭喩（毒矢）」）等がある。すなわち、「次第説法」は身近な生活の基礎的な知識を確認させ、それを次第に積み上げ、専門的なレベルに引き上げていく一面があると思われる。また「対機説法」は「人を見て法を説け」といわれているように相手（学生）の力量（機根・能力や感性等の個性）を十分に把握してきめ細かに対処しなければなるまい。相手の苦悩（各種の劣等感・悲劇的な体験等）を十分に理解し、カウンセラーのように適切な言動をすることに努めることが必要であろう。

「弹琴」話は頑張り屋の学生が体調を崩し病になった場合、「張りすぎてもだめ、たるんでもだめ、ちょうどいいあんばいが一番いい」（詩：相田みつを。原「弹琴喩」）という教示は、「中道」をわかりやすく示すものであろう。さらに「箭喩」は理屈っぽく頑固な者には、今ここでなすべきことをなさなければ、傷つき命をおとすこともあり後悔することになるという教え。これら教化の一端は、釈尊の勝れた「教育者」の一面を知らされる。

### 三 部派仏教（学派仏教）の「修道」

仏滅約百年後、戒律に関する十ヶ条（十事）の対立から保守的な上座部と革新的な大衆部との二派に分裂、その後、最終的に二十部派となり、「部派仏教」（小乗二十部派）と称される。その特徴は、各教義を細かく分析するもので「煩瑣哲学」的面を強く有する。その面を最も多く有するのが上座部から派生した「説一切有部」である。なお大衆部から派生し展開したのが後の「大乘仏教」につながっていく。

仏道修行者の基本項目「三学（梵語）トリニー・シクサニー」とは、「戒学」（身に行い口に話し心に思う行為〔三業〕すべてにわたり悪を止め善を修す）・「定学」（禅定を修して心の散乱を沈め安静にする）・「慧学」（本能的欲望を制御し正しく真実を見極める智慧を身につける）をいう。なお、この「三学」の学とは、「学道（学び実践する）」の意味であり、単なる「学問」ではない。「三学」の次第順序として「戒（梵語）シーラ」（規則）を守ることにより「定（梵語）サマーディ」（瞑想）を助け、「定」の精神統一により心を研ぎ澄ませ「慧（梵語）プラジュニャー」（智慧）に達し、仏道を完成するに至る。このように「戒」「定」「慧」の三者は、不即不離の関係にある。しかし、これに満足するのではなくさらに向上することが望ま

れ、「増上戒学・増上心学・増上慧学」が設けられる。その展開が「五分法身（無漏の五蘊）」である。つまり従来の「戒学・定学・慧学」の三学の上に「解脱（あらゆる束縛や執着から解放され）」と「解脱知見（その解脱を自覚する）」を備えることが必要とされる。そこまで到達すると聖者（無学位の阿羅漢）と称され、「仏陀」となる要素・条件が具備しているとされる。「無学位」の「無学（梵語）アシャクサー」とは、仏道を究め、迷いもなく学ぶべきものもなくなった境地に到達した者＝阿羅漢「（梵語）アールハットゥ」（応供者。信者の供養に対応できる人・聖者）をいう。それは修行者が「仏陀」に接近したことになるが、そう容易にその境地に到達できるものではない。

それを「無漏の五蘊」（漏「煩惱」の一かけらもない純真な心の状態をあらわす五要素（＝戒蘊・定蘊・慧蘊・解脱蘊・解脱智見蘊）と称す。すなわち身業（身体行為）と語業（言語行為）とが無漏清浄になることを「戒蘊」、空（あらゆるものに実体はないとし、執らわれ片寄りが無い）・無相（形姿や特徴づけるものがない）・無願（特別の目的欲求を持たない）の三三昧（三解脱門とも）を成就することを「定蘊」、正しく見、正しく知ることを「慧蘊」、尽智（智慧を尽し）・無生智（智慧を生ずることを超越し）および正見と相応する勝解（勝れた理解）を得ることを「解脱蘊」、尽智・無生智勝解を得ることを「解脱知見蘊」という。「蘊（梵語）スカンドゥハ」（積重）とは塊（かたまり）や類別・要素という意味であるが、修行者が時に「煩惱」を生じ後戻りして凡夫になるようなことは一切なく、日常生活の中でしっかりと「仏陀」の境地に至り、それに徹し続けていく状態である。

〔「仏陀」の境地に近いといえば、阿羅漢が保持するとされる超人的能力、すなわち三明（宿命明・天眼明・漏尽明）六通（神変通（神足通）・天眼通・他心通・宿命通・漏尽通）が想定できるが、ここでは割愛しておく。〕

上記の「三学」中、第三の「慧学」（さとの智慧を学び実践すること）に関し、これを三種に展開して説示されることがある。それを「三慧」という。すなわち聞慧（経典の教えを聞きさとの）・思慧（道理を思惟してさとの）・修慧（禅定を修してさとの）である。たとえば修行者（学生）には、講義を聴き本質的なもの（真理）を身につける者、道理を深め理論的にそれを身につける者、坐禅の深い思索の中でそれを体得する者がいることを指す。そのように学生には「知恵」を習得する三類型がある事をいうが、前提としていずれも前向きな姿勢と積極的な行動を伴っているのが特徴であることを強調したい。

なお、仏教では『（大乘）北本涅槃経』巻二十七師子吼菩薩品の「一切衆生悉有仏性、如来常住無有変易」の語句から、生きとし生けるものには生まれながらに「仏性」が備わっているとされ、仏菩薩の救済対象となり「成仏」する《理想論》がある。それに対し、唯識法相宗では「五性各別説」を立てる。その五性（声聞定性・縁覚定性・菩薩定性・不定性・無性）中、

声聞・縁覚・菩薩の三乗に相応するものは、いずれ阿羅漢果・辟支仏果・仏果を各々得る。右の三乗にまだ定まっていないもの「=不定性」もいずれ上記のいずれかを得て成仏する。しかし、仏性がないもの「無性（無仏性）」〔一闍提（梵語）イッチャンティカ〕は「成仏」しない《現実論》がある。例外として「無性」にも「大悲闍提（菩薩の一面、慈悲心を持つ）」は「成仏」の可能性がある。これに関しては中世に天台宗と法相宗との間に論争があり決着がつかない。要するに仏教の説く「人間観」の類別として以上のような「成仏」の有無による理想論と現実論として二種の考え方があつた事を挙げておきたい。

翻って現代、何の目的もなくただ何となく大学に入り、漫然と講義に出ているだけで勉強もほとんどしないという消極的な学生が最近増えている。そのような学生に対し、教員はどう対処すべきであるか。当然ながら能力や意気込みの違う多種多様な学生が入ってきている以上、夫々の個性に対応する指導を綿密に工夫する必要性を確認しておきたい。教員としての吾人は、目的もなく意欲もない彼らを決して放置や無視はできないのである。

仏教では、上記の課題（能力別）について示唆的な項目を設定していると思われるのが「三十七菩提分法（三十七道品とも）」である。これらは菩提（真理）を究める実践修行方法である。ここでは一般仏教の基本的叙述に止め、その教育上の現代的活用は今後の課題としたい。道元禅師の著『正法眼蔵』「三十七品菩提分法」巻は後にその一端に触れる。

(1) 四念処（四念住）とは、道理に反する四種の顛倒「常」（ものや心は変わらない）、「楽」（心は安楽である）、「我」（自我やものは常住している）、「浄」（身は清浄であるという）を否定するものである。「顛倒（梵語）ヴィパリータ」とは正しい道理に反すること。それに「身念処」（肉体は不浄である）、「受念処」（感覚感性の感受は苦である）、「心念処」（心やものは無常である）、「法念処」（すべての事物は無我である）の四種を観察し想念する修行であり、「四念処観」とも称す。基本的には、「四法印」（諸行無常・諸法無我・一切皆苦・涅槃寂静）中の第一「無常」・第二「無我」の徹底的な認識を求めているといえよう。

(2) 四正勤（四正断とも）とは、「律儀断」（まだ生じていない悪を生じないように努める）、「断断」（すでに生じている悪を断ち切るように努める）、「随護断」（まだ生じていない善を生じさせるように努める）、「修断」（すでに生じている善を増幅させるように努める）である。

(3) 四神足（四如意足とも）とは、神通力（禅定による超人的能力を構成する単位）の四種であり、それに「欲神足」（意欲）、「心神足」（心念・心のすべて）、「進神足」（まっすぐに進む向上心）、「思惟神足（最も深く禅を思索観察する）」がある。これら四種の「精神」を自由自在に機能させる訓練といえよう。

(4) 五根とは、感覚を起こす器官や能力の五種であり、それに「信根」（信心）、「精進根」（常に努力する）、「念根」（思念）、「定根」（禅定）、「慧根」（智慧）がある。これら五種の感

覚・知覚を研ぎ磨くことである。

(5) 五力とは、煩惱を破り悟りへ導くすぐれた働きをなす五種の心情であり、それに「信力」(信仰)、「精進力」(努力)、「念力」(憶念)、「定力」(禅定)、「慧力」(智慧)がある。この(4)と(5)の項目は同じであるが、『俱舍論』では「根」は加行道(予備行)第三忍位(怠惰がない段階)、「力」は世第一法位(予備行の最後、世法の最勝位・無漏智の手前)として修行段階の違いを説示している。

(6) 七覚支とは、「さとり」を得るための手足となって役立つ方法の七種「擇法覚支」(真をとり偽を捨てる)、「精進覚支」(真を択びとった後に専念努力する)、「喜覚支」(真法を行じ喜悅に住す)、「除覚支」(心身を常に快適に保つ)、「捨覚支」(何事にも執らわれない)、「定覚支」(精神統一し散乱しない)、「念覚支」(常に禅定と智慧を念じている)である。

(7) 八正道(八聖道・八正道支とも)とは、四つの真理を意味する「四諦」(苦諦・集諦・滅諦・道諦)中の第四道諦の展開である。「正見」(正しく四諦の真理を見る)、「正思惟」(正しく四諦の真理を思惟する)、「正語」(正しく真実の語句をいう)、「正業」(正しい行動をする)、「正命」(正しい生活をする・正しい職業に従事する)、「正精進」(正しい努力を続ける)、「正念」(正しい記憶念を保つ)、「正定」(正しい禅定・精神統一・瞑想をする)の八種の実践項目は原始仏教時代からの普遍的な徳目と言え、今日でも充分に通じる。

部派仏教の成果(綱要書)ともいうべきテキスト『俱舍論(梵語)アビダハルマコシャ・シャーストラ』(音写「阿毘達磨俱舍論」)では、体系的に「修行位次(段階)」を設定している。概略的に項目を示せば、修行者を大きく「賢」(善和)と「聖」(正和)の二種に分ける。「賢」とは善をおこない煩惱を制御し精神の調和を図る意味、「聖」とは清浄な正智を起こし「四諦」の正しい真理に到達する意味である。そのための修行徳目として「賢」には、三賢(五停心・別相念住・総相念住)と四善根(煖・頂・忍・世第一法)の七加行を立てる。次に「聖」には預流・一來・不還・阿羅漢に各向・各果があり、預流向は見道、預流果から阿羅漢向は修道、阿羅漢果を無学道とする。その三道(見道・修道・無学道)中、見道(知的見解)と修道(実践的体験)のうちはまだ「有学」であり、無学道〔「無学」(既説)〕に至り成就する。見道には十六心の観法(聖諦現観)中の第一心より第十六心までの範囲における観法を指し、その第十六心「道類智」に至ると三界の見惑八十八使が断尽し次の修道に進む。この修道では、修所断の煩惱(修惑・思惑八十一品)を絶ち切る過程が煩瑣極まりなく説示され、「三阿僧祇百大劫」を要すとされる。

上記『俱舍論』の修道と併称され、「権大乘」(実大乘から批判される)に属す『成唯識論』の修道がある。その唯識法相宗でも前掲の『俱舍論』と同様に煩惱の断惑・断道が説かれる。それに三種の断(自性断・離縛断・不生断)やその段階である現行(現実生活の行動・善悪の

思想)を制伏し、「種子(梵語)ピージャ」(すべての現象を生じさせる根源的・潜在的勢力)を断尽し、習気(習慣性)をも棄捨する(伏・断・捨)も同様である。多少相違するのは、修道の階位である。それには声聞の修道(三生六十劫を要す)・縁覚の修道(四生百劫を要す)・菩薩の修道(三大阿僧祇劫を要す)がある。

一般的修道には「五十二位」(十信・十住・十行・十回向・十地・等覺・妙覺)がある。また「四十二位」という場合、十信を十住の初位に接する。それを元に慈恩大師は等覺を第十地に接して「四十一位」と設定している。これを五位(資糧位・加行位・通達位・修習位・究竟位)に分け、資糧位と加行位の二位を「方便道」、通達位と修習位の二位を「無漏聖道」とし、究竟位を「仏果位」とする。「四十一位」中の十住・十行・十回向の初三十心は「資糧位」(順解脱分とも)、十回向の満心第十法界無量回向位に至ると「加行位」(順決択分とも)、十地の初位極喜地に至ると「通達位」(見道とも)、右の見道から仏果を得る間に種々の修習をして「三大阿僧祇劫」という無限に近い修道を経て仏果妙覺の位に到達する位が「究竟位」である。『俱舍論』や『成唯識論』の修道論は、時空を超越するような長く厳しいものであり、現代人には実際に不可能で現実味に乏しいものと思われる。ここでは単に項目を列記するに止める。

#### 四 大乘仏教の修道

部派仏教の学僧による学問追究の姿勢が一般民衆の願望から乖離する面の批判や反省から自然と派生したのが大乘仏教と言える。「大乘(梵語)マハーヤーナ」とは、大きな乗り物(大船)という意味。多くの人々を救うための乗り物で、その担い手(船頭)が「菩薩(梵語)ボディサットヴァ」(求道者・真理の追求者)と称される。その「菩薩」は、釈尊の「前生譚(梵語)ジャータカ」において国王をはじめいろいろな動物等に姿を変えて種々の善業功德を積んだ説話に投影されているように所謂「慈悲(梵語)マイトレーヤ、カルナー」(友情、同情)の具体的行動をする人である。例えば、法隆寺の玉虫厨子扉に描かれている「捨身飼虎」のように王子が自分の命を捨てて飢えた虎の親子を救ったり(『金光明経』)、「施身聞偈」では帝釈天が羅刹に身を変えて「無常偈」の前句を唱え、それを聞いた雪山童子が後の句を聞くためにおのれの身を施したという逸話(『涅槃経』)である。いずれも「慈悲」心(思いやり)の発露と実践といえます。いわば「自未得度先度他(自ら未だ度せざるに先に他を度す)」ということ、「度(梵語)パーラミター」(音訳「波羅蜜多」)は「渡」と同義で「わたる」「わたす」「到彼岸」「救済」の意味である。

大乘仏教の代表的修行徳目として有名なのは、「六波羅蜜多」(布施・持戒・忍辱〔忍耐〕・精進・禪定・智慧)であり、これを「六度」ともいう。このうち第一の「布施(梵語)ダー



ナ」(音写「檀那」、「ほどこし」の意)が重要視される(他の五項目は割愛)。

一般に「布施」には、「財施(信者による財物のほどこし)」と「法施(僧侶の説法)」の二施、ないしこれに「無畏施(諸種の恐れを免れさせる)」を加えて三施という。信者に財物がない場合、「無財七施」として「眼施(優しいまなざし)」、「和顔悦色施(穏やかな笑顔)」、「言辞施(思いやりのことば)」、「身施(礼儀にかなった身のこなし)」、「心施(善意のこもった真心)」、「床座施(自然に座席を譲る)」、「房舎施(困っている人に宿泊させる)」(『雑宝蔵経』六卷)が説示されている。「布施」で大事なことは、「施物」と「施者」と「受者」との三者間に差別があってはならず、すべて「清浄」でなければならない。それを「三輪清浄」「三輪空寂」という。つまり自我や名利が絡み、分け隔てがあると「不清浄」というわけである。

「六波羅蜜多」と同類の実践項目として「四摂法(四摂事・単に四摂・四事・四法とも)」(布施・愛語・利行・同事)がある。「布施」は前述の通り。「愛語」とは、やさしく慈愛のこもった言語。時にはきつく叱り、時にはなだめる・ほめることも必要。「利行」とは、人々に利益を与えること、相手のためになること。「同事」とは、相手と同じ立場に位置すること、協同すること。この「四摂法」は前掲の「六波羅蜜多」よりも全体の構成がよく取れていて実践しやすいように思われる。関連の『正法眼蔵』「菩提薩埵四摂法」巻は後述する。

ところで自分の命を他人を救うために捧げるという行為は、容易にできるものではない。しかし、昨春三月十一日に生じた東日本大震災の際、その「菩薩行」をなした方々が複数おられたことが報道により知らされた。宮城県南三陸町役場に勤務していた女性職員は、逃げる時間があったにもかかわらず防災放送のアナウンスをして最期まで避難を呼びかけ大波に吞まれ犠牲になられた。同様に宮城県警の巡査部長と巡査五人はパトカーで避難誘導中に津波に巻き込まれ殉職されている。岩手県大槌町の町長さんや消防団の団長・団員の方々は避難を呼びかけ、また半鐘を鳴らし続け殉職している。これらの方々は、自分よりも不特定多数の人々の命を大切にされたのである。他にもおおいなる勇気を発揮した方が多勢おられたことでしょう。この紙上を借りすべての犠牲者のご冥福をお祈りしたい。

## 五 禅の修道

中国禅では、参禅学道の基本として「参師聞法・工夫坐禅」(参師問法・功夫坐禅とも)が大切にされる。優れた指導者(師家)を諸方に尋ね旅(行脚)をする。これらと思う人物に邂逅すると種々問答を交わし、互いに力量を把握したうえで師匠と弟子の関係(師資相契)を結び、本格的な修行が始まる。修行の中核となるのが「坐禅」の工夫である。その他に唐代の禅僧百丈懷海の指導理念である「一日不作、一日不食」の教示のように農作業等の労働(作務)

が課されることもある。修行者は必死に個性豊かで抜群な師家を探し求めたのである。その傾向は唐代から宋代にかけて盛んに行われ、「師家崇拜」の傾向が生じた。

それが「五家（七宗）」の家風・宗風として伝承され、禅宗の隆盛時代となった。南宋代の禅僧高峰原妙による五家の「評」（特徴）として臨済宗の「痛快」（気鋒峻烈で殺活の機用を現わす＝大機大用・個性の尊重）、曹洞宗の「綿密」（行解相応し行業綿密＝親切丁寧な指導）、滄仰宗の「謹嚴」（謹嚴な応酬の中に師弟默契す＝師弟間的人格尊重）、雲門宗の「高古」（奇警な言句を拈じ取捨分別の衆流を止め＝言句を超えた真理の体得）、法眼宗の「詳明」（教家の句意を活用し禅侶を除く＝教禅一致の推進）が挙げられる。この中で後世までその法系が続いたのがスパルタ教育式に「棒」「喝」を多用した臨済宗とこの世において平等（明）と差別（暗）の両面が互いに相即相入している真実のありようを親密に教授・受容していった曹洞宗である。特に臨済宗は公案（看話）の知解を重視し、曹洞宗は打坐（黙照）の実践を重視している。こうした流れが日本禅にも引き継がれている。これら五家の家風・宗風は、謂わば教育法・教育手段として参考になり得るのではなかろうか。一考を要するところである。

道元禅師は「正師」と「正法」を求め留学（入宋）、五年ほど滞在し帰朝した後、建仁寺仮寓中に正師如浄禅師の膝下で坐禅により「身心脱落」（坐禅の当体がそのまま悟証の姿。修証一等）した成果として『普勸坐禅儀』を撰述、続いて、正法（正伝の仏法）の立教開宗の宣言ともいべき「辨道話」を著わした。その後、深草興聖寺時代にライフワークとなる『正法眼蔵』の表題を冠した「摩訶般若波羅蜜」巻等、一連の諸巻が著わされていく。そうした中、「正法」を護持する弟子の養成書として天福二年（1234）春に撰述したのが『学道用心集』（原漢文）である。題名の意味は文字通り「学道（学仏道）」の「用心（心を用いる、注意・心得）」を集成したものである。以下、各章の内容を略述してみよう。

#### 第一、菩提心を発すべき事

修行の初めに菩提心を発す（発心・道心）こと、それは「無常を觀ずる」ことである。それはあたかも「頭燃」を救う（払う）ようにすぐに実行することが肝要と示される。「頭燃をはらふ」の句は、『正法眼蔵』「重雲堂式」「礼拜得髓」「行持」等にも使用され、「菩提心」と密接に関連する。同書には、同じ課題の「発菩提心」「道心」の諸巻がある。

#### 第二、正法を見聞して必ず修習すべき事

発心の後、正師に随従し正法を正しく見聞して、「真実」を身と心に刻みこむこと。

#### 第三、仏道は必ず行に依って証入すべき事

「学べばすなはち禄その中にある」如く「行ずればすなはち証その中にあり」である。それは『辨道話』の「仏法には、修証これ一等なり」や「本証妙修」と同意。

#### 第四、有所得心を用って仏法を修すべからざる事

世法のおのれや「名利」のためではなく、仏法（真理）のために仏法を追求すること。

#### 第五、参禅学道は正師を求むべき事

上掲の第二と重なる。「機（学生）は良材の如く、師（指導者）は工匠に似たり」の譬喩のように学生の成長は指導者次第である。その正師とは、次の七種の資格を備えているという。(一)年老の多少（修行の長短）は問わない、(二)正法を覚り正師の法（印証）を嗣いだ者、(三)文字（文章）や解釈を先とせず抜群（格外）の力量を有している、(四)並外れた（過節）の志気が溢れ、(五)我見我執を離れ、(六)情識（感情）に滞らず、(七)行解が相応している。これら「正師」の資質は現代においても必要なものといえよう。

#### 第六、参禅知るべき事

まず参禅学道は易行ではなく難行であること、次に仏法の一大事は身心を調整し坐すこと、つまり「調身、調息、調心」の上に「端坐」すること（＝只管打坐）である。

#### 第七、仏法を修行し出離を欣求する人、須らく参禅すべき事

同じく坐禅の注意、文字の教網を離れ思量分別を捨て実参実究することが肝心。

#### 第八、禅僧行履の事

ここでは「正法」のあり方、中国禅の代表的祖師たちの行実・逸話を挙げ、不退転の心で精進すべき事を督励している。

#### 第九、道に向かって修行すべき事

「道」とは人間が真実に生きること（仏道）、つまり「自己本道中」にあつて迷惑せず、妄想せず、顛倒せず、増減なく、誤謬なしということを信ずべし」と述べる。この信に立ち仏道を行ずること。真実を求め生きる自分自身を固く信ずることでもある。

#### 第十、直下承当の事

集約的にいえば「参師聞法、功夫坐禅」の教示をそっくり受け継ぎ、「本来の自己」に目覚め、「修証一等」の坐禅に徹すること。それは「安楽の法門」すなわち邪心なく、執らわれ・こだわり・偏りなく無心に坐に打ち込むことによって得られる境地である。

道元禅師は、修行僧の心得として他に『衆寮清規』（二七カ条にわたる衆寮〔坐禅堂〕の威儀進退等の垂範）、『典座教訓』（典座〔食事を司る職〕の心得、六味完備の用心）、「赴粥飯法」（粥や飯の食事作法）等も撰述、詳しく述べているが、ここではすべて割愛する。

次に『正法眼蔵』諸巻から「学仏道」に関連する巻を適宜抜粋して概説してみよう。

#### 「仏教」巻

仏教の中で「禅」は「教外別伝」として文字や經典を排斥するように言われるが、それは「謬説」（あやまり）であるとして「上乘一心」（大乘の異名）の「三乗十二分教（十二部教とも）」および「九部経」を示す。「三乗」とは仏道を行ずる三種の機根であり、「声聞乘」（仏弟

子の声聞は「四諦」により得道す、「縁覚乗」(縁覚〔独覚〕は「十二因縁」により般涅槃す)、「菩薩乗」(菩薩は「六波羅蜜」の教行証により正覚を成就す)である。「十二分教」とは、(1)「契経(梵語) スートラ」、(2)「重頌(梵語) ゲーヤ」、(3)「授記(梵語) ヴヤーカラナ」、(4)「諷頌(梵語) ガーター」、(5)「無問自説(梵語) ウダーナ」、(6)「因縁(梵語) ニダーナ」、(7)「譬喩(梵語) アヴァダーナ」、(8)「本事(梵語) イティヴルツカ」、(9)「本生(梵語) ジャータカ」、(10)「方広(梵語) ヴァーイプルヤ」、(11)「未曾有(梵語) アドブタダルマ」、(12)「論議(梵語) ウパデーシャ」である。「九部経」とは、この中の(3)(5)(10)を除く残りの九項目である。道元禪師は「これみな仏祖の眼睛、骨髓、家業、光明、莊嚴、国土。十二分教をみるは仏祖をみるなり。仏祖を道取するは十二分教を道取するなり」(趣意)と述べ、文字・経典を重要視しているのである。単純な「不立文字、教外別伝」を超越した立場である。

#### 「仏道」巻

「学仏の道業(仏道を学び実践する)」を「正伝(正しく伝承する)」上において「禪宗」「禪祖」「禪師」「禪和子」「禪家流」さらに「達磨宗」「仏心宗」および「五家(七宗)」等の呼称は使うべきではない。これらの呼称ではなく、道元禪師は次のように述べられる。「吾れに正法眼蔵涅槃妙心あり」「仏仏祖祖付属し正伝するは正法眼蔵無上菩提なり」、「諸仏無上の妙道なり」として、一宗一派の呼称に拘泥するのではなく「正伝の仏法」を受容し継承しているとの自覚(自負)・認識に立っていることを知るべきである。

#### 「仏経」巻

「学仏道」の根底には、「知識」(師匠)と「経巻」(教法)がある。道元禪師は、「西天東地(インドと中国)の仏祖、かならず或従知識、或従経巻の正当恁麼時、おのおの発意、修行、証果、かつて間隙あらざるものなり」と述べる。「知識」と「経巻」に恵まれていると有難いことに、発心し修行し悟るという過程には隙間なくつながっている。特にその「経巻」は所謂テキストだけに限定されるものではない。「いはゆる経巻は、尽十方界これなり。経巻にあらざる時処なし」とあるようにこの宇宙(大自然)のすべてが「経巻」となり、学ぶ対象になるわけである。同類書「看経」巻の叙述は略する。

#### 「行仏威儀」巻

仏道や禪の修行の中核には「坐禅」がある。しかし、修行はすべての行為「四威儀」(行・住・坐・臥)に関わる。道元禪師は、「諸仏かならず威儀を行足す、これ行仏なり」と喝破する。諸仏はなす威儀・行為そのものを行じ尽くすことにより「行仏」という。仏道を行ずることが「仏行」であり、その当体が「行仏」である。換言すると日々の行いのすべてが仏道にならなっているから仏道が一切の時処に応じ現成することになる。「即仏即自」(仏即自己、自己即仏)の体験は容易には得られないであろう。凡俗があれこれ迷いがちな「生死」の問題に関

し、「しるべし、生死は仏道の行履なり、生死は仏家の調度なり」、「大聖は生死を心にまかす、生死を身にまかす、生死を道にまかす、生死を生死にまかす」という。生死の繫縛から解放されたところに着点がある。「法説仏なり、法行仏なり、法証仏なり、仏説法なり、仏行仏なり、仏作仏なり」とは、「仏行」の展開した姿といえよう。

#### 「行持」巻（上下あり）

この「行持」の「行」とは「行仏」ないし「仏行」の意、「持」とは「護持」の意である。この巻にはインド・中国の三十人（馬祖は2回）に及ぶ「仏祖」の行実・逸話を解説している。その冒頭には「仏祖の大道、かならず無上の行持あり。道環して断絶せず、発心・修行・菩提・涅槃、しばらくの間隙あらず、行持道環なり」とある。よく似た文節は前掲の「仏経」にあったが、それを発展している。「諸仏諸祖の行持によりて、われらが行持見成し、われらが大道通達するなり。われらが行持によりて、この道環の功德あり」と述べ、その諸仏の「発心・修行・菩提・涅槃」を行わずることにより、我々の行持が現れ、かつ大道に通達し、その功德が現れるというように、仏祖の「行持」が今に至るまで繋がり続いているのである。限定的にいて「しかあればすなはち、一日の行持、これ諸仏の種子なり、諸仏の行持なり」というのは、一日のあらゆる起居動作を諸仏の現れる種子（もと）であり、諸仏の行持として学道者が行わずすることを促しているといえよう。

さらに「只ながく名利をなげすてて、万縁に繫縛せらるることなかれ。光陰を過ぎさず、頭燃をはらふべし。大悟を待つことなかれ、不悟は髻中の法珠なり」とは、凡俗のように名利や俗縁に執らわれ縛られるのではなく、仏道において寸時も惜しまず大事に過ごし、「悟り」を得ようとしないうこと、その「不悟」こそ髻中の法珠であると述べる。これは「修証一等」・「証上の修」の立場から修行において「さとり」すら求めないという大乘仏教の立場「無所得」「無所悟」および「空」の面からの説示である。

また「身命は無常にまかす、主君にもまかす、邪道にもまかす。しかあれば、これを挙して報謝に擬するに不道なるべし、ただまさに日々の行持、その報謝の正道なるべし」「いはゆるの道理は、日々の生命を等閑にせず、わたくしにつひやさざらんと行持するなり」と述べられるのは、身命を無常（死）や主君・邪道に任すしかない。そうであれば身命を報謝に充てようとしても道に適（かな）わない。ただ正に日々の学道（修行）を護持してなすことが報謝の正しい実践となる。すなわち、その道理として日々の生命をなおざりにせず、自分のみ費やしてならない（世のため人のためとして）修行を護持していかなければならない、という。「縁起」の道理（相互依存性・共生）の立場からも、この宇宙・環境問題・人間との関係、および「生命」等を考慮する上で誠に示唆的な教示といえよう。またここに、本学の建学の精神にある一つ「報恩感謝」の原点があるように思われる。

その感謝報恩の対象は、前述したように「縁起（共生）」の思想に基づくものであり、『(大乘本生)心地観経』の四恩（父母・国主・衆生・三宝）、および『六方礼経』の六方である東西南北上下に「父母」「夫また婦」「師匠」「朋友」「奴婢（召使）」の「六恩」に及ぶものである。現代では、「無償の行為」（ボランティア）に通じ、その普及にも尽力すべきである。

### 「身心学道」巻

仏教において身と心の関係は「身心一如」である。ここの「身心学道」巻では、それを仮に「仏道を学習するにふたつあり」として「心をもて学し」（心の学道）、「身をもて学す」（身の学道）と設定して説かれる。

まず「心の学道」とは、「あらゆる諸心」で学ぶことで、その諸心として「質多心（梵語）チッタ」（慮知心）、「汗栗駄心（梵語）フリダヤ」（草木心）、「矣栗駄心（梵語）同右」（積聚精要心）等を挙げる。具体的には、「発菩提心」「赤心片々」「古仏心」「平常心」「三界一心」に関する説示である。このうち「発菩提心」の「菩提心発なり、発菩提心なり」の時節と共に自発的に生ずる尊さを感じ、しめじみと感じる。〔この巻の前半の展開が「十二巻正法眼蔵第四・発菩提心」（草案）であると想定できる。〕また「平常心」の箇所に「発心すれば、かならず菩提の道にすすむなり。すでにこのところあり、さらにあやしむべきにあらず。すでにあやしむところあり、すなはち平常なり」には何か力づけられ安心感がえられる。

「身の学道」とは、「赤肉団（赤裸々な肉体）の学道」として「尽十方界、真実人体」と「生死去来、真実人体」に関する説示である。「尽十方界、真実人体」とは、この宇宙を真実の人体（本体）と体得すること、同じく「生死去来、真実人体」も生死去来する現実の中でその本質を体験すること、宇宙と我（自己）との一体を要請しているわけである。

注釈書『御聴書』には、「自己の身心は仏道・真理の現成であることを参究、修証せよとの義」であると述べている。「身心学道」巻、これも本学の建学の精神の一つ「行学一体」（修行と学問の一致）と関連することになる。

### 「仏向上事」巻

「仏向上事」とは、「さとり」を得て仏になっても、さらにその先の修行を継続することをいう。「さとり」済ましてはならない、「仏」であって「仏」を忘れ、「超仏越祖」（仏祖を超越する境地=殺仏殺祖）に達することである。修行に終わりはないのである。

巻末に「いはゆる仏向上事といふは、仏にいたりて、すすみてさらに仏をみるなり」とある。続いて「衆生の仏をみるにおなじきなり。しかあればすなはち、見仏もし衆生の見仏とひとしきは見仏にあらず。見仏もし衆生の見仏のごとくなるは、見仏錯なり。いはんや仏向上ならんや」とは、仏向上のひとが仏を見るのは、衆生が仏を見るのと同じであるが、衆生が仏を見ると等しくはない。仏を見るということ自体錯（あやまり）である。まして仏向上であろう

か、それはとんでもない」という。要するに「学道者」の向上事による「見仏」と一般衆生の「見仏」とは天地懸隔しているというわけである。

それは巻初に「仏向上にいたらざれば仏向上を体得することなし、語話にあらざれば仏向上を体得せず。相顕にあらざ、相隠にあらざ。相与にあらざ、相奪にあらざ」と述べるように師匠と弟子間の「語話（＝問答）」において互いに顕れたり隠れたり、与えたり奪ったりするのではない。その「語話」の現成する時に「仏向上事」があるという趣旨に通じている。

#### 「発菩提心」巻（十二卷本正法眼蔵、第四）

『修証儀』第四に引用されている「菩提心をおこすといふは、おのれいまだわたらざるさきに、一切衆生をわたさんと発願しいとなむなり。そのかたちいやしといふとも、この心をおこせば、すでに一切衆生の導師なり」をはじめ、「衆生を利益すといふは、衆生をして自未得度先度他のところをおこさしむるなり。自未得度先度他の心をおこせるちからによりて、われほとけにならんとおもふべからず。たとひほとけになるべき功德熟して円満すべしといふとも、なほめぐらして衆生の成仏得道に回向するなり」、「しかあればすなはち、たとひ在家にもあれ、たとひ出家にもあれ、あるひは天上にもあれ、あるひは人間にもあれ、苦にありといふとも、楽にありといふとも、はやく自未得度先度他の心をおこすべし」等と述べ、吾人が「菩薩行」（世のため人のために尽くすこと）に徹する必要を強調しているのである。

#### 「道心」巻（『秘密正法眼蔵』底本。岩波文庫本、四付巻）

上記と同義の「道心」巻には、冒頭近くに「世のすゑには、まことある道心者、おほかたなし。しかればども心を無常にかけて、世のはかなく、人のいのちのあやふきこと、わすれざるべし。われはよのはかなきをおもふと、しらざるべし。われは世のはかなきことをおもふと、しらざるべし。あひかまへて、法をおもくして、わが身、我がいのちをかるくすべし。法のためには、身もいのちもをしまざるべし」との文節は、ほとんど解説を加える必要はないであろう。特にいえば「道心（＝菩提心）」と「無常心」の密接な関係がここでも繰り返して示されていることである。

#### 「三十七菩提分法」巻

部派仏教の箇所において既述している項目である。ここでは大乘仏教の立場にある道元禅師の説示を概説したい。これは一般に「涅槃（＝さとり）」に至る助道法として扱われるが、禅師は「仏道」上における「さとり」の仏行・仏祖正伝の「法」として展開する。

そこで「四念住」（四念処とも）の(一)「観身不浄」、(二)「観受是苦」、(三)「観心無常」、(四)「観法無我」だけを抜粋して述べる。これは基本的に「四顛倒」（常・楽・我・浄）の克服する観法であるが、逆に「涅槃」の四徳（涅槃の不変不遷＝常、生死の二苦を離れ安穩＝楽、妄執を離れ大自在を得る＝我、迷惑を離れ湛然清浄＝浄）を得ているかのような境地を説いているの

である。すなわち意識的にいえば、(一)仏道修行者はそのまま「さとり」・「水濁知有魚」の道理・(二)苦が生きている証拠としての受(感受性)の働き・「苦これ受なり」、(三)観ずる心が無常(=仏性)・「無常者即仏性也」、(四)あるがままを受けとめる「長者長法身、短者短法身・「現成活計なるがゆゑに無我なり」となる。人生を消極的に受け止めるのではなく、積極的に生きることを提唱するのである。換言すれば坐禅は証(さとり)の上の修行であるということ。『菩提薩埵四摂法』巻(六十巻本正法眼蔵、第二十八。岩波文庫本、四付巻)

この項目は、「六波羅蜜多」の箇所です。簡単に触れた「布施・愛語・利行・同事」である。次に説示するのは、明治時代に『修証儀』として集大成される文節である。ほとんどは解説する必要はなかろう。まず「布施」。「その布施といふは不貪なり。不貪といふは、むさぼらざるなり。むさぼらずといふは、よのなかにいふへつらはざるなり」、「我物にあらざれども、布施をさへざる道理あり。そのもののかろきをきはらず、その功の実なるべきなり」、「ただかれが報謝をむさぼらず、みづからがちからをわかつなり」、「舟をおき、橋をわたすも、布施の檀度なり、(中略) 治生産業もとより布施にあらざることなし」。

次に「愛語」。「愛語といふは、衆生をみるにまづ慈愛の心をおこし、顧愛の言語をほどこすなり。おほよそ暴言の言語なきなり。(中略) 慈念衆生、猶如赤子のおもひをたくはえて言語するは愛語なり。徳あるはほむべし、徳なきはあはれむべし」、「むかひて愛語をきくは、おもてをよろこばしめ、こころをたのしくす。むかはずして愛語をきくは、肝に銘じ、魂に銘ず。(中略) 愛語よく廻天のちからあることを学すべきなり、ただ能を賞するのみにあらず」。

「利行」。「利行といふは、貴賤の衆生におきて、利益の善巧をめぐらすなり。(中略) 窮亀をみ、病雀をみしとき、かれが報謝をもとめず、ただひとへに利行にもよほさるるなり。愚人おもはくは、利他をさきとせば、自らが利、はぶかれぬべしと。しかにはあらざるなり。利行は一法なり、あまねく自他を利するなり」。

「同事」。「同事といふは、不違なり。自にも不違なり、他にも不違なり。たとへば、人間の如来は人間に同ぜるがごとし」、「しるべし、海の水を辞せざるは同事なり。さらにしるべし、水の海を辞せざる徳も具足せるなり。このゆゑに、よく水あつまりて海となり、土かさなりて山となるなり」。

この四種は、本学の建学の精神「報恩感謝」に付属する実践項目として具体化させていくように努力したい。

## おわりに

本学における「建学の精神」は、明治九年に曹洞宗専門学支校として開学以来、二本柱の



「行学一体」と「報恩感謝」と伝承されている。しかし、実際にその確証となる文書は現在のところない。しかし、「行学一体」は、どうやら当初からあったと思われる。それは数年前まで曹洞宗専門学本校であった駒澤大学において「行学一如」（付随的に「信・誠・敬・愛」）があったからである。なお駒澤大学では、これに関する激しい論議があり、今では無味乾燥な「仏教の教養並びに曹洞宗立宗の精神に則り、学校教育を行うことを目的とする」となっている。同じく姉妹大学の東北福祉大学は「行学一如（自利利他円満）」の文言をそのまま残し、また駒沢女子大学では「正念」と「行学一如」の語句を有している。なお鶴見大学は二大眼目として「大覚円成」「報恩行持」である。他に正眼短期大学と名古屋総合美容専門学校では「行学一体」、室蘭大谷高等学校では本学と重なる「報恩感謝 行学一体」と「自己反省 心身壯建」を掲げる。

この「行学一体」に関し、駒澤大学石井公成教授の論稿「「行学一如」の歴史的背景」（印仏研55巻1号）を参照し、文学部伊藤秀憲教授は、昭和十八年の「教育ニ関スル戦時非常措置方策」（当時の文部大臣橋田邦彦、『正法眼蔵釈意』四巻あり）の文中に「行学一体」の語句が数か所使用されていることから戦時中の学徒動員や集団疎開の標語としていたことを指摘している（『愛知学院大学人間文化研究所報』第34号）。これに対し大野榮人教授は、伊藤教授の説を踏まえつつも、明治時代の曹洞宗諸師（原坦山・大内青巒・大道長安）の所説に「行学一体」「報恩感謝」（大内青巒原著『洞上在家修証義』『行持報恩』）の淵源を見出している（『禅研だより』第13号、2009）。

確かに上述のように「行学一体」と「報恩感謝」の用語は、道元禅師の撰述書中には直接見いだせない。しかし、「行学一体（一如）」に通ずる用語には「身心一如」や「修証一等」があり、また一般仏教の「行解相応」や「依正一如」等〔儒教（陽明学）の「知行合一」〕もある。「報恩感謝」は大野教授の指摘通り、上記の『修証義』成立前後頃であろう。その原典は前掲の『正法眼蔵』行持巻である。

大事な点は、現在の「建学の精神」（行学一体・報恩感謝）を捧持しつつ、その仏教と禅の教えを通じ、学生の人格向上と育成に寄与すること。すなわち自然に対し畏敬の念を抱き、与えられた仕事に全力を尽くし、あらゆるものに感謝し報恩の誠を尽くす「全人的に調和のとれた人間」を社会に送り出すことであると思われる。

## 参考書

深浦正文著『俱舍学概論』百華苑、深浦正文著『唯識学研究』（上・下）永田文昌堂、水野弥穗子校注『正法眼蔵』岩波文庫、中村元著『広説佛教語大辞典』東京書籍、『禅学大辞典』大修館書店、『総合佛教大辞典』法蔵館、加藤宗厚編『正法眼蔵要語索引』（衛藤即応校注『正法眼蔵』岩波文庫）理想社等

# 自然科学・化学と教養教育

山口 正 人

(平成16年度～平成17年度 教養部長)

## 1. 日本における教育課程の改革期

1994年（平成6年）4月に歯学部から教養部に移籍して初めて教養科目を担当することになった時、ちょうど本学も新カリキュラムへの再編成・移行期にあった。大学設置基準の大綱化<sup>1)</sup>により、国公立問わず各大学で授業科目の再編成、とりわけ教養教育課程においては教養部の解体をも含む再構築が行われていた。歯学部では教養教育期間も進学課程の2年間から1年間に短縮されていたが、教養部では引き続き文系学生に開講の教養教育科目再編・移行の最中でした。当初の私は文系学生対象に「教養セミナー 学問の発見Ⅰ・Ⅱ」「化学Ⅰ・Ⅱ」「自然科学概論」、歯学部学生に「化学実習」の担当でした。歯学部学生の教養教育期間が1年間になった事と関連して、移籍した年は、歯学部で4年生と新3年生2年間分の講義・実習が1年間で実施される年に当たり、歯学部の薬理実習を兼担していたことが思い出される。移籍翌年には2年生以上対象の「自然科学概論」は、新カリキュラムでは「特定主題科目」の中の「総合科目Ⅳ－Ⅰ・Ⅱ」として開講することにした。1年目には土曜日にも一般科目が開講されていたが、翌年は教職課程などの特別科目専用日ようになった。

1980年代から日本では教育課程改革の議論の中で、初等教育から高等教育まで一貫した改革として教科内容の一部削減や上の学年への先送り、授業時間数の削減が行われた。詰め込み型教育から体験・経験型教育へと改正された学習指導要領に基づき、いわゆるゆとり教育が進められていた。移籍した年には、高等学校でも理科科目の多様化と選択が拡大された新学習指導要領の適用が始まった<sup>2)</sup>。教育課程審議会の議論では、生涯学習社会における学校教育のあり方として教育内容基準の一層の弾力化の必要性が示された。体験型の教育が重視され、2002

年（平成14年）から完全学校週5日制の実施、学習内容・授業時間数の削減・「総合的な学習の時間」の新設などゆとり教育が本格的に実施されることになった<sup>3)</sup>。しかし、その後のOECD生徒の学習到達度調査や国際数学・理科教育調査の結果<sup>4)</sup>などから「学力の低下」が問題となり議論になったが、結局ゆとり教育の見直しが始まった。2008年には学習指導要領の改定案が出され、指導内容の刷新、標準授業時間数を超えての授業ができることになり、初等教育から実施に移された。高等学校改訂の基本的な考え方として、「ゆとり」か「詰め込み」かではなく、基礎的・基本的な知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成との両方が必要です<sup>5)</sup>としている。高等学校では数学・理科については2012年度入学生から（全体は2013年度入学生から）適用される。

当然のことながら、こうした高等学校までの学習内容の改革は、大学における教育にも多大な影響を与えることになる。教育課程改革の中で、「新しい時代における教養教育の在り方について」の中央教育審議会の答申があり、新たに求められる大学での教養教育について、「自己の役割や在り方を認識し新しい知識を獲得して統合できる力を主体的に養う知的訓練の中核である」と指摘している<sup>6)</sup>。しかし、一方で大綱化によって再構築された新カリキュラムによる大学での教養教育の難しさも問題になってきている<sup>7)</sup>。

## 2. 私が携わる自然科学・化学の現況

### 1) 一般教養教育科目として

教養部への移籍に当たって、歯学部対象の化学実習以外は、学部学科も様々な学生対象にどのような授業をしたら良いのか、学生にとって選択科目であり何人の学生が受講してくれるのか見当すらつかない。それまで教養教育について考えたことがなく、すでに長年経験されている他の先生方がどんなテーマで授業されているか伺ったりしました。それぞれに面白そうで興味が持てそうな内容でしたが、私ができる分野ではありませんでした。準備期間の少ない中、とにかく今までの自分の経験の中で面白いと感じたことを話してみようと決めました。申し訳なかったけれど教養部での1年目は学生の反応を見ながら毎週プリントを作ったの全くの試行錯誤でした。そんな中、歯学部学生対象の「化学」の授業を1年間学生と一緒に聴講させていただきました。担当の先生にはご迷惑をかけたのですが、これは大変参考になり心から感謝しています。

大学での農芸化学、製薬会社薬品研究所での勤務・医学部基礎医学教室への出向や歯学部での薬理学・生理学の経験は、どれも生命の仕組みとそれに影響する化学物質の作用機序に関連

することでした。特に教養セミナー「学問の発見」は名の通り、それぞれの教員が研究体験を通して、学ぶことの楽しさ・学びの方法を伝える科目で、当初は副題を「からだの知恵」として開講しました。1、2回の示説実験であったが、カエルの摘出心臓の実験は学生に取っては初めての体験で、栄養液を力強く環流するその生命力に皆驚き、そして生きることの計り知れない仕組みに感動していた。心臓の摘出も学生に取り囲まれて行い、動物慰霊祭のことも含めて、一端とはいえ生命の仕組みや生きることの尊さなど伝えられたと思う。10年ほどして薬学部が新設されて実習室を教養セミナーで使用できる余裕が無くなり、すべての準備をしてから講義室に持ち込み、環流実験をしながら解説する方法に変更した。実験後は自由に心臓にも手で触れてもらおうと、それだけでも皆その柔らかさなどに感動していた。2年後一人の学生に「模型だと思っていた」と言われ、考えてもいなかった反応にその実験はその年で止めることにした。

高等学校まで、新学習指導要領で過ごしてきた学生の多様化が進み、授業に90分間は集中できない学生が増えてきた様に思う。最近は気分の切り替えも兼ねて、教養セミナーでは最初の30分はSPI非言語問題5問ほどをしている。全問できる学生は毎回1～2割で、1問目の練習のつもりの分数・少数計算ができない学生もいる。解説をして途中巡回し、採点・コメントして翌週返却している。2011年秋学期は12回行い11回満点が最高でした。繰り返しやればミスも減り少しずつできる様になる。何事にもまじめに続けて取り組む意欲が持てたらと願っている。

歯学部を除く各学部学科の学生の多くは理科学科を嫌いか苦手と思っている。一般学生に対する「化学」や「総合科目Ⅳ」では、生体を化学的な側面から捉え、そこに影響を与える薬物や毒物などの化学物質の話などを行っている。学生にとっては選択科目なので、移籍1年目から一回目授業は必ず授業内容に加え運営方針を話し、了解の上で受講するように伝えている。嫌いかもしれないが選んだ限りは最後まで続けてほしいし、何よりいろいろな見方・考え方があることを解ってもらいたい、ひょっとしたら興味を持ってもらえるかもしれないと願って行っている。どの科目も8～12回・10分程のまとめを兼ねたミニテストをしている。毎回2割前後の学生はしっかりまとめができていて、 Semester通してほぼ満点の学生も毎年何人かはいる。こうした学生に接するとこちらも刺激を受ける。平生の努力も重視したいので、それが評価の50%を占める。翌週の授業は復習を兼ねて優秀なまとめを読み・書かれた質問に答えることで学生理解を確かめて始まる。特に市販薬の話は文系学生には初めての話のようで、毎回幾つかの質問も書かれて答えるだけで30分を超えてしまうこともあった。毎年学生の反応を考えながら自作プリントを作りかえ、パワーポイントでの提示内容の改善もしているが、ここ

2、3年は質問もミニテストに書かれることは殆ど無く、授業後に個別に質問に来ることの方が多い。プリントは内容を予告して前週には配布している。目を通して来ているとは思えない。授業中静かにしているが、問とは違うまとめを書いたもの、電子辞書の写しと思われるものがある。私が学生の変化について行けなくなったのか、対応に苦慮することが増えた。

## 2) 歯学・薬学教育の準備教育として

自然科学科目の物理学・化学・生物学は、教養教育科目であると同時に歯学・薬学教育における準備教育の意味合いが大きい。どちらの学部も卒業時には歯科医師・薬剤師の国家試験があり、学部教育における学修内容を示すコア・カリキュラムが定められている。良き医療人を目指す学部の教養教育の意義として人としての素養を養うことに加え、基礎的知識の習得を前提とした歯学準備教育コア・モデル・カリキュラムや薬学準備ガイドラインが例示されている<sup>8)</sup>。限られた年限の中では基礎から順次積み重ねて理解していくことが求められている。特に高等学校までの規制緩和に伴う理科学科の多様化と選択の弾力化により、学生の修得レベルの幅が拡大してきている。高等学校での文系・理系といった進路による理科学科選択の違いも大きい。加えて受験生人口の減少と入試方法も多様化して、文系学部を進路に選んでいた学生にも歯学部・薬学部への入学を可能にし、新入生の修得レベルの広がりをも助長している面を否定できない。担当教員にとっては、準備教育としての授業が理解できない学生のための補講・補習だけでなく、高校で殆ど化学が学習できていない学生には補講の補講ともいえる授業も必要になってきている。

1年次生の化学実習ではグループ実習が多いけれども、お互いに依存心が強くなかなか実験がスタートしない。器具の使い方が分からないばかりかその名前も言えない学生が少なくない。実習を始めるに当たって説明をし、注意すべき点を何度も話すが、加える順序の無視だけでなく、試薬の取り違いさえある。優秀な学生も少なくないはずだが、リーダーシップを発揮しにくくなっているのかもしれない。確かめながら行うという気持ちもない様子で、指示通りやっただけと言いつつも、失敗の原因や自分に誤りのあった可能性など考えもしない学生もいる。失敗も含めた全測定値を記録するように言っても、レポートにはうまくいったデータだけ記録してある。実験で失敗することはあっても良い。何故だめであったかを考えて次につなげることが実験では大切なこと。失敗も含めたすべての測定記録が考えるための基になると言うと、ホットとした顔をするが理解してくれた様にはなかなか見えない。繰り返してやるしかない。

高等学校で長年化学を担当された先生にこうした実状を話すと、「化学実験は優秀な生徒の学校ほどすることもできる。しかし普通の学校では基礎的事項を教えるだけ精一杯。基礎を繰り返し理解させることで実験には手が回らないのが実状ではないか。」また、「高校の実験は

失敗が無い実験を失敗させないようにやるから、実験をしても失敗体験が無いのでは」とも言われたことが、妙に納得できてしまう。高等学校の新学習指導要領理科<sup>3)</sup>では、基礎的事項の繰り返し学習と観察・実験等の体験的学習の充実が改正の主眼にあったが、実行はなかなか難しそうである。

### 3. 問題点と今後の課題

#### 1) 現況における問題点

2003年（平成15年）頃高校訪問で進路指導の先生と話をした折、「ゆとり教育を受けてきた生徒は、先生を先生とも思っていない。友達みたいに思って菓子袋を持って職員室に来る。」と話していたことを思い出す。初等教育から続いてきた学習内容・学習時間の削減などで、高等学校での生徒の多様化が進んでいた。今では多くの大学も、多様化・大衆化が進んできているのではないかと思わせる。同時に日本では少子化に歯止めがかからず大学受験人口が大幅に減少してきた。1998年までは2万人を大きく超えた本学の受験生は、2001年には1万4千人程に減少し現在もそのレベルが続いている。何か目的・目標があって入学する学生だけでなく、大学に入れてしまったから入学した学生もいるに違いない。文系学部では歯学部・薬学部以上に、目的意識・学力・学修意欲などの面で厳しい状況にある。新カリキュラムへ移行しても今までと同じような授業内容で続けていては、新学習指導要領で過ごしてきた入学生には現実問題として難しいのではなかろうか。

大学では、単位制や学生の選択の自由化を基に、教養教育科目と平行して1年次から専門基礎科目・専門科目の開講が増えてきた。教育の変革は本当に自分の目標を持って自分で選択できる学生にとっては望ましいと思う。予想していた以上に早く進んだ大学大衆化の現状では、どれほどの学生が選択の幅の拡大をうまく活用できるのだろうか。むしろ目標を持っていないまま入学してきた学生にとっては、学部教育・目標への動機付けを急ぎ、1年も経たないうちから目標とするコースに沿った専門科目を選択しなさいといわれても、とまどいを増すばかりということはないだろうか。

歯学部、薬学部の様に学部の目標が明確な学部でも、最近では目的意識・学習意欲に欠ける学部の割合が増えている様に思う。それで学生のモチベーションを上げるためにと学部教育を急ごうとしている様に思える。何割かの基礎のできている学生には望ましいことと思うけれど、基礎がとても十分といえない学生には全く逆効果ではないか。取り残し部分が増えるばかりで、いずれ破綻を来すのではないかと危惧する。今までは春学期だけに開講されていた補習に相当する歯学・薬学基礎科目（化学）は、平成23年度には秋学期も開講され、今後も通年で

の継続が必要である。分かり始めてこそ興味も湧いてくるし、やろうとする意欲も出てくるのではなかろうか。

以前は自然に学生に通じていたと思う言葉や話し方が、今は学生に通じない事がままある。学生は何を言われているのかが理解できていない。化学実習で「予め何をするのか実習書を読んでくること」と言われて、読んでも書かれている内容をなかなか理解できない。試薬AとBの後にCを加えると言われても、混ぜることによる濃度の変化や起こる変化を予想しない。考えない習慣が基礎学力の無い事とも密接に関連していることは明らかであるが、医療人を目指さず以前に人として倫理面でも問題である。おそらく他の科目でも似た状態で、1つ1つ調べる気持ちのゆとりも無い学生が少なくないのではないか。実習前にすべき説明・準備があまりに多くて、実習を予定時間で終えることは不可能となっている。高等学校までの学習経験の修正は、忍耐強く続ける必要があると思う。目標は定まっているので、優秀な学生の学習意欲をさらに刺激しながら、今まで以上に基礎固めをしっかりとすることと、心理・倫理面での教育、学生生活のサポート・指導が重要であると思う。

## 2) 大学・教員自身の改革

「新しい時代における教養教育の在り方について」の中央教育審議会答申では、大学と教員自身の変革も強く求めている<sup>6)</sup>。

教養部では以前から教養教育の充実について議論を繰り返してきた。特に教養部教員が共通して担当する教養セミナーについては、理念・授業方法や学生生活も含めたアドバイザーのあり方についても議論し実践してきた。教員も学生による授業アンケート、FD活動などを通して、具体的に授業内容・方法などの改善を続けてきた。それでも、入学してくる学生の変化・現状に十分対応できていないとは思えない。学生自身、ゲームや現実より遙かにインパクトのあるメディア映像などを通じた疑似体験をしていますが、高等学校で体験的学習を殆ど受けていない。優れた映像資料や分かりやすい書籍などの活用、体験談などで学ぶ楽しさを伝えようとしても、学習意欲を持てる様な刺激になり難しくなっている。叱られた事がない、失敗体験がない学生が殆どのように、手短かに結果が出ないと我慢しては続けられない。興味が持てなければすぐ無視するなどの傾向が強くなった気がする。他の教員の話・授業を見聞して私自身が反省を込めて思うのは、今のような状況においても学生の学ぶ意欲を刺激する授業は、何より教員自身が楽しんでやっている授業に違いない。何においても楽しそうと思うことが取り組もうとする最大のきっかけになる。大学で何をしたいか聞くと多くの学生が友達を作りたいと言う。結構学生は孤独である。できれば学生を名前と呼べればなお良いと思う。今人との繋がりが情報通信機器主体で、直接的な繋がりが乏しい。特に人数の多い文系学部では、名前と呼ばれた学

生の表情は生き返る。教養セミナーにおける初年次教育でも、入学してくる学生の多様化に対応すべく、現在は初期の理念から少し離れてスチューデント・スキル、ラーニング・スキルが共通の必修項目になった。大学生としての生活指導も、以前より教員側からの働きかけが重要になっていると思う。

大学自体が大学院大学と専門基礎を学ぶ学士大学に選別されようとしているが、しばらくは経済成長もあまり見込めない現状では、私学の多くは学士大学にならざるを得ないではないか。

愛知学院大学におけるカリキュラム再編の初期は、各学部の専門科目と教養科目のゾーンの設定で開講時間帯がおおむね区別されていた。教養科目は1部の科目を除き1年次で多くを履修できて2、3年生での専門基礎科目から専門科目の履修と、知識の獲得が積み重ね的にできていたのではないかと思う。最近は単位制・semester制・くさび形カリキュラム編成で、教養教育科目も卒業年の8 semesterまでに取得すれば良い。大学での基礎知識も十分でない入学年のうちに、学部内のコースを決め選択科目を決めることができるのだろうか。全ての学生が希望のコース科目を履修できるのだろうか。「希望のコースはもう一杯でダメだと言われた」という学生もいた。やる気を失わせない様に、いろいろな課程で今まで以上に学生に丁寧な説明・指導が必要になってきている。

年1回であるけれど毎年全学FD委員会が開かれる。しかし、その出席状況を見れば教育改革に教員が一致して取り組んでいるとは思えない。私も含め多くの教員が、今自分がやっている方法が学生に取っても一番良いと思い（込んで）やっていると思う。しかし、現状は、今まで通りでは状況は改善されないことを現している。教育そのものが教員と学生の共同作業であることを考えれば、我々教員の改革も必然である。個々のやり方を否定するつもりは全く無いけれど、お互いに違う分野の教員の授業方法・考え方も見聞して活用する謙虚さも必要であると思う。学生を思い、学部を超えてできる改革を続けながら、大学・学部として望む入学生を選抜できる状況にすることが理想である。

#### 4. おわりに

今年日本での大震災・原発事故、世界的金融危機など、まさに世界全体が答申に書かれた様なおおきな社会変動の中にある。3月11日の大震災と巨大津波による圧倒的な破壊力を目の当たりにすると、自然の力は人知のおよぶところではないと思い知らされる。環境破壊や原発事故は、科学技術による豊かさに対して大きなリスクがあることを示した。人間のおごりと科



学技術の力を過信していた面があったと思うし、金融危機も欲望とモラル低下による歯止めのない競争の結果では無いかと思う。しかし、過剰ともいえる情報の中で、どれが真の情報か、本当に真の情報が知らされているのかの判断も難しい。また、科学技術の発展は利便性高めるが、同時にそのリスクの大きさも開発当事者や一部の専門家にしか解らなくなっている。そうした中で、東日本大震災の被災地でのボランティア活動に多くの学院生が応募し、現地でボランティア活動したことはかけがえのない経験である。まだまだ本学にも、勉学や社会活動に意欲的に行動できる学生も沢山入学し在籍している。

愛知学院大学百年史に、本学の教養部は、昭和46年の商学部・法学部の学生定員増と共に、それまでの一般教育部を基に一般教育課程及び歯学進学課程の教育・研究に責任をもつ学部同様の位置として設置された。発足に当たって、「教養部における教育は、大学教育における根幹とも言うべき重要な意義をもつもので、全人教育から人間形成につながるこの教養教育における達成こそ、本学建学の精神たる「行学一体」の根幹ともなるべきもので、今後いっそうその発展が期待されるべきものである。」と記されている<sup>9)</sup>。

大学には、社会の中で自身の立場・役割を認識して行動できる教養人の育成が要求されている。あらゆる面で変動の中にいる。今こそ、我々自身が教養部発足時の意識を再確認し、教養部が組織として残されたことを最大限活用できるよう一致して教養教育の中核として踏ん張るときである。

## 参考文献

- 1) 我が国の文教政策（第Ⅱ部第4章第2節高等教育改革の推進1）大学設置基準等の大綱化と自己評価  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/html/hpad199101/hpad199101\\_2\\_150.html](http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpad199101/hpad199101_2_150.html)
- 2) 学習指導要領（平成元年改訂、高等学校は平成14年度まで）[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shuppan/sonota/890304.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shuppan/sonota/890304.htm)
- 3) 新学習指導要領（平成10年改訂）[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/990301.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/990301.htm)
- 4) 国際数学・理科教育動向調査（TIMSS2003）（国際教育到達度評価学会（IEA）実施）[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/gakuryoku-chousa/sonota/07032813/001/003.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku-chousa/sonota/07032813/001/003.htm)
- 5) 新学習指導要領・生きる力 [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/index.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/index.htm)
- 6) 新しい時代における教養教育の在り方について（答申）平成14年2月21日 中央教育審議会 [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/020203/020203a.htm#02](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/020203/020203a.htm#02)
- 7) 大学設置基準大綱化の共通（教養）教育のかかえる問題 工大の教育を考える会講演会2003. 林 正人 大阪工業大学工学部一般教育科 [http://www.oit.ac.jp/japanese/toshokan/tosho/kiyou/jinshahen/48-2/jin-sya\\_2/hayashi\\_masahito.html](http://www.oit.ac.jp/japanese/toshokan/tosho/kiyou/jinshahen/48-2/jin-sya_2/hayashi_masahito.html)
- 8) 歯学準備教育モデル コア・カリキュラム——教育内容—— 医学・歯学における教育プログラム研究開発事業委員会 平成23年度愛知学院歯学部 AGUD CAMPUS GUID

薬学準備教育ガイドライン 履習要項2011 愛知学院大学薬学部

- 9) 愛知学院大学百年史第五章教養部 愛知学院大学百年史 p. 654、1976 (昭和51年). 愛知学院大学百年史編集委員会

謝辞：昨年の夏、編集委員の先生から、担当分野の立場から教養教育について書くように依頼されました。正直困ったが、どのみち自分の経験の範囲でしか書くことができません。編集委員の先生方の思惑とはずれた内容になったかもしれませんが、ご容赦願います。このような機会を頂いたことにお礼申し上げます。

# 教養部の英語教育

近 藤 勝 志

(平成18年度～平成19年度 教養部長)

平成3年の大学設置基準の大綱化により、教養教育の理念や教養部の存在意義が問い直されることになりました。こうした流れを受けて、愛知学院大学の教養教育も大きく改革され、平成4年12月には、以下の4点の基本方針からなる「教養教育の理念」がまとめられました。

- (1)科目の自由な選択に基づく主体的学習能力の育成
- (2)激動する社会の変化に対処する高度な洞察力・判断力の養成
- (3)緻密な学生教育を基盤にした着実・堅実な思考の練成
- (4)社会的協調性を養い、思いやりのある人間性の涵養を目的とした教養教育

教養部英語教室は平成6年のカリキュラム改革の時、上述の「教養教育の理念」の(1)「科目の自由な選択に基づく主体的学習能力の育成」に則り、全学共通の英語コア科目の教育において、コミュニケーション能力の養成に重点を移しました。具体的には、学生の希望に基づいた習熟度別クラス（基礎、通常及び中級）の導入、外国人教師の増員（平成23年現在専任7名、非常勤講師7名）、教師中心から学生中心の活動型授業への移行などです。この改革で特筆に値することは、学生が学力・学習意欲に応じたクラスを自主的に選択できることと、全学生が1年次に英語 Ia・IIa において必ず外国人教師によるオーラル・イングリッシュの授業を受けることです。授業が1シメスターになるか2シメスターになるかは、習熟度別に編成された所属クラスのグレードによります。なお、2年進級時には申し出により学力に応じたグレードへの変更が可能になる制度設計になっています。

カリキュラム改革の時、文系学部（除く：総合政策学部、文学部グローバル英語学科）では英語コア科目は諸般の事情を考慮して従来の4科目8単位から3科目6単位に削減されました（平成6年当時の学期は通年制でした）。その折、英語教室はコア科目の削減対策としてコア科

目の発展科目である英語エレクトィブ科目の充実を図りました。ここで英語エレクトィブ科目についてひと言触れておきたいと思います。英語教室では、学生のニーズに対応するべく開講科目、授業内容及び開講時間については毎年時間割編成時にチェックを続けています。平成23年度に関しては、ハリウッド映画を用いた文化的な深さを持った英語クラス（メディア英語）に学生の人気が集中しているようです。なお、学生の英語力を測定するために平成12年から主として英語エレクトィブ科目の受講生を対象にして TOEIC（LR）団体テストを実施してきました。実施目的は学生の英語力の客観的なデータを継続的に入手することで、英語学習指導の効果を高めることにあります。

その後幾多の変遷を経ましたが、平成23年度の英語開講科目及びクラス編成の内訳は以下の通りです。

## 1. 英語必修科目と選択科目

①商学部、経営学部、法学部、文学部、心身科学部心理学科

〔英語必修科目〕（単位数1）

英語 Ia・IIa：日本人教師による Listening と外国人教師による Oral Communication（学期毎に担当教師が交替）（1年次開講）

英語 Ib・IIb：Reading（1年次開講）

英語 Ic・IIc：Writing を中心とした総合英語（2年次開講）

〔英語選択科目〕（単位数1）

〈1年次以降開講〉

英会話 I・II

メディア英語 I・II

実践英語 I・II

英語表現法 I・II

英語読解法 I・II

〈2年次以降開講〉

英会話 III・IV

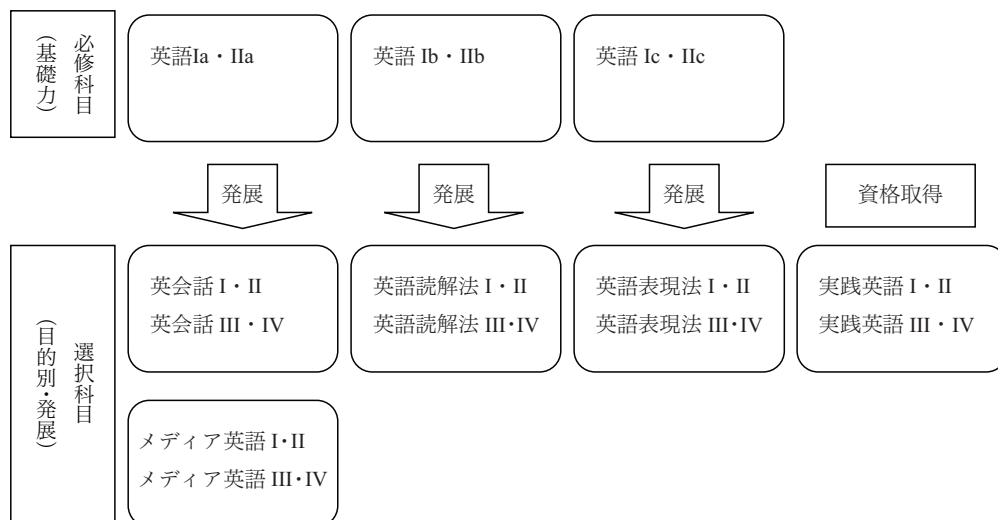
メディア英語 III・IV

実践英語 III・IV

英語表現法 III・IV

英語読解法 III・IV

〔教育課程のイメージ〕



## ②歯学部

〔英語必修科目〕(単位数1；全科目1年次開講)

英語Ia・IIa：Reading

英語Ib・IIb：Listening

英会話I・II：外国人教師による Oral Communication

## ③薬学部

〔英語必修科目〕(単位数1；全科目1年次開講)

英語Ia・IIa：Reading

英語Ib・IIb：Listening

## ④心身科学部健康科学科

〔英語必修科目〕(単位数1；全科目1年次開講)

英語Ia・IIa：外国人教師による Oral Communication

英語Ib・IIb：Reading

英語Ic・IIc：Writing

## ⑤心身科学部健康栄養学科 (単位数1；全科目1年次開講)

〔英語必修科目〕（単位数1）

英語 Ia・IIa：外国人教師による Oral Communication

英語 Ib・IIb：Reading

〔英語選択科目〕（単位数1；1年次開講）

英語 Ic・IIc：Writing

## 2. 習熟度別クラス編成

下記の学部・学科では、学生本人の申告に基づいた習熟度別クラス編成を実施しております。

〔クラス編成一覧〕

学部（学科）	基礎コース	通常コース	中級コース
商学部・経営学部・法学部	EA～EF	EG～EJ	EK
文学部	EA～EF	EG～EK	EL～EM
心身科学部（心理学科・健康科学科）	EA～EB	EC～ED	EF

※心身科学部健康栄養学科では習熟度別クラス編成を実施していない。

※クラス編成作業は「英語コース選択カード」に基づいて行われます。作業結果によっては、基礎コースと通常コースとの境界のクラスに変更の可能性があります。

〔未修得者クラス〕

未修得者クラスは、商学部・経営学部・法学部・文学部・心身科学部心理学科の学生のうち、開講学年で単位を修得できなかった学生が履修するクラスです。

参考：平成23年度未修得者クラス開講授業数一覧

春学期		秋学期	
科目名	開講コマ数（開講時間）	科目名	開講コマ数（開講時間）
英語 Ia	4（月2、月3、月5、火2）	英語 Ia	1（火5）
英語 IIa	4（火5、水5×2、金4）	英語 IIa	4（月2、月3、月5、火2）
英語 Ib	5（木2、木3、木5、金1、金2）	英語 Ib	1（木5）
英語 IIb	2（金1×2）	英語 IIb	4（木2、木3、金1、金2）
英語 Ic	4（火3、火4、水3、木4）	英語 Ic	1（木3）
英語 IIc	1（木3）	英語 IIc	4（火3、火4、水3、木4）
計	20	計	15

平成6年から導入した習熟度別クラスは、学生の希望に基づいて編成されるため、クラス内の学力差の是正には有効な方法と思われます。しかし学生の学習意欲と英語力とは必ずしも一致しないことも否めない事実です。そこで英語教室は申し出に基づく習熟度別クラス編成が内包する問題の解決策も兼ねて平成22年度から「愛知学院大学英語力評価テスト」(AGUTEA)を作成し全学科の一部のクラスで実施しました。テスト内容はTOEICテストと同形式でリスニング、語彙・文法、読解の3セクションから構成されています。実施目的は学生の英語力の定観測と1年間の英語力の進捗状況を把握するためです。

平成23年から薬学部の要請に応じる形で、AGUTEAを薬学部生に対しプレイスメントテストとして実施し、スコア順に4クラスにクラス分けをしました。申し出に基づく習熟度別クラス編成とより客観的なデータに基づく習熟度別クラス編成との教育効果を比較するためのデータを現在収集しています。

つぎはハード面の充実です。本学は平成16、17年にかけて教養部専用の外国語視聴覚教室(各48席)及び自習室(20席)にLキューブ StageEZを導入しました。Lキューブ StageEZは高機能ながらユーザーフレンドリーなシステムです(平成23年度機器一新)。

このシステムはグレード制の導入にもかかわらず、ある程度画一的な授業の進め方が求められるコア科目にも、また個人差が大きい個人学習が重視されるエレクトィブ科目にも対応できます。さらにeラーニングの活用が可能であるばかりでなく「Native World」とかTOEIC関連の教材ソフトも豊富に用意されています。

最後にiPadの試験的利用についてひとこと触れておきたいと思います。英語教室では昨今のITC技術の革新にも柔軟な対応ができるように様々な方策を試みています。その一つが平成21年から始まった産学協同研究プロジェクトとしてのタブレット端末を使用した授業の展開です。タブレット端末を使用した授業では従来の授業では展開できなかった様々な可能性を試すことができます。現時点で指摘できることは、一定の学生数を対象として客観的なデータを得ることで、現状の英語教育の長所と短所を正確に把握することができるようになったことです。詳細については愛知学院大学『語研紀要』(第35巻第1号 通巻36号)に掲載の「タブレット端末を用いた語学教育の現状と問題」(佐々木 真教養部教授)をご参照下さい。

なお、本文中の図表については鷲嶽正道准教授作成の資料を使用しました。

# 石川県河北潟干拓地における営農展開の一考察

山 野 明 男

## はじめに

筆者は干拓地農業における研究の一環として、これまで八郎潟干拓地（大潟村）、大中の湖干拓地、鍋田干拓地、児島湾干拓地北七区、笠岡湾干拓地、そして諫早湾干拓地における営農展開を明らかにしてきた。

わが国の大規模な干拓地は、第二次世界大戦後の食糧難から造成された。干拓地造成の当初は水田稲作用に干拓事業が行われた。しかし、完成時の1965年から1970年に食生活の洋風化と輸入食料の増加による米余り現象のため、政府は米の生産調整政策を実施しなければならなくなった。1970年からいわゆる「減反政策」が実施してされているが、稲作主体の大規模干拓地は減反の規模も割合も大きく、営農の転換を迫られた。

このため、大規模干拓地の入植者達は干拓地に適合する作物を導入したり畜産に切り替えたり対応を迫られ、稲作からの転作を余儀なくされ営農に多大の苦労を強いられることとなった。これらの研究成果については、筆者は『日本の干拓地』（2006）に詳しく報告している。

筆者は、これまでの研究から干拓地は、低湿地である点、圃場が大規模のため畑作に要する労働力が不足する点などにより、畑作物の栽培が一般的に不向きなことを指摘してきた。しかし、大規模干拓地では国の政策には逆らえず、稲作に代わるいくつかの作物を導入して対応しようとした。今回の石川県河北潟干拓地はその事例報告である。



## 1 研究課題

大規模干拓地における営農展開の例として、新たに石川県の河北潟干拓地を2011年夏季に調査することができた。この干拓地は、他の多くの干拓地と異なり造成時期が遅く、米の生産調整政策が実施されてからの完成のため、営農は水田皆無に計画変更された経緯がある。

河北潟干拓地の営農を具体的にみると、入植時から水田皆無で始まり、畜産（酪農）と畑作そしてレンコン畑が指定され入植を募ったという特殊な干拓地である。これらの経緯から、河北潟干拓地における入植後の営農展開を明らかにすることを研究課題とし、そのために、この干拓地の土地利用、土地所有、各種の営農実態の把握に努めた。また、近年入植時に中止されていた水田稲作が次第に増加している点にも興味を抱き、その実態と増加の原因、今後の傾向を明らかにする。

今回は、河北潟干拓地における最初の調査であり、まず全体像を明らかにしようとしたものである。なお、筆者の干拓地の土地利用・所有の調査対象地としては、ここよりも遅い干拓地造成の岡山県笠岡湾干拓地があり、ここでは水田皆無で3種類の営農形態であり、また最近完成した長崎県の諫早湾干拓地はすべての農地が貸与方式で水田皆無の畑作地となっている。これらの干拓地との比較も行いたい。

## 2 河北潟干拓地の造成経緯と特徴

石川県中部にある河北潟干拓地は、内灘砂丘で日本海と隔てられた大野川の河口部分である潟湖が干拓されたところである（図1）（写真1）。この河北潟は約3,604haの面積があり、干拓の歴史をたどると、江戸時代初期まで遡る。

干拓地の開発は、1673（延宝元）年の加賀藩主前田綱紀による約3haの新田開発に始まり、以降数次にわたる小規模の干拓が行われた。江戸時代末期の1849（嘉永2）年に地元の豪商銭屋五兵衛によって、約230haの巨大な新田開発が計画され実施に移されたがある事件に巻き

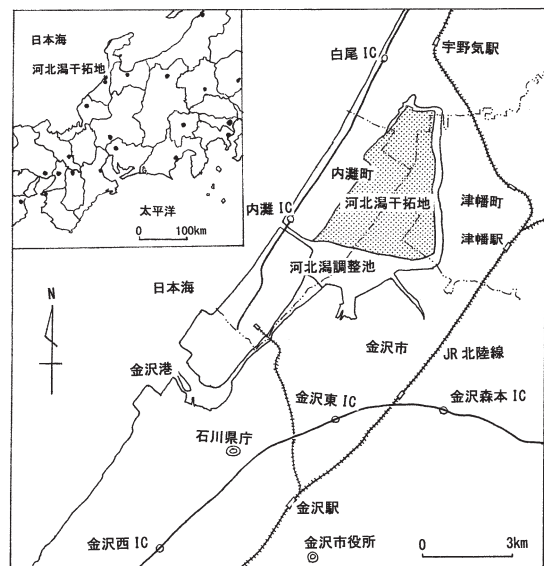


図1 石川県河北潟干拓地の位置図



写真1 河北潟干拓地周辺の空中写真

(Yahooの地図による)

込まれ頓挫した。これから約100年後に干拓地が国営として造成されることとなった。

この河北潟干拓の造成事業で問題点となるのは、干拓後の河北潟周辺の排水、漁民の反対などであった。排水問題については、河北潟全面を干拓せずに一部を調整池として残し、また排水を良くするために内灘砂丘を切って掘割をつくり、放水路の役割をもたせることで解決した(図2)。

この河北潟では汽水湖特有の漁業が行われていた。そのため干拓地造成に強い反対があり干

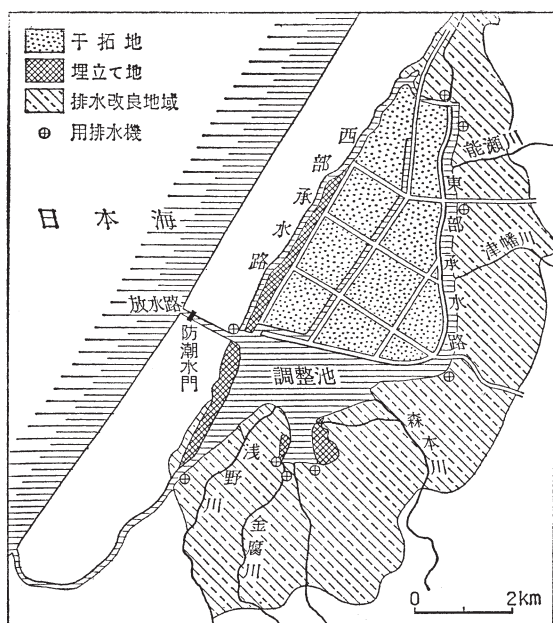


図2 河北潟干拓地の事業計画図  
 (「河北潟干拓事業概要」から齋藤晃吉作図による)

拓計画は戦後まで実行に移せなかった。しかし、この河北潟は県庁所在地の金沢市の郊外であり、水質の悪化で年々漁獲が振るわなくなり、漁民の中には農耕地を手に入れようとする者もあらわれ干拓地造成は容易になった。

次に、河北潟干拓地の建設概要を説明したい。食料増産の水田稲作を目的に国営事業としてこの干拓地は1963年に着工され、1971年に干陸した。その後、1977年に水田から畑地に土地利用計画が変更され、1979年から一部暫定営農がなされ、1986年本格営農が開始された。

当初の計画では、1969年秋から干陸が開始され、1,211haの農地に105戸の農家が入植し、1戸平均4haの大規模農家

が出現するほか、河北潟周辺の既存の農家が増反入植として干拓地の水田を配分されることとなっていた。このような計画から、当初は水田稲作を主体の干拓地造成であったことが分かる。なお、河北潟干拓地の本格営農までの経過については、『レポート河北潟干拓』(北国新聞社刊：1985)に詳しい。

当初の総事業費は84億6,000余万円であったが、この干拓地造成の結果、総事業費は約238億円となり、干陸総面積は1,356haで、2,248haの公有水面が調整池(淡水湖)として残された。干拓総面積のうち農地面積は1,071haとなり、施設用地として55ha、道路・堤防敷地230haで造成された。

入植時に行政区分が行われ、面積順にみると内灘町が376ha、津幡町が282ha、金沢市が229ha、宇ノ気町(現河北市)が184haに分けられた。畜産以外の入植地はほぼ行政区分に沿ったところに入植が行われた。すなわち、金沢市の農家は金沢市域の地所を、津幡町域の農家は津幡町域の地所を手に入れるよう計画された。また、農家の住居を伴う入植は畜産のみであり、このように多くの市町村(行政区分)に分断された点と入植者が畜産農家のみということが、一つの干拓地の共同体としてのまとまりを阻害する要因にもなっている。

かんがい用水は、残された河北潟や承水路などから4つの用水機場で干拓地内に取り入れら

れパイプラインにより各圃場に届くように敷設されている。その他に2つの取水工がある。排水については、3か所の排水機場が設置されている。用排水が同じ河北潟調整池なので水質汚濁の心配もある。

農地は大きく3区分され、1区画の面積が普通畑は0.6ha、レンコン畑は1.2ha、飼料畑は8haになっている。

畜産団地は、西部の内灘地区に配置された。これは飼料畑226haと施設用地18haの用地がまとまった形で取れるところとして選定された。1981年から酪農家の入植が始まり1984年の入植完了時には22戸（28セット）が営農を開始した。この1セットとは、飼料畑が約8haと牛舎用地（牛舎・堆肥舎・サイロ等）が約0.5ha、住宅用地が約0.1haで構成されている。

普通畑の中央部には、特殊畑として地元金沢の特産品であるレンコン畑が1区画約1.2haで約65haが用意された。その他は普通畑で穀物、野菜、果物などに利用がされた。

入植者は、畜産のみが住居を伴い、他は増反入植の形態をとっている。初期の増反入植の条件は20km圏の通作が可能な範囲に限定された。

1985年に河北潟干拓地の配分面積1,071haのうち、売れ残った農地の201.5haを国から石川県農業開発公社が配分を受けた。その後の売買により、2011年現在では248.4haを公社が保有している。水田稲作から畑作への変更は、暫定営農で入植し野菜を試作したが採算が合わず、本格営農の前の1984年までに124人の離農者が出た。この結果をみると、いかに畑作特に野菜作に不向きであることが分かる。

このような特色をもった河北潟干拓地の実際の土地利用を次にみる。

### 3 土地利用の展開

計画段階では全面水田が予定されたが、1969年の干陸後、翌1970年国の米の生産調整政策を受け、1977年に水田皆無の畑地の干拓地となった。1979年から一部暫定営農が始められ、1986年から本格営農が開始された。

その際の土地利用は、大きく4分割され畑地、レンコン畑、飼料畑、農業施設用地となっていた（図3）。畑地は853ha、その中にレンコン畑が65ha存在する。もともとレンコンは蓮田といわれ水田に分類するのであるが、ここでは畑作物としてとらえ畑地と捉え、特殊畑と表記している。また飼料畑も230ha割り当てられた。

施設用地は河北潟営農センターが55haであり、この営農センターは現在、石川県農業総合研究センターの河北潟農業研修館になっており、その一面に河北潟干拓土地改良区がある。

集落用地が畜産農家用（28戸分）に干拓地の西端部約3haで用意されたが、畜産農家の減少

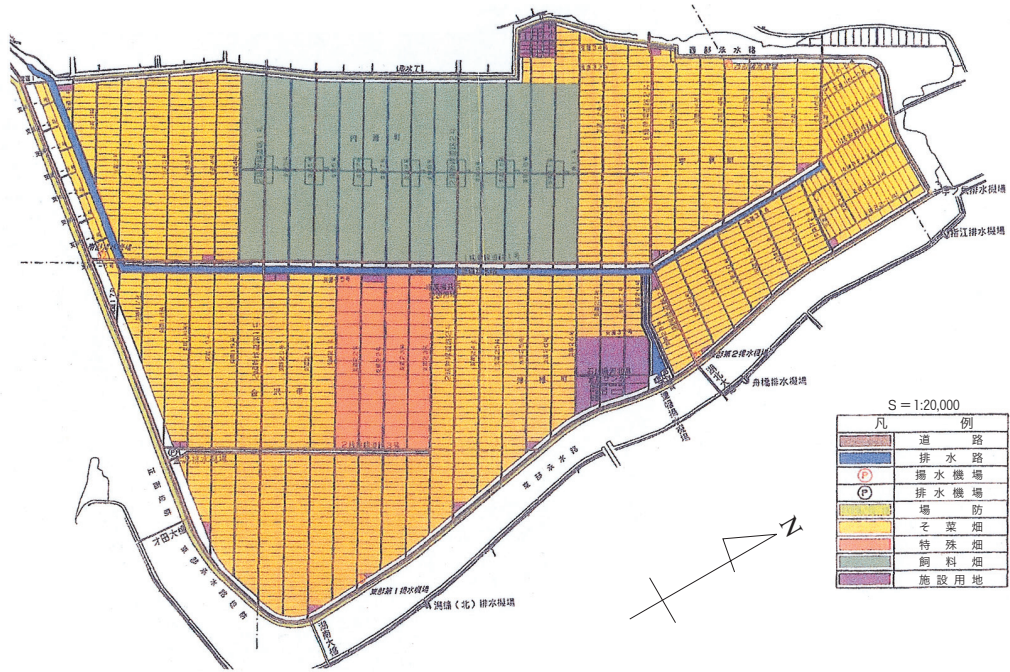


図3 河北潟干拓地における入植時の土地利用計画

(農林水産省による)

で2011年現在畜産農家は13戸、一般住宅17戸となっている。またところどころに小規模な格納庫（農業倉庫）が用意された。

### (1) 農業施設

また、地図上で見ると、入植後新たな農業関連施設ができています（図4）。飼料畑の南部に配置された(株)河北潟ゆうきの里は2000年に建設された。この施設は畜産団地から出る牛糞を堆肥にする施設である。3haの用地に堆肥化施設を整え、環境保全にも役立っている。その他、野菜出荷場、麦茶焙煎工場、JA 種苗センターなど営農に寄与する施設が干拓地の中心部に出来上がっていった。野菜出荷場は1.7haで河北潟営農公社が所有し、麦茶焙煎工場は0.6haで農協の全農いしかわの所有であるが民間の京都グレインに貸与している。種苗センターは0.6haで全農いしかわの所有である。

また、干拓地農業への理解と親しみを深めてもらう目的で、ひまわり村やチューリップ園など施設を設けた。ひまわり村は1995年に河北潟土地改良区が中心部の土地0.6haをひまわり畑にしたのが始まりである。ひまわり村は2011年現在2.3haまで拡大し、地元の保育園児に播種

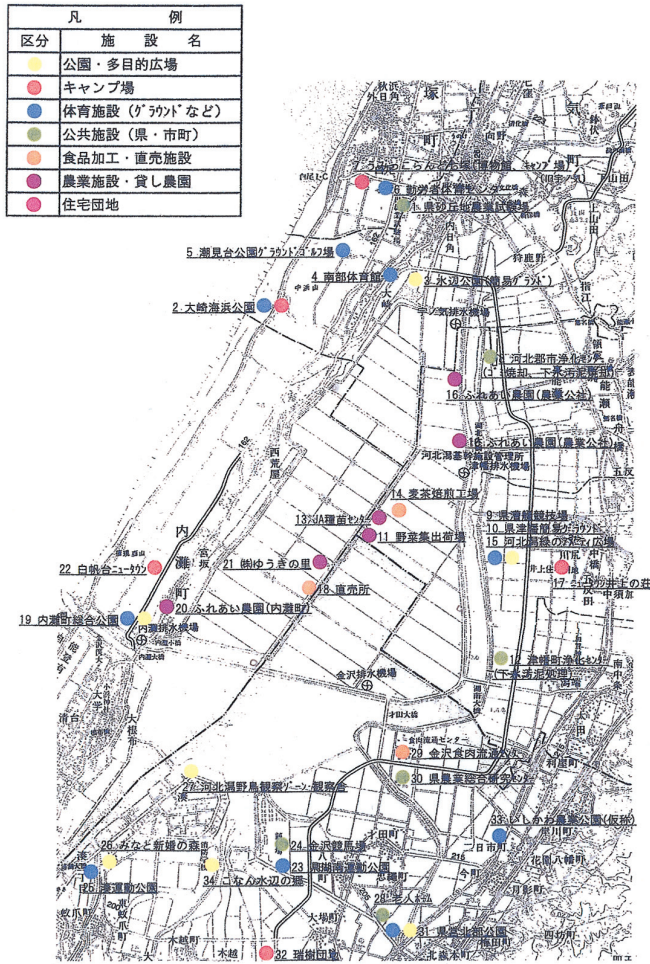


図4 河北潟干拓地における干拓地とその周辺の諸施設  
 （「河北潟干拓地の概要」2011年4月による）

をしてもらい7月下旬から8月上旬にひまわりが咲き誇る。これを都市住民に鑑賞してもらうとともに迷路をつくり遊びの要素も入れた施設になっている。チューリップ園は2.3haで個人が経営していたが現在は閉鎖されている。

## (2) 農地の利用

農地の利用についてみると、暫定営農の時期は盛んに野菜が奨励されたが、野菜では収穫量が上がらず、多くの入植者が干拓地から撤退した。その理由は、土壌が透水性の悪い粘質土壌

で、水面下1.5m～2.0mの排水の悪さである。

本格営農に入ると畑地は麦類や野菜類が栽培され、畜産農家用の飼料畑は牧草が栽培された。また、レンコン畑に指定されたところではレンコン栽培がされた。1986年の本格営農の年には、穀類では麦が364ha、大豆が232haの計596haであり、野菜はスイカが82ha、レンコンが30ha、キャベツが20ha、その他の野菜が70haの計202haであった（図5）。

当初の営農指導では、野菜栽培を主体にしていたが、慣れない野菜栽培はあまり普及しなかった。その他の作物が20ha、果樹は3haで種類は不明である。以上、畑作物は821haであった。飼料作物は257haでその家畜では乳用牛のみで1,798頭であった。この干拓地内の作付面積の合計は1,078haとなり農地面積からみると100%の利用と読み取ることができる。

その後は、飼料作物の面積が広くなり、レンコン栽培も多い。その他、麦類、大豆などが多く、スイカ、キャベツ、ダイコン、ニンジン、メロン、軟弱野菜、果樹ではナシ、ブドウなど、花・花木、芝・造園樹、タバコなどが栽培されていた。

中間の1998年では、畑地面積において穀物では麦類が365ha、大豆が322ha、水稻11haと水稻がみられるところに特色があった。野菜ではスイカが62ha、レンコンが46ha、キャベツ12ha、軟弱野菜11ha、その他の野菜34haとなり計165haであった。花きは4ha、その他の作物

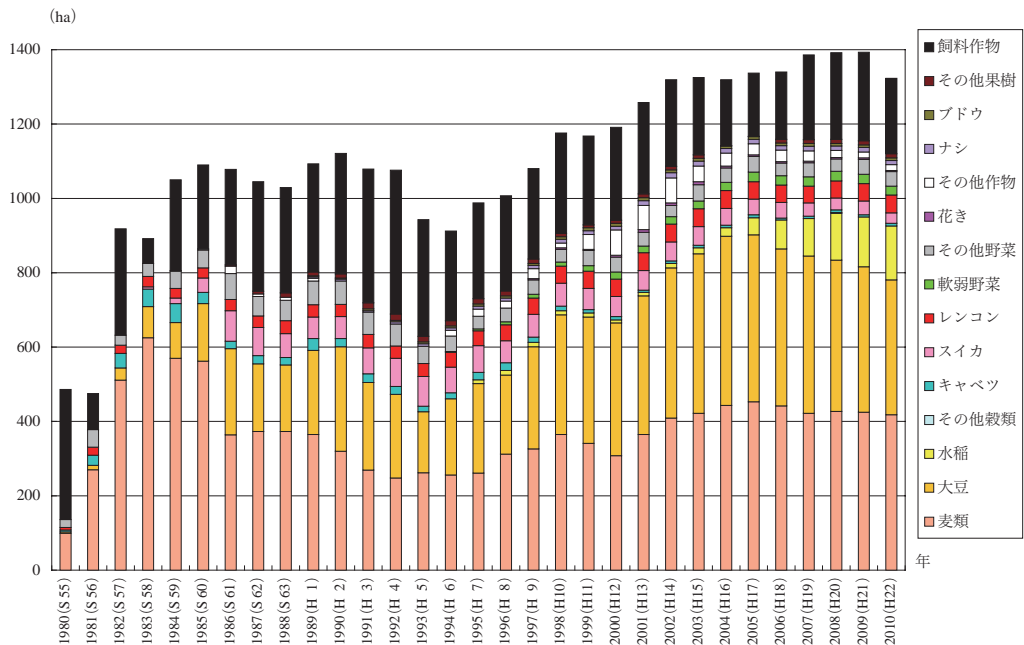


図5 河北潟干拓地における品目別の栽培面積

(石川県農林部農業政策課作成による)

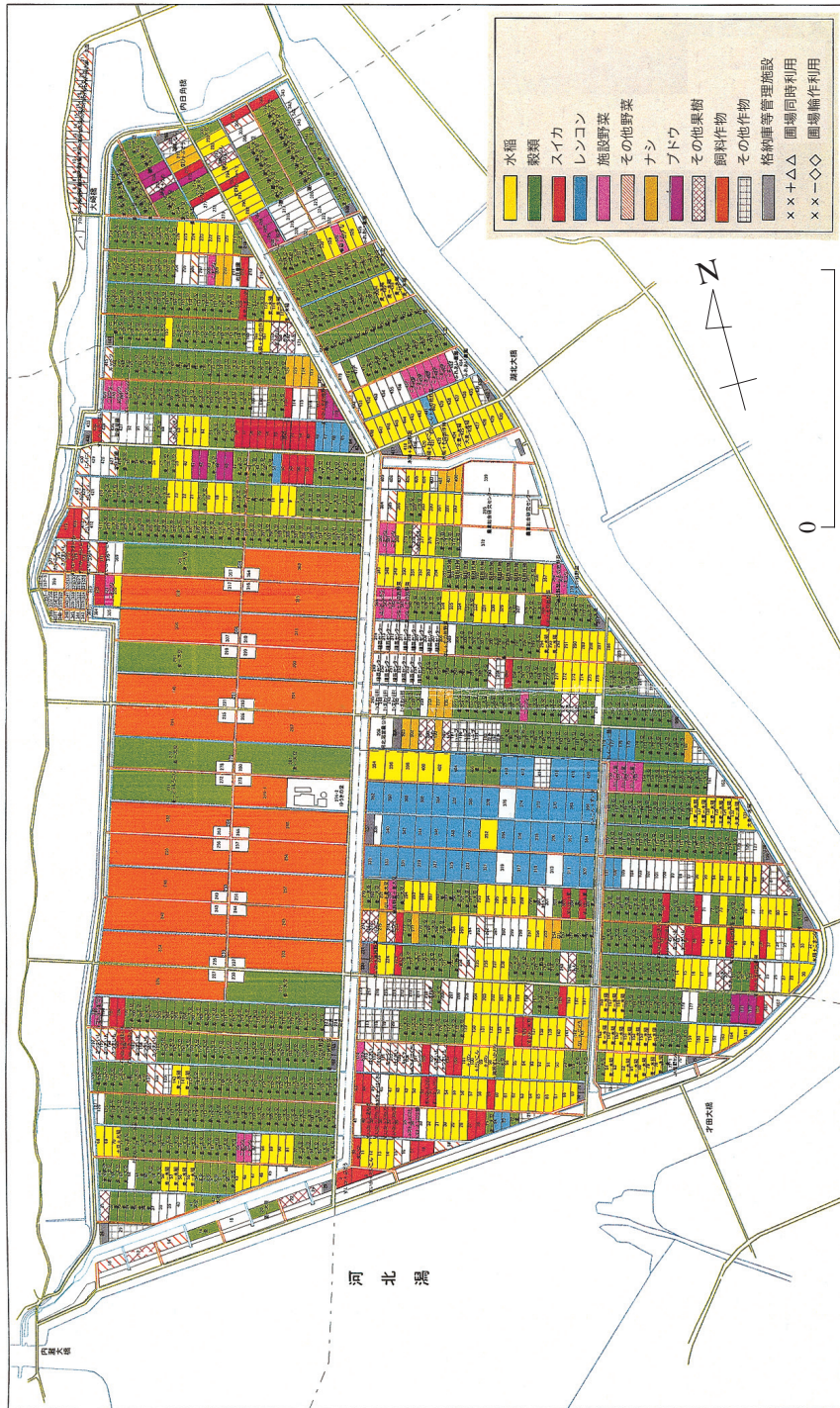


図6 河北潟干拓地における作付実態 (2010年5月・11月調査結果)  
 (「河北潟干拓地の概要」2011年4月による)



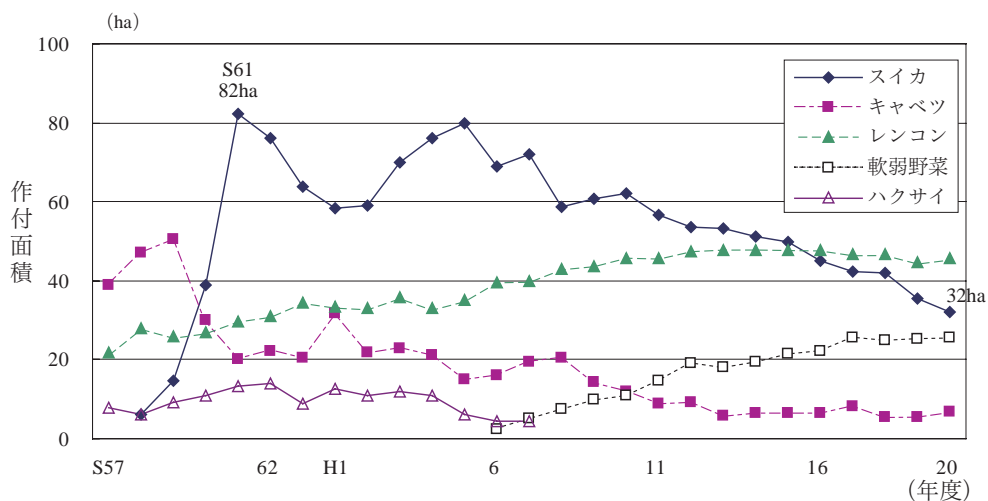


図7 河北潟干拓地における主要野菜作付面積の推移

(石川県農林部農業政策課作成による)

13ha、果樹はナシが10ha、ブドウが7ha、その他の果樹が9ha計26haとなっていた。以上の畑作物の栽培面積の計は906haであった。畜産では乳用牛は1,861頭、肉用牛が429頭と、肉用牛が増加して計2,290頭、飼料作物は270haとなっていた。干拓地合計1,176haの作付がなされていた。

現在の状況を2010年でみると、麦類が418haと大面積を占め、次いで大豆が363haとなっている(図6)。ここで水稻が145haと増加したのも特徴であり、穀類の計926haとなった。野菜はレンコンが48haと一番多く、次いでスイカが28ha、軟弱野菜が24ha、キャベツが2haと減少し、その他の野菜が39haとなっており野菜の計は146haである。果樹はナシが11ha、ブドウが7haその他の果樹が11haの計29haとなっている。施設の花きは3haに減少しており、小菊とトルコキキョウが主である。畑作物の計は1,120haである。畜産用地において飼料作物は203haであり作付面積の合計は1,323haである。作付面積の合計は年々増加したが、最大は2009年の1,393haであった。この干拓地は、日本海側に位置するため冬作は不可能であり、耕地の利用率が低いとみることができ、延130%の利用と100%以上となっている。

野菜類の推移をみると、営農当初はキャベツが一番多く、次いでレンコン、ハクサイと続いたが1982年からスイカが登場すると急激に増加し1986年には82haと急激に増えた(図7)。その後スイカは漸減状態である。レンコンの微増が続き、現在は栽培面積でトップである。1994年ごろから軟弱野菜が増加してきている。

### (3) 土地の所有形態

河北潟干拓地の農地は、1979年からの暫定営農から普通畑648.53ha、特殊畑（レンコン）39.57haの計688.1haを個人配分地として1986年まで8次にわたって計画配分された。最終的には未配分面積が201.5haとなった。ただし1980年の第三次配分で一時期全配分面積の仮配分が行われたが、本格営農までに多数の辞退者があり、入植を予定した農地が売れ残ったところを1985年に石川県農業開発公社が201.5haを国から配分を受けた。

河北潟の畑作地の形状は、一筆当たり60aとなっていることから、当初の1戸当たりの配分面積は原則として普通畑では概ね1.2、1.8、2.4、3.0、3.6、4.2、4.8haとし、レンコンの特殊畑では概ね1.2、2.4haとした。ただし、普通畑と特殊畑は合わせての配分はしない。

増反入植者による配分条件は、①金沢市、津幡町、内灘町、宇ノ気町（現河北市）に住所を有し、0.8ha以上の経営面積を有する農家の者及び農業生産法人であること、②農家の者であって、年齢は20歳から59歳までの者。ただし50歳を超えるものについては、農業後継者があること。となっていた。

しかし、本格営農が開始される直前に多数の辞退者が出てからは上限面積及びその他の条件も廃止されている。また、土地代の償還は、事業が完了した1986年度より3年据え置き22年元利均等償還方式（年6.5%）での償還となった。

1986年には農業開発公社が離農農家の農地を135.7ha取得し、その後売り渡した農地を差し引いた248.4haを現在保有している。2010年における作付地は1,071haのうち1,002haであり、不作付地は69haである。

そして、公社の取得した農地は、ほとんどの農地を貸し付けており、内訳は、普通畑が201.7haで一時貸付地が196.5ha、ふれあい農園（市民農園）1.8ha、遊休地は3.4haとなっている。飼育畑が46.7haで一時貸付地が41.6ha、宅地の貸付地が2.5ha、遊休地が2.5haとなっている。農業開発公社の所有地を合計すると、一時貸付地が244.8ha、宅地の貸付地が2.5ha、遊休地は5.9haである。石川県農業開発公社の保有地は、貸付がほとんどで干拓地全体の利用率を上げている。

振り返ってみると、1970年までに完成したわが国の大規模干拓地の多くが、入植者には干拓地に入植して同一の面積と土地条件も揃うように2か所に分散して配分は平等ということが前提であった。しかし、1970年以降の造成された干拓地は、水田皆無から始まり土地配分や土地所有、営農などに新しい形態がみられるようになった。

河北潟では、1986年営農開始され、畜産・レンコン畑は指定され、畑地は増反入植者に任せる形となった。岡山県の笠岡湾干拓地では、1990年に営農が開始され、農地面積1,187haで畜産経営（10ha）、耕種複合経営（5ha）、園芸複合経営（1.5ha）に分けて募集がなされた。笠

岡湾干拓地は畜産農家で埋められなかった328haを粗飼料生産供給基地として、畜産農家などに貸し出し飼料の供給に役立っている例もある。

また、長崎県の諫早干拓地は2008年に営農を開始して農地面積816haの全農地を長崎県農業振興公社が国から購入し、その農地を貸与する形をとっている。干拓地に集落等用地はあるが入植者は1戸のみで他は農業施設となっている。農地は5年の貸与契約で、その後再契約の形をとるといふ。これは、入植に当たっての入植農家の負担軽減という意味をもっており、農地の所有を容易に変更できるという良さがある。保有面積も営農も希望を出して割り当てる形をとった。この干拓地には、今まで農業に関係の無かった企業まで入っており保有面積は60haから3haまで様々である。

このように、新しい干拓地は造成の時期から土地の所有や営農の形態に過去の反省を踏まえて変化がみられるのが特徴である。

## 4 営農の実態

ここでは、入植者の聞き取り調査から、干拓地の主要な営農実態を明らかにする。

### (1) 畜産経営

1981年から酪農家の入植が始まり、1984年の入植完了時に22戸（28セット）が営農を開始したが、これまでに経営主の死亡や経営の行き詰まりなどでこれまでに10戸（12セット）が離農した。1991年に新たに1戸（1セット）が県外から入植したことにより、現在は13戸（17セット）が営農している。内訳は、4セットが1戸、2セットが1戸、1セットが11戸となっている。

酪農への入植は以下の条件が課せられていた。石川県内に住所を有し、酪農に従事していること、事業主の年齢は20歳から59歳までの者で、50歳を超える者については農業後継者がいること、また概ね1,600万円の資金及び35頭の搾乳牛を携行できる者、干拓地に移住できる者としていた。

乳牛頭数は入植当初22戸の時は1,910頭（うち経産牛は1,505頭）を飼育しており、生乳生産量は9,020tであり1頭当たりの生産量は5,993kgであった。ちなみに当時の乳価は118円/kgであった（表1）。乳用牛はホルスタインがほとんどで一部ブラウンスイス（ジャージ）牛が飼育されている。肉用牛は1988年から導入された570頭から始まったが、次第に減少して2010年には75頭までに減少した。

2009年では、13戸で乳牛頭数は1,339頭（うち経産牛は1,190頭）、生乳生産量は10,445tであ

表1 河北潟干拓地における畜産部門の新旧対比

	利用施設数 (セット)	農家数 (戸)	乳牛頭数 (頭)	生乳生産量 (t)	1頭当生産量 (kg)	乳 価 (円/kg)
1986年度	28	22	1,910 (1,505)	9,020	5,993	118.216
2010年度	17	13	1,339 (1,190)	10,445	8,654	109.92

・乳牛頭数 (H22.2.1 調査) の ( ) は経産牛頭数で内数、差し引き頭数は子牛、育成牛を示す。

・生乳生産量は暦年データによる計数

・H22乳価は河北潟干拓地酪農家のみを暦年データ実績値

(石川県農林部農業政策課作成による)

表2 河北潟干拓地における畜産農家の規模別戸数

項 目		規模別農家数割合 (%)			
		8.0ha 以下	8.1~16.0ha	16.1ha 以上	計
飼 料 畑	戸 数	9	2	2	13
	割 合	69.2	15.4	15.4	100
牛 (乳牛+肉牛)		60頭以下	61~120頭	121頭以上	計
	戸 数	2	7	4	13
	割 合	15.4	53.8	30.8	100

・子牛、育成牛も含む全頭数

(「河北潟干拓地の概要」2011年4月による)

り、1頭当たりの生産量は8,654kgと入植当時に比べ生産性は大きく伸びている。しかし、乳価は109円/kgと約10円の低下をしている。畜産農家は13戸であるが、飼料畑は8ha未達が約70%と最も多く、8.1ha~10haが2戸、16.1ha以上が2戸になっている(表2)。牛の全頭数では60頭以下が2戸、61~120頭が7戸、121頭以上が4戸となっている。なお、畜産の生産額は統計上では1994年まで明らかになっていない。2010年現在では、畜産は乳用牛が1,501頭、肉用牛が75頭、計1,576頭となっている。

畜産経営で問題となる環境への影響に関しては、前述の牛糞処理施設「ゆうきの里」の立地で緩和された。

## (2) レンコン経営

レンコン農家は干拓地内中央の金沢市域に特殊畑として設定された。レンコン栽培は地元金沢市で加賀レンコンとして特産地化していた。藩政時代加賀藩の5代藩主前田綱紀の頃から栽培されていたといわれている。当時は城内で栽培され薬用にされていた。

その後、金沢市の大樋町(小坂地区)で栽培され「大樋蓮根」とよばれ加賀の国の産物とし

て栽培されるようになった。明治の中ごろから商品作物として小坂蓮根として出荷されるようになった。これまで種々の品種が導入されたが、現在は「支那白花」が中心である。レンコン栽培の適地であるこの干拓地で1980年に7haから始まり、1986年に30haを超え、1994年に40haを突破し2001年に48haまで達しその後若干下がるがこの面積を維持している。生産額をみると、2009年に271百万円となり最高を示している。

栽培は4月下旬から5月下旬に種レンコンを植え付け、収穫は9月下旬から翌年の5月中旬まで市場の状況に応じて長期に出荷する普通栽培である。掘り取りは水圧をかけておき後は手掘りで、洗浄には井戸水が使用されている。ここのレンコンは、泥付きレンコンとして地元市場を中心に出荷される。

1986年のレンコン栽培者は15戸とみられ、面積拡大とともに増加し2010年には27戸となっている。2010年の生産額239百万円から単純に計算すると1戸当たり880万円の生産額となる。よってレンコン栽培はこの干拓地の土壤に適合し特産品となっている。

### (3) 畑作経営

次に一般の畑作地と区分されるところの農地をみると、穀物畑と野菜畑と果樹園に大きく分

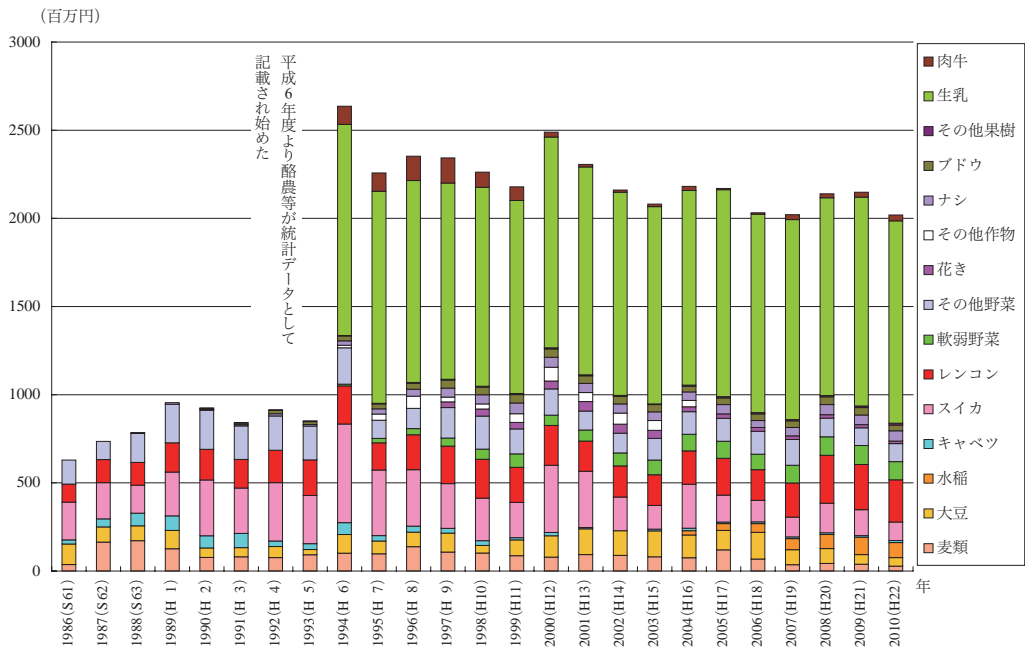


図8 河北潟干拓地における品目別の生産額の推移

(石川県農林部農業政策課作成による)

表3 河北潟干拓地における農産物の生産状況 (2010年)

		2010 年 度				
		作付面積 (ha)	10a 収量 (kg)	生産量 (t)	単価 (円)	生産額 (千円)
穀 類	大 麦	357.3	203.2	726	36.5	26,519
	うち収穫面積	302.4	240.1			
	小 麦	61.6	55.0	34	48.0	1,626
	うち収穫面積	57.1	59.3			
	大 豆	362.9	91.5	332	145.9	48,461
	うち収穫面積	330.0	100.6			
	水 稻	144.8	499.0	723	117	84,936
	うち加工米	114.2	499.7	571	100	57,066
	その他穀類	—	—	—	—	—
穀 類 計	926.6	—	1,815	—	161,542	
野 菜	ス イ カ	28.0	3,000	840	125	105,000
	キャベツ	7.0	1,500	105	117	12,285
	ダイコン	2.9	5,000	145	80	11,600
	レンコン	48.1	920	443	541	239,403
	メ ロ ン	0.4	1,050	4	335	1,407
	サツマイモ	8.5	1,500	128	296	37,740
	コマツナ	26.4	1,049	277	375	103,585
	ト マ ト	1.2	4,000	48	225	10,800
	その他野菜	23.8	1,608	383	106	40,567
	野 菜 計	146.3	—	2,372	—	562,387
果 樹	ナ シ	10.5	1,783	164	352	57,740
	うち結果樹	9.2				
	ブ ド ウ	7.1	782	43	771	33,160
	うち結果樹	5.5				
	その他果樹	11.7	600	33	303	9,999
	うち結果樹	5.5				
	果 樹 計	29.3	—	240	—	100,899
うち結果樹	20.2	—	—	—	—	
花 き	2.8	9,000	252	56	14,112	
その他作物	15.9	—	—	—	—	
畑作物計	1,120.9	—	—	—	838,940	
酪 農	乳用牛 (頭)	1,501	8,654	10,445	109.9	1,148,000
	うち経産牛 (頭)	1,173				
	肉用牛 (頭)	75	—	—	145	33,212
	うち販売頭数	229	—	—	—	—
	飼料作物	202.5	5,657	11,455	—	—
畜産計	—	—	—	—	1,181,212	
総 計	頭 数 (頭)	1,576	—	—	—	2,020,152
	作付面積 (ha)	1,323.4	—	—	—	

\*花きの「10a 収量」の単位は (本・球・鉢)、「生産量」については (千本・千球・千鉢) である。  
(「河北潟干拓地の概要」2011年4月による)

けられ、小規模に花きとその他の作物がみられる。

生産額をみると本格営農を開始した1986年には、品目別ではスイカが一番高く214百万円で、次はその他の野菜の136百万円、大豆の116百万円、レンコン102百万円と続いていた(図8)。麦類と大豆が大幅に減少しているが、これは国の買入れ価格が低下していることに起因している。

中間の1998年では、スイカの241百万円、レンコンの221百万円、麦類の102百万円と続いている。そして、2010年ではレンコンで239百万円、スイカが105百万円、軟弱野菜が103百万円と続く。注目すべきは2004年から生産額に出てきた水稻の85百万円である(表3)。

生産額の推移をみると、それぞれの品目のピークが異なりそれぞれの時代を反映したものかと思われる。麦類は初期に高く、スイカは衰退気味である。レンコンは比較的安定した形をとっている。軟弱野菜はほとんどがコマツナであり、新規就農者の増加と価格の高騰で伸びてきているといえよう。花きは途中から伸びたが衰退傾向にある。果樹はナシとブドウが維持している。

#### (4) 入植農家の実態

河北潟干拓地における入植農家は、2011年現在、農家277戸と農業法人11の計288で構成されている(表4)。聞き取り調査では、実際の営農者は約180名であり、残りの約100名は土地持ちの農家で実際営農はしていないと推定される。よって、河北潟干拓地の平均農地面積は約4haと見積ることができる。

表4 河北潟干拓地における農家構成

市町名	経営主の年齢構成(人)							認定 農家数 (人)	中核 農家数 (人)	後継者 数 (人)
	40才以下	41～50才	51～60才	61才以上	小計	法人	合計			
金沢市	4	13	19	92	128	4	132	39	34	9
かほく市	3	5	9	25	42	3	45	23	24	1
津幡町	2	7	12	34	55	0	55	21	17	2
内灘町	0	3	7	31	41	3	44	23	20	8
その他	1	0	1	9	11	1	12	2	2	1
計	10	28	48	191	277	11	288	108	97	21

- ・農家数は2011年1月1日現在干拓土地改良区所有者台帳に記載された地権者である。
- ・認定農家数は、市・町調べによる。
- ・中核農家数は、中核農家登録台帳による。
- ・後継者は、農家後継者登録台帳に記載された者をいう。
- ・農家数は、法人を含む地権者数をいう。(2005年より法人欄を新設)

(「河北潟干拓地の概要」2011年4月による)

表5 河北潟干拓地における耕種農家の規模別割合

項 目	規模別農家数割合 (%)						計
	1.20ha 以下	1.21～ 1.80ha	1.81～ 2.40ha	2.41～ 3.00ha	3.01～ 4.80ha	4.8ha 以上	
自 作 地	35	14	13	8	13	17	100
経営耕地 (自作地+借地)	38	9	11	9	10	23	100

(「河北潟干拓地の概要」2011年4月による)

農家の経営主の年齢構成は、68.9%が61歳以上、17.3%が51～60歳、3.6%が40歳以下であり。農業後継者が21人は少なすぎる。この結果は、農業者が如何に高齢化しているかが伺え、将来の営農に不安が残る。しかし、認定農家数は277戸のうち108戸、中核農家が97戸存在する点は、有利に働くことが期待される。

経営耕地の規模別農家数で見ると、1.2ha以下が38%と最も高く、これは増反入植のためと思われる(表5)。一方4.8ha以上は23%と次に高く両極に分化しているといえる。

現在は経営耕地面積で見ると、所有地と借地を合わせて100haを超える営農を行っている農家が1戸ある。この農家は有機農業を進めており、その作物は大豆や小麦が主体となっている。50haを超える農家は2戸、20haを超える農家も3戸存在する。

入植農家の多くは、稲作ではなく畑作を強いられ干拓地特有の土壌条件により慣れない野菜作の導入を強く指導され苦勞した。河北潟干拓地より後にできた笠岡湾干拓地では、先に述べたように導入の部門を指定して入植する形をとった。諫早湾干拓地では入植時に厳しい審査を実施し、これまでの実績などが入植判定の材料に使用された。そして、増反農家には干拓地での経営内容・面積の希望を申告して審査を受けた。これらのことは、河北潟干拓地から学んだ教訓のようにみえる。

## 5 水田稲作の増加

入植時には畑地で始まった河北潟干拓地は、1986年の本格営農が開始されてから8年を経過すれば土地改良規則の営農計画が緩和されるが、「新規開田抑制通達」により規制が緩和されなかった。しかし、10年後の1995年に10haの水田稲作(水稻)が現れた。稲作は最初、加工米に限られ面積も少なかったが、2007年には100haを超えるほどになり、水田皆無の干拓地に2010年現在145haの水田が出来上がった(図9)。その内訳は、加工米は114.2ha(78.9%)、生食米は30.6ha(21.1%)となっている。

稲作導入の契機は、営農当初から増反者として入植した大半の農家は、将来は稲作が可能に



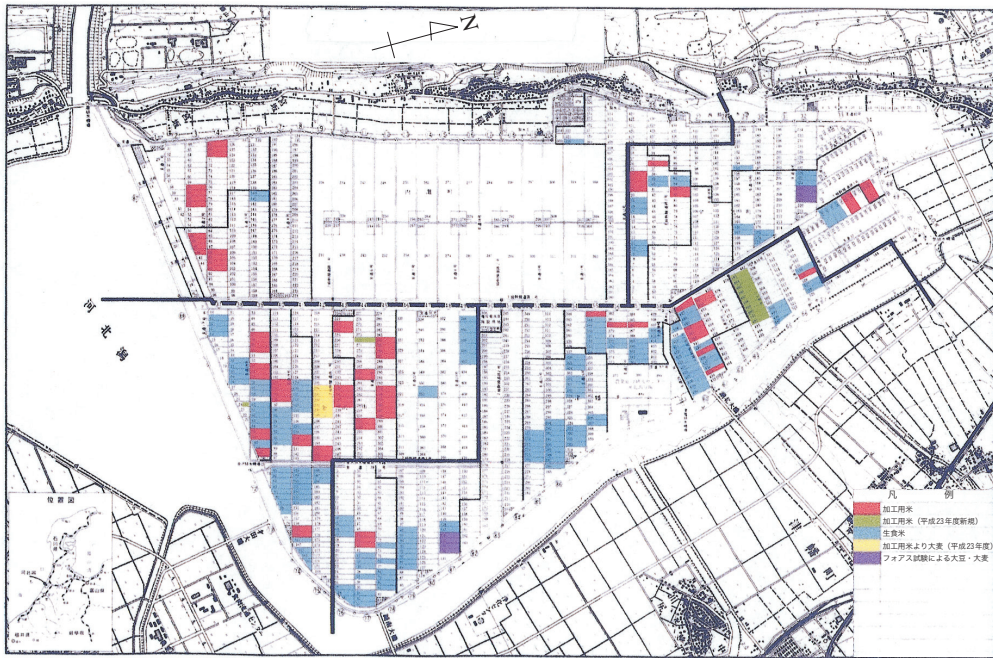


図9 河北潟干拓地における米の種別作付地（2011年）

（石川県農林部農業政策課作成による）

なるであろうとの期待をもって入植した経緯がある。入植して10年後の1995年に米作を石川県に強く要請した。結果として畑作の雑草対策、連作障害回避の試験田として5年間の期限付きで約10haが認められ、その後5年ごとに更新し最終的には「鴨のおとり用の池」として現在にいたっている。

水田が増加している理由は、干拓地が低湿地で土壌が水田稲作に適しており、豊凶の差の少ないこと、入植農家は畑作栽培に不慣れであり、かつ畑作物の単価が安く農家所得が不安定で、所得向上が望めないこともある。一方水稲栽培は、機械化が進み労働力の省力化と背後地で長年培った稲の栽培技術を有している点があげられる。

畑作物やレンコンの鴨による食害を防ぐための「おとり用の池」として加工米の稲作が認められた。特に、レンコンは水中の地下にあるレンコンまで鴨に食い荒らされるという。そのため、水田という池を鴨にあてがうことで食害を防ごうとしたものである。麦や牧草の食害も減少し、おとり池の実施前は100ha程度の被害があったが、現在は半分程度に縮小されている。

この干拓地で生産された加工米は、煎餅や味噌の材料となっている。生食米の稲は、減反政策の影響を受け各農家の既存の所有耕地で作付していたところを止めた面積分を、この干拓地

内で栽培が許可されるという。よって、生食用の水田面積は地域全体でみた場合に変動を生じないようになっている。

しかし、畑作主体のこの干拓地には、用水の施設が前述の揚水施設しかなく、近年水田が拡大する中で、この揚水能力が水田用に対応していないため、河北潟調整池に水量はあるが、これ以上の取水ができないという欠点が出てきた。また、河北潟調整池から多量に取水する場合、水利権の問題を解決しなければいけなくなる。これらの問題が解決されれば、より水田面積は拡大の方向に向かうと思われる。

## おわりに

わが国の大規模な干拓地は、入植当初、政府の米の生産調整政策により大きく営農の転換を迫られ入植者が苦悩した経緯がある。この河北潟干拓地は、造成が遅いため入植時から水田皆無で始まり、畜産（酪農）と畑作そしてレンコン畑が指定され入植を募ったという特殊な干拓地である。

そこで、造成から土地利用がどのように変化したかを研究課題とし、調査の結果から次のようなことが明らかとなった。

1986年本格営農を開始し、農地は大きく3区分され、1区画が普通畑は0.6ha、レンコン畑は1.2ha、飼料畑は8haになっている。農家の入植は畜産団地のみで、他は増反入植である。入植時に行政区分が行われ、4市町に分けられた。このように、同一干拓地内で行政地の異なる点と、入植農家が畜産農家のみという点が、干拓地の共同体としてのまとまりを阻害する要因にもなっている。

新たな農業関連施設としては、(株)河北潟ゆうきの里、野菜出荷場、麦茶焙煎工場、JA 種苗センターなど営農に寄与する施設が干拓地の中心部に出来上がっていった。農業開発公社の保有地を合計すると、一時貸付地が244.8ha、宅地の貸付地が2.5ha、遊休地は5.9haである。よって、貸付地が多いことが読み取れる。

干拓地の所有形態でみると、造成時期が遅くなると賃貸形式が増加の傾向にある。その後完成した笠岡湾干拓地や諫早湾干拓地などの新しい干拓地は、造成の時期から土地の所有や営農の形態に過去の反省を踏まえて、新しい変化がみられるのが特徴である。

農作物は、2010年では麦類が大面積を占め、大豆、水稻が増加したのも特徴であり、穀類の計926haとなった。野菜はレンコンが一番多く、次いでスイカ、軟弱野菜、キャベツ、その他の野菜となっており野菜の計は146haである。果樹はナシ、ブドウ、その他の果樹の計29haとなっている。畑作物の計は1,120haである。飼料作物は203haであり作付面積の合計は1,323ha

である。作付面積の合計は年々増加したが、最大は2009年の1,393haであった。

畜産は乳用牛が中心の経営であり計1,576頭を13農家で飼育している。レンコン栽培者は2010年には27戸、レンコンはこの干拓地の特産品となっている。

生産額の推移をみると、それぞれの品目のピークが異なりそれぞれの時代を反映したものとされる。麦類は初期に高く、スイカは衰退気味である。レンコンは比較的安定した形をとっている。軟弱野菜は増加傾向といえよう。花きは途中から伸びたが衰退傾向にある。果樹はナシとブドウが維持している。

水田皆無の干拓地に2010年現在145haの水田が出来上がった。その内訳は、加工米が114.2ha (78.9%)、生食米が30.6ha (21.1%)となっている。河北潟干拓地で水田面積が増加については、干拓地は低湿地で土壌が水田稲作に適しており、入植者にとって稲作経営は入植時からの悲願であった。また稲作は他の作物に比べて、価格が安定していて、豊凶の差の少ないこと、作業が機械化され栽培が容易であることも考えられる。水田面積の増加に伴い、今度は水の確保に問題が生起している。

これまでの干拓地における営農の研究から指摘できる点がいくつかみられる。一つには、既存の土地で既に産地化されている作物の導入、ここではレンコン栽培が強いことである。言うまでもなく干拓地の土壌にあっているものと言えよう。二つには干拓地では一般野菜の産地化が困難であるという点である。当然、技術・土壌両面から不適と判断できる。また、産地化するために必要なコミュニティーの不在である。それはすべてが増反入植であったためである。

今後も調査を進め、河北潟干拓地の農業の展開過程を追っていきたい。

## 謝 辞

本研究の現地調査や資料収集、論文作成に際し、河北潟干拓地改良区、石川県農林部農業政策課、県央農業総合事務所津幡農林事務所、そして河北潟干拓地の入植者の方々に大変お世話になりました。これらの方々にお礼申し上げます。

## 参考文献

- 河北潟環境対策期成同盟会 (2007) : 『河北潟とわたしたちの暮らし』 134p.
- 齊藤晃吉 (1969) : 『湖沼の干拓』 古今書院 162p.
- 二宮書店 (1970) : 『日本地誌10 富山県・石川県・福井県』 日本地誌研究所 229-232.
- 北陸農政局河北潟干拓建設事務所 (1986) : 『干拓事業の記録』 481p.
- 北陸農政局河北潟干拓建設事務所 (1986) : 『河北潟干拓事業誌』 316p.
- 北陸農政局河北潟干拓建設事務所 (1985) : 『完工記念誌』 108p.
- 北国新聞社編集局 (1985) : 『レポート河北潟干拓』 北国新聞社 247p.

石川県河北潟干拓地における営農展開の一考察

山下和歌子（1991）：「河北潟干拓地における農業」お茶の水地理32 p.57.

山野明男（2004）：「干拓地における土地利用の変更と営農の特色—岡山県笠岡湾干拓地を事例として—」  
地理学報告99 27-46.

山野明男（2006）：『日本の干拓地』農林統計協会 227p.

山野明男（2009）：「長崎県諫早湾干拓地における新しい入植形態に関する一考察」愛知学院大学教養部紀要  
56-4 67-84.

# 数学における数の実在論について

久馬 栄 道

## 1 はじめに

数学における数の概念は現在では、自然数、整数、有理数、実数の順番で、整然と集合論の上で構成されている。ここで自然数は、

$$0, 1, 2, 3, \dots$$

である。整数はこれにマイナスの数を含めた

$$\dots, -2, -1, 0, 1, 2, \dots$$

である。有理数は分子分母が整数で分母が 0 でない分数、すなわち

$$\frac{a}{b} \quad (a \text{ は整数、} b \text{ は } 0 \text{ でない整数})$$

である。

自然数全体の集合を  $N$ 、整数全体の集合を  $Z$ 、有理数全体の集合を  $Q$ 、実数全体の集合を  $R$  として、

$$N \subset Z \subset Q \subset R$$

となる。このように集合の概念で数を理解するようになったのは、もちろんゲオルク・フェルディナント・ルートヴィヒ・フィリップ・カントール (Georg Ferdinand Ludwig Philipp Cantor) が集合論を作った以後となる。

さて、本論文の表題に「実在論」という言葉を用いているが、これは“Realism”の和訳であり、本論文においては物事の背後にある本質的な存在の意味で用いることとする。数は数学のいちばん本質的な存在であり、一見集合とは関係なさそうである。しかし、そのさらなる本質的な存在は、現代数学では集合を用いて構成されている。

ところで、この集合による数の構成は、じつは数直線概念によっている。では、いつからこのような理解になったかということ、それはルネ・デカルト (René Descartes) の著書「幾何学 (La Géométrie)」からである。もちろん直線概念は、古来からあるわけだが、それが数直線という形で数と結びつくためには、長い歴史が必要だったわけである。

それでは、それはどのようにして現代のような形になったのであろうか。それらを本論文で見に行こう。

## 2 古代ギリシャ以前

古来より、数を数えるという行為は、あまりにも自然なことであり、自然数の起源を探ることは、きわめて難しい。しかし、たぶん人類の知性の発生とともに、自然数はあったと思われる。ただし0の概念は、後のインド人による。

7つの指、7つの石、7つの星、7つの耳、これらにながしら共通点があるとわかるためには、**1対1対応**が必要なわけである。1対1対応を行うと、これらは同じ個数だとわかり、個別のものに属していた「7」という数が、単独で導き出される。

また一方、量に対する関心も、人類の知性の発生とともにあったと思われるが、量に関しては、量というよりは、2つの量の大小を比べるということに関心があったように思える。長さという量の大小は、2つを並べてみれば分かるし、重さという量の大小は、秤にのせてみれば分かる。

ここに単位の長さや単位の重さが現れて、はじめて量という概念が現れるわけである。しかし、古代世界においては、単位というものは、かなり変化するものであった。

たとえば古代日本においては、大きな建造物を造る場合には、頭領の定規、つまり指矩(さしがね)にあわせて、配下の大工のものも作り直し、長さを統一していたそうである。

これらの量から、現代的な意味の実数の概念が表れるのには、デカルトまで待たねばならない。

## 3 古代ギリシャ

現在では実数という言葉で表しているものは、古代ギリシャには存在しなかった。それに近いものは、「比(logos)」の概念で表されていた。現代的な実数の概念は、デカルトによって導入される単位の長さ1の概念や、それから導かれる数直線の概念ができてからである。

比は $a:b$ と書かれる $a$ と $b$ の関係である。厳密には、分数 $\frac{a}{b}$ と同じではないが、そのように理解するとわかりやすいこともある。

例えば、今では我々が $\sqrt{2}$ と書くものは、古代ギリシャでは正方形の対角線の長さ1辺の長さの比であったが、これは比を分数の意味で考えるとわかりやすい。また $\pi$ と書くものも、円周と直径の長さの比である。

古代ギリシャでは、自然数の比を共測量と呼び、正方形の対角線と1辺の比が共測量ではない量、非共測量であることを知っていた。これは現代の言葉で言えば、 $\sqrt{2}$ が有理数でないということになり、証明は今では高校の教科書に、背理法の例として出てくる。

ピタゴラス (Pythagoras) はなんらかの宗教と関係のある教団を作っていたらしいが、その教団は共測量を絶対視していたので、正方形の対角線とその辺の長さの比のような非共測量の存在を知ってはいたが、秘密にしていたらしい。

古代ギリシャで、もっともまとまった数学書は、ユークリッド (Euclid) の「原論 (Elements)」である。「原論」は全部で 13 巻あるが、その中で比に関して書かれているのが、第 5 巻比例論と第 10 巻非共測量である。この第 5 巻の定義 5. は、今でいうと

$$a : b = c : d$$

を定義しているのであるが、原文を読むと、そうとう複雑である。

4 つの量が、第 1 が第 2 に対し、そして第 3 が第 4 に対し、同じ比にあると言われるのは、第 1 と第 3 の等多倍が、第 2 と第 4 の等多倍に対して、それが何倍であろうとも、[第 1 と第 3 の等多倍の] 各々が、[第 2 と第 4 の等多倍の] 各々に対して、あるいは同時に超過するか、あるいは同時に等しいか、あるいは同時に不足するときである。ただしこれら [の多倍] は対応する順序でとられるものとする。

これは  $\sqrt{2}$  倍のような、共測量でないものの等号を、整数倍と大小の比較のみで、定義しているのである。さらに 19 世紀にユリウス・ヴィルヘルム・リヒャルト・デーデキント (Julius Wilhelm Richard Dedekind) がデーデキント切断とよばれるものを用いて、実数論を展開し完成させる考えの基礎となった重要な定義なのである。

しかし、少し見ただけでは、あまりにも明らかなことが書かれていて、さして重要とは思えない。この定義は、どのような場合に、使うのであろうか。

これは、古代ギリシャ人が量というものを幾何学として考えた場合、具体的に値を求めることに興味がなかったということを理解しないといけない。そしてその量に対して、自然数倍するとか、2 つの量の大小を比べるとか、そのような操作しか認めないという態度なのである。

例えば現代であれば、円周率  $\pi$  は精密に周の長さや直径の長さを測り、ある程度の近似値を求められるかもしれないが、このような方法は使わないのである。

さて  $\pi$  の近似値は、 $\frac{22}{7}$  や  $\frac{355}{113}$  などいろいろなものが、古来より知られていた。実用上はこれらで十分であるが、これが厳密に  $\pi$  と一致しているかどうかという疑問がある。

このことは、現代であれば  $\pi$  は有理数でなく無理数であるので、分数で表せられないことは明らかであるが、このことは 18 世紀にヨハン・ハインリッヒ・ランベルト (Johann Heinrich Lambert) と 19 世紀にアドリアン＝マリ・ルジャンドル (Adrien-Marie Legendre) によって証明された結果であるので、とうぜん古代の人は知らないことであった。

そこで、先ほどの定義に従って考えてみよう。

まず適当な円があって、その円周の長さ $\pi$ と直径は長さとしてあるが、その長さの値は具体的には測定しないわけである。そこで仮に、円周を  $k \times \pi$ 、直径を  $k$  としておこう。これが  $\frac{22}{7}$  と一致すると仮定すると、現代の書き方だと

$$(k \times \pi) : k = 22 : 7$$

ということであるが、これを先ほどの定義に従って考えると、任意の自然数  $a$  と  $b$  において、

$$(a \times (k \times \pi) > b \times k) \iff (a \times 22 > b \times 7) \quad \cdots (1)$$

または

$$(a \times (k \times \pi) = b \times k) \iff (a \times 22 = b \times 7) \quad \cdots (2)$$

または

$$(a \times (k \times \pi) < b \times k) \iff (a \times 22 < b \times 7) \quad \cdots (3)$$

ということになる。 $a$  と  $b$  は何でも良いので、 $a = 7$  で  $b = 22$  とし、(2) を考えると、

$$7 \times (k \times \pi) = 22 \times k$$

を考えれば良い。ただし、 $k \times \pi$  と  $k$  は具体的な長さは分からず、図形上に線分として存在するだけである。

そこで  $k \times \pi$  を 7 倍した線分と、 $k$  を 22 倍した線分の長さを比べると、等しくはならないので、定義に従えば  $(k \times \pi) : k = 22 : 7$  とならないわけである。

これが 19 世紀のデーデキントの実数論につながるわけである。

## 4 デカルトの数直線

古代ギリシャ以後、インド人によるゼロの発見とか、マイナスの数の導入とか、さまざまな数の概念の拡張が行われた。それらの後でデカルトにより、数の実在論は本質的に進展した。

現在では、デカルトにより座標系が導入されたように理解されているが、17 世紀のデカルトの著作「幾何学」を読んでも、そのようなものは出てこない。ではデカルトの何が画期的であったのであろうか。

デカルトの「幾何学」を読むと、まず単位の長さ 1 を平面上に決めると、線の長さの量  $a$  と  $b$  に対して、 $a \times b$  の長さを作図することができることを示している。方法は、

$$a : 1 = x : b$$



となるように作図すれば  $x = a \times b$  となり良い。このような操作は相似形の3角形の作図で、簡単に行うことができる。

じつはこれが画期的なのである。たとえば同時代の数学の天才ピエール・ド・フェルマー (Pierre de Fermat) も、長さの量  $a$  と  $b$  を古代ギリシャ人のように認識をしていたので、 $a \times b$  は面積の量としか解釈できない呪縛からは、自由にはなれなかった。

デカルトのように単位の量 1 を設定すると、 $a \times b$  も長さの量として表現できるのである。

つぎに、やはり単位の長さ 1 を平面上で決めると、線の長さの量  $a$  に対して、 $\sqrt{a}$  を作図できることを示している。方法は、 $\sqrt{p^2 - q^2}$  を作図することは、直角3角形を使えばできるので、

$$\sqrt{\left(\frac{a+1}{2}\right)^2 - \left(\frac{a-1}{2}\right)^2} = \sqrt{a}$$

となるように作図してやれば良いのである。

このあとデカルトは、古代ギリシャより難問として考えられてきた「パッポス (Pappos) の問題」を、単位の長さ 1 があれば、線分の長さの方程式として考えることができることを示している。

このパッポスの問題は、ユークリッドをはじめ古代の数学者を悩ませてきた問題だが、デカルトが切り開いた解析幾何学のおかげで、今では高校生でも解くことが可能な問題となった。数学は、本質的に進歩しているのである。

このデカルトによる幾何学平面の単位の長さ 1 のおかげで、現在我々が思い描く数直線の概念ができあがった。直線を単位の長さ 1 に 10 のべき乗を整数倍したものをかけて区切れば、それは 10 進数を表す数直線となる。 $n$  進数の数直線も同じように作れる。

## 5 デーデキントの実数論

19 世紀になると、数学を基礎づける学問が、急速に発展した。そしてデーデキントとカントールは、それぞれの方法で、実数を基礎づけることに成功した。

彼らのやった仕事をおおまかに言うと、有理数を用いて実数の本質を浮かび上がらせ、17 世紀のニュートン、ライプニッツの微分積分学では不正確であった実数の扱いを、厳密に扱えるようにしたということである。カントールはコーシー列と呼ばれるものを用いて実数を定義したが、ここではデーデキントの仕事を紹介しよう。

デーデキントは 1872 年の「連続性と無理数」において、今ではデーデキント切断と呼ばれる概念を示した。これは現在では、1887 年に書かれた「数とは何か、何であるべきか」と合わせて、河野伊三郎先生の訳で、

デーデキント著、「数について」、岩波文庫、1961 年 (現在絶版)

で読むことができる。

さて、有理数全体の集合を  $Q$  とするとき、

$$A \cup B = Q \quad A \cap B = \phi \quad A \neq \phi \quad B \neq \phi$$

であり、

$$\text{すべての } a \in A \text{ と、すべての } b \in B \text{ で } a < b$$

となる  $A$  と  $B$  の組み  $(A, B)$  を、 $Q$  のデーデキント切断という。このデーデキント切断を用いると、数直線上の任意の点を、 $A$  と  $B$  の境界で表すことができる。

たとえば数直線上の  $\sqrt{2} = 1.41421356\dots$  の点は、

$$A = \{q \in Q \mid q < \sqrt{2}\} \quad B = \{q \in Q \mid \sqrt{2} < q\}$$

とすれば良い。

$$\frac{14}{10} < \sqrt{2} < \frac{15}{10} \quad \frac{141}{100} < \sqrt{2} < \frac{142}{100} \quad \frac{1414}{1000} < \sqrt{2} < \frac{1415}{1000} \quad \frac{14142}{10000} < \sqrt{2} < \frac{14143}{10000} \dots$$

なので、

$$\begin{array}{ccccccc} \frac{14}{10} \in A & \frac{141}{100} \in A & \frac{1414}{1000} \in A & \frac{14142}{10000} \in A & \dots & & \\ \frac{15}{10} \in B & \frac{142}{100} \in B & \frac{1415}{1000} \in B & \frac{14143}{10000} \in B & \dots & & \end{array}$$

となり、 $\sqrt{2} = 1.41421356\dots$  に、好きなだけ近い有理数ではさみこめることがわかる。

このように数直線上の点を、有理数との比較で表そうとするのは、本質的には前に紹介したユークリッドの「原論」の第5巻の定義5.と同じである。

数直線上の点は、このようにデーデキント切断  $(A, B)$  によって表すことができるので、デーデキント切断  $(A, B)$  そのものを数直線上の点そのものと思っても良い。つまり数直線上の点の存在論、すなわち実数の存在論は、じつは有理数全体の集合  $Q$  によって構成されるデーデキント切断  $(A, B)$  だと思って良いわけである。

## 6 デーデキントによる自然数の構成とその後の発展

さらにデーデキントは、1887年に書かれた「数とは何か、何であるべきか」において、今日ではデーデキント無限と呼ばれる概念を導入し、デーデキント無限から自然数全体の集合を構成してみせた。

これも前出のデーデキント著「数について」の後半に入っている。

まずデーデキント無限であるが、これは集合  $D$  の上の単写像  $f$  が存在し、 $d \in D$  が存在し、 $f(x) = d$  となる  $x \in D$  が存在しないとき、 $D$  をデーデキント無限とよぶ。通常、無限集合はすべてデーデキント無限である。

さてデーデキントの基本アイデアは、デーデキント無限から

$$d \quad f(d) \quad f(f(d)) \quad f(f(f(d))) \quad \dots$$

という系列を集めて新たな集合をつくり、 $d$  を自然数の 0 とみなし、 $f(x)$  を自然数  $x$  の次の数、つまり 1 を加える操作だとみなして、この系列が自然数全体の集合と同じ構造をしていることを示す、というものである。

そのためにまず

$$G = \left\{ F \mid (F \subset D) \text{かつ} (d \in F) \text{かつ} (\text{すべての } x \in F \text{ で } f(x) \in F) \right\}$$

という集合を作り、さらに

$$M = \bigcap_{F \in G} F$$

としてやればよい。しかし、これらはかなり複雑な集合の操作を必要とする。

このことは、デーデキントと親交のあったカントールが集合論を作るきっかけとなった。カントールの作った集合論を用いると、これらの集合の操作を行うことができる。

デーデキントは  $M$  が集合の性質として、現在我々が「ペアノの公理」と呼んでいるものと同じ性質を持っていることを示し、そこから自然数の性質を導き出した。 $M$  を自然数全体の集合として扱うときは  $\mathbf{N}$  と書くこととする。

ここまで、集合論を用いると、デーデキント無限から自然数全体の集合  $\mathbf{N}$  が構成できることを紹介した。さらに  $\mathbf{N}$  から整数全体の集合  $\mathbf{Z}$  や、有理数全体の集合  $\mathbf{Q}$  を構成できることは簡単である。また有理数全体の集合  $\mathbf{Q}$  から、デーデキント切断を用いて実数と同じものを作ることができることは先ほど示したので、それら全体を集めてくると、実数全体の集合  $\mathbf{R}$  を構成してやることができる。

つまり  $\mathbf{N}$  や  $\mathbf{Z}$  や  $\mathbf{Q}$  や  $\mathbf{R}$  などの実在論は、デーデキント無限の存在に依存しているのである。

デーデキントは「数とは何か、何であるべきか」で、

「私の思考の世界、すなわち私の思考の対象となり得るあらゆる事物の全体  $S$ 」  
がデーデキント無限である。

ということを証明し、これよりデーデキント無限の存在を示した。しかし「私の思考の対象となり得るあらゆる事物の全体  $S$ 」は、あらゆる集合の集合を含むような巨大な集合だから、今日の立場ではこのような証明は認められない。

現代の数学では、カントールの集合論においてはラッセルのパラドックスが生じるので、それを改良した公理的集合論の上で展開するのが普通である。その公理的集合論では、デデキント無限の存在は「無限公理」によって導かれる。

このように現在の数学では、数の実在論は公理によっており、それを集合論の操作によって、自然数や実数を構成しているのである。

現代数学は公理的集合論の上に展開するのが一般的なのであるが、それは上のように理解されないといけないわけである。

## 参考文献

- [Tabak 2005] Tabak, J., 松浦俊輔訳, 「はじめからの数学3、数」, 青土社, 2005
- [Kline 2011] Kline, M., 中山茂訳, 「数学の文化史」, 河出書房新社, 2011
- [斉藤 1997] 斉藤憲著, 「ユークリッド『原論』の成立」, 東京大学出版会, 1997
- [Euclid 2008] Euclid, 斎藤憲訳, 三浦伸夫訳, 「エウクレイデス全集〈第1巻〉原論1-6」, 東京大学出版社, 2008
- [Descartes] Descartes, R., 青木靖三他訳, 「デカルト著作集 第1巻」, 白泉社,
- [Dedekind 1872] Dedekind, R., “Stetigkeit und irrationale Zahlen (連続性と無理数)”, 1872
- [Dedekind 1887] Dedekind R., “Was sind und was sollen die Zahlen? (数とは何か、何であるべきか)”, 1887
- [Dedekind 1961] Dedekind R., 河野伊三郎訳, 「数について」, 岩波文庫, 1961年
- [久馬 1995] 久馬栄道, 「Q & A 数学基礎論入門」, 共立出版, 1995年
- [田中 2005] 田中尚夫, 「選択公理と数学」, 遊星社, 2005年
- [飯田 2007] 飯田隆編集, 「哲学の歴史 11、論理・数学・言語」, 中央公論新社, 2007

# マルセル・デュシャンと寺山修司

——レディ・メイドとコンセプチュアル・アート——

清水 義和

## 01. まえおき

マルセル・デュシャンが提示した『泉』は、レディ・メイドの“便器”である。さて、コンセプチュアル・アートは、そのオブジェを鑑賞するとき、高踏的なイマジネーションを働かせて凝視することになる。しかし、鑑賞者は、普通の絵画や写真のような、いわばタブローに総てが表現されている即物的な作品に見慣れている。だから、誰もが、そこに置いてあるオブジェを鑑賞するよりも、先に、作品それ自体に違和感を懐いてしまう。つまり、殆どの人が、オブジェに何か革新的なイメージを見出す前に、トイレで見慣れた“便器”をイメージしてしまう。従って、誰もが、寝かせてある“便器”を前にして、泉である尿を降り注ぐと、“便器”が男女の愛を象徴しているという説明を、初めて知りその新機軸に漸く気づくことになる。だが、それまでにかかなりの時間がかかってしまう。そこで、デュシャンは次のように自分の芸術観を述べることになるかもしれない。

On n'a que : pour femelle la pissotière et on en vit. —<sup>1)</sup>

おまけに、トイレに立て掛けてある“便器”は男性的であるが、その“便器”寝かせると女性的になる。つまり、こうしてみると、高橋康也が東野芳明との対談で語っているように、“便器”が両性具有的なものであり、そういうオブジェとして眺めることになる。<sup>2)</sup>それに、このオブジェに対して、そうした概念を懐くことを強いる事は、やはり、些か、説明的であり、もっと辛辣に言えば、屁理屈のように思え、鑑賞より先に、先入観が先に来てしまいかねな

い。

だが、デュシャン以来、レディ・メイドの既製品をコンセプチュアル・アートの視点で眺める芸術作品は、現代アートに大きな影響を与え、メジャーな現代美術作品であり続けてきた。先ず、そのことを思い出す必要がある。しかも、実は、デュシャンを遡ってみても、例えば、過去の芸術を概観してみると、既に、ボードレーが詩『阿呆鳥』で、詩人を、社会に無用なものとして象徴したり、ランボーが詩『地獄の季節』で象徴派詩人の境涯について内的独白をしたり、ロートレアモン伯爵が『マルドロールの歌』で奇怪なものとの鉢合わせ「手術台の上の、ミシンとこうもり傘の出会い」を書いていたのである。以来、近代人は象徴派詩人の芸術に慣れ親しんできた。更にまた、近代人は、ジャリの『ユビ王』のナンセンスな劇や、レーモン・ルーセルの『アフリカの印象』の奇想天外な言葉遊びに衝撃を受けてきた。こうして振り返って見ても、デュシャンが提示した『泉』に至るまでに、既に時間は随分長く経っている。

それにもかかわらず、鑑賞者は、デュシャンのレディ・メイドである“便器”を『泉』として提示された時、それまでの前衛芸術と全く異なった何の変哲もないオブジェを眼前にして、前衛芸術家達ですらその斬新さに殆ど気がつかず、無視し続けた経緯がある。つまり、展示当時、ただのレディ・メイドの“便器”に、今までになかった芸術的価値を認める事は、誰にも出来なかったのである。従って、レディ・メイドである既製の“便器”を見て、前例のない芸術価値に気付くには、コペルニクスの転換を必要とした。

さて、今では、地球が丸い事は誰もが知っている。しかし、1961年宇宙飛行士ガガーリンが宇宙から地球を見るまで、誰も丸い地球を見たものがいなかった。だが、ガリレオはおおよそ四百年前に「地球が丸い」と言ったのであり、その出来事は近代科学史においてビッグバンであった。その事は誰もが認めることである。言い換えれば、ガリレオが想像力によって、見た事がない地球の姿を「丸い」と言ったのである。それは、デュシャンのレディ・メイドである“便器”を想像力によって男女の愛を共有した両性具有としてイメージする事と、どこかしら、似ている。

いわば、デュシャンのレディ・メイドである“便器”は、ガリレオが望遠鏡で眺めた星と似ている。というのは、ガリレオの想像力が現実となるまでには、宇宙飛行士ガガーリンがロケットに乗って、宇宙から地球を眺め、地球が丸いと実感するまでに、人類は気の遠くなる時間を要したからである。けれども、デュシャンのレディ・メイドである“便器”は、想像力によってのみ可能であり、いくら凝視しても誰も“便器”に男と女の両性具有を見る事は出来ない。また、それを見た者もないのである。言い換えれば、想像力がなければ、デュシャンのレディ・メイドである“便器”の『泉』に、解答はなく、いつまでも謎のままである。

ところで、寺山修司のドラマを観ていると、分からない事にしばしば遭遇する。例えば、『青ひげ公の城』では、主人公の青ひげ公が舞台に姿を現さない。確かに、青ひげ公の台本には、青ひげ公自身の台詞がある。それなのに、当人は姿を現さない。また、舞台に青ひげ公の衣装が置いてある。それにも拘らず、本人は姿を現さない。しかし、どうやら、寺山は、青ひげ公のイメージを、レディ・メイドとして考えていたらしく、舞台の上に、その空洞の姿をそのまま置いたようなのだ。その時以来、手垢のついた青ひげ公は姿を隠し、謎となってしまった。だが、いわば、透明なイメージの方は、忽ち、手垢のついた青ひげ公のイメージから離れて、斬新なイメージーションとなって舞台に姿を現わすことになる。但し、その姿はあくまでもイメージーションの成せる業によってのみ現われるのである。こうしてみると、前にも述べたように、恐らく、寺山は、“青ひげ”を『山姥』『犬神の女』『あおひげ』『青髭とジャム』で連作しているうちに、“青ひげ公”がそれ自体すっかりレディ・メイドになってしまったと考えて、遂に、寺山はその姿を消してしまったようなのだ。というのは、青ひげ公の伝説のせいで、観客は、何も想像力を使わずに、何の抵抗もなく、しかも受動的に、舞台上、青ひげ公の伝説を見せられ、そのレディ・メイドを受動的に受け入れてしまうからである。恐らく、寺山は“青ひげ”を劇作していく過程で、そのことを十分意識していた筈である。

いっぽう、マルセル・デュシャンが制作した芸術作品のレディ・メイドも、よく見ていると、その由来を知らない限り、あくまでも、何の変哲もないオブジェにすぎない。しかし、その由来をいったん知ると、俄然、今まで見たこともない芸術作品のイメージが目の前に姿を現わす。

ところで、デュシャンの芸術作品は、オブジェを見る時、想像力を駆使し、何も無い空間に何かを補って見ないと、デュシャンの芸術作品がトータルとして完成しない事は既に見てきた。

他方、寺山は『青ひげ公の城』で、青ひげ公の台詞や衣装すらも、レディ・メイドになってしまったとみなしていたようだ。従って、そのように解釈していくと、観客の方が自ら想像力を総動員して舞台を見つめ、創造力を駆使して見直せば、今まで見えなかった何もない空間に、青ひげ公の姿が蠢いているのが見えてくるのである。

かつて、寺山は、自作の『はだかの王様』で、子供が、「王様ははだか」と言ったのは、「その子供に、王様の衣装が見えないのは、想像力がないからだ」と批評している。こうしてみると、寺山は、はだかの王様ですらレディ・メイドにしていたように思えてくるのである。

また、デュシャンは、万人が知っているモナ・リザをレディ・メイドとして考え、モナ・リザの顔に髭を描いた。そればかりか、髭のないオリジナルのモナ・リザは、髭をそった後のモナ・リザだと批評している。

更に、デュシャン自身の女装や、『大ガラス』を見ていると、一見、悪戯な変装趣味や変態願望と見えてしまう。ところが、プルーストの『失われた時を求めて』やエリアーデの『悪魔と両性具有』に描かれた両性具有の概念とか、両生類の生態系などを知ると、生命の誕生以来、生命そのものが男と女が一体になっていた事を教えられる。進化の過程で、何時の時代からか、一体であった生物が、男と女に分かれる事になったようだ。しかも、男と女として二つに分かれてしまった時から、その後、男と女を別々の視点で、眺めるようになり、その結果、モナ・リザの髭やデュシャンの女装さえも、芸術家の気まぐれや悪戯だと解してきてしまったようなのだ。

ところで、子宮は、男女の両方とも生み出す。つまり、子宮は女性だけでなく男性も産む。ということは、女性の子宮は、男と女を両方生み出す不思議な“器”と言う事になる。

寺山は、『田園に死す』で化鳥が「かあさん私をもう一度妊娠してください」といい、或いはまた『身毒丸』でしんとくが「かあさんぼくをもう一度妊娠してください」という。この不可解な言葉は、ともかくとして、母親の子宮が、男と女を産み出す容器であることを思い出させてくれる。

また、シェイクスピアは、『十二夜』で、双子の兄妹のヴァイオラとセヴァスチャンを描いた。しかも、劇中、更に、ヴァイオラが男装して小姓のセザーリオに変身してしまう。その為に、元々一つであった生命が、先ず、双子に分裂し、更にヴァイオラが男に変装することによって、再び、一人の人間が男女に分かれ、そのようにして分裂を繰り返す。その過程を、シェイクスピアは、『十二夜』で、ドラマ化した。更に、また2011年1月4日～26日 Bunkamura のシアターコクーンで上演された『十二夜』で、女優の松たか子氏は、ヴァイオラとセザーリオばかりでなく、セヴァスチャンも一人で演じ分けてしまった。言い換えれば、松たか子氏は、『十二夜』で、根源的な生命という生物を取りだして、舞台上演し分けたと考えられるのである。

さて、デュシャンが遺作として描いた「(1)落ちる水、(2)照明用ガスが、与えられたとせよ」のうち裸体画は、女性(1)落ちる水、(2)照明用ガスは、男性を暗示している。更にまた、女体と流れる水と照明用ガスとが一体になっているところから見ると、東野芳明が評論『曖昧な水』で指摘するように、このオブジェは両性的である。<sup>3)</sup>

ところで、このデュシャンの遺作を見る為には、鑑賞者は覗き穴からしか遺作を見ることが出来ない。もしかしたら、覗き穴の向うにある世界は子宮のようで、この世に生れ出る前の世界を表しているかのようだ。或いは、実は、かつて、東野芳明が推論して、驚くべき発想に基づいた新機軸を展開した事がある。つまり、東野は「デュシャンの遺作の中身は鏡に反射して映った空洞かもしれない」と述べている。しかし、東野は、後になって、それは、「自分の勘



違いであった」、と認めた。しかし、東野の勘違いは、例えば、寺山の作品を考えるうえでは、極めて重要な指摘であると思われる。

というのは、東野は高橋康也とアリスの鏡の国について対談した際に、ルイス・キャロルとデュシャンとルーセルのアートを論じ、東野がデュシャンの遺作を空洞だと思ったのが、単なる思い付きや勘違いであったとは思われなかったからである。

つまり、例えば、寺山の『地球空洞説』では、部屋が消えてなくなる。或いは、『壁抜け男——レミング』では、部屋の壁がなくなる。まるで、鏡に映った虚像のように、生の姿は突然虚像となり実在しないことになる。そもそも、子宮も、錬金術的な意味で見つめ直すと、実に不思議な容器であり、そもそも本来中身の無い容器の中に、生命が誕生するわけである。

更にまた、寺山は、遺作「懐かしのわが家」で、自分自身の身体が、桜の木の枝に変容して成長していくのを歌っている。そこで、「懐かしのわが家」を、仮にデュシャンの『遺作』に沿って解釈すると、寺山が歌っている“木の枝”（女性）は、地中の“水分”（男性）を汲み取って成長する。また、地中の水は、寺山が命の水として飲んで育った故郷の水でもある。また、桜の木は、接ぎ木をすると、根が生え、芽が出てくる。これは人間が失った能力である。また、或る植物は、雄蕊と雌蕊が一本の木に同時に備わっている樹木がある。

もしも、一本の木を、系図に譬えるなら、一本の木は、父や母や、兄弟姉妹が含まれた家族を内包しているようにも思われる。とするなら、アルトーが指摘するように「父や母は、私であり、兄弟姉妹も私である」と言う事になる。

*Cela veut dire que la mère est le père, que c'est la mère qui est le père ...<sup>4)</sup>*

果たして、寺山が遺作『懐かしのわが家』を書くときに、晩年のデュシャンの作である『遺作』を想い浮べて歌った詩かどうか分からない。だが、少なくとも、寺山が自分の命の再生を桜の木に見ていた事は確かである。

このようにして見ていくと、デュシャンの女装やモナ・リザの髭を、人間だけでなく、植物などの両棲類を含めた観点から見直していくことができる。すると、デュシャンの女装やモナ・リザの髭は、単なる悪戯でなく、デュシャンが生命を再生の視点からも眺めている事が次第に分かってくる。

前に述べたように、デュシャンのレディ・メイド作品である“便器”の『泉』も、“便器”を女性と見、泉を男性と見れば、男女の生命の営みをシンボリックに表している事が分かってくる。他方、寺山の作品『青ひげ公の城』では、青ひげ公は姿を舞台に姿を現さない。けれども、いわば、透明人間のような青ひげ公が、少女との生の営みを象徴的に表わしている事が劇

の進行と共に次第に分かってくる。

寺山は、ドラマ作品を一つの視点からだけで構築していない。絶えず、その作品は、未知を秘め、迷宮の世界に引き込む。だから、寺山とデュシャンの因果関係を軽々に論じる事は出来ない。だが、少なくとも、寺山は、デュシャンのアートを自作の作品やエッセイの中で度々引用しているのは注目に値する。しかし、寺山は、デュシャンから引用しただけでなく、その痕跡を執拗に辿っていったのである。従って、デュシャンのアート作品と寺山のドラマ作品を具に比較して観ていくと、寺山の謎めいた迷宮の深淵の中に、今まで見えなかった姿が、ブラックホールのように忽然と現われてくるのである。

本稿は、デュシャンの芸術作品を解析し、同時に、寺山の知られざる迷宮の淵を辿りながら、両者が作品に秘めた謎を解明していく試みでもある。

## 02. マルセル・デュシャン

デュシャンの作品を見ていると、キュビズム風な問題作『階段を降りる裸体』や、レディ・メイドの『泉』、『モナ・リザの髭』、『大ガラス』（『彼女の独身者たちによって裸にされた花嫁、さえも』）、『遺作』『(1)落ちる水、(2)照明用ガスが、与えられたとせよ』などが、その都度、絵画史を塗り替え、絶えずモダン・アートを次々と更新し続け、前衛芸術界に衝撃を与え続けてきた実体に分かってくる。

けれども、デュシャンの作品の根底にあるのは、男女の愛（エロス）と生命である。デュシャンは、斬新なコンセプトで既製の絵画芸術を根底から覆してしまった。だが、先駆者たちでさえも、彼らのアートがあまりにも新しい芸術であるがゆえに、呪われた芸術家の境涯を辿ったのであり、全く新しい美感覚でアートを更新してきたのであった。時代を遡って、ボードレー、ランボー、ロートレアモンから、ジャリの不条理な芸術やルーセルの言葉遊びを経て、マン・レイ、サルバドール・ダリ、アンドレ・ブルトン、アポリネールらのシュルレアリスムまで、時代の影響を受けながら、その都度、前例のない前衛芸術の新機軸を切り拓き続けてきたのである。

さて、ミシェル・カルージュは『独身者の機械』で、カフカの『変身』の毒虫と、デュシャンの『大ガラス』（『彼女の独身者たちによって裸にされた花嫁、さえも』）の上部のオブジェの間の類似性を指摘している。

Pourquoi, par exemple, ai-je senti, des la première lecture de la Métamorphose de Kafka qu'il existait une singulière identité entre l'image de Grégoire Samsa changé en vermine et cette autre affreuse

vermine suspendue par Duchamp au sommet de son célèbre verre : La mariée mise à nu par ses célibataires même ? Alors qu'en outre, Grégoire est suspendu, lui aussi, par moments contre une vitre au plafond de sa chambre.<sup>5)</sup>

カルージュは、『独身者の機械』の中で、デュシャンに至る、カフカ、ルッセル、ジャリ、アポリネール、ヴェルヌ、リラダン、カサーレス、ロートレアモン、ポーラを“機械”というコンセプトで総括的に論じている。寺山は、カルージュの『独身者の機械』に触発されて、『奴婢訓』をドラマ化した。しかしながら、寺山はデュシャンの『大ガラス』（『彼女の独身者たちによって裸にされた花嫁、さえも』）はカルージュの評論『独身者の機械』と異なるとみなしているようだ。

いっぽう、ジョン・ゴールディングは『マルセル・デュシャン 彼女の独身者たちによって裸にされた花嫁、さえも』の中で、デュシャンの『大ガラス』を、全く斬新な視点で解説した。

In conversation with Piere Cabanne, Duchamp remarked, 'Eroticism ... replaces if you like what other schools of literature called Symbolism, Romanticism. It could so to speak become another ism.' In Duchamp's hands it has become just that. The *Large Glass* continues to preserve its enigmas intact, but it is as if having given us the literary key to a greater understanding of it by publishing the *Green Box*, Duchamp, forced to admit that he had been artist all along, felt obliged to paint and sculpt it 'back into the world'—and into art.<sup>6)</sup>

しかしながら、ゴールディングは著書『マルセル・デュシャン 彼女の独身者たちによって裸にされた花嫁、さえも』の中で、デュシャンのオブジェ『大ガラス』（『彼女の独身者たちによって裸にされた花嫁、さえも』）について論じているが、オブジェ作品と論文との間で、双方の視点はかなり異なっているようだ。それと同じように、デュシャンのオブジェ『大ガラス』（『彼女の独身者たちによって裸にされた花嫁、さえも』）は、ティエリー・ド・デュエヴの著書『マルセル・デュシャン』や東野芳明の著書『マルセル・デュシャン』や『マルセル・デュシャン遺作論以後』とも異なっている。或いはまた、カルージュの著書『独身者の機械』は、寺山のドラマ『奴婢訓』と比べるとかなり異なっている。だが、こうして、これらの作品や評論を一堂に並べて比較してみると、以外にも、寺山が構成した劇のコンセプトは、むしろ、カルージュの『独身者の機械』のコンセプトに似ている事に気が付く。但し、カルージュの『独身者の機械』は、あくまでも、評論であり、劇作品ではない。また、それが、寺山に

とって不満だった様にも思われる。確かに、寺山が自分のエッセイ『装置実験室』所収の「装置の宇宙誌」で論じた「独身者の機械」は、寺山がライフワークとして、機械をドラマ化してゆく上に如何に重要であったかを詳細に明示してくれる。

殊に、寺山が、『装置実験室』の中で、デウス・エクス・マキナ（機械仕掛けの神）としての機械を、ある意味では、カルージュが『独身者の機械』で示したコンセプトを超えて、舞台化の過程で、腐心して構築していった経緯を読み取る事が出来る。また、寺山は、デュシヤンのエロスとは幾分異なり、男女のエロスよりも、子宮回帰としての母子関係にエロスを見ていた。

この事から、寺山は、デュシヤンの模倣ではなく、デュシヤンのアートが寺山自身のドラマに新機軸を開く重要な役割を果たしていたことも解読出来る。言い換えれば、つまり、デュシヤンの前衛芸術を解読する事と、デュシヤンが成しえなかったドラマ作りとは異なる。例えば、ルーセルは、自分の小説『アフリカの印象』を脚色化してもらい、舞台化もしてもらった。デュシヤンは、ルーセルの舞台を観て、自らの進むべきアートの方向性を掴んだ。だが、デュシヤンはそのコンセプトを舞台化しなかったのである。

ところで、寺山は、デュシヤンの成しえなかったアートの舞台化を、デュシヤンのコンセプトをヒントにして作りあげようとした。寺山のドラマを観ていくとき、デュシヤンの『大ガラス』（『彼女の独身者たちによって裸にされた花嫁、さえも』）に、更に、フーコーやドゥルーズの機械のコンセプトが繋がっていることに気がつく。けれども、寺山が、独自の機械論を舞台化していく中で、デュシヤンのコンセプトから離れていったというわけではない。というのは、デュシヤンが「死ぬのは他人ばかり」と言った墓碑銘に、寺山が、生涯拘ったからである。つまり、ラカンが言うには、他人である相手が、自分を見つめているように、そのように、自分の方では、その姿を見つめる事が出来ない。だから、同じ様に、他人の死は見る事が出来ても、自分自身では、自分が死ぬ姿を見る事が出来ないことになる。

“Never do you see me there where I see you,” Lacan declares.<sup>7)</sup>

寺山は、自分の死を見届けられないなら、最初から自分が死んで生まれたらどうなるかとか、或いは、自分の死が、他人の死だとするならばどうなるかとか、自分が半分死んで生まれたならば、どうなるかとか、色々と考えた。これに対して、デュシヤンとは反対に、荒川修作は、死を反転させて見つめようとした。これは寺山もやろうとしたが、荒川はもっと積極的で、しかも本格的に成し遂げようとした。「死ぬのは法律違反です」と。

### 03. アルチュール・ランボーとロートレアモン

ボードレールが象徴詩にことよせて詩人の心境を歌ったのは、何時の時代でも恵まれない詩人に対する慰めとなった。1842年、二十歳のボードレールは、西インド洋のモーリシャス島からフランスへ帰る途中の南大西洋上で、船を追って来て、水夫に捕まった阿呆鳥を見たという。この阿呆鳥は、空を飛んでいる時は、優雅で美しいのに、甲板で水夫に追回されると、大きな翼が邪魔となり、ヨチヨチ歩きしかできず、不器用な鳥でしかなくなった。ボードレールはこの阿呆鳥を自分の身の上に重ね合わせ、呪われた詩人の運命に思いを馳せた。ヨーロッパでは阿呆鳥やかかもめを水死した船乗りの魂と信じて、これを殺せば凶運に見まわれると考えたのである。

ところで、ジャン＝リュック・ゴダールは映画『気狂いピエロ』のラストシーンで、ランボーの詩「永遠」を使った。

L'eternite'  
Elle est retrouve'e.  
Quoi ? —  
L'Eternite'.  
C'est la mer alle'e  
Avec le soleil.<sup>8)</sup>

いっぽう、寺山は、『超時間対談』の中で、ランボーと対話する場面を設定して次のように述べている。

ランボー　ねえ、読んだ？  
寺山　何を？<sup>9)</sup>

上記のように、寺山は、ランボーと一緒に、『気狂いピエロ』のラストシーンを扨って架空の対談をしたのかもしれない。

また、更に、寺山はロートレアモンの『マルドロールの歌』を実験映画で映像化している。さて、ロートレアモンは『マルドロールの歌』の中で「解剖台の上のミシンと蝙蝠傘の偶然の出会いのように美しい」と歌ったが、この詩句はシュルレアリスム運動にかなり影響を与えた。

... comme la rencontre fortuite sur une table de dissection d'une machine a coudre et d'un parapluie.<sup>10)</sup>

或いは、松岡正隆氏は、ロートレアモンを解説している批評の中で、寺山を引用して次のように述べている。

寺山修司さんが「松岡さんならわかるとおもうけど、ロートレアモンは言葉の絵を描いたんだよね。でね、ぼくはこれを映像か舞台にしようと思ってね」と言った。<sup>11)</sup>

寺山は、実際、実験映画『マルドロールの歌』を制作し、驚いたことに、ロートレアモンの詩集自体を映像化してしまった。つまり、寺山は、詩集『マルドロールの歌』をスクリーンに映し、書物の詩集を紐で縛り水に浸しているのである。寺山の意図からすると、詩集は読むためのものだけと考えている人に対して、詩集がまるで生の肉体であるかのように扱っている。しかも、詩を解説することを期待している観客にとっては、寺山の映像は悪戯とも思われ、苛立ちさえ覚えてくる。ところが、実験映画『マルドロールの歌』を、全く視点を変えて見ると、寺山が、『人魚姫』を舞台化したときに、人魚姫の名前をマルドロールと名付けた事と関係してくることが分かってくる。この実験映画は、寺山が、詩集『マルドロールの歌』を人魚姫に譬えていることを意味する。また、この人魚姫の名前が「マルドロール」である由来から推測していくと、何故、寺山が、実験映画『マルドロールの歌』で、詩集を水に浸すのかその謎が分かり、こうして実験映画『マルドロールの歌』解説の手掛かりがつかようになる。また、実際、『マルドロールの歌』を読むと、ロートレアモンが、この詩集で、海と水を賛歌している事も分かってくる。ここにおいても、何故、寺山が詩集を水に浸すのか、その謎も解け、おまけに、実験映画『マルドロールの歌』と、デュシャンの『泉』との間に‘水’を介して符号があることも分かってくる。

#### 04. エドガー・アラン・ポー

寺山が『中国の不思議な役人』の中国の役人のモデルにしたのは、ポーが『使いきった男』で描いたジョン・A・B・C・スミスである。スミスは、自分の臓器を自在に取り外しが出来る男である。確かに、ポーは、ジョン・A・B・C・スミスの生理作用を説明していない。寺山の中国の不思議な役人は身体がバラバラになった後、再び、総ての器官を接合してから姿を現す。このとき、中国の不思議な役人は、ちょうど、ジョン・A・B・C・スミスが、バラバラになった臓器を元に戻して、人間の形を取り戻す場面と繋がりが分かる。

“Strange you shouldn’t know me though, isn’t it?” Presently resqueaked the nondescript, which I now perceived was performing upon the floor some inexplicable evolution, very analogous to the drawing on of a stocking. There was only a single leg, however, apparent.

“Strange you shouldn’t know me though, isn’t it?” Pompey, bring me that leg! Here Pompey handed the bundle a very capital cork leg, already dressed, which it screwed on in a trice; and then it stood up before my eyes<sup>12)</sup>

また、ポーが『使いきった男』の中で描いたジョン・A・B・C・スミスは、ヴィリエ・ド・リラダンの『未来のイヴ』やピグマリオンのガラテアとも繋がりがあがる。

或いは、バルトークの中国の役人が神か仏陀の化身であるとすれば、寺山の中国の不思議な役人は、ポーのジョン・A・B・C・スミスや、リラダンの未来のイヴや、ピグマリオンのガラテアや、ジャリの超男性のように、「機械」が醸し出す不死のイメージと繋がりがあがる。

## 05. ジョルジュ・バタイユ

寺山は『中国の不思議な役人』を劇化する時、ジョルジュ・バタイユのアイディアが念頭にあったようだ。殊に、娼婦、切り抜きキャラクターは『青ひげ公の城』で演じた衣装係とバタイユの父の梅毒とが微妙に絡み合っているように見える。

さて、バタイユは『眼球譚』で、眼だけになった人間の苦悩を物語っている。この眼は、一種の内視鏡のような働きをしている。或いは、寺山の読書映画では、人間がペンカメラのようになって書物に入り込む場面がある。ミクロの世界では、等身大の生人間のイメージは消滅し、まるで臓器自体になってしまう。殊に消化器官の検診で、内視鏡が、身体に入り込み、モニターで映し出す映像を見ていると、バタイユがいう少女と人形と娼婦は一体であるという奇妙なイメージが思い浮かぶ。つまり、臓器の内視鏡検査では、カメラ・アイによって、暗喩として、少女と人形と娼婦が臓器と微妙に繋がっているような錯覚に陥る。この場合、カメラ・アイは、死とエロスを合体させ、同時に、死への恐怖と生命への欲望とを結びつけてしまう。

また、バタイユが『眼球譚』の中で、父親の死に至る病を描写する件は、自らの受苦と死とが深く結びついていると思われる。

When I was born, my father was suffering from general paralysis, and he was already blind when he conceived me, ... and those huge eyes went almost entirely blank when he pissed, ... In any case, the image of those white eyes from that time was directly linked, for me, to the image of eggs, and that

explains the almost regular appearance of urine every time eyes or eggs occur in the story<sup>13)</sup>

バタイユが描写する眼は、眼としての機能が在る器官ばかりでなく、生理作用とも堅く結びついている。しかも、生理作用は、浄化作用とも繋がりがあがる。涙や糞尿は生理作用を伴い、逆説的に見ると、アリストテレスのカタルシスとも結びつきがある。また、バタイユのコンセプトは、どこかしら、寺山が考える死やエロスとも繋がりがあがるようにも思える。

バタイユが、ロマンを通して醸し出す妄想の世界を、仮に『中国の不思議な役人』とダブらせると、逆説的ではあがるが、中国の役人のバラバラになつた臓器は転じて、内視鏡によってモニターに映し出される生々しい臓器のひとつひとつと繋がっているように連想させられてしまう。

## 06. アルフレッド・ジャリ

寺山が『中国の不思議な役人』で描いた超人としての役人のイメージは、ジャリの『超男性』を想い起こさせる。殊に、『超男性』の中で関心を引く挿話は、機関車と自転車乗りとの競争である。つまり、機械と人間の競争であるが、先ず、機関車の前を走っている自転車には、問題の人間が乗っており、その男は、後から猛進して来る機関車に押しつぶされそうになり、衝突は避けられそうもない。にもかかわらず、機関車と自転車は一体となつて走り続けるのである。

... Le Pédard se prélassait toujours à gauche, sur le ballast ! La locomotive était tout contre lui et il n'en paraissait d'aucune manière incommodé. J'eus l'explication du prodige : la misérable brute ignorait sans doute l'arrivée par derrière du grand rapide, autrement elle n'eût pas fait preuve d'un aussi beau sang-froid<sup>14)</sup>

このシュールな描写は、デジタル映画で、CGの特殊撮影を駆使すれば、少なくとも、クストファ・ノーラン監督が『インセプション』で見せたように、デジタル処理による合成した場面が再現可能となる。ともかく、書物の中で、ジャリは、機械と人間との愛をシュールでシンボリックに書いている。結局、超男性の正体は、機械である。

Ce n'est pas un homme, c'est une machine. (p. 127)



ジャリの発想するイメージには夢が介して、現実ではありえない不条理な笑いを引き起こすのである。寺山は、清水浩二氏から贈呈されたジャリの『超男性』を読み、やがて、ゴードン・クレイグ (Craig, Gordon) の超人形に関心を懐いて、自作の人形劇『狂人教育』を書いた。『狂人教育』のラストシーンでは、家族全員が合体して出来た一匹の怪物が、少女の“蘭”を殺害する。『狂人教育』の機械=人形のイメージは、ジャリの『超男性』のイメージを濾過して、やがて、『中国の不思議な役人』の機械=人形のイメージへと繋がっていく。

## 07. レーモン・ルーセル

デュシャンはルーセルの『アフリカの印象』の舞台公演を観て、当時の観衆とは正反対の反応を示した。或いは、そこにこそ、デュシャンのコンセプトの原点を見る事が出来るかもしれない。

CABANNE: In 1911, the year you met Picabia, you were at the Théâtre Antoine with him, Apollinaire, and Gabrielle Buffet, Picabia's wife, for the performance of Raymond Roussel's *Impression of Africa*.

DUCHAMP: It was tremendous. On the stage there was a model and a snake that moved slightly—it was absolutely the madness of the unexpected. I don't remember much of the text. One didn't really listen. It was striking ...<sup>15)</sup>

ともかく、ルーセルの場合、岡谷公二氏によると言葉や語句の繰り返しでも、言葉の綴りを一字変えることによって、全く別の意味を表してしまう。以下にその例を示してみよう。

例：billard (撞球台) の b を p に変えると pillard (盗賊) に変わる。

次いで、ルーセル自身の解説を紹介する。

En ce qui concerne billard et pillard les deux phrases que j'obtins furent celle-ci :

1° Les letters du blanc sur les bandes du vieux billard ...

2° Les letters du blanc sur les bandes du vieux pillard.<sup>16)</sup>

つまり、上記の解説のように、billard (撞球台) の頭文字の b を、p に変えると、pillard (盗賊) と、意味が全く変わってしまうのである。

ところで、寺山の一連の映画やドラマ作品の場合、言葉の綴りや台詞は少しずつ変わっても、内容は殆ど同じである事が多い。なかでも、『ジャンケン戦争』はその典型的な一例であ

ろう。『ジャンケン戦争』では、「ジャンケン・ポン、アイコデ・ショ」と言って、不毛な戦いを延々とくり返すワンシーン・ワンカットの実験映画である。しかも、『ジャンケン戦争』には、明らかに、単純な掛け合い言葉や、合言葉に、俳優を狂信的に駆り立てる不思議な呪術が働いている。そのところは、レーモン・ルーセルの作品『アフリカの印象』のテーマと類似している。観客の一人であったデュシャンは、ミミズがギターを演奏する場面を見て、呪術が働いているとしか思えなかった。ルーセルは、フランスの小説家であり詩人でもあり、その奇想と言語実験的な作品は、ダダリストやシュルレアリスト達に高く評価されたのである。

## 08. マン・レイ

マン・レイは、それまで単なる写真であった媒体を芸術作品にまで高めた。マン・レイはデュシャンに会って、レディ・メイドの『自転車の車輪』や『瓶掛け』等のオブジェ作品に触発された。また、マン・レイは、デュシャンの『大ガラス』に埃が付いた凹凸面を写真の映像に捉えたりした。

或いは、また、デュシャンとマン・レイは、お互いに芸術上影響しあった。デュシャンは、1919年、マン・レイによるしくと、アレンスバーグ宛の手紙に書いている。

Je viens de recevoir le magazine de Man Ray TNT ... Remerciez Man Ray de m'avoir reproduit le dessin : j'ai l'intention de lui envoyer un petit mot.<sup>17)</sup>

更に、デュシャンは、1921年、マン・レイに出会ったときの経緯を、フロライン・ステットハイマー宛の手紙に書いている。

Hartley. Man Ray j'ai\_vu. (p. 101)

かつて、ウォーホルは知名人の写真からシルクスクリーンを何枚も作った。それと同じ様に、マン・レイは、知名人やモデルの写真を撮り続け、単なる写真を越えた独特な映像写真を造りだした。なかでも、マン・レイがプルーストのデスマスクを撮った写真は、幾つかのデスマスクをスケッチした画像よりも遙かに秀でた作品となっている。<sup>18)</sup>また、マン・レイは、モデルのキキ達と交友があったが、なかでもマン・レイが撮ったキキの写真は、優れた被写体となり、ただの静止画を芸術作品にまで高める為に重要な役割を果たした。かつて、マン・レイはデュシャンの影に隠れていたという批評があったが、近年マン・レイの生涯を網羅した個展

が開催されて、デュシャンの良きパートナーとしての存在感を確実にした。

## 09. サルバドール・ダリ

ダリはシュルレアリスム運動を通じて独自の芸術を産み出した。従って、ダリの奇抜なパフォーマンスと比較すると、デュシャンは生涯の殆どを寡黙で通し、むしろ自作の芸術作品自体にその真価を語らせ続けた様に思われる。

殊に、ダリがブニュエルと合作した『アンダルシアの犬』は実験映画史上革命的な作品となった。ダリがブニュエルやロルカと学生時代を過ごしていたとき、斬新なイメージで創作する芸術運動を展開し、やがて、ブルトンとダダ運動に怒涛のごとく巻き込まれていった。その後、更に、ダリは、デュシャンと次々と新しい芸術運動を産み出した。それらのプロセスを見て行くと、ダリが絶えず新しい芸術運動の最中にいた事が分かってくる。

After Coco, Marcel Duchamp came to see us. He was terrorized by those bombardments of Paris that had never yet taken place. Duchamp is an even more anti-historic being than I; he continued to give himself over to his marvelous and hermetic life, contact with whose inactivity was for me a paroxysmal stimulant for my work.<sup>19)</sup>

さて、近年のことであるが、寺山をよく知る下馬二五七さんが、惜しくも亡くなられた。在りし日、下馬氏が、「寺山さんはパリ滞在中、ダリと連絡が取れて会いに行ったよ」と語って下さった言葉が今も尚偲ばれる。また、寺山の『壁抜け男——レミング』には、ダリの絵画を思わせる幻想的な場面がある。

## 10. アンドレ・ブルトン

ブルトンは「シュルレアリスム宣言」で、既製の芸術を根底から覆した。文学では、自動記述の方法を提案して、既製の作品にある物語性を批判した。或いは、寺山修司の自動記述はエッシャーの絵から想を得ているが、ブルトンからも、寺山は自動記述の方法についてかなり影響を受けていたはずである。例えば、1995年、ロンドン大学のデヴィッド・ブラッドビー教授から、筆者は、「ブルトンは特色ある文章を書いているから、小まめに、文献にあたると、新しい発見が必ずある筈だ」とアドバイスを受けた事がある。少なくとも、デュシャンはブルトン固有の文体から深い暗示を受けていたように思われる。例えば、ブルトンは『黒いユーモ

ア選集』の中で、デュシャンのレディ・メイドについて次のように定義している。

Duchamp, tout en se consacrant de 1912 à 1923 à cette sorte d'« anti-chef-d'oeuvre » : La mariée mise à nu par ses célibataire même qui constitue son oeuvre capital, a signé, en protestation contre l'indigence, le sérieux et la vanité artistiques, un certain nombre d'objets tout faits (ready made) dignifiés a priori par la seule vertu de son choix : portemanteau, peigne, porte-bouteilles, roués de bicyclette, urinoir, pelle à neige, etc.<sup>20)</sup>

また、ブルトンは『シュルレアリスムと絵画』に所収されているデュシャンの『大ガラス』（『彼女の独身者たちによって裸にされた花嫁、さえも』）の中で、花嫁と独身者の関係を次のように述べている。

La Mariée mise à nu par ses célibataires 2 éléments principaux : 1. Mariée 2. Célibataires ... Les célibataires devant servir de base architectonique à la Mariée, celle-ci devient une sorte d'apothéose de la virginité. Machine à vapeur avec soubassements en maçonnerie. Sur cette base en briques, assise solide, la machine célibataire grasse, lubrique (développer). À l'endroit (en montant toujours) où se traduit cet érotisme (qui doit être un des grands rouages de la machine célibataire) ce rouage tourmente donne naissance à la partie-désir de la machine.<sup>21)</sup>

前述したブルトンの論述は、デュシャンの『大ガラス』（『彼女の独身者たちによって裸にされた花嫁、さえも』）を解説した批評である。この論評を一読すると、後にドゥルーズが『アンチ・オイディプス』の中で論じる事になる機械論が、既にブルトンの文章に見られ、同時にその予告を彷彿させてくれる。

## 11. 瀧口修造

日本のシュルレアリストとして知られている瀧口修造は、博学で旺盛な知識から、デュシャンだけでなく、ダリやブルトンをはじめ、シュルレアリスム運動全体にまで知悉したモダン・アーティストであった。殊に、瀧口は、シュルレアリスムの全体像を総括的に俯瞰できる稀有な詩人であり、自動記述を応用した作品や、或いは、モダンな音楽や絵画にも造詣が深かった。例えば、瀧口は、デュシャンの批評としてブルトンを例に挙げて次のように述べている。

マルセル・デュシャンは二十世紀初頭のもっとも賢明で、また（多くの人にとって）最も厄介な人間、と言ったのはアンドレ・ブルトンであったが、この謎と啓示にみちた人間の思想と作品がなぜ今日もたえず喚起されるのだろうか。<sup>22)</sup>

また、瀧口は、デュシャンとも交友があり、「レディ・メイド」について、以下のように簡潔な文章で説明している。

マルセル・デュシャンは、例のモナ・リザにひげをかいたり、便器に「泉」と題して展覧会に出品したりした有名なダダイストであるが、現代にいわゆるオブジェというものを導き入れた最初の人だといってもよいだろう。……デュシャンのオブジェの最初のもは「既成品」（レディ・メイド）と呼ばれるもので、日用品をそのまま、その用途を無視して一箇の芸術作品のように、いやひとつの独立したオブジェとして提示する。するとその平凡な器物は異様な実在感をもって見直される。（91頁）

前述したように、瀧口は、活字の人として評価されるだけでは満足せず、膨大な詩集や批評や翻訳だけではなく、文章を解体した斬新な表記を披露したり、或いは、自ら、写真や抽象絵画や奇抜なオブジェ作品を創作し続けた。また瀧口はデュシャンの紹介に生涯を奉げた。また、瀧口の後継者として、詩人・吉増剛造氏がいる。吉増氏は、瀧口との交友を通じて、デュシャンの影響を早くから受け継いでいた。吉増氏の創作活動は、造詣が深く、写真や映像や文化人類学にまで及んでいる。

## 12. 東野芳明

東野芳明が著した『マルセル・デュシャン』論は、前衛芸術に博学な批評家の書いた比較的分かり易いデュシャンの伝記である。殊に、デュシャンのモダン・アートに近づくためには好著である。東野は次のようにデュシャンを紹介している。

デュシャンの世界が、徹底して女性原理に基づいていることが分かるだろう。「大ガラス」の独身者の運動を司っていたのはじつは花嫁だったことを思い出していただきたい。<sup>23)</sup>

東野は、ウォーホル研究の泰斗でもある。だが、それと同じくらい、東野の『デュシャン論』は、瀧口修造の『マルセル・デュシャン』論と好対照を成している。

更に、また、東野は『マルセル・デュシャン遺作論以後』の中で、「大ガラス」と「遺作」について次のような見解を述べている。ところで、「遺作」はデュシャンが死後公開した作品である。

「大ガラス」の解答——ここでは眼差しは何時も早く来すぎてしまう。なぜなら、出来事が《遅延》しているからであり、肉体は限りなく裸にされつづける状態にとどまっている。「遺作」の解答といえば、遅く来すぎたのは眼差しであって、裸体化はすでに終わり、裸が残っている。現在が、まだなお (pas encore) と、もうすでに (déjà plus) の間で、蝶番を作りあげているのだ。<sup>24)</sup>

しかも、東野の『デュシャン論』は、更に、荒川修作の『マルセル・デュシャン』論へと発展し、次いで、そのデュシャン研究をダイナミックに展開していく過程を読み解くことが出来る。

### 13. 荒川修作

荒川修作が、ライフワークとした建築芸術を読み解くためには、マルセル・デュシャンの芸術を濾過しないと見えてこない、そんな核になる部分を荒川の労作は内包している。というのは、瀧口修造にしても、東野芳明にしても、批評家であり、荒川のように、本格的にアートを創造し、斬新な芸術作品として産み出し、結実していないからである。荒川は、大部な自作芸術の評論を書き続け、しかも、同時に、実際に、次々と芸術作品も作った。荒川の建築は、ガウディやフランク・ロイド・ライトのように巨大な建築「三鷹天命反転地」であるばかりでなく、広大な庭園「養老天命反転地」も造った。更に、その建築や庭園が、これまでの既成概念を覆す作品ばかりであり、荒川のスケールの大きさには目をみはるばかりである。馬場駿吉氏は、「荒川修作はある意味で、デュシャンの後継者という人もいる」<sup>25)</sup>と批評したが、その評価は、まさに、至言であり、ある意味では、予言でもある。荒川の芸術作品は、デュシャンの作品を雛型にしており、また、荒川の構築した広大な宇宙を想わせるような建築作品や庭園となっていて、それらの巨大な作品群は、そのまま宇宙に繋がっているように思わせる。デュシャンの前衛芸術が現代アートのビッグバンとすれば、荒川の建築や庭園は、ダークエネルギーのように、今尚、膨張し続ける巨大な宇宙のようにも思えてくる。さて、東野芳明は『美術手帖』所収の「ニューヨークの荒川修作」で次のように指摘している。

アラカワの絵画の青写真は、いわば「グリーン・ボックス」の絵画化であり、胚芽の観念のままを、大きなカンヴァスの上に定着しようとする試みである。<sup>26)</sup>

また、工藤順一氏は、『美術手帖』所収の「荒川修作「見る者がつくられる場」読解」の中で次のように指摘している。

通常は、作家が表現し、見る者＝観客はそれを鑑賞するのが美術に限らず近代芸術、現代美術のルールではなかったか。「られる」を、いま文法的に受身とするなら、君は勝手につくられるのだよ。なんだか抵抗を感じないか。デュシャンを知っている人なら、逆に「見る者が勝手に心の中で芸術作品をつくる」(鑑賞する)→①……第一に「られる」という受け身を能動態に変え、主語をつけると「芸術作品が(外の心＝場)に勝手に見る者を作る」となり、これは、デュシャンの①の言葉をちょうど反転させていることに気づく。<sup>27)</sup>

さて、荒川修作は、ドキュメント映画『死なない子供たち』の中で、「一万年たったら会おう！」と予言を残している。

死なない家＝生きる家＝リバーシブルディスティニー／生命とは何か、それを地球上で知っている者は誰もいない／私の言っていることは、あなたたちには誰ひとりわかるはずがない／死なない＝自然と繋がること＝永遠／目に見えるあの星までが私のテリトリー／一万年たったら会おう<sup>28)</sup>

或いは、また、馬場駿吉氏が指摘するように、「寺山修司の遺作『さらば箱舟』で「百年たったら帰っておいで」と述べている言葉と、荒川修作の「一万年たったらまた会おう」の言葉とは符合する」と語る。馬場駿吉氏は「荒川修作を語る」で以下のように語る。

聞き手：荒川さんは、大きな謎をかけたまま、いなくなった人という印象があります。この映画は、それに対するひとつの答なんでしょうね。

馬場：その話につなげて言うと、最近気になっていることがあります。1957年に、あるイベントで寺山修司が荒川に会っていて、「荒川というのはすごい男だ」と書いています。その時のことを荒川に聞いてみたかったと思って。

聞き手：そういえば、映画の中に「一万年後に会おう」という荒川さんの言葉が引用されています。寺山の遺作『さらば箱舟』のラストのセリフは……

馬場 : そう「百年経ったら、その意味わかる」。どこかで二人はつながっていたんでしょ  
うね。今まで気がつかなかったけれど。<sup>29)</sup>

#### 14. 寺山修司の『地獄篇』

寺山が、デュシャンから影響を受けたもっとも有名な引用句は「さりながら、死ぬのはいつも他人ばかり」であろう。

マルセル・デュシャンはうまいことを言ったものさ。「死ぬのはいつも他人ばかりだ」と。<sup>30)</sup>

また、寺山が、デュシャンから影響を受けた証左のひとつとして、次の様な一文によっても、その痕跡が見うけられる。

「デュシャンがくわえたばこでちょっといたずらしたと。」<sup>31)</sup>

或いは、寺山は、デュシャンからの引用句「死ぬのは他人ばかり」をコピーするだけでなく、そのコンセプトを発展させ、更に展開している。

「いつでも死ぬのは他人ばかりだとデュシャンはいった。ぼくは他人じゃない。ぼくは自分になる。それは消えること」<sup>32)</sup>

特に、寺山はコラージュの名手であったが、「他人が言った名言も、今度は自分がそれを口に出した時には、他人の言葉では無く、自分の言葉になってしまうことがある」と、考えていたようだ。寺山の考え方は、一種の模倣を想起させるが、デュシャン程の有名なアーティストではなくても、無名の人が使った名言も、やがて作者不詳になっても後世に残ることがある。寺山は、皆が強い関心を示す言葉に対して、まるで鋭利な刃物のように敏感であり、その言葉を独特に解釈してしまう。その能力に関しては、寺山は特に鋭いという評判が高かった。さて、寺山がデュシャンの「死ぬのは他人ばかり」をキーワードにして書いた詩篇『地獄篇』がある。そこで、以下にその一例を紹介してみよう。

秤を売る男 私共はいつでも死んだ人間を量っております。悪企みではなしに。

哲学者 だが、おまえには死んだ人間は量れても、人間の死は量れないぞ。



- 秤を売る男 人間の死なんてものはありません。あるのは他人の死ばかりです。
- 哲学者 自分の死は？ おまえ自身の死の問題はどう答えるつもりなのだ？
- 秤を売る男 自分の死を量ってくれるのは、いつだって他人ですよ。それどころか、自分の死を知覚するのだって、他人なんです。<sup>33)</sup>

これらの一連の対話は、確かに寺山がデュシャンの「死ぬのは他人ばかり」を念頭のおいて書いているようだ。だが、先ず、寺山は、ウォーホルの『マリリン』のアート作品を知っていたことを思い出す必要があるかもしれない。だから、寺山の『地獄篇』をデュシャンの墓碑銘の模倣にすぎないと判断したら、それは甚だしい間違いとなるであろう。例えば、デュシャンは、「他人の死は知覚できるが、自分自身の死を知覚することはできない<sup>34)</sup>」と言っているわけである。ところが、寺山は、デュシャンの墓碑銘をひっくりかえして、「自分の死を量ってくれるのは、いつだって他人ですよ。それどころか、自分の死を知覚するのだって、他人なんです」と論じているのだ。

しかも、寺山は、「他人」について、自作の戯曲『花札伝綺』の中で、その他人さえも、既に死んでいると言っている。例えば、歌留多は「あたしは死んだんです」と言い、更に、歌留多は「あたしは生まれた日に死んだのです<sup>35)</sup>」とも言って、歌留多の生まれ変わりの代理人は、藤しまだが、既に彼女も死んでいると語る。しかも、歌留多は死んで生まれたのは「歌留多ではない藤しまです」（111頁）と述べ、他人の“生”まで否定しているのである。

## 15. 寺山修司『装置実験室』

寺山修司は、デュシャンの機械を一種の遊戯装置と捉え、全く別の視点から、この機械をSF的な世界観へと拡大してから再び脱構築した。先に、寺山はエッセイ『装置実験室』を書き、次いで『奴婢訓』の舞台装置に応用するため、舞台空間を組み立てていったように思われる。さて、寺山が、『奴婢訓』を書くときに使用した文献は以下の作品群がその一部分である。

ウィリアム・テン『生きている家』、J・G・バラード『ステラヴィスタの千の夢』、ロバート・シルヴァーバーグ『時の仮面』、レイ・ブラッドベリ『草原』、フランツ・カフカ『ある流刑地の話』、チャールズ・アダムズ『Dear Dead Days』の「簡易首吊り用ネックレス」、カール・レーヴェ「心臓ピアノ」「機械の中の死」、ルイス・ホルヘ・ボルヘス『不死の人』、チャールズ・チャップリン『モダンタイムス』、カレル・チャペック『R・U・R』、江戸川乱歩『パノラマ島奇談』、アルフレッド・ジャリ『超男性』、ミシェル・カルージュ『独身者の機械』、レーモン・ルーセル『アフリカの印象』、ロートレアモン『マルドロールの歌』、デウス・エキ

ス・マキナ（機械仕掛けの神）、ミシェル・フーコー『レーモン・ルーセル』、ジル・ドゥルーズ『アンチ・オイディプス』の機械論などである。

先に示した一連の作品群は、寺山が『奴婢訓』に使った資料の出典であり、寺山が舞台に『奴婢訓』を構築する時にアイデアとなった原典であると思われる。ところで、寺山は、『装置実験室』のなかで、デュシャンを以下のように引用している。

マルセル・デュシャンによると、この「独身者の機械」は二種類の等価な要素のよって構成されていることになる。その一つは、性的な要素である。すなわち、機械は両性具有であり、男でも女でもない。

「独身者の機械」には男性的要素の分子とみなされていて九人の独身者が入っている。そして、そのなかの幾人かが協同で、一つの女性的キャラクターに対して、男性的要素を表出する、という仕組みになっている。

（この二元性は、同じマルセル・デュシャンの「大ガラス」Large Glass にもはっきりとあらわれている）。そこでは、彼は花嫁を上部にとりつけ、男性的な独身者装置を（隔離するように）下部にとりつける。性の二元性は、この機械にとって不可欠なものだ。<sup>36)</sup>

こうして、寺山は、デュシャンの『大ガラス』（『彼女の独身者たちによって裸にされた花嫁、さえも』）を解体して、『奴婢訓』の舞台に脱構築していくのである。

## 16. 寺山修司『奴婢訓』

寺山は、『奴婢訓』の解説で、『プレイ・アンド・プレイヤーズ』から批評を引用しながら、デュシャンの「大ガラス」『彼女の独身者たちによって裸にされた花嫁、さえも』について次のような批評を引用している。

マルセル・デュシャンの機械などの、驚くべき集合体を思わせる。寺山のオリジナリティは、内省者としてより、イメージの狩人としてのものだ。空間に対して、画家的感覚を持っており、俳優たちを、行為のキャンバスに絵具として塗りこめる。<sup>37)</sup>

また、寺山は『奴婢訓』の紹介文で、自ら「私がこの演劇で描きたいことは、〈主人の不在〉と言う言葉で表される」と述べている。寺山の〈主人の不在〉は、例えば、デュシャンが『泉』に暗示したように、横たわった“便器”の相手である男性の姿が見えないこと、その事が『奴

婢訓』を劇化するときに大きな動機となって働いたと思われる。また、デュシャンの油彩画『階段を降りる裸体』には、女性の姿が見えない。従って、この作品はキュビズムを根底から覆した作品であるともいわれる。ハーバート・R・ロットマンは『マン・レイのモンパルナス』で、デュシャンの『階段を降りる裸体』について次のように批評をしている。

The biggest shocker was the work of unknown Frenchman named Marcel Duchamp. His Cubist Nude Descending a Staircase, despite the irresistible title, revealed very little nudity or indeed anything else that was recognizable. (p.31)

ところで、寺山の歌『階段上の猫』は、映画『書を捨てよ、町へ出よう』の挿入歌で、浅川マキが映画の中で歌っている。さて、実際、浅川マキが寺山との思い出を語ったラジオ番組がある。それは、MRO 北陸放送ラジオが『浅川マキ〜ロング・グッドバイ』を制作して、2011年5月29日（日曜日）に15時00分から15時55分まで放送した。その番組で、浅川マキは、実際、問題の場面を映したスクリーンを見たが、薄暗くてマキの姿全体がはっきりと映っていなかった。そこで、浅川マキが試写会の後で、寺山にその場面の撮り直しを提案した。だが、寺山は「それでいいのだ」と答えて、浅川を困惑させたという。後に、浅川マキはこの話を聴衆の前で再び話したら、聴衆はまた笑った。それで、浅川マキは「何故笑うのか」と聴衆に反論している。これら一連のエピソードから分かる事は、寺山が浅川に「それでいいのだ」と答え、しかも、同じエピソードを浅川が聴衆に話したら、また、聴衆が笑ったので浅川が困惑していることだ。ちょうど、これは、観客が『泉』を見ても意味が分からず、困惑しているのを、デュシャンが見て笑う悪戯っぽさとどこかしら似ている。また、そこから、同時に、寺山の悪戯も透いて見えてくる。

確かに、寺山の〈主人の不在〉は、『奴婢訓』以外にも『青ひげ公の城』の青ひげ公の不在や、『中国の不思議な役人』の役人の不在などにも現れている。けれども、私達が寺山の謎解きに囚われていると、案外、寺山の悪戯によって、私達の方が、翻弄されていることに気がつかないのかもしれない。

それでなくても、『奴婢訓』は、分からない仕掛けや謎に満ちた作品である。先ず、冒頭の主人の謎めいた描写がある。いったい主人は、生身の人間なのか、それとも、ガンダムのように組み立てロボットなのか、それとも、『ターミネーター』のサイボーグなのか分からない。そんな謎の物体として、問題となっている屋敷の主人が紹介される。

元々、戯曲『奴婢訓』には、その前後に書かれた小説があり、そこでは、生身の主人公が描かれている。ところが、寺山は、まるでエッセイのだまし絵のように、その絵が描かれた所

から、元の絵を消しゴムで消してしまう。そのようにして、寺山は『奴婢訓』から生身の主人の姿を消し去ってしまったらしい。つまり、寺山は、台本が、あたかも下絵の鉛筆の線であるかのように、その台詞を言う役者を、今度は、絵の具が下絵の鉛筆の線を消していくのと同じような具合にして、生身の主人公の姿も消し去ってしまうのである。

先に触れたが、浅川マキは映画『書を捨てよ、町へ出よう』に出演し歌を歌っている。なのに、寺山は、暗い照明で、彼女の姿を殆ど消してしまった。けれども、ライトが浅川の姿を黒く塗りつぶしたのであって、浅川の声は聞こえてくる。ちょうど、実験映画『消しゴム』の中で、画面は消えてしまっても、人の声や波の音は聞こえてくるように、浅川の声は暗闇から聞こえるのである。

或いは、『奴婢訓』の舞台には、幾つもの箱がメールボックスのように幾層にも積み上げられていて、その中から幾つもの顔が次々と首を出し、台詞を、即興的に、しかもアットランダムに言う。あたかも、それが、ジョン・ケージのチャンス・オペレーションのように、或いは、デュシャンのチェス・ゲームのように、全く偶然に、舞台は進行してゆく。寺山の舞台には、物語やスタニスラフスキーの俳優術を無視したパフォーマンスがある。だが、その代わりに、ルイス・キャロルの『アリス・ワンダーランド』や『マザー・ゲース』の鋭いナンセンスな薬味の効いたユーモアもある。

『奴婢訓』に出てくる舞台上の人間ハンガーは、アクロバットのな軽業師の熟練を要する。だが、寺山はここでも殊に見世物の復権を強く要求していて、サーカスの世界を芝居に導入することを強く求めているようだ。

『奴婢訓』の舞台には、自分自身を折檻する機械が登場するが、寺山は、SF的な機械装置を実際に舞台上に登場させようとした。これは一種のマジックショーであるが、ちょうど、ルーセルが自分の小説『アフリカの印象』の観念の世界を舞台上で表わそうと試みたように、『奴婢訓』の折檻する機械には、ルーセルのアイデアにオリジナルがあるように思われる。ところで、寺山は、東野芳明から、ルーセルを知り次いで、デュシャンの機械に関心を懐き、遂に『地下演劇』第9号で「レーモン・ルーセルの演劇」の特集を刊行した様である。

寺山 東野さんが「君、レーモン・ルーセルを知ってるかい」って言った事がこの特集の最初の動機となったわけです。<sup>38)</sup>

寺山は、『地下演劇』第9号を通して、自分の新しい演劇の展開を明らかにしていった。殊に、東野がルーセルとデュシャンとの関係を論じる時、その発言が、寺山には強い刺戟になったようなのである。

東野 デュシャンがしょっちゅうルーセルのことを言ってるわけね、デュシャン論など色々読んでいるとどうもルーセルというのは一つの鍵になるらしい。(11頁)

ところで、現実世界では、全くあり得ない世界を、エッシャーやマグリットがだまし絵で描き、SF映画作家がトリックや特撮や合成技術でスクリーンに映写した。だが、寺山は、舞台上、生の人間を使って一種の人間機械を表わそうとした。さて、寺山の天井桟敷に属した制作者や役者達は、人間ポンプで口に大やけどしたり、人力飛行機を火で燃やす時に、腕に大やけどをしてケロイドになったりした。また、萩原朔美氏や鈴木達夫氏の発言によると、寺山が出す無理難題のアイデアを実現しようとしたのでスタッフは辟易したと、回顧している。けれども、寺山が、一種の人間リンチ機を空想して作りあげようとした危険性にもかかわらず、寺山が、少年のような好奇心から出すアイデアに、制作に関わった人達が、次第に、心を引きずられて行くほどの魔力があったことも事実だ。例えば、寺山が作った実験映画『ローラ』では、森崎偏陸氏は現在六十二歳であるが、彼が二十五歳の時に演じた青年役を四十年近く経っても、まるで機械の一部となったかのように演じ続けて、未だにフランスや日本各地を巡演し続けている。これなど、森崎氏が寺山の魔力に今も尚、引き摺り回されている好例であろう。

さて、寺山は、『奴婢訓』の劇中で、宮沢賢治の宇宙論に触れている。他にも『青ひげ公の城』で、寺山は、劇場は、宇宙の彼方と繋がっていると述べている。つまり、寺山は、劇場を宇宙の核のように考えていたようだ。

また、寺山の市街劇は劇場の外側の世界である。かつて、松山で開催された『人力飛行機ソロモン』を観劇した後、筆者が、夜の飛行便で、松山から名古屋に飛んだとき、飛行機から、真っ暗な下界を見下ろしながら、松山の夜景の中に、数時間前に観た『人力飛行機ソロモン』のフィナーレの光景をぼんやりとした灯火の中に観た思いがした。それは、銀河系宇宙の星のぼんやりとした輝きのように頼りがなかった。しかし、確かに、あのぼんやりとした灯りの下で、市街劇は上演されたのだと思ったのである。

また、荒川修作の広大な建築や公園と比較するならば、確かに、寺山は、狭い劇場空間や広い市街劇の空間に宇宙を見ていたにすぎないかもしれない。けれども、馬場駿吉氏が述べているように、荒川のアイデアは、寺山のコンセプトに繋がっているかもしれないのだ。

## 17. まとめ

もしも、寺山修司の作品から、マルセル・デュシャンの前衛芸術から受けた影響を取り除いてしまったら、寺山の作品が訴えている底知れない「謎」は消滅し、衝撃的なインパクトも半

減してしまうかもしれない。むろん、寺山の謎に満ちた暗黒世界は、デュシャンに止まらず、荒川修作の衝撃的な芸術観によって更に発掘され、次々と新しい謎が解明されるであろう。しかし、その前にデュシャンが残した芸術を解明する必要がある。というのは、寺山は、デュシャンからの影響を提示しているのであり、従って、デュシャンの芸術の尺度から寺山の作品を再検討すると、それまで、寺山演劇の地表の下に隠れていて見えなかった真の姿が現われ、ベールの被膜から、まるで半睡のまま眠っている秘密が、透いて見えてくるからである。

従って、寺山の隠れた真実を解明するためには、先ず、デュシャンの芸術の尺度から測定方法を探求しなければならない。そして、更に、デュシャンの芸術に新しい視点を開発した荒川修作の芸術を解明しながら、新たな手掛かりを発掘し、未だに寺山の作品の中に眠り続けている鉱脈を掘り当てていかなければならない。

言い換えれば、デュシャンが切り拓こうとしていたモダン・アートの地平を、今度は、荒川修作が継承し新たな視点からそのアートを解明していた事に気がついて、それを探求し、その考え方を解読して、寺山の隠れた謎の解明に挑まなければならない。

そのとき、寺山作品の理解の仕方が一変し、未知の地平に、新しい道のりが見えてくる。例えば、寺山は「百年経ったらその意味分かる」と言っているが、荒川は「一万年経ったら再び戻ってくる」と予言しているのだ。

荒川の方法は、デュシャンとは異なるが、もし、デュシャンが生きていたら、自分とは違う荒川の方法論を傾聴して、自己の芸術を更新したに違いない。また更に、寺山の未知の鉱脈を掘り当てる為にも、デュシャンの鑿ばかりでなく、荒川の鑿も、寺山山脈の採掘には不可欠である。デュシャンは「死ぬのは他人ばかり」と言って「不死」を退けたがたが、荒川は「死ぬのは法律違反です」を著し、「不死」論の新機軸を展開している。かつて、岡本太郎は、ピカソが好きだったがピカソのエピゴーネンになることを嫌い、生涯「アンチ・ピカソ」を貫いた。荒川が、「不死」論を展開するのは、デュシャンの「死ぬのは他人ばかり」を深く理解したうえで批評しているのであり、取りも直さず、荒川がデュシャンの芸術に通暁しているからに外ならない。

また、寺山は、やはり、デュシャンの墓碑銘でもある「死ぬのはいつも他人ばかり」から強い感化を受け、「自分の墓はいらない。言葉だけで十分」と遺言を残しさえした。けれども、寺山の「不死」論は、デュシャンの「死ぬのはいつも他人ばかり」にアンチを表明していた事は確かだ。だからこそ、寺山の「不死」論からは、アンビヴァレントな感覚を読み取ることが出来る。従って、寺山の二律背反的な反応を、荒川の「不死」論と比較することによって、未知なるアートの一部が、もしかしたら解明されるかもしれない。その時、デュシャンの「レディ・メイド」や「コンセプチュアル・アート」が、明白で分かり易いコンセプトとして我々

の目の前に現れるかもしれない。

## 注

- 1) Duchamp, Marcel, *Duchamp du Signe* (Flammarion, 1994), p. 37.
- 2) 高橋康也対談集「デュシャンの方へ」(『アリスの言葉たち』新書館、1981)、229頁。
- 3) 東野芳明『曖昧な水』(現代企画室1980)、52頁。
- 4) Artaud, Antonin, *Oeuvres Complètes VII Heliogabale* (nrf Gallimard, 1967), p. 20.
- 5) Carrouges, Michel, *Les Machines Célibataires* (Arcanes, 1954), pp. 27–28.
- 6) Golden, John, *Duchamp: The Bride Stripped Bare by her Bachelors, Even* (Allen Lane Penguin Press, 1973), P. 100.  
cf. ジョン・ゴールディングが『ピエールガパンヌとマルセル・デュシャンとの会話』から引用した個所は以下の通りである。Cabanne, Pierre, *Dialogues with Marcel Duchamp* Translated by Ron Padgett (The Viking Press, 1971), p. 33.
- 7) Duve, de Thierry, *Pictorial Nominalism on Marcel Duchamp's Passage from Painting to the Readymade* Translation by Dona Polan (Minnesota U.P., 1991), p. 42.
- 8) Godard, Jean-Luc, *Pierrot Le Fou* Translated by Charles Affron (Rutgers U.P., 1987), p. 104.
- 9) 「アルチュール・ランボー 寺山修司」『超時間対談』(集英社、1981)、174頁。
- 10) Ducasse, Isidore (Comte de Lautréamont) *Oeuvres Complètes Lea Cants de Maldoror Lettres Poésies I et II* (nrf Poesiel Gallimard) p. 234.
- 11) (参考)「松岡正剛の千夜千冊」(2011/11/13) [www.isis.ne.jp/mnn/senya/senya0680.html](http://www.isis.ne.jp/mnn/senya/senya0680.html)
- 12) *The Complete Tales & Poems of Edgar Allan Poe* (Modern Library Giannini, 1938), p. 411.
- 13) Bataille, Georges, *Story of the Eye* Translated by Joachim Neugroschal (Penguin Books, 2001), p. 72.
- 14) Jarry, Alfred, *Le Surmâle* (Mille. Et. Une. Nuits, 2006), p. 73. 以下同書からの引用は、頁数のみ記す。
- 15) Cabanne, Pierre, *Dialogues with Marcel Duchamp* (Viking, 1971), p. 33.
- 16) Roussel, Raymond, *Comment j'ai écrit certains de mes livres* (Jean-Jacques Pauvert Editeur, 1963), p. 11. (参考) 岡谷公二『レーモン・ルーセルの謎』(国書刊行会、1998)、69頁。
- 17) *Affectionately, Marcel, The Selected Correspondence of Marcel Duchamp* (Ludion Press, 2000) p. 101. 以下同書からの引用は頁数のみ記す。
- 18) Cf. Lottman, Herbert R., *Man Ray's Montparnasse* (Harry N. Abrams, Inc., 2001), p. 72.
- 19) Dali, Salvador, *The Secret Life of Salvador Dali* Translated by Haakon M. Chevalier (Dover Publications, inc., 1993), p. 383.
- 20) Breton, André, *Anthologie de l'humour noir* (Jean-Jacques Pauvert, 1966), p. 356.
- 21) Breton, André, *Le surréalisme et la peinture* (Gallimard, 1965), p. 133.
- 22) 『コレクション瀧口修造』3 (みすず書房、1996)、90頁。以下同書からの引用は頁数のみ記す。
- 23) 東野芳明『マルセル・デュシャン』(美術出版社、1981)、335頁。
- 24) 東野芳明『マルセル・デュシャン遺作論以後』(美術出版社、1990)、253頁。
- 25) 馬場駿吉「60年から70年代芸術と寺山修司・II」(国際寺山修司学会第11回春季大会、講演、愛知学院大学楠元学舎・薬学部棟)
- 26) 東野芳明「ニューヨークの荒川修作」(『美術手帖』1966.5)、111頁。

- 27) 工藤順一「荒川修作「見る者がつくられる場」読解」(『美術手帖』1992.2), 38-39頁。
- 28) 「荒川修作の言葉 死なない家=生きる家=リバーシブルディスティニー」(2011/11/12) [http://hiwihhi.com/ha2\\_a/status/67249429073231874](http://hiwihhi.com/ha2_a/status/67249429073231874)
- 29) 『『死なない子供』荒川修作』(2011/11/12) <http://cineaste.jp/2000/2013.htm>
- 30) 寺山修司『黄金時代』「詩歌人——岸上大作」(九藝書房1978), 249頁。
- 31) 寺山修司『言葉が眠るときかの世界が目ざめる』(新書館1972), 259頁。
- 32) 『寺山修司の状況論集時代のキーワード』(思潮社1983), 9頁。
- 33) 寺山修司『地獄篇』(思潮社、1983), 100頁。
- 34) Duve, de Thierry, *Pictorial Nominalism on Marcel Duchamp's Passage from Painting to the Readymade* Translation by Dona Polan (Minnesota U.P., 1991), p. 42.
- 35) 寺山修司『花札伝綺』(思潮社、1984), 111頁。
- 36) 寺山修司『装置実験室』(日本ブリタニカ、1980), 52頁。
- 37) 『プレイ・アンド・プレイヤーズ』からの引用(『寺山修司の戯曲』第五巻『赤札伝綺』作品ノート、思潮社、1984), 326頁。
- 38) 東野芳明、寺山修司「特集「レーモン・ルーセルの演劇」対談「アフリカの印象」(『地下演劇』第9号), 11頁。以下同書からの引用は頁数のみ記す。

## 参考文献

- The Writings of Marcel Duchamp* Edited by Michel Sanouillet and Elmer Peterson (A Da Capo Paperback, 1973)
- Dialogues with Marcel Duchamp* by Pierre Cabanne Translated by Ron Padgett (Viking Press, 1971)
- Golding, John, *The Bride Stripped Bare by her Bachelors, Even* (Allen Lane Penguin Pree, 1973)
- Marcel Duchamp* Edited Anne D'Harnoncourt Kynston McShine (The Museum Modern Art, Philadelphia Museum Art, 1989.5)
- West Coast Duchamp Ed: Bonnie Clearwater* (Grassfield Press, 1991)
- Cvach, Milos, *Marcel Duchamp Porte-chapeau* Editions du Centre Pompidou (1 janvier 1992) ; Collection : L'art en jeu.
- Curtill, Sophie & Cvach Milos, *L'Art en Jeu* Edition du Centre Pompidou, (1973)
- Marcel Duchamp, *die grosse Schachtel : de ou par Marcel Duchamp ou Prose Selavy*
- Inventar einer Edition Ecke Bonk (Schirmer/Mosel, 1989)
- Marcel Duchamp *The Box in a valise inventory of an Edition Ecke Bonk* Translated David Britt, (Rizzoli, 1989)
- Baldwin, Neil, *Man Ray: American Artist* (Clarkson N Potter, Inc., 1988)
- Roussel, Raymond, *Nouvelles Impressions d'Afrique* (Pauvert, 1979)
- Roussel, Raymond, *l'Etoile au Front* (Jean-Jacques Pauvert, 1963)
- Roussel, Raymond, *la Poussiere de Soleils* (Jean-Jacques Pauvert, 1964)
- Roussel, Raymond, *Locus Solus* (Gallimard/Jean-Jacques Pauvert, 1965)
- Caradec, Francois, *Vie de Raymond Roussel* (Jean-Jacques Pauvert, 1972)
- Dali, Salvador, *Comment on deviant Dali* (Editions Robert Laffont, 1973)
- Dali, Salvador, *Hidden Faces* (Picador, 1975)
- Dali, Salvador, *Journal d'un genie adolescent* (Motifs, 2004)



- Dali, Salvador, *Dali on Modern Art* Translated by Haakon M. Chevalier (Dover Publications, inc., 1996)
- Madeline Gins and Arakawa, *Architectural Body* (Alabama U.P., 2002)
- Silberg, Robert, *The Masks of Time* (VGSF, 1987)
- Sheckiley, Robert, *The Status Civilization and Notions: Unlimited* (SF Ace Books, 1960)
- Ballard, J. G., *Passport to Eternity* (A Berkley Medallion Book, 1963)
- Gins, Madeline & Arakawa, Syusaku, *Making Dying Illegal* (Roof Books, 2006)
- Fris-Hansen, Dana 『マルセル・デュシャン紙の上の仕事』 南條史生訳 (京都書院、インターナショナルビギナーアートスペース、1991)
- トムキングズ、カルヴィン 『デュシャン1887-1968』 東野芳明日本語版監修 『巨匠の世界』 (Time.inc,1966)
- 菅原教夫 『レディメイドデュシャン覚書』 (五柳書院、1998)
- パタ、オクタビオ 『マルセル・デュシャン論』 宮川淳、柳瀬尚紀 (書肆の薔薇、1991)
- モウレ、グロリア 『マルセル・デュシャン』 野中邦子訳 (美術出版社、1990)
- ミンク、ジャニス 『マルセル・デュシャン』 (Taschen, 2001)
- シャルポニエ、ジョルジュ 『デュシャンとの対話』 北山研二訳 (みすず書房、1997)
- 中原佑介 『デュシャン』 (新潮美術文庫49、1993)
- 宇佐美圭司 『デュシャン』 (岩波書店、1986)
- レリス、ミシェル 『デュシャンミロマッソラム』 岡公二編訳 (人文書院、2002)
- コレクション 瀧口修造 1～13、別巻 (みすず書房、1991-1998)
- 寺山修司、矢牧健太郎 『遊戯装置』 (河出文庫、s63)
- 寺山修司 『装置実験室』 (日本ブリタニカ、1980)
- 寺山修司 『私と言う謎』 (講談社文庫、2002)
- 『黄金時代』 寺山修司評論集 (九藝出版 s53)
- 『寺山修司演劇評論集』 (国文社、2000)
- 寺山修司 『月蝕機関説』 (冬樹社、s56)
- 『寺山修司の状況論集時代のキーワード』 (思潮社、1993)
- 『寺山修司対談集言葉が眠るときかの世界が目ざめる』 (新書館、1972)
- 東野芳明 『曖昧な水』 (現代企画室、1980)
- 瀧口修造 『シュルレアリスムのために』 (せりか書房、1974)
- 瀧口修造 『16の横顔ポナールからアルプへ』 (白揚社、1955)
- 『コレクション・日本シュルレアリスム⑤』 澤正宏編 (本の友社、2000)
- 飯島耕一「瀧口修造」『言論は日本を動かす』 第9巻「文明を批評する」(講談社、s61)
- ダリ、サルヴァドール 『異説・近代芸術論』 瀧口修造訳 (紀伊国屋書店、2006)
- 『飯島耕一・詩と散文』 2 「瀧口修造へのオマージュ」 (みすず書房、2001)
- テラス、アントワーヌ 『ポール・デルヴォー』 與謝野文子訳 日本語監修瀧口修造 (河出書房新社、2006)
- 『マルセル・デュシャン書簡集』 北山研二訳 (白水社、2009)
- 『マルセル・デュシャン全著作』 北山研二訳 (未知谷、2001)
- デュシャン、マルセル 『表象の美学』 (牧神社、1977)
- トムキングズ、カルヴィン 『マルセル・デュシャン』 木下哲夫訳 (みすず書房、2003)
- 『特集＝シュルレアリスムの彼方へデュシャンとルッセル』 (ユリイカ、1977.8)

- デューヴ、ティエリー・ド『マルセル・デュシャン』(法政大学出版局、2001)
- ブルジャッド、ピエール『マン・レイとの対話』(水声社、1995)
- 石黒輝雄「マン・レイになってしまった人」(銀紙書房、1983)
- 荒川修作「デュシャン頌」(『マルセル・デュシャン』『エピステマー』、朝日出版社、1977.11)
- 荒川修作、マドリン・キンズ『養老天命反転地』(花の都ぎふ花と緑の推進センター、2005)
- 荒川修作・藤井博巳〔対談集〕『生命の建築』(水声社、1999)
- 荒川修作、マドリン・キンズ『建築する身体』川本英夫訳(春秋社、2004)
- 『現代思想』「総特集荒川修作+マドリン・キンズ」(青土社、1996)
- 荒川修作、マドリン・キンズ『死なないために』三浦雅士訳(リプロボート、1988)
- ブルトン、アンドレ『シュルレアリスムと絵画』(粟津則雄、大岡信訳(人文書院、2008)
- 『版画芸術』「荒川修作最新作集」No. 18 (阿部出版、1977)
- 荒川修作、マドリン・キンズ『建築——宿命反転の場アウシュヴィッツ——広島以降の建築的実験』工藤順一、塚本明子訳(水声社、1995)
- 荒川修作+マドリン・キンズ『死ぬのは法律違反です』河本英夫、稲垣論訳(春秋社、2007)
- 『美術手帖』「特別企画荒川修作「見る者がつくられる場」展」(美術出版社、1992.12)
- 荒川修作+マドリン・キンズ『意味のメカニズム進行中の著作(1963-1971、1978) 荒川修作の方法によって』瀧口修造訳(発行所: ギャラリー・たかぎ、1979)
- 高橋康也対談集『アリスの言葉たち』(新書館、1981)
- 『夜想』27「★特集★レーモン・ルーセル」(ペヨトル工房、1990)
- 『日本詩人全集』第6巻昭和篇(1) 瀧口修造(創元社、s27)
- 『世界美術全集』37 西洋(13) 現代(角川書店、s36)
- 『瀧口修造とマルセル・デュシャン』(千葉市美術館、2011)

# 吉増剛造と寺山修司

## ——詩人がイメージする映像論——

清水 義和

### 01. まえおき

吉増剛造氏や寺山修司は、活字による表現方法から美術や音楽を含んだ総合的なアートへと大きく発展させて、その結果、モダンアートをすさまじいほど飛躍的に急展開させた。従って、そこには、二人のアーティストの写真や映像作品に共通点を見出す事が出来る。例えば、吉増氏は文字表記を活字体とルビのような小文字とを併用したスタイルを築きあげた。更にまた、吉増氏が描く草書体のような文字表記法は解読するのに難解である。恐らく、この草書体表記はグーテンベルグの印刷術に対する批判が込められていると思われる。或いは、これは、また、吉増氏の詩の表記法が、印刷文字になれた現代人に対する異議申し立てとして読みとることもできる。或いは、吉増氏独特の文字表記法からは、古くはマヤの文字表記から現代のデュシャンの文字表記まで、殆ど無限に近い時間を感じさせられる。

ところで、いっぽうで、かつて、吉増氏や寺山が、古典的な詩のスタイルを変え、或いは、詩や俳句や短歌の形式を捨てて、写真や映像に走ったという見方があった。その理由の源と考えられるのは、一例としてデュシャンが、これまで何れの芸術でも成しえなかった斬新な芸術の新機軸を示したことにある。デュシャン以後、何れの芸術分野でも、伝統的で古典的で書誌的な研究をしているだけでは済まされなくなってきた。

だから、カフカやベケットやジョイスやプルーストが小説で行った革命や、また、ロートモリアンやランボーが詩で行った革命や、更に、ルーセルやジャリやアルトールが行った演劇運動の革命や、或いは、エイゼンシュテインやルイス・ブニュエルとサルバドール・ダリの映像革命や、他方で、ピカソやマチスがタブロー絵画で行った革命も、デュシャンが『泉』、『大ガ

ラス』、『遺作』などのオブジェで見せた全く斬新な芸術作品が出現したとき、デュシャン以前の芸術はその生命が終わりを告げたとさえ思われたのである。従って、デュシャンの芸術が登場したことによって、生身の人間と同じ様に、恒久的な芸術でさえも、作品に生命があることを思い知らされる事となった。しかも、デュシャン以後、芸術の新機軸となる作品は、今までになかったコンセプトを完璧に表していなければならなくなった。

例えば、デュシャンの後継者と言われる荒川修作の斬新な作品を見ると、デュシャンの作品でさえ、1960年代の作品だと思えてくる。更に、荒川の『養老天命反転地』や『三鷹天命反転住宅』を見てみると、そのアイデアの巨大さや天文学的な宇宙観や繊細なメカニズムなどに圧倒されてしまう。だが、荒川の作品は、デュシャンの芸術を明らかに越えてはいるけれども、反面、デュシャンの影響を強く受けていることもよく分かるのである。

荒川は、『ヘレン・ケラーまたは荒川修作』(Helen Keller or ARAKAWA, 1994)を表し、新しい世界は、ヘレン・ケラーのような全盲の人が夢見た世界でなければ思い描けないと考えていたようだ。これまで眼明きが観てきたものは、デュシャンが言うように、極論すれば総て「レディ・メイド」になってしまう。ならば、全盲のヘレン・ケラーが夢見る世界に、今まで見たことも無い世界を見つけ出さねばならない筈である。

さて、寺山が『盲人書簡』でドラマ化したのは、盲人の夢の世界であった。そのコンセプトは荒川の世界観と一種の符合があるようだ。だが、それは全く偶然ではなかった。というのは、四百年前、ガリレオが真っ暗な闇の宇宙を観測してきたし、現在、飛行機や船は真の暗闇でも弾丸のように走っているからだ。或いはまた、寺山が1965年ニューヨークの大停電から想いついた『停電映画』も、これまで見たことも無い映画であった。

或いは、吉増氏が詩や写真や映像で表わす世界は、今現在の現実にはない、つまり、現在ではなく、失われた世界との遭遇を表した夢の世界である。

いわゆる、デュシャンの芸術の出現によって、全ての芸術家は、伝統や古典や書誌の下に隠れていて捉えどころのない世界を躍起になって探し、追求し始めたことであろう。

例えば、寺山の『邪宗門』や『花札伝奇』は筆者が英訳してみても明らかになることがあった。それは、他の作家たちと異なる表記が書かれた文章の背後に隠されていることにしばしば気づかされる。殊に、俳句や短歌には主語や動詞が省略されていることがしばしばある。それで、その俳句や短歌は、誰がどうしたのかが分からない事がある。いっぽう、吉増氏の詩の表記も、更に複雑で、一つの作品の中に詩と散文と対話とが入り乱れ、それに、映像や音楽が加わって、譬えれば、ワグナーの総合音楽のような複雑な芸術作品である事が分かる。ワグナーの楽劇は、音楽に劇が加わった総合芸術であるが、吉増氏が創作した作品の場合にもそのような傾向が見られる。吉増氏は、詩人で、写真家で、映像作家であるが、その詩の朗読会におい

てさえも、音楽や多言語による異文化社会が総合的に網羅されている。

その点で、寺山の芸術も類似した傾向が見られる。但し、寺山の場合には、その他に、舞踏や人体文字とも言うべきパフォーマンスがあり、また、鳥や動物の生態を思わせる自然現象の出現する表現があるし、更に、マイノリテーな民族に属する人達の文化現象を表わし、或いは、ルーセルを想起させるような奇想天外なカラクリのパノラマが現出する仕掛けになっている。従って、両者の違いを一言で言えば、寺山は、天井桟敷という劇団の集団芸術であり、それに対して、吉増氏の特質は吉増氏個人の制作による個人映画の傾向が見られることだ。

ところで、グーテンベルグの印刷術以来、活字表現による閉塞感は、先ず、デュシャンの芸術によって打ち砕かれた。たとえば、詩人・瀧口修造が、活字表現から美術へと転換した経緯は、瀧口がデュシャンやダリやブルトンのアートと接触するなかで、次第に芸術観が変貌を遂げる事になったからだ。吉増氏も、また、瀧口の変貌を、具に見つめながら、活字表現から映像表現へと転換を遂げていく事になる。

或いは、寺山が、俳句から短歌へ、更に、実験映画や演劇へと転換していった軌跡を辿っていくと、寺山とほぼ同世代にあたる吉増氏も、詩人として、活字の表現から写真、映画へと触手を伸ばしていった経路を辿る事が出来る。

更に、吉増氏や寺山は日本だけでなく、海外に、己の芸術を拡大していったことも共通してみられる現象である。寺山が海外で詩の朗読会に参加したように、吉増氏も、詩の朗読会で自分の詩を朗読した。

だが、吉増氏と寺山の詩の朗読の違いは、海外で、日本語が、聴衆に理解されないという局面で顕著に表れたようである。例えば、寺山はユミ・コバースらの同時通訳を伴って映画・演劇の海外公演を果たした。いっぽう、吉増氏は、奥さんのマリリアさんを、謂わば、同時通訳として二人によるアートのコラボレーションを行った。

ところで、エジプト学者、吉村作治氏によれば、シーザーがクレオパトラとの関係を密にしたのは、クレオパトラが、ラテン語やギリシア語を話せたばかりでなく、アフリカの諸民族の言語にも通じていたからだという。期せずして、吉増氏とマリリアさんの関係は、シーザーとクレオパトラと一緒に古代アフリカの奥地ナイル川の源流求めて冒険した逸話を想起させてくれる。

或いは、吉増氏や寺山が、ジョイスに惹かれた理由も、ジョイスが、多文化を多言語で表現したアーティストであったからであろう。ジョイス研究家の柳瀬尚紀氏は、吉増氏や寺山と交友関係があり、また、寺山は柳瀬氏との対談も行っている。柳瀬氏はその対談で、吉増氏が行った海外での詩の朗読会を話題にしている。

柳瀬尚紀 吉増剛造は海外でももちろん日本語で朗読するわけですね。<sup>1)</sup>

これに対して、寺山は、吉増氏が奥さんのマリリアさんと朗読会を行ったスタイルと異なっていた。それで、寺山には、海外での詩の朗読会について、独特の解釈があった。

寺山修司 ぼく自身も詩の朗読を何度か向こうでやったことあるけど、聞き手は日本語を当然分らないですよ。 (p. 55)

先に触れたように、吉増氏の場合、詩の朗読会に奥さんのマリリアさんが同時通訳者として絶えず同伴したようだ。しかしながら、吉増氏は海外での言語体験は、いっぽうで、かなり苦汁をなめたようである。寺山も海外公演を頻繁に行ったが、吉増氏や荒川修作のように、いわば、同時通訳者として彼らの妻を同伴して、何年も海外に滞在する経験はなかった。従って、寺山は、同時通訳の代わりに、文字言語を肉体化して、観客に意味を伝える方法を考案したようだ。恐らく、寺山は、肉体文字を使って言語表現は出来ると考えたに違いない。

ミドル・セクス大学レオン・ルビン教授によれば、英国の俳優学校 (RADA) での三年間のうち二年間は言語を使わずに、パントマイムだけで意志を伝える。そして、俳優たちには、動物園で鳥や動物の家族を詳細に観察するエクササイズがあった。果たして、人類が言語や文字を持つ以前は何時の頃まで遡る事が出来るのであろうか。言葉が生まれる時代は、有史以前と重なり、マルセル・モースやレヴィ=ストロースの文化人類学による調査によって明らかにされつつある。その調査の過程の中で未開文化の豊饒さも明らかにされようとしている。寺山が、言葉で表現できない記号化 (コード化) された文化をモースの『社会学と人類学』から学び、それを、劇団天井桟敷のエクササイズで肉体化したようである。

因みに、寺山は市街劇『人力飛行機ソロモン』で近代文明を批判し、言葉を持たない原始社会を、一メートル四方1時間国家として、現代都市の一角に出現させた。その国家は、一時的とはいえ、突如この世に出現させるという試みであった。

いっぽう、これに対して、吉増氏は、自分自身の劇団を持たず、むしろ、アーティスト達とのコラボレーションを通して、写真や映画での映像表現に昇華していった。吉増氏は、まいまい井戸のような窪地に深い関心があり、その窪地に現代社会とは異化された異空間を求め、実験的個人映画『キセキ』に映像化した。

ところで、吉増氏と寺山の違いは、吉増氏が個人の劇団を持たなかったことに見られる。だが、むしろ、吉増氏と寺山が表現しようとした新しいアートに共通点も多く見られる。言い換えれば、吉増氏のアートを寺山のアートと較べると二人の表現の違いよりも、むしろ重なって

いく多層的なコンセプトが焙りだされてくるのである。

本稿では、吉増氏と寺山が、既製の芸術を打破して、今まで一度も見た事も無いアートの源流を辿り、これまで、明らかにされなかった現代アートの新機軸を二人のアートの中に見出す試みでもある。

## 02. ル・クレジオとレヴィ=ストロースの文化人類学

吉増氏は対談集『アーキペラゴ』の中でル・クレジオの『悪魔祓い』に関心を懐いた事を語り、更に、自身も詩集『わが悪魔祓い』を書いている。

悪魔祓い。拝火教の悪魔祓いが数千年前に終了したのなら、いまは悪魔を創造する季節である。<sup>2)</sup> (p. 62)

吉増氏は、ル・クレジオの『悪魔祓い』から感化されたらしく、自らの詩集『わが悪魔祓い』のなかで、封印され失われた古代の死霊を呼覚まそうとしているかのようである。

もはや／珈琲よ／海の、割れ目だ／ぶらさがり／波にのり／光る、山々を、スケッチし／  
skating する／悪魔祓いだ (pp. 100-101)

前述の詩文は、吉増氏が、沖縄の南海に「海の、割れ目」を、凝視しようとしているさまが読み取れる。

エロス、／木霊！／死の舟。／ミロク。／ (p. 140)

上記の詩句は、『わが悪魔祓い』の中の末尾の詩句であるが、吉増氏が、ル・クレジオの『悪魔祓い』から受けた影響の痕跡を醸し出している呪文のようであるらしく、しばしば、他の詩でもリフレインされる。

いっぽう、寺山は、ル・クレジオがマヤの民俗学や人類学に基づいて執筆した小説『巨人たち』や評論『悪魔祓い』を読み、やがて、インディオの呪術に関心を懐いたのであり、かつて、実際に、ル・クレジオに会って、生活を共にさえた。

一ぼくは、連歌や俳諧の起源についても、少しばかり知っていることがある。でも、共同で

生み出す散文とを一緒に語ることはできないさ。

とル・クレジオ。

一詩は私の言葉で、散文は集団の言語で書かれるんだよ。

と私が反問した。

一でも、詩は衝動で書けるが、散文は衝動じゃ書けない。衝動はとても連帯しやすい感情なのだから。

とル・クレジオが言った。<sup>3)</sup>

上記の寺山とル・クレジオとが交わした会話から推し量っていくと、寺山や吉増氏の詩や散文に対する態度も次第に透けて見えて来る。

ところで、寺山修司が著した『わが金枝篇』は、ジェームズ・フレイザーの『金枝篇』(The Golden Bough)を念頭に置いた詩集であるようだ。実際、『金枝篇』はイギリスの社会人類学者フレイザーが『金枝篇』を著した未開社会の神話・呪術・信仰に関する研究書である。フレイザーがこの書物を表わした動機は、イタリアのネミにおける宿り木信仰、「祭司殺し」の謎に発しているところから採られたといわれる。ところで、寺山が『わが金枝篇』に書いた詩に次の句がある。

癌すすむ父や銅版画の寺院 寺山修司<sup>4)</sup>

歌人の塚本邦雄は、この歌に詠み込まれた「癌すすむ」に悪臭を嗅ぎ分けている。また俳人の馬場駿吉氏によると、同歌に詠み込まれた「銅版画」は駒井哲郎のエッチングを指すのではないかと批評している。何れにしても、寺山が、詩に匂いと絵画とを詠み込んでいることは確かだ。或いは、もしかしたら、寺山は、駒井がエッチングに秘めた銅画の世界を腐食剤としての匂いと思いを重ねて「癌すすむ」と歌ったのかもしれない。しかも、エッチングによる芸術作品は、一種の魔術を表した世界であり、フレイザーの「金の枝」の世界から、駒井が「銅版の絵画」に読み替える事によって、不吉な予感を醸し出しているのかもしれない。

さて、吉増氏は前述した『アーキペラゴ』に戻ると、その中で、文化人類学者の今福龍太氏と一緒に、シャーマンについて以下のように語り合っている。

吉増 気がつくとガサガサと何かが動く。おそらく、ヘビカトカゲが動いているんでしょうね。だから、ほんの百分の一くらいのことは、おっしゃっていたシャーマンのようなことはできるんでしょうね。人間はシャーマンのようなことは少しはできる。それが小さな旅かもしれ



ない。<sup>5)</sup>

この場合、吉増氏は、ちょうどアントナン・アルトーがヴァン・ゴッホの絵に“気配”があると論じているように、この対談で、“気配”のようなものを述べているのかもしれない。次いで、吉増氏は、そこから一步踏み込んで、この“気配”が、一種の忘我状態の中にある、性的なエクスタシー体験へと論じながら、次のように展開していく。

非常に優れたシャーマンでもいいし—詩人もそうですけれど、そういうものが成り立つには不思議な条件があって、それが欠損の充実、欠損の充満。啞の状態・盲目の状態になっている部分があるということに近頃気がついていました。……アイヌのおばあちゃんの、貝澤コキン（古錦）さんの話りの、冒頭の部分の言い直すところだけを聞いたり、あるいは恐山の巫女さんの話を、ジーンと聞いていたりする影響かもしれない。芭蕉の「先たのむ椎の木も有夏木立」—これは目をふさいでいるんですよね。幻住庵に籠って居て、目をふさいで想像力の触手で触っている感じなんですね。……ある意味では、シャーマン的な意識のレベルが変わってきている。それが非常に豊かな聾啞状態なんだなって気がついていました。西行にもあるんだけど、芭蕉が残したものが、これほど我々の潜在意識に訴えかけてくるのは、それも一つの秘密なんだなって思い当たった。(pp. 117-118)

或いは、吉増氏がアイルランドのイエイツやジョイスやベケットに関心を懐き、殊に、イエイツが書いた妖精物語に強い関心を懐いたようである。そして、吉増氏は、イエイツの妖精と、柳田國男の『遠野物語』に登場する天狗、河童、座敷童子などの妖怪に纏わるものから山人、マヨヒガ、神隠し、死者などに関する怪談、更に、祀られる神や、その行事などと類似点があるのを見出している。

さて、エリアーデは『神話と夢想と秘儀』の中で、性的なエクスタシー体験を論じているが、コリン・ウィルソンは『オカルト』の中で、プルーストのこの性的なエクスタシー体験を「心の間歇」と呼んでいる。プルーストは『失われた時を求めて』で、「ケルト人は無機物にも死んだ魂が宿っている」と述べ、それが突如として蘇るという。

Je trouve très raisonnable la croyance celtique que les âmes de ceux que nous avons perdus sont captives dans quelque être inférieur, dans une bête, un végétal, une chose inanimée, perdues en effet pour nous jusqu'au jour, qui pour beaucoup ne vient jamais, où nous nous trouvons passer près de l'arbre, entrer en possession de l'objet qui est leur prison.<sup>6)</sup>

つまり、プルーストは、『失われた時を求めて』の第一部の『コンブレー』の中で、パリでの憂鬱な生活を送っていたある日のこと、お茶をマドレーヌに浸したのが舌に触れた瞬間、性的なエクスタシー体験に包まれて、この死んだ無機質な味の中に膨大な無意識的な記憶が蘇るのである。その記憶へと辿る道は、『失われた時を求めて』の第一篇『スワン家の方へ』で、マルセル少年が、コンブレー村で父と一緒に散歩した「道」であり、その道を辿りながら膨大な失われた世界へと辿って行くのである。

このように、吉増氏が論じているイエイツの妖精や柳田國男の妖怪は、プルーストのお茶に浸したマドレーヌが呼覚ました性的なエクスタシー体験「心の間歇」と類似している。

更に、吉増氏は、多木浩二氏との対談「言葉の閃光を掴まえる」の中で、ベンヤミンの『プルースト論』を引用している。

吉増 ……これもプルーストについてですが、(類似性はそれが支配していることの真のしるしを認識させてくれる。あるものと別のものとの、私たちが予期するような、目覚めているときの私たちの関心をひくような類似性は、夢の世界のもっとも深い類似性の周辺にちらつくものにすぎない) といつて、……(物には、過去にそれをながめたまぎしの幾分かが残っている) とプルーストが言ったところを取ってくる。……「想起」ですね。ベンヤミンはプルーストについて語りながら、「無意識的想起」、その「想起」の特殊な層を、或る重みをもって私たちに伝えると言います。<sup>7)</sup>

ところで、吉増氏は、仏文科出身の詩人なのでプルーストについては造詣が深かったと思われる。いっぽう、寺山はプルーストについて余り言及していない。だが、寺山はハロルド・ピントアのドラマに惹かれていたようだ。ピントアはプルーストの小説『失われた時を求めて』を脚色してシナリオに書いている。そして、ピントアは『失われた時を求めて』に影響を受けたドラマ『帰郷』、『昔の日々』、『背信』、『部屋』などを書いた。こうして、寺山はピントアの劇から影響を受けたと思われる『青ひげ公の城』や『邪宗門』などを脚色しているのである。つまり、二人に共通してみられる箇所は、現実には存在しない「気配」や「起こらなかつたけれども覚えている記憶」であつたりする。

さて、吉増氏が書いた『ブラジル日記』を読むと、吉増氏がレヴィ=ストロースの『悲しき熱帯』を読み、ブラジル滞在でマイナーな文化に触れた体験に触れる事が出来る。また、吉増氏がレヴィ=ストロースから学んだ事は、紙の上ではなく、歩くことから真実が得られることであると述べている。

更に、吉増氏はレヴィ=ストロースの『悲しき熱帯』を読みレヴィ=ストロースの哲学を解

読する。吉増氏は前述した『アーキペラゴ』の中でレヴィ=ストロースについて次のように述べている。

とても深い孤独な感じが伝わってくるのね (p. 144)

あるいは、吉増氏は、もしかしたら、レヴィ=ストロースの孤独から、ル・クレジオや柳田國男や折口信夫にも同種の孤独を見出し、独自のシャーマン観を懐いていたのかもしれない。

いっぽう、また、寺山は、レヴィ=ストロースとル・クレジオの関係について興味深いコメントを残している。

私は一度も南アメリカへ行こうと思ったことはなかったし、その知識もレヴィ=ストロースの二、三の書物によるものでしかなかった。だが、ル・クレジオの場合、私が読んだのと同じレヴィ=ストロースの書物でさえも、同じフランス人の著作であるというだけでいっそう身近に感じられているのだった。『悲しき熱帯』について語る時、ル・クレジオは殆ど少年のように熱狂的だった。<sup>8)</sup>

ところで、寺山は市街劇『人力飛行機ソロモン』の上演で、一メートル四方国家を造り、近代文明国の真ただ中であって、あたかも、間欠泉のように、未開文明を忽然と出現させ、そうして、レヴィ=ストロースが『悲しき熱帯』で描いた未開文明をドラマ化した。寺山の市街劇は、夢の発露であり、コリン・ウイilsonが言うように、性的なエクスタシー体験でもあった。この性的なエクスタシー体験は、吉増氏の詩とも関係があり、そのような吉増氏のコンセプトを通して、レヴィ=ストロースの孤独から、柳田國男や折口信夫の孤独に触れる事が出来るのである。

### 03. 折口信夫と柳田國男のシャーマニズム

いっぽう、吉増氏は、前述した『アーキペラゴ』の中で、レヴィ=ストロースの孤独から、ル・クレジオや高銀氏や柳田國男や折口信夫の孤独にまで触れている。吉増氏は、『燃えあがる映画小屋』の中で、折口信夫の『身毒丸』について以下のように語る。

吉増 ふっと、こう、眠った時に、折口信夫さんが『身毒丸』（普通は『俊得丸』ですけどね、折口さんは、この表記と清音の組合せにこだわる……）という小説を書いているのを思い出し

ましてね。<sup>9)</sup>

寺山修司は戯曲『身毒丸』で、しんとくを、恐らく、折口信夫の小説『身毒丸』を参照して、しんとくに近い人物を造形したと思われる。

また、更に、吉増氏は、『アーキペラゴ』の中で、柳田國男をアイルランドの詩人イエイツの“The Celtic Twilight”に関連付けて述べている。

吉増 イェイツの塔やおはかのそばにたたずんでね。そうすると、いまだに酔っぱらったアイルランドの農夫がすぐそこに横たわって、血まみれのウサギを肩に担いで……のような姿がありありと見えてくるのね。そんな風土に触れて、“The Celtic Twilight”を読んでいた。これは初期の柳田さんも読んでいますよね。(p. 34)

ところで、寺山修司は『邪宗門』の中で、柳田國男という名のキャラクターを黄泉の国の案内人として使っている。

更にまた、吉増氏は、日本のシャーマンから韓国、ブラジルのアマゾンに亘る広大な領域のシャーマンについて論じていく。

さて、シャーマンは薬草によって一種の忘我状態に陥る。クリストファー・ノーラン監督の映画『インセプション』では、コブが、ドラッグによって、夢の幾層もの底に沈んでいく場面がある。いっぽう、吉増氏は、谷川俊太郎との対談「目の旅・耳の旅」でアルコールの効用について語っている。

谷川 今でも、幻聴というのがしばしばあるの？

吉増 僕はお酒のみだから、その状態を割合意識的につかっている感じでしょうね。<sup>10)</sup>

他方、寺山は、ネフローゼで、禁酒、禁煙を余儀なくされた。だが、寺山は芝居に異常な夢の幻覚を書いている。もしかしたら、寺山は、ネフローゼで治療中、薬の副作用によって幻覚症状を体験したのかもしれない。寺山は、俳優はシャーマンだと考えていたようだが、自分自身は俳優になろうとはしなかった。

寺山修司の孤独感については、多くの批評家や研究者が論じている。筆者は、これまで寺山の孤独感を、バルトークのオペラ『青ひげ公の城』やエリアーデの『シャーマニズム』と関連づけて寺山の魔術音楽劇『青ひげ公の城』と比較検討してきた。

本稿では、寺山の孤独について、歌手の浅川マキの証言から辿る事にする。馬場駿吉氏が

ら、2011年、「北陸放送で「浅川マキロンググッドバイ」で、浅川マキさんが、寺山さんのことを語っている番組がある」とお聞きした。その放送を聞いて、寺山が、浅川マキという歌手を通して、自分の孤独感を表現していると思った。寺山は、浅川マキに寺山の孤独感を表した詩を朗読するように強く要請した。その詩は、活字では、表現されるものではなかった。

寺山が、映像化した『田園に死す』で恐山のいたこに口寄せを頼む場面がある。この映画は遺作『さらば箱舟』と同じ様に死者との出会いを描いた作品である。けれども、寺山は詩人として、死者の無念な思いを死者の孤独を語る事が出来る吟詠詩人を探していた。遂に、寺山は浅川マキと出会い彼女の歌の中に死者の霊を呼び出す歌唱力と朗詠力があると確信したようである。寺山は、浅川マキの人生も、自分と同じ流れ者の血が流れていることを察知した。寺山の母が幼い寺山少年を残して愛人と他所の地へ行き捨て児同然の孤独な幼年時代を過ごした。寺山は、幼い時から家族を喪失した孤独な少年の心境を歌う吟遊詩人を求めてきた。ある意味で、寺山の母はテネシー・ウィリアムズの『欲望という名の電車』の娼婦ランチと似ており、寺山少年は、韓国人李康順の孤独な死にも強く共感した。寺山はキッチュな感覚で「自分の孤独感を詩で歌う吟詠詩人は浅川マキだ」と確信した。

アナウンサー：当時彗星の如く現れた、詩人であり、劇作家であり、演出家でもある寺山修司の世界に惹かれた寺本さんは、浅川マキがこの人と組めば面白くなるのではと、二人を引き合せたのでした。

寺本幸司：どういう意図があったかと言うと、なんかこう、寺山修司の世界が欲しいわけではないんですけど、浅川マキというものを演劇の空間に立たせてみたかったな。そういう感じの歌手にしたかったかなというふうなこともあって。寺山さんはマキの歌を聞いて、なおかつ、マキのステージの様々な動きとか、喋りとかに惚れ込んでくれていますね。是非やろうという話になって、それで、しばらく、どういう風にやっていくかという話しがあって、その頃、既に、天井桟敷が出来あがっていて、新宿のアンダーグラウンドといいますが、新宿文化アートセンターの地下にある、出来たばかりの蠍座で、連夜、天井桟敷はそこでもって公演してて、ものすごく話題になっている。寺山さんが、「寺本君、あの蠍座でマキをやろうと思うけどどうお。」「あいいですね、僕も、一回行ったことがあるけど、あの空間、最高じゃあないですか」というところから始まって、一九六八年の十二月でしたか、蠍座で三日間……

アナウンサー：夜十時開演、という深夜コンサートにもかかわらず、連日満員、ドアが閉まらない程の盛況で華々しいデビューコンサートとなりました。このとき、寺本さんは、浅川マキの世界が生まれたと確信しました。

寺本幸司：寺山さんがその稽古というかそういう場面になった時に、十五曲と詩を書いてくれてきて、それにマキさんが曲をつけたりして。マキは『夜が明けたら』という歌をもっていましたから、『夜が明けたら』という曲を入れたくらいで、後殆ど寺山修司の「かもめ」とか、「不幸せという名の猫」とかですね、そういう風なものを全部まるで台本のように出来上がって、それを、浅川マキは本当に全部完全に覚えてステージに立って、「ピアノの横に立ってくれ」とか、「ここでこうして」とか「この歌の歌い始めは、ここで喋ってくれ」とか、細かい演出があるのを、全部、勿論バックにバンドが入っていましたから。それを、浅川マキはまるで初めてとは思えないくらいに見事に演じ歌いきったのですね。そこの晩ですね。寺山さんと顔を見合わせてうなずき合った時に、やっと、浅川マキという歌い手がここに誕生したなと思った場面でしたね。<sup>11)</sup>

更に、浅川マキは自ら、寺山修司とアーティストたる由縁を、未だかつてなかった唄と朗読ともつかないリサイタルのリハーサルでの一部始終を明らかにしてくれる。

アナウンサー：その三年後、金沢のリサイタルで、彼女は寺山修司さんの演出について語っています。

マキ：私には東京へ出てからも、いろんな友達が出来たり、応援してくれる人達がいっぱい出来たりして。その中で、私は、暮らしています。寺山修司さんの方は、えらい詩を色々書いてくださり『かもめ』とかいっぱい書いてくれました。すると、いかにも私は、アンダーグラウンドで、アングラと言いますね、暗い所へ出て来て、似合うんじゃないか」「お前さんの顔はがぼっとお陽さんのあたるところで見ると、どうも、飯が喉を通らんと……」（笑い声）よく笑うわね。だから、私が出てくるところは何時でもアンダーグラウンドで。最初の蠍座で演出とか全部、無料でやってくだすたのは寺山修司さんで、その時以来、何かと応援してきてくれて。そして、今度、寺山さんがお作りになった映画を、一生に一度だけ作りたかったという話で『書を捨てよ、町へ出よう』というアートシアター系なんですけど、その映画の中で、私は一生に一度『書を捨てよ、町へ出よう』の映画に出てもいいんじゃないかということで出たんです、そして、台本を貰ったら役が付いていまして、「売れない娼婦」というのです。それで、うちのスタッフが「いくらなんでも、娼婦は言いとして、売れない娼婦というのはあんまりじゃあないか」というんです。そしたら、配役に、階段の娼婦という風に変えられていて、階段に座って猫を抱きながら歌うのです。黒い猫で、私が台詞を言う度に、ひっかくのです。どうしてひっかくのかと思ったら妊娠中の猫だったのです。そして二・三日前に、映画の有料の試写会があったんです、それで、四日前ですかね、行っ

て見ましたら、映っていないのですね。「どうして映っていないのか」と言ったら、「ライトが暗過ぎちゃって映らなかった」というのです。私は余りスケジュール、そんなに忙しくないから「取り直しましょうか」と言うと「それでいいのだ」と言うのですね。

アナウンサー：浅川マキが映画『書を捨てよ、町へ出よう』の中で、階段に座って猫を抱きながら歌った曲「不幸せという名の猫」

マキ：(歌) 不幸せという名の猫がいる。いつも私のそばにぴったり寄り添っている

不幸せという名の猫がいる。だから私はいつも一人ぼっちじゃない。

この次春がきたなら、迎えに来ると言った、あの人の嘘つき

もう春なんか来やしない、来やしない

不幸せという名の猫がいる。いつも私のそばにぴったり寄り添っている

この次春がきたなら、迎えに来ると言った、あの人の嘘つき

もう春なんか来やしない、来やしない

不幸せという名の猫がいる。

いつも私のそばにぴったり寄り添っている。

浅川マキが黒尽くめの出で立ちで舞台に立つ姿は、寺山のアートを考えるうえで必要不可欠であった。シャーマンは、姿は見えず声だけが聞こえて来る。寺山は、照明が暗いのは浅川マキの姿よりも声の方が大切だと考えた筈である。

アナウンサー：そして寺山修司が作った曲の中に何処にも残されていない貴重な曲があります。一九七一年のリサイタルから十八年後の一九八九年の金沢市内のホテルで行われたライブで……

マキ：これは寺山さんが本当にあった話、それを私の為に書いてくれた。「私はとてもこんな歌は、歌えない」というと、喧嘩になりました。音のない小さなアンダーグラウンド。(寺山)「マキこの歌を歌ってくれないんだったら、ぼくは、あなたの演出をする気持ちはないんだ」そして、この歌は何処にも残っていません。私が死んだら誰も継承していかない。この歌は『ロンググッドバイ』というタイトルなのです。そして、寺山さんのところに、小さな家に十七歳くらいの男の人が、いきなり飛びこんできて、いきなり実際にあった話を読み上げたんです。それを寺山修司さんが私の為に書きなおしてくれまして、全部事実です。ちょっと長いのですが、この歌だけは、世間でいうと暗い。でも、是非聞いてください。私がいなくなったらだれも歌わないことを承知して、二度言いましたけれど、私は、これは、皆さんへの今日のお願いです。聞いてください。『ロンググッドバイ』ありがとう。

(歌) もう聞こえないあの足音、

すぐそばのおじさんが、

階段を降りてから

寂しいぼろ靴の響き

おじさんの名前は、金山さんだけど、本当は金さんたった一人の息子さんは、朝鮮人だという事を隠すために、山谷のルンペンから戸籍を買って結婚して叔父さんを捨てて逃げて行ってしまった。

(歌) 寂しい十二月、アパートに一人残されて、出て行った息子さんのシャツを洗いながらおじさんは歌ってた。

線路は続くよ、何処までも

野を超え、山越え、谷越えて、

浅川マキの歌『ロンググッドバイ』は、歌というよりも、歌と詩の朗読が融合したむしろ吟遊詩人風の詩の朗読に近い内的独白であった。かつて、小山内薫が、「歌うな、踊るな」と言ってから、新劇のリアリズム演劇が始まった。だが、浅川マキの謳いは、新劇のリアリズムでもない。ところで、吉増氏の詩は、日本語と英語とハングルが幾層にも重なった言葉にならない言葉である事がある。例えば、浅川マキが歌う『ザ・ハウス・オブ・ザ・サン』の歌詞は、単なる英語から日本語への訳詞ではなく、時々聞き取れない言葉がある。その時、浅川マキの声は、ため息や呻きや曖昧音になる。つまり、もはや、浅川マキは歌っているのでもなく朗読しているのでもない。つまり、浅川マキの声が心を打つのはそのアメイジング・ヴォイスが秘密の回路を謎の指示に従って通過して来るかのようだからである。

浅川マキが歌う『ザ・ハウス・オブ・ザ・サン』は、テネシー・ウイリアムズの『欲望という名の電車』に出て来る娼婦ランチを思わせる歌であり、同時に、寺山の母ハツの半生を彷彿とさせる。

アナウンサー：浅川マキは、マイマン、セント・ジェームス病院、ジーン・ハウス・ブルースなどを、幾つかの外国の楽曲を手掛けています。どの曲も、原曲を損なうことなく浅川マキの世界を作りだしているといわれています。寺山修司をして、「彼女は詩人だね」と言わしめた所以です。彼女が日本語訳にした一曲、『ザ・ハウス・オブ・ザ・サン』はアメリカ民謡です。朝日楼、朝日のあたる家、彼女はこの曲を娼婦に身をおとした女の、娼婦の嘆きと後悔を歌いこんでいます。単なる訳詞ではなく、日本の詩として完成しているところに彼女の歌に対する姿勢がうかがえます。アルバム・マキ2の最後におさめられたこの曲は、新宿



花園神社での、実況録音で、ギターだけの演奏そして雑踏の音をも生かしていた曲です、あたかも、そこが、ニューオリンズの雑踏であるかのように描きたかったのでしょうか。

マキ：（歌） 私が着いたのはニューオリンズの朝日楼という名の女郎屋だった。

愛した男が帰らなかった。あんどきあたしは、国を出たのさ。

汽車に乗って、また、汽車に乗って、貧しい私に、変わりはないが、

時々思うのは、故郷のあのプラットホームの薄暗さ

寺山が、オルグレンの『朝はもう来ない』や『黄金の腕を持った男』に描かれている哀れな女、麻薬に犯された娼婦たちの描写に共感し、シカゴまでオルグレンに会いに行った。殊に、寺山が経緯や当時貧困だった黒人の詩に惹かれたのは、日本の戦後、寺山が父を戦地で失い、母と生き別れした孤独な少年時代と想いが重なるからであろう。浅川マキの歌は寺山が幼心に母の惨めな心境を解釈した哀歌であったと想像できる。

浅川マキの歌の魂は、活字では、決して萬分の一も理解できない。浅川マキの歌とも朗読とも峻別出来ない音源によってしか伝わらない。寺山は、そんな浅川マキを見つけ、自分の劇団で育て、歌手浅川マキを誕生させて自ら、ピグマリオン（芸術家）となった。この放送から、寺山が浅川マキに魂を吹き込んだシャーマンであった事がよく表われていると思われるのである。

浅川マキが歌った寺山の詩歌が、貧しい生活者を歌った詩であることは一目瞭然である。例えば、寺山の詩は、澁澤龍彦の詩と相いれなかったと言われる。その理由は、色々あるであろうが、一概に、育った環境が違ふとだけでは片づけられない問題がある。少なくとも、寺山が浅川マキを見出し、戦後の民衆の気持ちを歌った吟詠詩人をアーティストとして育てたのは稀有な仕事であったことは確かである。従って、浅川マキの歌や詩の朗読から寺山の立場から見、シャーマンの孤独を見落としてはならないだろう。

#### 04. 荒木経惟の写真芸術

荒木経惟氏の写真は、いわば、写真を越えた類まれな写真の映像である事はどの識者も認めている。そこで、自然に、吉増氏も寺山も荒木氏の写真に次第に感化されていった。

寺山は、『写真家100人顔と作品』所収の「先生万歳！ 仮空録音構成「荒木讃江」」で渋谷天井桟敷の舞台上で、荒木の自画像を撮っている。そして次のような仮空録音を掲載している。

新幹線ひかり号の四号車の客 「……おもしろうてやがてかなしき写真かな

といったところでしょうかね」

寺山修司 「荒木さん、池坊保子さんを撮ってください」<sup>12)</sup>

ところで、荒木氏は『写真屋・寺山修司』で次のように述べて、弟子の寺山の態度について、ユーモアたっぷりに次のように批評している。

実ゆーと、寺山修司は私の弟子なのです、写真の。<sup>13)</sup>

さて、吉増氏も「対談神を写す目、神が宿る目」の中で荒木氏の写真について、以下のように述べている。

吉増 荒木さんの追っかけ弟子みたいにして写真を撮り始めて、たくさん撮っていくようになったでしょう。<sup>14)</sup>

ところで、映像作家・萩原朔美氏は、萩原朔太郎の孫であるが、詩人・吉増氏の詩の解説ではなくて、写真『線路』について以下のように興味深い批評をしている。

何度目をこらして見ても、平行であるべき線は長い山を描いているのだ。<sup>15)</sup>

上記の萩原氏の『線路』批評は、マン・レイがタブローに描いた作品『道』を思い出させてくれる。吉増氏は萩原朔太郎を敬愛していたが、朔太郎の孫にあたる萩原朔美氏の批評と吉増氏の写真はお互いに好敵手同士の凄まじい決闘のようなものを感じさせてくれる。また、事実、吉増氏の何れの対談でも火花が散って燃え盛る炎のような迫力を感じさせてくれるのである。

## 05. ジョナス・メカスの映像論

吉増氏が制作した実験的個人映画をDVD『キセキ』の映像で見ると、冒頭のまいまいず井戸は、僅か数メートル下にある井戸へ降りていくだけで、現実の喧騒を一足飛びに飛び越えて音のない異界へと舞い降りる。

À un coin de Musashino, au Cinquième Dieu de Plumes, il y a le <puits-de Maïmáizu > ; comme

absorbé (deux ou trios petites voitures pourraient y entrer), dans ce trou, je descendais en me rappelant la toupie en plomb de mon enfance. En marchant, j'entendais un étrange écho. Les feuilles d'arbres autour, ouvrant des yeux hardis, 1/4, ou 1/3? Comme en chantant, elles regardaient le dos de celui qui descendait? Le vent se calme, les cigales se reposent à l'ombre des arbres.

Les tympants dorment embrassant la caverne.

Un énorme cheval, debout, là regarde dans le gouffre à la limite.<sup>16)</sup>

この「ユキ? ユキ」に歌われた「まいまいず井戸」は、DVD『キセキ』の冒頭の映像で見られる。この井戸は、寺山修司の遺作『さらば箱舟』のラストシーン近くでスエが捨吉を追って後追い自殺する「穴」を思い出させる。この映画の中で、村の住民がこの穴の底を覗きこむシーンがある。

生身の人間の世界から見ると地下の世界は、死者の世界と隣り合っているように見える。実際、エリアーデの書物『神話と夢想と秘儀』や『シャーマニズム』を読むと、上昇する世界は天界に達し、下降する世界は冥界に到達する。例えばマヤ文明の洞窟の下にある満々と水をたたえた地下には無数の髑髏が埋葬してある。生身の人間の目から見るとおどろおどろしいのであるが、自然界と一体となった眼から見ると、地下の洞窟は誠に平和な静寂の広がる世界である。髑髏は土に帰り、やがて、新しい生命の一部となって再生する。更に、吉増氏は、柳田國男の『東野物語』に描かれたシャーマンの世界と地下の世界は関わりがあると考えて、地下に霊が棲む場所があると考えているかのようだ。この霊は、ギリシア神話に登場する女神で冥界の女王、ペルセポネー（古典ギリシア語：Περσεφόνη, Persephone）を彷彿させるのであるが、吉増氏は、レヴィ=ストロースやル・クレジオの民族學に見られる霊を連想して書き綴っているようなのである。

寺山の場合、霊界は暗喩として、黄泉の国に通じる穴と考えていたようである。更に、寺山は、黄泉の国は、子宮と繋がっているとも考えていた。つまり、寺山は、子宮と冥界とは迷路を介して繋がっているように考えていたようである。寺山の子宮回帰は、エリアーデが『神話と夢想と秘儀』で記述しているように、子宮と地界とは繋がっているという古代人の考え方を引用している記述を思い出させる。

さて、吉増氏はジョナス・メカスと長年共同で実験映画を制作し交流を深めてきた。吉増氏はメカスとの対談「詩、そして映像の越境」で、寺山の名前を挙げて日本での実験映画創世期を語る。

吉増 僕らは詩の側から、違う角度からメカスさんを見ようという運動をしてきたんですけれ

ども、実は日本にも、ウォーホル、あるいはジョン・レノンとつながるように、インディペンデントの志をつないできた映像作家がたくさんいるんですね。故人になってしまった寺山修司さん、飯村隆彦さん、かわなかのぶひろさん……あるいは赤瀬川源平さんというフルクサスにつながった人もおられます。<sup>17)</sup>

前述の記述から、吉増氏が、寺山と実験映画を介して交流があった事が分かる。しかし、吉増氏は、自分の映画が、当時のアヴァンギャルドとしての映画作法とは異なると述べている。ところで、吉増氏は、飯村隆彦氏、かわなかのぶひろ氏らと『フィルムメーカーズ個人の映画のつくり方』に参加している。恐らく、メカスがこの書物に関わっているからでもあるといえよう。つまり、この書物のサブ・タイトルが示しているように、観方によっては、この書物は吉増氏の映画論を実践するための映像論ともなっている。また、吉増氏の映画の視点は『メカスの映画日記』から読みとる事が出来る。

Exerpt One from my True Diaries:

November 8, 1958. I am a regionalist, that's what I am. I always belong somewhere. Drop me anywhere, into a dry, most ifeess, dead, stone place where nobody likes to live - and I'll begin to grow and soak it, like a sponge. No abstract internationalism for me. Nor do I put my stakes on the future: I am now and here.<sup>18)</sup>

更に、吉増氏は、メカスの詩集を読み、やがて、メカスの実験映画へと繋がっていったと論じている。つまり、吉増氏は、先ず、最初に、メカスを詩人として見ようとしているようなのである。

さて、アラン・ジュフロアは『荒木論』を書いた。ところで、そのジュフロアが吉増氏と荒木氏を交えて対談をしている。そこで、その対談から写真家・荒木自身を介して、詩人吉増と寺山の関係が繋がっていた例をその鼎談「裸足のカンバセーション」から以下に引用してみよう。

ジュフロア 写真で翻訳するわけですね。イメージによる新しい辞書になります。  
荒木 ちょっと前に、寺山修司の短歌や剛造さんの詩でやってみたんですよ。<sup>19)</sup>

これまで、吉増氏の詩、写真、映画について、論じてきたが、次に、吉増氏が演劇観について、唐十郎氏との対談「言葉の「湯気」に耳そばだてて」で状況劇場を四十数年間見続けてき

たと語っているのを以下に紹介してみよう。

吉増 土方巽の舞踏言語をパラフレーズしてみますが、判るの難しいだろうなあ。“うさぎを、濡れた板で、ギギギッと掻いている音、チョウチョが、三ツ口だから……って”、あの土方さんが立ててる音が、舞踏なのね、フグフグ、チュチュって。これらは、唐さんはもう既に長い時間をかけて体内化していらっしやると思う。でも、僕は、寺山修司の世界も含めて、もしかすると、唐さんが幼い時からどうしても触りたいと思っていたものが、五〇年代、六〇年代の大歩行の結果として出てきた気がする。<sup>20)</sup>

前述の吉増氏の発言によって、吉増氏と寺山との交友関係がその背後から浮かびあがってくるのである。

## 06. むすび

寺山は短命であった。寺山が、1983年に亡くなってから、30年間近く経とうとしている。もしも、寺山が未だ生きていたら、寺山のアートがどれほど変貌したかと考えると興味は尽きない。だが、少なくとも、寺山が、海外からどんなアートを受容し、消化し、新たなアートを産み出し、寺山のアートを継承していったかを辿る事は出来る。それと同時に、寺山の同世代のアーティストたち吉増氏や荒川修作らが、寺山とは異なるアートの領域で、独自のアートを受容し昇華し発展させていったかを辿る事も出来る。そうした横断的な現代アートを探求することが、これまで隠れていて見えなかった謎が明らかになり、その解明が寺山研究には欠かす事が出来ないと思われる。

いっぽうで、デュシャンが「アートに命がある」と言ったように、1983年以後、新しいアートが次々と生まれて来ている。そして、過去のアートは古びつつある。しかしながら、デュシャンの芸術が依然として現代アートにとって大きな山脈であることに変わりはない。その理由のひとつは、デュシャンのアートを継承し発展させた荒川修作のアートの存在が未だに生々しいからである。そのように、寺山の場合も、寺山自身のアートを継承し発展させている映像作家安藤紘平氏や劇作家の天野天街氏が寺山のアートに新しい解釈を持ち込んで生々しく脱構築し、展開している。

吉増氏の場合、まだまだ、新たな芸術を発展させていく可能性は大きいのであるし、まさに、吉増氏はその途上にあるから、吉増氏の継承者の問題は今ではなく今後の課題になるだろう。

さて、以上のように、詩人の吉増氏と寺山が、詩ばかりでなく、写真や実験映画の映像作品を次々と産み出してきた足跡を辿りながら両者の映像論を比較研究してきた。吉増氏と寺山が、最も影響を受けたのは、やはりデュシャンといえるのではないだろうか。デュシャンもまた、レヴィ=ストロースの文化人類学やルッセルやアルトーやブルトンのアヴァンギャルド芸術の影響を受けてきたのである。そのことは、吉増氏と寺山が、デュシャンのモダンアートをそれぞれ受容し、独自に発展させていった足跡を二人の詩や写真や実験映画の映像作品から読みとる事が出来るからである。

## 注

- 1) 寺山修司、柳瀬尚紀、「対談 翻訳家この悪魔にも似た表現者」(「翻訳の世界」1981.7), p. 54. 同書からの引用は頁数のみ記す。
- 2) 吉増剛造『わが悪魔祓い』⑤(河出書房新社、1978), p. 62. 同書からの引用は頁数のみ記す。
- 3) 寺山修司「書物のフォークロアール・クレジオと語る」(『地平線のパロール』河出文庫1993), p. 20.
- 4) 寺山修司『わが金枝篇』(湯川書房、1973), p. 32.
- 5) 吉増剛造、今福龍太『アーケペラゴ群島としての世界へ』(岩波書店、2006), p. 92. 同書からの引用は頁数のみ記す。
- 6) Proust, Marcel, *A la recherche du temps perdu* I (nrf Gallimard, 1954), p. 44.
- 7) 吉増剛造、多木浩二「言葉の閃光を掴まえる」(『ユリイカ』2002.12), pp. 80-81.
- 8) 寺山修司「書物のフォークロアール・クレジオと語る」(『地平線のパロール』河出文庫1993), pp. 11-12.
- 9) 吉増剛造『燃えあがる映画小屋』(青土社、2001), p. 83.
- 10) 吉増剛造、谷川俊太郎、対談「目の旅・耳の旅」(『詩と思想』土曜美術社、1988.10), p. 84.
- 11) 『浅川マキ〜ロング・グッドバイ』(MRO 北陸放送ラジオ制作、放送日:2011年5月29日(日曜日)15時00~15時55分) Cf. 『ロング・グッドバイ 浅川マキの世界』(白夜書房、2011), pp. 229-230.
- 12) 寺山修司「先生万歳! 仮空録音構成「荒木讃江」」(『写真家100人顔と作品』毎日新聞社、1973), p. 77.
- 13) 『写真屋・寺山修司』(田中未知編、フィルムアート社2008), p. 178.
- 14) 吉増剛造、荒木経惟、「対談神を写す目、神が宿る目」『すばる』(集英社、1999.1), p. 217.
- 15) 萩原朔美(文)、吉増剛造(写真)、「線路」(『ポエム』すばる書房1978.1), pp. 82-87.
- 16) Yoshimasu, Gozo, *Osiris, dieu de pierre* Traduit du japonais par Makiko Ueda et Caude Mouchard (Circe,1999), p. 47.
- 17) 吉増剛造、メカス、ジョナス、対談「詩、そして映像の越境」(『すばる』集英社、1996.7), p. 199.
- 18) Mekas, Jonas, *Movie Journal The Rise of a New American Cinema, 1959-1971* (Collier Books, 1972), p. vii.
- 19) 吉増剛造、荒木経惟、アラン・ジュフロア、「鼎談「裸足のカンパセーション」」(『すばる』集英社、2001.2), p. 115.
- 20) 吉増剛造、唐十郎、「対談「言葉の「湯気」に耳そばだてて」(『すばる』集英社、2009.8), p. 160.

参考文献

- YOSHIMASU, GOZO, *OSIRIS, THE GOD OF STONE* (Saint Andrews Pr, 1991.02)
- YOSHIMASU, GOZO, *La Malle du Martroi* (Saint Andrews Pr, 1991.02)
- Yoshimasu, Gôzô, *Osiris, dieu de pierre, in-8, br Deuxième trimestre 1991-* (Editions Belrin, 1991)
- Yoshimasu, Gôzô *Deux proses-in-8, br-bande conservée Premier trimestre 1992-* (Editions Belrin, 1992)
- YOSHIMASU, GOZO, *gozo Cine KI-SE-KI* (Osiris Co., Ltd., 2009)
- LE CLEZIO J.M.G. *Hai* (Albert Skyra, Genève, 1971- Coll. "Les sentiers de la création")
- LE CLEZIO J.M.G. *Les Geants* (Gallimard, 1973)
- Jouffroy, Alain, *Araki (Photofile)* (Thames & Hudson, February 1, 2008)
- Sorgenfrei, Carol, Fisher, *Unspeakable Acts The Avant-Garde Theatre of Terayama Shuji & Post war Japan* (Hawaii U.P., 2005)
- 吉増剛造 『オシリス、石の神』 (思潮社、1984)
- 吉増剛造 『出発』 ① (河出書房新社、1977)
- 吉増剛造 『黄金詩篇』 ② (河出書房新社、1977)
- 吉増剛造 『頭脳の塔』 ③ (河出書房新社、1977)
- 吉増剛造 『王国』 ④ (河出書房新社、1978)
- 吉増剛造 『死の舟』 (書肆山田、1999)
- 吉増剛造 『スコットランド紀行』 (書肆山田、1999)
- 吉増剛造 『生涯は夢の半径 折口信夫と歩行』 (思潮社、1999)
- 吉増剛造 『燃えあがる映画小屋』 (青土社、2001)
- 吉増剛造 『ブラジル日記』 (書肆山田、2002)
- 吉増剛造 「巨人伝説」 『ドラキュラ』 創刊号 (発行人：宇田川良雄、1973)
- 吉増剛造・萩原朔美 (写真) 「線路」 月刊『ポエム』 (すばる書房1978)
- 谷川俊太郎・吉増剛造、ピック対談「眼の旅・耳の旅」 『詩と思想』 (土曜美術社、1988.9)
- 吉増剛造 「芭蕉の世界」 『國文学解釈と鑑賞』 (至文堂、1972.9)
- 吉増剛造 「萩原朔太郎・詩の生理」 『國文学』 (學燈社、1978.10)
- 吉増剛造 「詩 リズム・イメージ・意味」 『國文学』 (學燈社、1987.3)
- 吉増剛造 「越境する折口信夫」 『國文学』 (學燈社、1997.1)
- 吉増剛造 「写真／ボディ・スコープー光・ロゴス・記憶」 『國文学』 (學燈社、1997.1)
- 吉増剛造 「対談・詩の地面の発明者」 松浦寿輝、「朔太郎はどこへ行ったか」 『國文学』 (學燈社、2002.6)
- 吉増剛造 「短歌の争点ノート」 『國文学』 (學燈社、2002.6)
- 吉増剛造 「レッスン・複合領域の文化研究」 『國文学』 (學燈社、2004.5)
- 吉増剛造 「啄木ローマ字日記の古暁 アイオワにて」 『國文学』 (學燈社、2004.12)
- 吉増剛造 「常世へ、底凝りの常世へ下りていく」 「妣の声」 他 『國文学』 (學燈社、2006.9)
- 吉増剛造 「吉増剛造—黄金の象」 『國文学』 (學燈社、2008.5)
- 吉増剛造・與謝野文子、対談「鉄幹の眼、晶子の声」 『國文学』 (學燈社、2009.6)
- 寺山修司・柳瀬尚紀 「翻訳できないものなどあるものか？」 『翻訳の世界』 (日本翻訳家養成センター、1981.7)

- 柳瀬尚紀・羽生善治『対局する言葉羽生+ジョイス』（河出文庫、1996）  
吉増剛造・羽生善治『盤上の海、詩の宇宙』（河出書房新社、1997）  
吉増剛造・市村弘正『この時代の縁で』（平凡社、1998）  
吉増剛造『アジアの渚で』（藤原書店、2005）  
吉増剛造『詩をポケットに』上・下（NHK 出版、2002）  
『フィルムメーカーズ個人映画のつくり方』（アーツアンドクラフツ、2011）  
『写真屋・寺山修司』田中未知編（フィルムアート社、2008）  
『ユリイカ』ホルス・ルイス・ボルヘス（青土社、1970.8）  
『ユリイカ』エズラ・パウンド（青土社、1972.11）  
『ユリイカ』詩的言語へ 日本語のリズムと音（青土社、1973.3）  
『ユリイカ』パタイユ（青土社、1973.4）  
『ユリイカ』道化（青土社、1973.6）  
『ユリイカ』エリックサテイの奇妙な世界（青土社、1974.5）  
『ユリイカ』アントナン・アルトー演劇空間の現在（青土社、1974.8）  
『ユリイカ』アントナン・アルトーあるいは器官なき身体（青土社、1988.2）  
『ユリイカ』コクトー永遠の詩人—生誕百年（青土社、1989.9）  
『ユリイカ』荒木経惟（青土社、1996）  
『ユリイカ』ソクーロフ（青土社、1996.8）  
『ユリイカ』古書の博物誌（青土社、1997.6）  
『ユリイカ』フォークナー（青土社、1997.12）  
『ユリイカ』島尾敏雄（青土社、1998.8）  
『ユリイカ』60年代のゴダール（青土社、1998.10）  
『ユリイカ』ボルヘス（青土社、1999.9）  
『ユリイカ』ミステリ・ルネッサンス（青土社、1999.12）  
『ユリイカ』アイルランドの詩魂（青土社、2000.2）  
『ユリイカ』與謝野旭子（青土社、2000.8）  
『ユリイカ』ゴダールの世紀（青土社、2002.5）  
『ユリイカ』吉田喜重（青土社、2003.4）  
『詩と思想』（土曜美術社1988.10）  
『現代詩手帖』（思潮社、1965.6）  
『現代詩手帖』（思潮社、1967.4）  
『現代詩手帖』（思潮社、1969.4）  
『現代詩手帖』（思潮社、1969.10）  
『現代詩手帖』（思潮社、1974.9）  
『現代詩手帖』（思潮社、1975.10）  
『現代詩手帖』（思潮社、1975.12）  
『現代詩手帖』（思潮社、1976.9）  
『現代詩手帖』（思潮社、1982.10）  
『現代詩手帖』（思潮社、1983.2）



- 『現代詩手帖』(思潮社、1983.5)  
『現代詩手帖』(思潮社、1983.9)  
『海』(中央公論社、1972.3)  
『海』(中央公論社、1973.2)  
『海』(中央公論社、1973.8)  
『海』(中央公論社、1973.11)  
『海』(中央公論社、1975.3)  
『海』(中央公論社、1975.4)  
『海』(中央公論社、1975.5)  
『海』(中央公論社、1975.7)  
『海』(中央公論社、1975.8)  
『海』(中央公論社、1975.9)  
『海』(中央公論社、1975.11)  
『海』(中央公論社、1976.9)  
『海』(中央公論社、1977.6)  
『海』(中央公論社、1977.10)  
『海』(中央公論社、1981.3)  
『すばる』(集英社、1988.4)  
『すばる』(集英社、1996.1)  
『すばる』(集英社、1997.7)  
『すばる』(集英社、1998.11)  
『すばる』(集英社、1999.9)  
『すばる』(集英社、2002.9)  
『すばる』(集英社、2003.2)  
『すばる』(集英社、2003.6)  
『すばる』(集英社、2003.6)  
『すばる』(集英社、2004.9)  
『新潮』(新潮社、1988.9)  
『新潮』(新潮社、1998.7)  
『新潮』(新潮社、2001.10)  
『文学界』(文藝春秋、1984.11)  
『文学界』(文藝春秋、2001.2)  
『文学界』(文藝春秋、2008.1)

# A Study of Isochrony Theories in English

Masaki TSUDZUKI and Atsunori KAMIYA

## 要 旨

伝統的に英語は強勢が等時間隔に繰り返し生じる言語であると考えられてきた。この概念が音声学者の間で注目されるようになったのはPike (1945)とAbercrombie (1964)に拠るところが大きい。特にAbercrombie (1964: 217)が、等時性が生じる強勢間を「フット」(foot:脚)と名付けたことで、英語のリズム構造を理論的・体系的に説明することが容易になり、日本の英語音声教育においてもこの考えが浸透した。

このように英語の等時性はフット間に生じる現象として認識されてきたが、その一方で、近年のサウンドスペクトログラフなどの音響分析機器の飛躍的な進歩に伴って、言語直感に基づいた英語フットの等時性に疑問を投げかける実証的音声リズム研究が相次いで報告されてきた(Shen & Peterson, 1962; Bolinger, 1965; O'Connor, 1965; Lea, 1974; Nakatani, O'Connor & Aston, 1981)。生成面に焦点をあてた等時性理論が音響実験により否定されたことによって、多くの研究者が等時性は聴き手の知覚レベルに存在するものではないかと考えるようになった。実際、様々な知覚実験を通して、英語フットの等時性が妥当な現象であることが立証されてきた。これらを代表するような実験に拠ると、英語母語話者は実際の発話時間よりもフット間を等時間隔に知覚しているというのである(Lehiste, 1977; Donovan & Darwin 1979; Benguerel & D'Arcy, 1986)。

結局、Classe (1939)が述べたように、どの程度まで等時性を認めるか、さらにどの視点から等時性について論じるのかが重要なのであると筆者らは考える。

本研究では、これまで報告されてきた等時性もしくは強勢拍リズムに関する代表的な研究を検証しつつ、英語の等時性の妥当性について種々な角度から考察を試みる。

## 1. Introduction

All spoken languages are classified as either stress-timed languages or syllable-timed languages (Jones, 1918; Pike, 1945; Abercrombie, 1967, etc.). In stress-timed languages, the intervals between stresses theoretically have equal length regardless of the number of syllables within each foot, whereas in

syllable-timed languages, successive syllables are of equal duration regardless of the segmental makeup of the syllable (Abercrombie, 1964). English, Russian, and Arabic fall into the first category, and French, Spanish, Telugu, and Yoruba are examples of the second category (Dauer, 1983). A third category, known as “mora-timed” languages, exemplified by Japanese and Ancient Greek, has been proposed by many linguists (Han, 1962; Ladefoged, 2010). However, it has been pointed out that mora-timed languages are similar to syllable-timed languages; therefore, they can be subsumed into the class of syllable-timed languages (Kubozono & Honma, 2002).

In stress-timed languages, the intervals between stressed syllables have equal duration, and the duration of each syllable lengthens or compresses, according to the number of unstressed syllables within each foot (Teschner & Whitley, 2004). This means that the duration of each interval is almost the same, even though the numbers of syllables in each foot are different (Dauer, 1983). On the contrary, in syllable-timed languages, the temporal adjustment seen in stress-timed languages is not observed and each syllable is produced at an even interval of time. Therefore, the duration of each utterance is determined by the number of syllables within each utterance.

Up to the present time, two rhythmic classifications proposed by Pike (1945) and later elaborated by Abercrombie (1964) have been widely accepted among linguists (Bolinger, 1965; O’Connor, 1967; Halliday, 1970; Uldall, 1971; Corder, 1973; Catford, 1977; Major, 1981). Abercrombie (1964) introduced the concept of “foot” as an isochronous unit, specifying that each English foot consists of a stressed syllable followed optionally by weak syllables, up to but not including the next stressed syllable. Consecutive feet are of equal duration, regardless of the number of syllables in each foot. For example, the sentence “Walk down the path to the end of the canal.” is divided into feet as follows (Roach, 2009): |Walk |down the |path to the |end of the ca|nal.|

However, Abercrombie’s theory does not allow weak syllables to be included in a foot if they appear at the beginning of a sentence. For example, “The” in Example (1) below is considered to be an “anacrusis” (i.e., a redundant element) because it is not included in Abercrombie’s foot (Takebayashi, 1996).

#### Example (1)

The| boy be | longs to the |music | club.|  
       foot      foot      foot  foot

The most important point of Abercrombie’s theory is that feet are independent of syntax. Thus a foot boundary is allowed to occur within a word. For example, the word “belongs” in the above example can

be allocated to two separate feet.

Abercrombie's foot concept was inherited by Halliday (1970), who introduced the idea of "silent stress," which carries the stress before an anacrusis, producing a foot at the beginning of a sentence. Therefore, Halliday's theory regards the word "the" in Example (2) below as part of the first foot.

Example (2)

|\* The| boy be|longs to the |music |club.| (\* indicates a silent stress)  
foot foot foot foot foot

Although many other linguists have proposed theories of English rhythm (Gimson, 1985; O'Connor, 1967; Jassem, Hill & Witten, 1984, etc.), there is no definite consensus among them. However, Abercrombie's theory now receives widespread support. For example, Yamauchi (2000) compared three major theories developed by Abercrombie, O'Connor, and Bolinger. She divided several sentences into rhythm units according to the methods proposed by them. The measurement of the duration of each rhythm unit showed that Abercrombie's theory is most appropriate as an isochronous way of determining the rhythm unit of English. Moreover, many rhythm studies have been reported based on Abercrombie's theory, providing an impressive body of evidence in his favor (Cutler, 1980).

Abercrombie's theory has clearly attracted widespread support. Yet many linguists are skeptical about it because many studies have failed to show an isochronal tendency among English feet when inter-stress intervals were measured.

In this study, we will consider the validity of English isochrony by reviewing previous studies on English speech.

## 2. Isochrony in English

It has traditionally been claimed that English utterances have a regular timing of stressed syllables (Abercrombie, 1964). This isochronal phenomenon can easily be observed and many arguments have been made in its favor. For example, in idiomatic phrases such as "*tea* or *coffee*" or "*cup* and *saucer*," it is not common for the word order to be reversed like "*coffee* or *tea*" or "*saucer* and *cup*." This is because the former consists of repetitions of strong and weak syllables, unlike the latter. So the former is more appropriate for a stress-timed language. Similarly, lexical stresses on certain words and compounds tend to move so that there is more regularity between feet. Thus "*Japanese tea*" and "*Thirteen boys*" are heard

frequently instead of “*Japanese tea*” and “*Thirteen boys*.”

With the advance of technology in recent years, many linguists have used empirical methods to investigate the validity of isochrony from the viewpoint of production. The first technological experiment on isochrony was performed by Classe (1939), who measured inter-stress intervals (ISIs) using a kymograph (a scientific instrument which measures changes in sound pressure). Although Classe failed to show absolute isochrony either in production or perception, he did not dismiss the notion of isochrony, but regarded it as a tendency to speak in rhythmic units that are perceived as isochronous.

## 2. 2. Isochrony in Production

Although many studies of English rhythm have been reported, the concept of isochrony remains elusive. This is partly because of the wide range of methods used by researchers, which makes it difficult to compare the results.

We will now review several experiments which have claimed to show evidence against isochrony in English.

### (1) Shen & Peterson (1962)

In this experiment, subjects were asked to read written prose, and the intervals between succeeding primary stresses were measured by using a machine. There were three subjects, and each subject read a different prose. The intervals between the primary stresses ranged from 410 to 1820 ms for the first subject, from 380 to 2500 ms for the second subject, and from 550 to 3610 ms for the third subject. The intervals were too variable to support isochrony, even when the secondary stress was considered to carry the unit of rhythm. Thus, Shen & Peterson rejected the notion of isochrony in English.

### (2) Bolinger (1965)

Six subjects were asked to read two very long sentences. The intervals between the stresses were measured, which showed considerable variation among inter-stress intervals (ISIs). One fourth of the intervals (13 out of the 53 intervals) were particularly long in duration. They had approximately twice the length of the shortest interval. Bolinger suggested that syllable structures and semantic factors affected the length of the inter-stress intervals. Bolinger therefore also found the theory of isochrony untenable.

### (3) O'Connor (1965, 1968)

O'Connor (1965) investigated isochrony under regular conditions, recording by hand and making a click sound at each stress. The average of 15 inter-stress intervals was 518 ms. The difference between the longest and the shortest interval was 88 ms. In spite of these results which seem to support isochrony, strict isochrony was not observed. Moreover, O'Connor (1968) analyzed seven utterances, each consisting of

three monosyllabic feet. O'Connor changed the segmental length of the second foot from three segments to nine segments, while the length of the first foot and the third foot remained constant. The "compression effect," in which syllables in polysyllabic feet are squeezed together in order to maintain equal spacing of stresses, was not observed in his results. In fact, the duration of each foot increased almost linearly as the number of syllables in each foot increased. On these grounds, O'Connor expressed his doubts about the existence of isochrony in production.

**(4) Lea (1974)**

In this study, the inter-stress intervals (ISIs) of 31 sentences read by eight subjects were measured in order to test the isochronal hypothesis proposed by Pike (1945). Six out of the eight subjects were asked to read a script which was a mixture of various genres, while two other subjects read a monosyllabic script. The results were that the average ISIs increased in proportion to the number of intervening syllables. Therefore, he claimed that there was no support for the theory of isochrony.

**(5) Nakatani, L. H., O'Connor, K. D. & Aston, C. H. (1981)**

Nakatani et al. (1981) examined isochrony in American English speech by using two-word adjective-noun phrases which were each 3 to 5 syllables long. They tried to find evidence to support a more liberal interpretation of isochrony in English. However, they failed to show the tendency for metrical feet to compress in duration. In fact, foot duration increased almost linearly with foot size, contrary to the hypothesis that the relationship between foot size and foot duration should be inversely proportional. This result led Nakatani et al. (1981) to reject the theory of isochrony in American English speech.

**(6) Roach (1982)**

Syllable durations of three stress-timed languages were compared with those of three syllable-timed languages, and it turned out that the standard deviations of the syllable durations for both types of languages did not differ significantly. Moreover, Roach (1982) compared the standard deviations of inter-stress intervals (ISIs) among the same six languages and found, contrary to his predictions, that the deviations from isochrony were greater in English than in any of the other five languages. On the basis of these results, he dismissed the concept of isochrony in English.

**(7) Dauer (1983)**

To investigate isochrony of different languages, Dauer (1983) compared five languages which include stress-timed languages and syllable-timed languages: English, Thai, Spanish, Italian, and Modern Greek. For each language, informants were asked to read a passage from a novel or play. The results did not support the general claim. Inter-stress intervals were no more constant in English than they were in any other language. Furthermore, she claimed that all of these languages are more or less stress-based and

the degree of how much they are stress-based is decided by how much each language depends on stresses. According to the linear graph provided by Dauer (1983), English is the most stress-based language, in which stress plays an important role, while in Japanese, stress is the least important among these six languages. Therefore, her graph indicates that the world's languages can not be classified based on a rhythmic dichotomy.

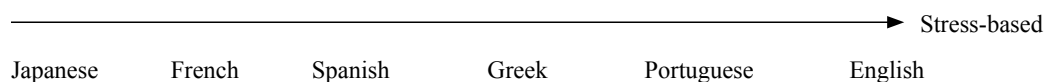


Figure 1: Stress-based languages (Dauer, 1983: 60)

### 2. 3. Isochrony in Perception

The negative results depending on ISIs (inter-stress intervals) mentioned above led some researchers to suspect that isochrony, rather than being a feature of production, is actually a characteristic of perception (Lehiste, 1977; Donovan & Darwin 1979; Benguerel & D'Arcy, 1986). Among the skeptics, Lehiste (1977) is presumably the most influential. She ran a perceptual experiment to find the noticeable differences in duration. In her experiment, four-foot sentences were chosen and the length of each foot was manipulated. The length of one of the four feet was either decreased or increased by only 10 ms. Thirty listeners were asked to judge which intervals were the longest and the shortest. She discussed the results as follows:

“I reasoned that if listeners cannot identify the actual longest or shortest measures in spoken English sentences, the measures must seem to them to have equal duration. If you cannot tell them apart, they must be alike. Isochrony would then be a perceptual phenomenon.”

(Lehiste, 1977: 256)

Furthermore, she added that:

“The results showed that to get significant agreement among listeners that a given interval was “longest,” an increment was needed that ranged from 30 to more than 100 ms. Differences smaller than 30 ms were never reliably identified. The decrement needed for significant ‘shortest’ judgments ranged also from 30 to 100 ms.”

(Lehiste, 1977: 257)

These statements mean that listeners heard the utterances as more isochronous than they really were. Also, they suggest that the threshold of human perception lies at about 100 ms and thus ISIs below 100 ms are not distinguishable.

Although her findings were from the viewpoint of perception, they persuaded us to further investigate the isochronal tendency in production. Cutler (1980) indicated this point as follows:

“The perceptual reality of isochrony naturally leads one to suspect that there is indeed an underlying regular rhythm in production, and that it is this underlying rhythm which the listener picks up in spite of the multiple perturbations resulting from segmental variations which obscure it in the acoustic signal.”

(Cutler, 1980: 183)

### 3. Discussion

Although a strict interpretation of isochrony has been rejected through numerous production experiments, many linguists still support the notion of isochrony in English. The isochrony debate is centered around defining the maximum acceptable differences between the durations of feet which are regarded as being isochronal (Yamauchi, 2000).

Based on Lehiste (1977), we propose that 100 ms is the perceptual threshold between isochronal feet, and that differences under 100 ms can be ignored. If that is the case, then the result of O’Connor (1965), for example, would be in favor of isochrony because the difference between the longest and the shortest interval in his experiment was 88 ms, which is below this perceptual threshold.

The number of intervening syllables is another factor which needs to be taken into account. According to Halliday (1985), a two syllable foot is about one fifth as long as a one syllable foot and the relative duration of a foot containing one to four syllables is as follow:

The number of syllables in the foot:	1	2	3	4
The relative duration of the foot:	1	1.2	1.4	1.6

(Halliday, 1985: 272)

A tendency towards isochrony exists because syllables in polysyllabic feet are squeezed together in order to maintain equal spacing of stresses, which is called the “compression effect.” Yet it turns out that



feet are empirically longer when they contain more syllables. We can thus treat these data as evidence for rejecting a strict interpretation of isochrony in English.

Cross-linguistic research is helpful when evaluating the validity of this argument. For example, in a cross-linguistic study in which English (a stress-timed language) and French (a syllable-timed language) were compared, Grosjean & Deschamps (1975) showed that the pause time ratio in each of the two languages is almost identical, but this equal pause time is organized differently in the two languages: in English, many short pauses tend to appear irregularly, whereas in French, pauses are fewer but longer, and in definite positions. This difference between the two languages is reasonable from a phonological point of view because English speakers tend to use pauses as parts of feet to regulate stress-timed rhythm, but French speakers use pauses to avoid disturbing syllable-time rhythm.

#### 4. Conclusion

In English, there is a well-established theory that stressed syllables tend to occur at regular time intervals. This tendency, which is called “isochrony,” has been a great concern among linguists. However, technological progress in recent years has given scholars many modern tools to measure the intervals between successive stressed syllables. As seen in the previous chapter, the results often show considerable variation among the duration of feet, leading many linguists to reject the validity of isochrony in English. Nevertheless, there remain several reasons to suggest that it is unwise to completely reject the notion of isochrony in English feet. Isochrony in English is not only the object of acoustic study, but has also been investigated from phonological, syntactic, and perceptual points of view, and in fact, many studies in these fields have supported the notion of isochrony in English.

#### References

- Abercrombie, D. (1964). Syllable quantity and enclitics in English. In Abercrombie, D., Fry, D. B., MacCarthy, P. A. D., Scott, N. C. & Trim, J. L. M. (eds.), *In Honour of Daniel Jones: Papers Contributed on the Occasion of His Eightieth Birthday 12 September 1961*, (pp. 216–222) London: Longman.
- \_\_\_\_\_ (1965). *Studies in Phonetics and Linguistics*. London: Oxford Univ. Press.
- \_\_\_\_\_ (1967). *Elements of General Phonetics*. Edinburgh: Edinburgh Univ. Press.
- Benguerel, A. & D’Arcy, J. (1986). Time-warping and the perception of rhythm in speech. *Journal of Phonetics*, 14, 231–246.
- Bolinger, D. L. (1951). Intonation: Levels vs. configurations. *Word* 7, 199–210. Reprinted in Abe, I. & Kanekiyo, T. (eds.), *Forms of English: Accent, Morpheme, Order*. Tokyo: Hakuousha.

- \_\_\_\_\_ (1965). Pitch accent and sentence rhythm. In Abe, I. & Kanekiyo, T. (eds.), *Forms of English: Accent, Morpheme, Order*. Tokyo: Hakuousha.
- Catford, J.C. (1977). *Fundamental Problems in Phonetics*. Edinburgh: Edinburgh Univ. Press.
- Classe, A. (1939). *The Rhythm of English Prose*. Oxford: Basil Blackwell.
- Corder, S. P. (1973). *Introducing Applied Linguistics*. Harmondsworth, Middlesex: Penguin.
- Cutler, A. (1980). Syllable omission errors and isochrony. In Dochert, H. W. & Raupach, M. (eds.), *Temporal Variables in Speech*, The Hague: Mouton, 183–190.
- Dauer, R. M. (1983). Stress-timing and syllable-timing Reanalyzed. *Journal of Phonetics*, 11, 51–62.
- Donovan, A. & Darwin, C. J. (1979). The perceived rhythm of speech. *Proceedings of the Ninth International Congress of Phonetic Sciences*, 2, 268–274. Copenhagen: Institute of Phonetics.
- Gimson, A. C. (1985). *An Introduction to the Pronunciation of English*, 3<sup>rd</sup> ed. London: Edward Arnold.
- Grosjean, F. & Deschamps, A. (1975). Analyse contrastive des variables temporelles de l'anglais et du français. *Phonetica*, 31, 144–184.
- Halliday, M. A. K. (1967). *Intonation and grammar in British English*. The Hague: Mouton.
- \_\_\_\_\_ (1970). *A Course in Spoken English*. London: Oxford Univ. Press.
- \_\_\_\_\_ (1985). *An Introduction to Functional Grammar*. London: Edward Arnold.
- Han, M. S. (1962). The feature of duration in Japanese. *The Study of Sounds*, 10, 65–80.
- Jassem, W., Hill, D. R. & Witten, I. H. (1984) Isochrony in English speech: Its statistical validity and linguistic relevance. In D. Gibbon and H. Richter (eds.), *Intonation, Accent and Rhythm: Studies in Discourse Phonology*, Berlin: Mouton de Gruyter.
- Jones, D. (1918). *An Outline of English Phonetics*. Cambridge: W Heffers & Sons.
- Kubozono, H. & Honma, T. (2002). *Onsetsu to Mora* [Syllables and Moras]. Tokyo: Kenkyusya.
- Ladefoged, P. N. & Johnson, K. (2010). *A Course in Phonetics*, 6<sup>th</sup> ed. Boston: Heinle.
- \_\_\_\_\_ (1996). *Elements of Acoustic Phonetics*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lea, W. A. (1974). Prosodic aids to speech recognition: A general strategy for prosodically-guided speech understanding. *Univac Report No. PX10791*. St. Paul, Minn.: Sperry Univac, DSD.
- Lehiste, I. (1970). *Suprasegmentals*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
- \_\_\_\_\_ (1977). Isochrony reconsidered. *Journal of Phonetics*, 5, 253–263.
- Major, R. C. (1981). Stress-timing in Brazilian Portuguese. *Journal of Phonetics*, 9, 343–351.
- Nakatani, L. H., O'Connor, K. D. & Aston, C. H. (1981). Prosodic aspects of American English speech rhythm. *Phonetica*, 38, 84–106.
- O'Connor, J. D. (1965). The perception of time intervals. *Progress Report*, 2, Phonetics Laboratory, University College, London, 11–15.
- \_\_\_\_\_ (1967). *Better English Pronunciation*. Cambridge: Cambridge University Press.
- \_\_\_\_\_ (1968). The duration of the foot in relation to the number of component sound-segments. *Progress Report*, Phonetics Laboratory, University College, London, 1–6.
- Pike, K. L. (1945). *The intonation of American English*. Ann Arbor, Mich.: Univ. of Michigan Pr.
- Roach, P. J. (1982). On the distinction between “stress-timed” and “syllable-timed” languages. In Crystal, D. (ed.), *Linguistic Controversies: essays in linguistic theory and practice in honour of F. R. Palmer*, London: Edward Arnold.

- \_\_\_\_\_ (2009). *English Phonetics and Phonology: A Practical Course*, 4<sup>th</sup> ed. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Shen, Y. & Peterson, G. G. (1962). Isochronism in English. *Studies in Linguistics, Occasional papers*, 9, 1–36. Dept. of Anthropology and Linguistics, Univ. of Buffalo., Buffalo, NY.
- Takebayashi, S. (1996). *Eigo Onseigaku* [English Phonetics]. Tokyo: Kenkyusha.
- Teschner, R. V. & Whitley, M. S. (2004). *Pronouncing English: A Stress-Based Approach with CD-ROM*. Washington, D. C.: Georgetown Univ. Press.
- Uldall, E. T. (1971). Isochronous Stresses in R.P. *Hammerich-Jakobson-Zwirner*, 205–210.
- Yamauchi, H. (2000). An acoustic study of English rhythm: Degrees of isochrony. *English Phonetics*, 3, 207–225.

# Palatalness and Palatalization of Sounds for Speech Therapists (Part 1)

Masaki TSUDZUKI

## Contents

1. Introduction
2. Double articulation or Coarticulation
3. Articulatory palatalic mechanism
  - 3.1. Palatalness
  - 3.2. Palatalization
4. Acoustic Observation
  - 4.1. Acoustical Achievements
  - 4.2. Sound Spectrographic Data
    - 4.2.1. *Visible Speech*
    - 4.2.2. Formants of the vowels
    - 4.2.3. Sound spectrographic data of approximant [ j ]
  - 4.3. Traditional palatograph
    - 4.3.1. Powder *wipe-off* type
    - 4.3.2. Tongue-palate contacted mechanism
  - 4.4. Electro-palatograph
    - 4.4.1. Three versions of electro-palatograph
    - 4.4.2. Purpose of the electro-palatograph
    - 4.4.3. Electro-palatographic data by phoneticians
  - 4.5. Rion's electro-palatograph
    - 4.5.1. Methodology of using electro-palatograph
    - 4.5.2. Artificial palate
    - 4.5.3. Mechanism and usefulness
    - 4.5.4. Drawback
    - 4.5.5. Tsudzuki's electro-palatographic system
5. Japanese alveolar nasal with palatalness
  - 5.1. Five variants of nasals
  - 5.2. Electro-palatographic observation of *ni* [ ni ]
  - 5.3. Electro-palatographic observation

5.3.1. [ n ] in *ana* [ ana ] (with no palatalness)

5.3.2. [ n ] in *ini* [ ini ] (with palatalness)

5.3.3. [ ɲ ] in *nyu* [ ɲju ] (with palatalness)

Conclusion

Acknowledgements

References

Keywords: *hard palate, coarticulation, secondary articulation, electro-palatograph, complete palatalization*

## 1. Introduction

Regarding the principles of phonetic study, speech sounds are clarified on the basis of two bodies of evidence: perception evidence and physical evidence. Perception evidence derives from both the auditory impression and the articulatory sensation; physical evidence is gathered from both acoustic analysis and palatographic analyses.

That is, phonetic study should be based on the following approaches:

(1) Perception evidence:

(a) auditory impression

e.g. clear l [ l ] or dark l [ ɫ ]

(b) articulatory position

e.g. advanced [ k̟ ] or retracted [ k̠ ]

(2) Physical evidence:

(a) Acoustic Analysis (using the voice)

Sound-spectrographic Analysis

Visi-Pitch Analysis

Flow-Nasalitygraphic Analysis

(b) Palatographic Analysis (using articulators)

Traditional Palatography

Electro-palatographic Analysis

This article is mainly concerned with palatalness and palatalization. The focus first will be on making clear distinction between double articulation and coarticulation. Secondly, palatalness will be described. Thirdly, the mechanism of palatalization which is one of main members of secondary articulation will be explained. Fourthly, acoustic data will be shown to highlight the movements of the front of the tongue towards the hard plate and also partial or complete contact of two articulators using electro-palatograph.

IPA (The International Phonetic Alphabet) nominates seven phonetic symbols to denote palatals: such as voiced or voiceless palatal plosives [ c ], [ ʝ ]; palatal nasal [ ɲ ]; voiced or voiceless palatal fricatives [ ç ], [ ʝ ]; palatal approximant [ j ] and voiced palatal lateral approximant [ ʎ ]. Many languages have consonants which are the same or similar either to these palatals of IPA or their variants. Some of them are involved in Japanese, such as; [ ɲ ], [ ç ] and [ ʎ ]. It is interesting to observe the articulatory mechanisms of these palatal sounds by highlighting with electro-palatographic data. The data are treated graphically considering the way of how data are visualized.

## 2. Double articulation or Coarticulation

Phoneticians have already explained *double articulation* and *coarticulation* fully which our languages have in their sound systems, so I need only briefly review these articulations in this section.

In Double articulation, two articulators of equal stricture are produced simultaneously at different places of articulation.

Coarticulation is the process by which the sequence of sounds is influenced by adjacent sounds or fused together into another single sound. In coarticulation, two articulations of different stricture are produced simultaneously at different places of articulation. The closest stricture of the two indicates the primary articulation while the more open indicates the secondary articulation. There are four main kinds of secondary articulations, such as labialization, pharyngealization, velarization and palatalization.

Coarticulation involves the two main factors; one is primary (dominant) articulation and the other is secondary (subsidiary) articulation. Secondary articulation occurs by producing the lesser degree of features accompanied with the primary articulation during articulatory movements.

W. J. Hardcastle, J. Laver, and F. E. Gibbon (324: 2010) explain the reason why coarticulation occurs as:

The function of coarticulation is to smooth out the differences between adjacent sounds; coarticulatory modifications accommodated the segments so that the transition between them are minimized.

There are two types of coarticulation. The one is anticipatory coarticulation and the other is regressive coarticulation.

Anticipatory coarticulation can be heard when a sound is influenced regressively anticipating the following sound's features with coarticulatory influence. The position or manner of articulations is altered

to a similar position or manner more like that of a following sound. In regressive coarticulation, the mechanism of the articulations is the opposite.

### 3. Articulatory palatalic mechanism

#### 3.1. Palatalness

Palatal is a sound which is produced by touching or nearly touching between the front upper surface of the tongue and the hard palate. When a speech sound is pronounced by two articulators (the front of the tongue against the hard palate) in this way, we can call it as a consonant featuring *palatalness*.

*Palatalness* differs from *palatality* in the sense of definition by R. L. Trask. *Palatalness* is a typical articulatory feature which palatal has during production by touching or narrowing between the front of the tongue and the hard palate. According to R. L. Trask (254: 1996), *palatality* is described as follows:

A label commonly applied to the phonological prime { i } or I in various privative theories of phonology, especially Dependency Phonology.

Palatalness may occur, for example, in *ra*-series in a table of the Japanese syllabary, such as *rya* [ʎja], *ryo* [ʎjo] and *ryu* [ʎju] at the syllable initial, intervocalic and interconsonant positions. These [ʎ] are laterals with palatalness which can be transcribed as *rya* [ʎ<sup>j</sup>a], *ryo* [ʎ<sup>j</sup>o] and *ryu* [ʎ<sup>j</sup>u]. Also in the *na*-series at the syllable initial and intervocalic and interconsonant positions; *nya* [ɲja], *nyo* [ɲjo], *nju* [ɲju]. Words such as *kya* [kja], *sha* [ʃja], *cha* [tʃja], *mya* [mja] also have palatalness.

#### 3.2. Palatalization

Palatalization is symbolized by [ <sup>j</sup> ]. (small <sup>j</sup> at the upper right-hand corner of the phonetic symbol as [ n<sup>j</sup> ])

R. L. Trask (254: 1996) gives an account of *palatalization* as follows:

The phenomenon in which a segment whose primary articulation is at some other location is articulated with a secondary articulation involving the raising of the front of the tongue towards the palate or (with back consonants) the moving of the constriction forward towards the palate.

Palatalization occurs by full or partial contact between the front of the tongue and the hard. In palatalization, the front of tongue has a wide approximation to hard palate ([ i ]-like or [ j ] position).

## 4. Acoustic Observation

### 4.1. Acoustical Achievements

In the late of the twentieth century, acoustical achievements have become the focus of phonetic studies. Acoustic phonetics has shown remarkable progress and has played an important role in analyzing perception and articulation of speech sounds. Acoustic phonetics clarifies the physical properties and features of speech sounds using an electric apparatus which are specially designed for phonetic investigation.

Phoneticians have contributed the progress and development of phonetic studies showing outstanding physical evidences. They have thrown new light on the issues of auditory and articulatory mechanism of the speech sounds using experimental apparatuses, such as sound spectrograph, electro-palatograph and flow-nazalitygraph, so on.

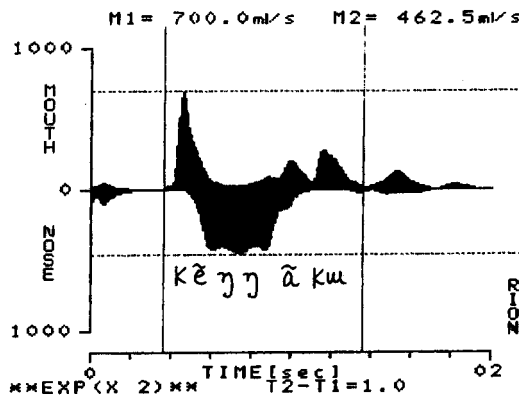


Fig. 1 Flow-nazalitygraphic Data: [ kẽηηãku ] (nasalization by M. Tsudzuki)

## 4.2. Sound Spectrographic Data

### 4.2.1. Visible Speech

Phoneticians have offered reliable evidences through experimental methods in the fields of acoustic phonetics and speech perception. The sound spectrograph has been used for the past half century in speech research. The sound spectrograph, which was invented by R. K. Potter, G. A. Kopp and H. C. Green of Bell Telephone Laboratories (BTL), USA in the 1940's, has been one of the most useful and reliable devices for the study of speech sounds. It was originally intended as a visible speech aid for the hearing disabled people in speech disorders.



The sound spectrogram represented in *Visible Speech* by BTL was one of the most useful apparatuses used in a medical study as well as theoretical phonetics. It has enabled researchers to ascertain the physical characteristics of sounds and the physiological status of the speech organs by graphically representing sound frequencies. After their studies, numerous attempts have been made by phoneticians and linguists to demonstrate the formant features or patterns of vowels by sound spectrograph. This point deserves explicit emphasis.

#### 4.2.2. Formants of the vowels

The original sound spectrograph was an analogue instrument based upon a variable frequency band pass filter and a display device that burned an image known as a spectrogram into a sheet of electro-carbon paper. Nowadays we can stably use the digital spectrogram obtained by a soft ware of the computer.

It is well known that the spectrograms which are produced by the sound spectrograph provide three visual evidences in which three important factors are illuminated; formant frequency vertically, time horizontally and intensity by the relative blackness or light and shade. Formants of the vowels representing on the sound spectrogram show the characteristic overtones of the sound in the production. The quality and attributes of a vowel are determined by the frequencies of the formants.

The formants of the vowel sounds represented on the sound spectrogram show the characteristic overtones of their actual sounds in production. The quality and attributes of a vowel are determined by the specific frequencies of their formants. Peter Ladefoged (1975) developed a formant chart which has been commonly used by phoneticians and linguists to analyze vowel qualities and compare the relationship between vowels as measured on a sound spectrogram. Ladefoged plots the frequency of the first formant on the ordinate (the vertical axis) and the difference between the frequencies of the first and the second formants on the abscissa (the horizontal axis). Ladefoged says (187: 1975) that the frequency of the first formant certainly shows the relative vowel height quite accurately. He further states that the distance between the first and the second formants reflects the degree of backness quite well, but that there may be confusion due to variations in the degree of lip rounding.

#### 4.2.3. Sound spectrographic data of approximant [ j ]

It is easily understood that coarticulation effects effectively modifies the point of constriction of approximant [ j ] in connected speech. However, in respect to sound spectrographic data of the sound sequences (consonants + [ j ] + vowels), as far as the writer concerns, there are not enough examples and explanations. For example, W. J. Hardacastle, J. Laver, and F. E. Gibbon (100: 2010) say that [ j ] like [ i ]

has a low F1 and a high F2. Shigeru Takebayashi (77–78: 1996) highlights Japanese and English words including [j] by demonstrating sound spectrographic data.

The following are data using the writer’s pronunciation. Phonetic transcriptions, such as [ʌj], [ɲj], [kj], [çj], [tʃj] and [mj] may be substituted tentatively by other phonetic symbols, such as [ʌʲ], [ɲʲ], [kʲ], [çʲ], [tʃʲ] and [mʲ]. Some of the commonest Japanese words containing these are: *kyoryoku*, *nyugaku*, *shuryo*, *Kyushu*, etc.

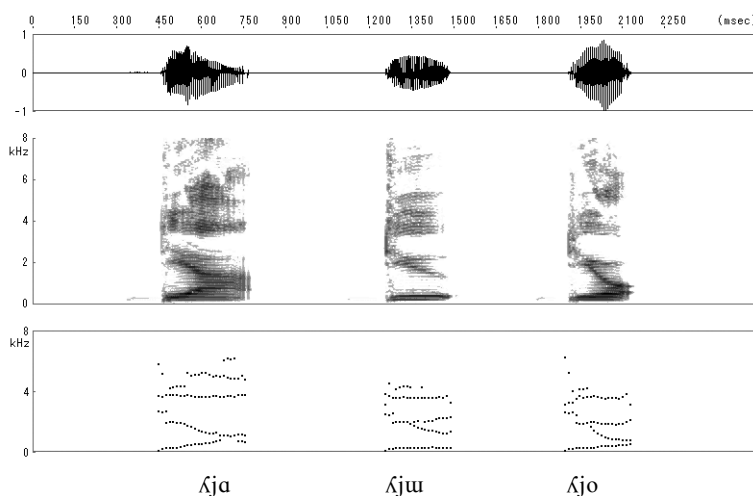


Fig. 2

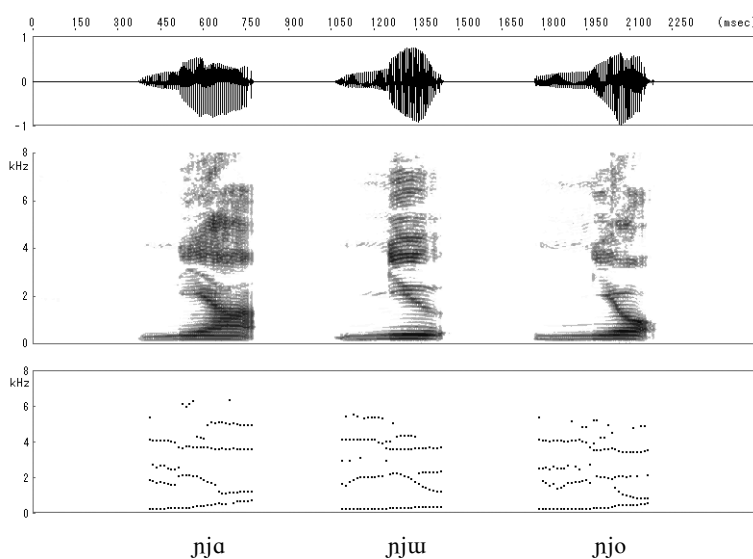


Fig. 3

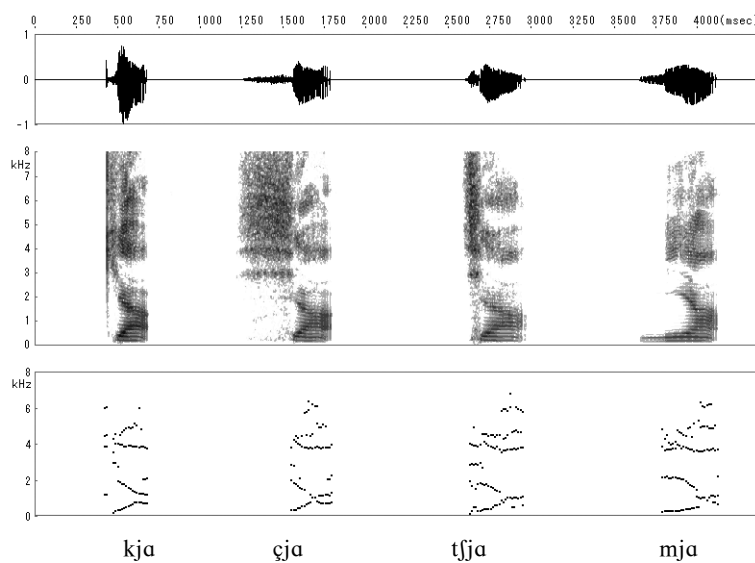


Fig. 4

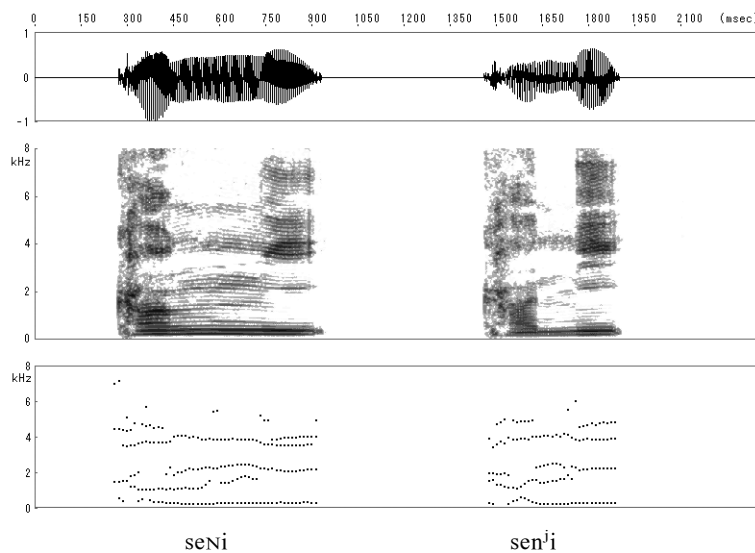


Fig. 5

(Figures No. 2, No. 3, No. 4 and No. 5 are pronounced by M. Tsudzuki)

### 4.3. Traditional palatograph

#### 4.3.1. Powder *wipe-off* type

Palatograph had been a standard technique in studying tongue-palate contacts during speech

articulation. In a classical palatograph, the subject's palate is painted with some powdery material. The *wipe-off* of the powder on the palate, corresponding to areas of contact by the tongue, is observed after a given articulatory gesture. The palatogram thus obtained, however, gives rather static information about the total area where the tongue contact took place at least once throughout the time course of the gesture.

Before the electro-palatograph was invented, a traditional palatograph were reported to show various phonetic analyses by D. Jones (1964) and A. C. Gimson & A. Cruttenden (1994). Those artificial palatographs show articulatory tongue positions of *alveolar*, *post-alveolar* and *palatal consonants*.

The traditional palatograph can show the point of articulation upon the artificial palate which has been placed upon the inside of the upper jaw. Historically, the palatogram was first experimented by Oakley Coles in 1871. After that D. Jones's palatogram is useful and helpful for practical purposes; however, we can only see this tongue-palate action represented statically rather than in its real, kinetic state.

D. Jones (§.656, Figs. 77, 78: 172: 1978) shows two palatograms, one is the *advanced* [ŋ] in the English sequence [-iŋ] and the other is the French [ɲ] in the sequence [aɲ].

R. L. Trask (255: 1996) describes a palatography as follows:

A technique for determining which areas of the roof of the mouth are touched by the tongue during an articulation. Either the roof of the mouth is coated with a coloured material, or a false palate similarly coated is inserted into the mouth; after the articulation of interest is performed, the mouth or false palate is examined to see where the coating has been removed.

According to the account of *linguagram* by R. L. Trask (208: 1996), it is described as:

A photograph of the tongue showing which parts of it have been coloured by contact with the colouring matter applied to the roof of the mouth during a traditional kind of palatography.

#### **4.3.2. Tongue-palate contacted mechanism**

We can see the static contact areas or palatalization made by speech organs or articulators in the mouth using the traditional palatograph. The articulatory contact conditions between upper lip and lower lip, or upper teeth and lower lip, movement of the uvular, velarization, so on, cannot be observed.

### **4.4. Electro-palatograph**

#### **4.4.1. Three versions of electro-palatograph**

Fiona Gibbon and Katerina Nicolaidis (229–230: 1999) make an account that there are three commercially available versions of EPG in current use as briefly cited here: A British system developed

at the University of Reading (the latest version being the Reading EPG3 system; a Japanese system manufactured by the Rion Corporation (the Rion DP01), and an American Palatometer marketed by Kay Electric corporation. And F. Gibbon and K. Nicolaidis describe as follows: All three systems share some general features, but differ in details such as the construction of the palates, number and configuration of electrodes and hardware/software specifications.

#### **4.4.2. Purpose of the electro-palatograph**

The first purpose of the electro-palatograph is to visually observe the articulation in functional tests for patients suffering from articulation disorders caused by hearing disabilities, cerebral palsy or structural disorders of the hard palate. Secondly, such data is also applied to phonetic research. The electro-palatograph is useful and helpful not only for the patient with speech disorders but also for the person who wants to learn the correct pronunciation of his or her mother tongue or a foreign language.

Electro-palatograph or dynamic palatograph as it is sometimes called, has been used efficiently for analyzing statistic or kinetic tongue palate contacts with the hard palate during sound production.

In respect to the definition of the continuous palatography, R. L. Trask (91: 1996) makes an accurate account as:

A variety of palatography involving a false palate with electrodes implanted, allowing palatal contact to be recorded continuously over time during a series of articulations.

Trask (129: 1996) also mentions on electro-palatography as:

a version of palatography using a false palate implanted with electrodes, so that contact between the tongue and the roof of the mouth may be continuously recorded and displayed. The instrument is an electro-palatograph; the output is an electro-palatogram.

#### **4.4.3. Electro-palatographic data by phoneticians**

It is believed that the analysis or signification by the use of the electro-palatographic data presented by professors, Hyun Bok Lee and Hiroyuki Umeda have given impetus to further study in this hitherto unexplored field of Comparative-Acoustic Phonetics.

One well known investigation by electro-palatograph was done by Lee, H. B. (1-47: 1980) in which he studied Korean consonants such as plosive, affricate, lateral and nasal. Retroflexion and palatalization in Korean sounds were reported in his paper. His was the first article published in Korea in which electro-palatographic data was featured. In that paper he showed nearly 90 intricate palatograms and clarified the

actual realization of those consonants.

Gimson's works, *An Introduction to the Pronunciation of English*, was first published 1962 and was revised by Alan Cruttenden as *Gimson's Pronunciation of English*, 1994. In the present version, palatograms newly appear. In *Foreword to the Fifth Edition* (1994) of the new version, A. Cruttenden writes that the palatogram are offered by Martin Barry.

#### **4.5. Rion's electro-palatograph**

##### **4.5.1. Methodology of using electro-palatograph**

In order to examine the kinetic or dynamic conditions of the tongue-palate contacts, an electro-palatograph has been devised by Rion Co. The electro-palatograph was originally devised for observing kinetic conditions of tongue-palate contact by Rion Co. in the late 1960's. It represents the quick-moving conditions of tongue-palate contact on the horseshoe palatogram. The electro-palatograph invented by Rion Co. is not only an intricate piece of machinery but also a delicate mechanism.

Experiments have been carried out by using speech materials of the author. The period of experimentation using sound spectrograph and electro-palatograph was from 8th January, 2001 to 18th September, 2003.

The phonetic symbols used throughout this thesis are those of the I.P.A. (2002); *The Principles of the International Phonetic Association*, University College, London.

##### **4.5.2. Artificial palate**

In order to get a well fitted electro-palatograph for the subject, as the first stage, the researcher's own electro-palatograph has to be made of his or her dental impression. So it is necessary to have a plaster cast of the teeth (teeth impression) made at a dental office in advance. As the second stage, the sixty three metallic electrodes are implanted in a thin artificial palate which was made to fit the hard palate of the subject. Each electrode is 1 mm in diameter and is attached to a fine insulated wire. The wires are gathered and inserted into a vinyl tube which leads out from the mouth to the computer.

##### **4.5.3. Mechanism and usefulness**

We can observe the tongue-palate contact (touching area) or movements of the tongue (kinetic condition) against the hard palate by the sixty three electric signals on the real-time monitor screen or slow-motion picture. Each electro-palatogram is shown in the horse's hoof-shaped frame.

In the horse's hoof-shaped frame of the electro-palatogram, lingual contacts are represented by [ + ]

and non-contacts by [ · ]. Each representation of the electric signal ([ + ] or [ · ]) on the screen is arranged in the position corresponding to each of the electrodes implanted on the electro-palatograph. The data can be automatically stored on a floppy disk for repeated display. The Rion's electro-palatograph can produce sixty horse's hoof-shaped frames per second of the electro-palatogram.

#### 4.5.4. Drawback

The electro-palatograph invented by the Rion has sixty three metallic electrodes implanted into the thin artificial palate made to fit the hard palate of the subject. Electric signals displayed on the real time computer screen make it possible for researchers to observe not only tongue-palate static contacts but also kinetic tongue movements. However, through phonetic laboratory works, the writer understands the mechanical limitations which electro-palatograph has and agrees the following account by W. J. Hardacastle, J. Lver, and F. E. Gibbon (30: 2010):

The drawback of EPG is that data are collected only when the tongue touches the palate. Thus information is lost when the jaw lowers the tongue away from the domain of the palate, as occurs during mid and low vowels. However, during continuous speech the tongue is in fairly continuous contact with the palate at one location or another. EPG thus contributes greatly to the study of speech, especially the study of lingual consonants, constriction shapes and sizes, increasing its value in studies of language and disorders.

#### 4.5.5. Tsudzuki's electro-palatographic system

The writer established his methodology of analysing Rion's EPG (DP-20). At each frame of the electro-palatogram, 63 points which can represent either contacted or non-contacted electrodes are numbered by the writer as follows:

First Outer Circle, Left: 13LA, 11LA, 9LA, 8LA, 6LA, 4LA, 3LA, 2LA.

Second Outer Circle, Left: 13LB, 11LB, 9LB, 8LB, 6LB, 5LB, 4LB.

Third Outer Circle, Left: 13LC, 11LC, 9LC, 8LC, 7LC, 6LC.

Second Inner Circle, Left: 13LD, 11LD, 9LD, 8LD.

First Inner Circle, Left: 14LE, 12LE, 10LE.

Central or Middle Line: 1M, 4M, 6M, 7M, 9M, 11M, 13M.

First Inner Circle, Right: 14RE, 12RE, 10RE.

Second Inner Circle, Right: 13RD, 11RD, 9RD, 8RD.

Third Outer Circle, Right: 13RC, 11RC, 9RC, 8RC, 7RC, 6RC.

Second Outer Circle, Right: 13RB, 11RB, 9RB, 8RB, 6RB, 5RB, 4RB.

First Outer circle, Right: 13RA, 11RA, 9RA, 8RA, 6RA, 4RA, 3RA, 2RA.

The writer's numbering system of the electrodes on the palatogram and the correspondence of electrodes to the upper articulatory locations were shown in his previous papers (2002, 2003 and 2005).

## **5. Japanese alveolar nasal with palatalness**

### **5.1. Five variants of nasals**

Japanese obviously contains five variants of nasal, such as, [ m ], [ n ], [ ɲ ], [ ŋ ], and [ Ń ] which are mainly conditioned by the following sounds or sound circumstances. A retroflex nasal [ ɳ ] is not included among them. In producing the uvular nasal, the out-going air current can be allowed to escape through the nose as well as through the mouth by lowering the uvula. The Japanese uvular nasal tends to be a velar nasal in the syllable-final position because of the reduction of articulatory energy.

In respect to alveolar nasal, it is assumed by articulatory observation that the point of articulation of the [ n ] is influenced to a certain degree by the adjacent vowel quality. And this point will be argued by showing using electro-palatograms. Incidentally, [ Ń ] also occurs in the Inuit language (O'Connor: 1982).

### **5.2. Electro-palatographic observation of *ni* [ ni ]**

An alveolar nasal has been experimented by the electro-palatograph. To summarize, in the case of [ n ] in [ ni ], the blade, front and sides of the tongue make wide contact with the palate. The [ n ] in [ ni ] has great palatalness and can be transcribed as [ n<sup>j</sup> ]. The maximum tongue-palate contact in [ ni ] has 61 contacted electrodes or 96.825 % of the total. Complete closure continues for a succession of 16 frames with the duration of 0.250 seconds. The average number of contacted electrodes of the three stages; at the first, the maximum and final complete closure (Fig. 6), is 52 or 82.539 % of the total. Palatalness occurs greatly in [ n<sup>j</sup> ].



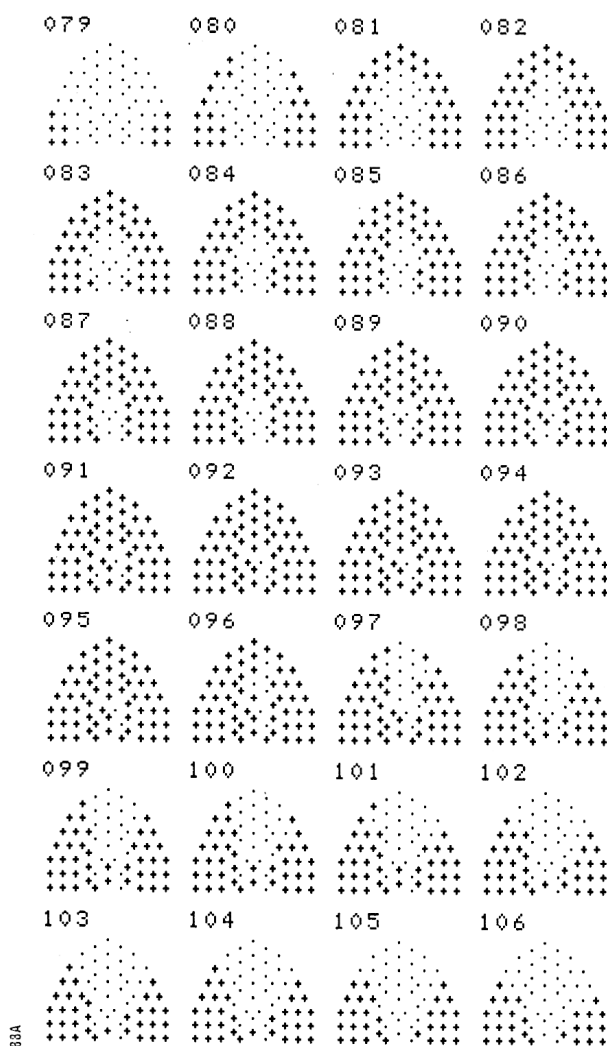


Fig. 6 Complete tongue-palate closure of [ n<sup>j</sup> ] ([ ni ] with great palatalness, M. Tsudzuki)

### 5.3. Electro-palatographic observation

#### 5.3.1. [ n ] in *ana* [ ana ] (with no palatalness)

At the first stage of production, the tip and sides of the tongue make a fine or narrow contact with the palate. Tongue-palate contact occurs completely at the first outer circle and partially at the second outer circle. Complete closure begins at frame No. 092 which has 26 contacted electrodes or 41.269% of the total: 13LA, 11LA, 9LA, 8LA, 6LA, 4LA, 3LA, 2LA, 1M, 13RA, 11RA, 9RA, 8RA, 6RA, 4RA,

3RA, 2RA, 13LB, 11LB, 4M, 13RB, 11RB, 8RB, 6RB, 5RB, 4RB. Maximum tongue-palate contact occurs at frames Nos. 095–098. In each frame there are 44 contacted electrodes or 69.841% of the total: 13LA, 11LA, 9LA, 8LA, 6LA, 4LA, 3LA, 2LA, 1M, 13RA, 11RA, 9RA, 8RA, 6RA, 4RA, 3RA, 2RA, 13LB, 11LB, 9LB, 8LB, 6LB, 5LB, 4LB, 4M, 13RB, 11RB, 9RB, 8RB, 6RB, 5RB, 4RB, 13LC, 11LC, 9LC, 8LC, 7LC, 6LC, 13RC, 11RC, 9RC, 8RC, 7RC, 6RC. The final complete closure occurs at frame No. 100 which has 30 contacted electrodes or 47.619% of the total: 13LA, 11LA, 9LA, 8LA, 6LA, 4LA, 3LA, 2LA, 1M, 13RA, 11RA, 9RA, 8RA, 6RA, 4RA, 3RA, 2RA, 13LB, 11LB, 9LB, 8LB, 6LB, 5LB, 4LB, 4M, 13RB, 11RB, 5RB, 13LC, 11LC. Complete tongue-palate closure begins at frame No. 092 and continues to frame No. 100. Complete closure continues for a succession of 9 frames with a duration of 0.140 seconds. After the break of the last closure, there remains a wide air passage (e.g., frames Nos. 102–103). The average number of contacted electrodes of the three stages (at the first, the maximum and final complete closure) is 33 or 52.381% of the total. Maximum tongue-palate contact occurs at frame No. 095 and continues to frame No. 098 for a succession of 4 frames over a duration of 0.062 seconds. The author's palatogram shows that the intervocalic [ n ] in *ana* [ ana ] is realized as *an alveolar nasal* [ n ].

### 5.3.2. [ n ] in *ini* [ ini ] (with palatalness)

At the first stage of production, the tip and sides of the tongue make wide contact with the palate. Tongue-palate contact occurs at the first, second and third outer circles. Complete closure begins at frame No. 079 which has 48 contacted electrodes or 76.190% of the total: 13LA, 11LA, 9LA, 8LA, 6LA, 4LA, 3LA, 13RA, 11RA, 9RA, 8RA, 6RA, 4RA, 3RA, 13LB, 11LB, 9LB, 8LB, 6LB, 5LB, 4M, 13RB, 11RB, 9RB, 8RB, 6RB, 5RB, 4RB, 13LC, 11LC, 9LC, 8LC, 7LC, 6LC, 6M, 13RC, 11RC, 9RC, 8RC, 7RC, 13LD, 11LD, 9LD, 8LD, 13RD, 11RD, 9RD, 14RE. Maximum tongue-palate contact occurs at frames No. 082 and No. 083. In each frame there are 57 contacted electrodes or 90.476% of the total. At frame No. 082: 13LA, 11LA, 9LA, 8LA, 6LA, 4LA, 3LA, 2LA, 1M, 13RA, 11RA, 9RA, 8RA, 6RA, 4RA, 3RA, 2RA, 13LB, 11LB, 9LB, 8LB, 6LB, 5LB, 4LB, 4M, 13RB, 11RB, 9RB, 8RB, 6RB, 5RB, 4RB, 13LC, 11LC, 9LC, 8LC, 7LC, 6LC, 6M, 13RC, 11RC, 9RC, 8RC, 7RC, 6RC, 13LD, 11LD, 9LD, 8LD, 13RD, 11RD, 9RD, 14LE, 14RE, 12RE, 11M, 13M. At frame No. 083: 13LA, 11LA, 9LA, 8LA, 6LA, 4LA, 3LA, 2LA, 1M, 13RA, 11RA, 9RA, 8RA, 6RA, 4RA, 3RA, 2RA, 13LB, 11LB, 9LB, 8LB, 6LB, 5LB, 4LB, 4M, 13RB, 11RB, 9RB, 8RB, 6RB, 5RB, 4RB, 13LC, 11LC, 9LC, 8LC, 7LC, 6LC, 6M, 13RC, 11RC, 9RC, 8RC, 7RC, 6RC, 13LD, 11LD, 9LD, 8LD, 13RD, 11RD, 9RD, 14LE, 9M, 14RE, 11M, 13M. At the final complete closure (frame No. 087), there are 39 contacted electrodes or 61.904% of the total: 13LA, 11LA, 9LA, 8LA, 6LA, 4LA, 3LA, 13RA, 11RA, 9RA, 8RA, 6RA, 4RA, 13LB, 11LB, 9LB, 8LB, 6LB,

13RB, 11RB, 9RB, 8RB, 6RB, 13LC, 11LC, 9LC, 8LC, 7LC, 13RC, 11RC, 9RC, 8RC, 13LD, 11LD, 9LD, 13RD, 11RD, 14LE, 11M. Complete tongue-palate closure begins at frame No. 079 and continues to frame No. 087. Complete closure continues for a succession of 9 frames with a duration of 0.140 seconds. After the break of the last complete closure, there remains wide tongue-palate contact at both sides of the palatogram (e.g., frames Nos. 088–094). The average number of contacted electrodes of the three stages (at the first, the maximum and final complete closure) is 48 or 76.190% of the total. Maximum tongue-palate contact occurs at frame No. 082 and continues to frame No. 083 for a succession of 2 frames over a duration of 0.031 seconds. Palatalization occurs greatly in [ n ] conditioned by the adjacent vowel [ i ] which hems [ n ] in the combination of [ in<sup>i</sup> ] (e.g., frame No. 083). It is shown by the author's electro-palatogram that the Japanese inter-vocalic [ n<sup>i</sup> ] in *ini* [ in<sup>i</sup> ] has great palatalness.

### 5.3.3. [ ɲ ] in *nyu* [ ɲju ] (with palatalness)

In the pronunciation of [ ɲju ], the first complete tongue-palate closure occurs on the front and sides of the palate at frame No. 025. In that frame, there are 47 contacted electrodes or 74.603% of the total: 13LA, 11LA, 9LA, 8LA, 6LA, 4LA, 3LA, 13RA, 11RA, 9RA, 8RA, 6RA, 4RA, 13LB, 11LB, 9LB, 8LB, 6LB, 5LB, 4LB, 4M, 13RB, 11RB, 9RB, 8RB, 6RB, 5RB, 4RB, 13LC, 11LC, 9LC, 8LC, 7LC, 6LC, 6M, 13RC, 11RC, 9RC, 8RC, 7RC, 6RC, 13LD, 11LD, 9LD, 8LD, 13RD, 11RD. Maximum tongue-palate contact occurs at frames Nos. 030–040. In each frame there are 63 contacted electrodes or 100% of the total: 13LA, 11LA, 9LA, 8LA, 6LA, 4LA, 3LA, 2LA, 1M, 13RA, 11RA, 9RA, 8RA, 6RA, 4RA, 3RA, 2RA, 13LB, 11LB, 9LB, 8LB, 6LB, 5LB, 4LB, 4M, 13RB, 11RB, 9RB, 8RB, 6RB, 5RB, 4RB, 13LC, 11LC, 9LC, 8LC, 7LC, 6LC, 6M, 13RC, 11RC, 9RC, 8RC, 7RC, 6RC, 13LD, 11LD, 9LD, 8LD, 7M, 13RD, 11RD, 9RD, 8RD, 14LE, 12LE, 10LE, 9M, 14RE, 12RE, 10RE, 11M, 13M. At maximum tongue-palate contact, all parts of the palate are completely contacted. That is, the front of the tongue is fully raised towards the hard palate, because of the influence of the following [ j ]. Complete tongue-palate closure starts from frame No. 025 and continues to frame No. 044, a succession of 20 frames, for a duration of 0.312 seconds. The last complete closure occurs at frame No. 044. There are 47 contacted electrodes or 74.603% of the total: 13LA, 11LA, 9LA, 8LA, 6LA, 4LA, 3LA, 13RA, 11RA, 9RA, 8RA, 6RA, 4RA, 13LB, 11LB, 9LB, 8LB, 6LB, 5LB, 13RB, 11RB, 9RB, 8RB, 6RB, 13LC, 11LC, 9LC, 8LC, 7LC, 6LC, 13RC, 11RC, 9RC, 8RC, 7RC, 13LD, 11LD, 9LD, 8LD, 13RD, 11RD, 14LE, 12LE, 10LE, 14RE, 11M, 13M. The average number of contacted electrodes of the three stages (at the first, the maximum and final complete closure) is 52 or 82.539% of the total. The number of frames of maximum tongue-palate contact is 11 frames (frames Nos. 030–040) or 0.171 seconds. There occurs great palatalness during the

pronunciation of [ɲ] in *nyu* [ɲju].

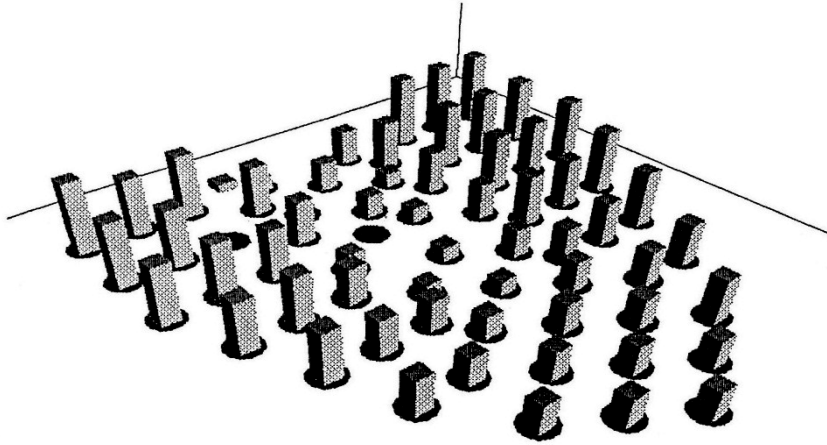


Fig. 7 The illustration of [ɲ] with palatalness (M. Tsudzuki)

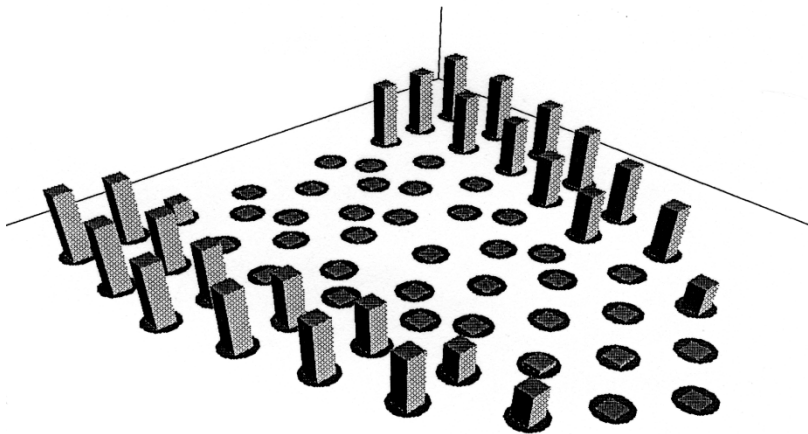


Fig. 8 The illustration of uvular nasal [ɴ] of *insa* [iɴsa] (M. Tsudzuki)

Fig. 8 is the illustration of producing the uvular nasal which shows the out-going air current through the mouth without blocking during the production of the word *insa* [iɴsa]. These tongue-palate mechanism are easily understood if we compare [ɲ] and [ɴ] graphically.

## Conclusion

In the late of the twentieth century, acoustical achievements have become the focus of phonetic studies. Acoustic phonetics has shown remarkable progress and has played an important role in analyzing perception and articulation of speech sounds. Phoneticians have contributed the progress and development of phonetic studies showing outstanding physical evidences. They have thrown new light on the issues of auditory and articulatory mechanism of the speech sounds using experimental apparatuses, such as sound-spectrograph (SPG), electro-palatograph (EPG) and flow-nazalitygraph (FNG), so on.

The writer's research on speech sounds has been developed along articulatory and experimental lines, using the sound spectrograph, electro-palatograph and flow-nasalitygraph. His contribution to the field has been to establish three fundamental methodologies for the study of speech-sounds based on: auditory perception, articulatory feeling as reported by the articulator and physical evidence such as acoustic and palatographic analysis. The observations of the dynamic changes of tongue-palate contact were established using Rion's electro-palatogram.

In this article (Part 1), the actual realization of the alveolar or palatal nasal in the context *ni* [ ni ], *ini* [ ini ] and *nyu* [ njju ] are examined by considering the electro-palatographic data of the *horse's hoof-shaped* frame and also examining the articulatory feeling and auditory impression. And it is clarified that [ n<sup>h</sup>i ], [ in<sup>h</sup>i ] occur featuring with palatalness. To summarize, a Japanese alveolar nasal is realized as a *horse-shoe* type of the electro-palatogram and moraic uvular nasal can be seen in the *butterfly* type frame. This idea is easily recognized when highlighting electro-palatogram graphically.

(To be continued)

## Acknowledgements

In bringing out this study, my sincere acknowledgments are due to Professor Ho Young Lee of Seoul National University, Korea, who has kindly spared so much of his busy time and has given me valuable help in discussing the manuscript of this paper; also to Dr. Okran John of Degue University, Korea, who gave me invaluable advice during the gathering of my data.

I would like to express my profound gratitude to Professor Hyun Bok Lee who was my academic supervisor since 1986 at Seoul National University for his valuable lectures on Phonetics and his continuous encouragement which enabled me to carry out my study in Phonetics and Linguistics.

(This article was originally presented in English at the *Second Joint Seminar on English Phonetics*, which was held by the Phonetic Society of Korea and the English Phonetic Society of Japan, 10th March, 2004 at Seoul National University,

Seoul, Korea.)

## References

- Catford, J. C. (1988). *A Practical Introduction to Phonetics*, Clarendon Press, Oxford.
- Crystal, David (1985). *A Dictionary of Linguistics and Phonetics*, Oxford, Blackwell, 2nd ed.
- English Phonetic Society of Japan, EPSJ (2005). *The Practical Dictionary of English Phonetics*, Seibido. (in Japanese)
- Fant, Gunnar (1973). *Speech Sounds and Features*, The MIT Press.
- Fry, D. B. (1982). *The Physics of Speech*, Cambridge University Press, Reprinted.
- Gimson, A. C. (1981). *An Introduction to the Pronunciation of English*, Edward Arnold, 3rd ed., Reprinted with corrections.
- Gimson, A. C. and Cruttenden, Alan (1994). *Gimson's Pronunciation of English*, Edward Arnold, 5th ed., Revised by Alan Cruttenden.
- Ladefoged, Peter (1960). *Spectrographic Determination of Vowel Quality*, J. Acoustical Soc. Vol. 32.
- (1971). *Elements of Acoustic Phonetics*, The University of Chicago Press, 7th Impression.
- Lee, Hyun Bok (1980). *A Study of Korean Speech Sounds Using Electro-Palatography and Its Application to Speech Pathology*, Language Institute, Seoul National University, Korea.
- (1989). *Korean Grammar*, Oxford University Press.
- Lee, Hyun Bok and Zhi, Min-Je (1987). *A Spectrographical Study of Korean Vowels*, Korea Journal, Vol. 27, No. 2, Korean Phonetics, pp. 37–41.
- Matsuno, Kazuhiko (1989). *An Electropalatographic Study of Japanese Palatal Sounds*, Bulletin No. 190, Phonetic Society of Japan.
- Nihon Onsei Gakkai (1985). *Onseigaku Daijiten, A Grand Dictionary of Phonetics*, Supervisor, Masao Onishi, The Phonetic Society of Japan, Sanshusha, 6th ed. (in Japanese)
- O'Connor, J. D. (1982). *Phonetics*, Penguin Books, Reprinted.
- Onishi, Masayuki (1987). *A Study of Japanese Consonants by Dynamic Palatography*, Bulletin No. 186, Phonetic Society of Japan. (in Japanese)
- Potter, Ralph K.; Kopp, George A. and Green, Harriet C. (1947). *Visible Speech*, D. Van Nostrand Company, INC.
- Tsudzuki, Masaki (1992). *An Electro-palatographic Study of the Japanese Nasal [n] Conditioned by [j]*, Foreign Languages & Literature, Vol. 17, No. 1, Foreign Languages Institute, Aichi Gakuin Univ.
- (1997). *A Phonetic Analytical Study of the Japanese [N]*, Journal of EPSJ, No. 1 (Inaugural Issue), English Phonetic Society of Japan.
- (2002). *A Study of Speech Sounds Using the Electro-palatograph*, Foreign Languages & Literature, Vol. 27, No. 1, Foreign Languages Institute, Aichi Gakuin Univ. (in Japanese)
- (2003a). *An Electro-palatographic Analysis of the Korean Palatality, Part 1*, Journal of EPSJ, No. 6, English Phonetic Society of Japan.
- (2003b). *An Electro-palatographic Analysis of the Korean Palatality, Part 2*, Journal of EPSJ, No. 6, English Phonetic Society of Japan.
- (2005a). *A Phonetic Analytical Study of Palatality by the Use of Electro-palatograph, Part 1*, Journal of EPSJ, No.

7, English Phonetic Society of Japan.

—— (2005b). *A Phonetic Analytical Study of Palatality by the Use of Electro-palatograph*, Part 2, Journal of EPSJ, No. 8, English Phonetic Society of Japan.

Roach, Peter (1992). *English Phonetics and Phonology*, Cambridge Univ. Press, Reprinted.

Tsudzuki, Masaki & Lee, Hyun Bok (1995). *An Electro-palatographic Study of the Korean and Japanese Nasals*, Linguistics in the Morning Calm 3, the Linguistic Society of Korea.

Umeda, Hiroyuki (1982). *Observation of Some Selected Articulation in Korean and Japanese by Use of Dynamic Palatography*, Papers of the 1st International Conference on Korean Studies, The Academy of Korean Studies, Seoul, Korea, pp. 869–880.

## 名古屋の寺院に関する

### 木版資料について（八）

川口 高風

詳である。

#### 三、禅隆寺無縫塔供養案内（仮題）

禅隆寺（東区飯田町）は臨濟宗妙心寺派で、円珠院（尾張藩主宗勝の生母湯本）と英巖院（尾張藩主宗睦の生母一色氏）の菩提所である。無縫塔供養を行うため参詣の案内を木版刷したものである。三月廿三日と墨書きされているが、木版の月日の部分は記入できるようにあいている。おそらくは明治期以後のものである。

#### 四、本堂造立有志連名帳

堪忍堂は元、西区紙漉町にあり、真言宗高野山派の興正寺の末寺である。明治十三年一月に齋木惟貞（初代・保忍法浄）の開創で、堪忍尊天、善光寺如来などを安置している。本堂の再建にあたり、寄附を願った有志の連名帳で、同十五年三月十九日に届けたものである。なお、本堂造営百分の一の図も添えられている。堪忍堂は戦災で焼失したため、戦後に昭和区御器所へ移転し堪忍寺と称した。

#### 五、円通寺縁起（仮題）

円通寺（熱田区神宮）二十七世信叟仙受が、明治二十四年十一月に入院した後に記した円通寺の開創や秋葉三尺坊に関する縁起及び寄附金勸募の印刷物である。円通講規約や積善会々則、奥院毘沙門天略縁起なども所収している。

#### 一、円光大師御直作尊像縁起

自然院（東区筒井町）の本尊木造阿弥陀如来立像の縁起である。源空（法然）の作といわれ、京都黒谷の金戒光明寺の内仏殿に安置されていたものである。俗にこの地を黒谷と呼ばれるのは、本尊が金戒光明寺に祀られていたからであろう。木版刷された年次は不詳である。

#### 二、子安地藏略縁起

法然寺（中区松原）の本尊子安地藏菩薩の略縁起である。創建時は妙鏡山法浄寺と称し天台宗であった。後に浄土宗に改められ、源空（法然）が再興して今の名に改めた。地藏菩薩立像は腹籠で、腹内の像は後白河法皇の作、源空の開眼仏である。山号、寺号はこれより起ったと伝えられ、木版刷の刊行年次は不

名古屋の寺院に関する木版資料について（八）



## 六、愛知県名古屋七小町遍照院地藏大菩薩略縁記

浄土宗の遍照院（東区泉）の地藏堂に祀つてある木造地藏菩薩坐像の略縁記である。元、越後の乙宝寺に安置してあったのを、元禄年中（一六八八―一七〇三）に十代目の眞誉梅鑑が受け、元禄十年（一六九七）四月に梅鑑が遍照院に住持するや堂宇を建てて安置したといわれる。明治二十九年五月二十四日に二十九世沢田成満が印施したものである。

## 七、福満寺ノ由来（仮題）

福満寺（西区押切町、現在は廃寺）の由来を二十九世の保忍法浄が記し、明治二十九年十二月に印施したものである。文禄年間（一五九二―九五）に高野山の出家者がこの地に留まって草庵を結び、承応年中（一六五二―五四）に加賀の白山権現の神事を始め、元禄年中（一六八八―一七〇三）には社殿を修繕して神輿を造成し隆盛を図つた。しかし、明治維新により社殿は氏子とともに神官が奉事することになった。明治二十四年十月二十八日の濃尾大震災によって破損し廃寺になるところであったが、その後、有縁の信男信女とともに力を尽し興隆するための施財を願っている。しかし、昭和二十年の戦災によって焼失し廃寺となった。

## 八、稲園山七寺境内之図

明治三十一年に、七寺（中区大須）の境内図に由緒を附記して

横井良琪住職が印施した一枚刷の絵図である。

## 九、尾州熱田本遠寺境内図

本図は、本遠寺（熱田区白鳥）三十六世西川日勇が明治三十三年一月に五月一日より七日迄の間、釈迦堂に安置された釈迦像を開扉して大恩忌を勤めるため、浄財の喜捨を願つた趣意書である。境内図とともに略由緒があり、それによれば本遠寺は、延暦年中（七八二―八〇五）に最澄が熱田神宮境内に法華堂を建立して親しく釈迦像を彫刻した。その後、正安二年（一三〇〇）春に日澄が尾張へ来て法華堂を現在地へ移し、釈迦像を安置したのが本遠寺の創建と述べている。

## 十、七寺略縁起

七寺（中区大須）の「金堂之図」と縁起及び一切経、阿弥陀仏坐像、観音勢至像、須弥壇などの宝物の「鑑査状写」を紹介している。明治三十三年四月七日に一切経が国宝であることを定められ、辛櫃の修理費を下賜されたことが記されているため、それ以後に刊行されたものである。

## 十一、周泉寺秋葉堂・本堂百分一之図

周泉寺（西区花の木）は初め中島郡片原一色村にあり、寛永二年（一六二五）に現在地へ移転した。初め、無縁寺と号していたが周泉寺と改号した。寺内に秋葉堂があり、享保十五年（一

七三〇)に勧請している。本図は本堂百分之一之図、善光寺如来の安置、秋葉堂の立面図を木版刷したもので、どのような目的で刷られたかは不詳である。

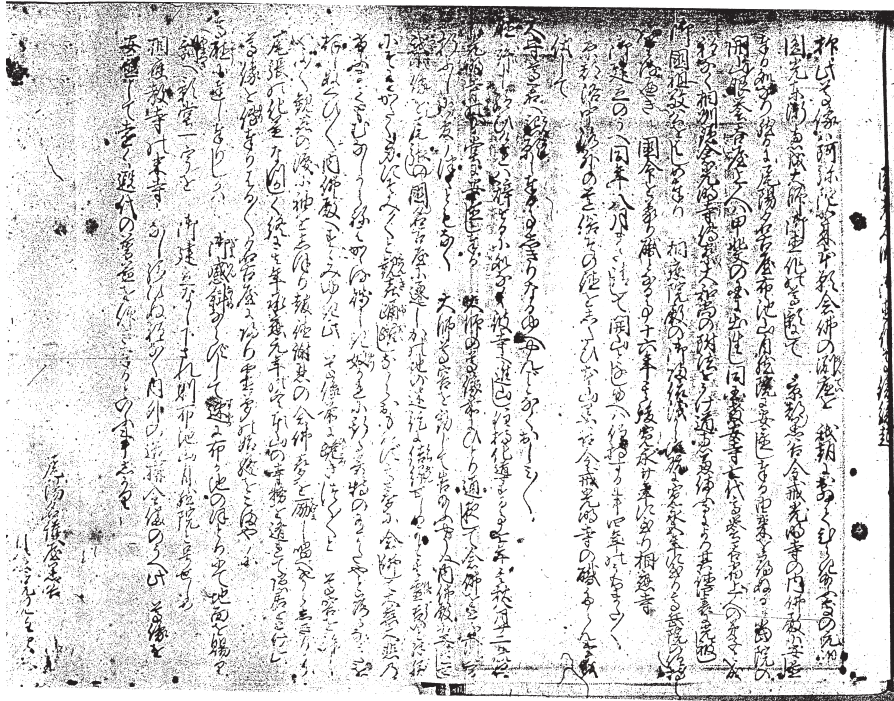
十二、當寺子安地藏大菩薩略縁起

法然寺(中区松原)の本尊子安地藏菩薩の略縁起で、「二、子安地藏略縁起」の縁起をより詳しくしたものである。明治期に活版刷された一枚物である。

十三、清水吒枳尼真天略縁起

本縁起は、長楽寺(南区呼続)に祀られている清水吒枳尼真天が明治四十三年二月に昇格大祭を行うことを知らせるために印施されたものである。長楽寺は初め寛藏寺と称し、一山十二坊のある大伽藍であった。文明六年(一四七四)二月に義山華嚴が再興し、明谷義光を中興の開祖として曹洞宗に改め長楽寺と改号した。寛永十一年(一六三四)夏には祝融の災に罹り、諸堂は烏有に帰した。その後、伽藍は復興され、明治六年には寺子屋として児童教育も勤めた。これは呼続小学校の前身にあたる。昇格大祭の発願主は二十六世久喜機外で、当時の住職は二十八世久喜風外であった。昇格発起人は久我通久、前田利鬯らである。明治四十三年二月以後の印施と考えられる。

一、円光大師御直作尊像縁起



圓光大師御直作尊像縁起

抑此尊像は、阿弥陀如来本願念仏の淵底を、我朝におゐて  
 ひらき給ふ処の元祖圓光東漸恵成大師御直作の尊影にし  
 て、京都の黒谷金戒光明寺の内仏殿に安置し奉る処なり。  
 然るに尾陽名古屋布池山自然院に安置し奉る由来を尋ぬる  
 に、当院の開山眼嘗吞屋上人は、甲斐の国に出生し、同国  
 教安寺七代高誉吞宿上人の弟子と成、程なく相州鎌倉光明  
 寺伝察大和尚の附法をうけ、道恵兼備ふるにより、其徳四  
 表に光被し、

御国祖敬公をはしめ奉り、相應院殿の御帰依浅からず。既に  
 寛永五年に至り、高岳院の住持為さるへき国命を蒙り、職  
 となる事十六年、其後寛永廿年に至り、相應寺御建立のう  
 へ、同年八月まで請して開山となし給へは、住持する事四  
 年のうち、またく京都洛中洛外の道俗その徳をしたひ、  
 本山黒谷金戒光明寺の職たらん事を伏して、  
 大守尊君へ懇願し奉る事しきりなるゆへ、やんごとなくお  
 しみく、  
 聴許し給ひければ、辞するに処なく彼寺へ進山し、住持化導

する事七年、其秋八月廿二日黒谷光明寺の本堂に安置し奉

して、遠く遐代の普益を仰ぎ奉るといふ事しかり。

尾陽名護屋黒谷

自然院□□□□

る□□大師の尊像前に、ひとり通夜して念仏をとなへ□□  
 る。折ふしに、夢うつゝともなく、大師尊容を動じて告給  
 ふやうは、内仏殿に安置せし我小像を、尾張の国名古屋に  
 遷し、かの池の□□に結縁せしめよと。其靈告いと殊勝に  
 そ有かたく、身にそみくと觀喜踊躍しなから、おもは  
 ず高声に念仏して、大慈大悲のけふまてもむなしからね  
 は、かゝる賤しき奴かれに斯る奇特の有かたやと。落るな  
 みたを押しぬくひく、内仏殿へすゝみゆき、此尊像前に  
 跪き、つくくと尊容を拝し、いよく觀喜の涙に袖を  
 しほり、報徳謝恩の念仏声を励し唱へなから、しきりに尾  
 張の化益なつかしく、終に其年承応元年の冬、本山の寺務  
 を遁れて隠居をとけ、此尊像を傳奉り、はるく名古屋に  
 帰り、靈夢の始終をこまやかに  
 尊聴に達し奉りしかは、御感斜ならずして、速に布か池  
 のほとりにて地面を賜り、剩へ影堂一字を御建立なし  
 下され、則布池山自然院と号せしめ、相應教寺の末寺とな  
 し給ひぬ。程なく内外の造構全備のうへ、此尊像を安置

名古屋の寺院に関する木版資料について(八)

二、子安地藏略縁起

子安地藏略縁起  
 尾陽城南法皇山法然寺本尊地藏菩薩は、後白河院の皇后建  
 春門院の御懐胎の時、平産御祈りのために、帝自彫刻  
 せたまひし故に、法皇山法然寺と号。或説には上人遠江国  
 □□池へ御下向の時、此地に暫らく逗留□□しと云伝ふ。永  
 曆二年九月三日、御産平安皇子誕生ならせ給ふ。是を高  
 倉院と申奉る。其後安阿弥別に大像を作らせ、彼本尊の  
 御身の内に納奉り。當寺開山深空上人此寺に安置し奉  
 り給ひてより、既一百六十余歳也、縁起委夫子安地藏菩薩  
 と号するは、經に十種を挙て、其第一女人泰産、第二に身  
 根具足すると説給ふによつて也、実に女人臨産のくるし  
 み、其恐れ甚重くして、間々母子共に死の難に遇ふ。若衆  
 生有て一心に帰命して、南無地藏菩薩と稱る則は、菩薩  
 の慈悲願力のゆへに、其人の苦患にかはりてこれをうけ、  
 遂に身心安穩得せしめ給ふ、一度御名を唱ふる者、福をあた  
 へ、はからす刑に望て命終りなんとせん事呪□に身を害  
 し、又は火災をまぬかれ、怨賊無量の苦に身をせめらるゝ

法皇山法然寺

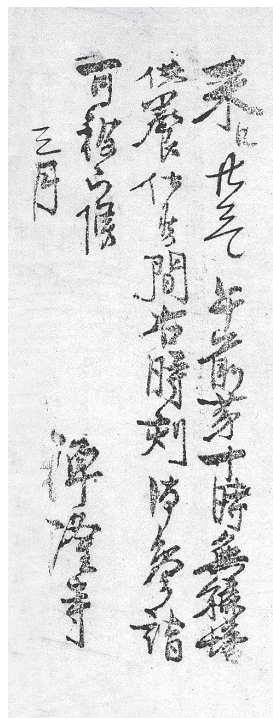
子安地藏略縁起

尾陽城南法皇山法然寺本尊地藏菩薩は、後白河院の皇后建  
 春門院の御懐胎の時、平産御祈りのために、帝自彫刻  
 せたまひし故に、法皇山法然寺と号。或説には上人遠江国  
 □□池へ御下向の時、此地に暫らく逗留□□しと云伝ふ。永  
 曆二年九月三日、御産平安皇子誕生ならせ給ふ。是を高  
 倉院と申奉る。其後安阿弥別に大像を作らせ、彼本尊の  
 御身の内に納奉り。當寺開山深空上人此寺に安置し奉  
 り給ひてより、既一百六十余歳也、縁起委夫子安地藏菩薩  
 と号するは、經に十種を挙て、其第一女人泰産、第二に身  
 根具足すると説給ふによつて也、実に女人臨産のくるし  
 み、其恐れ甚重くして、間々母子共に死の難に遇ふ。若衆  
 生有て一心に帰命して、南無地藏菩薩と稱る則は、菩薩  
 の慈悲願力のゆへに、其人の苦患にかはりてこれをうけ、  
 遂に身心安穩得せしめ給ふ、一度御名を唱ふる者、福をあた  
 へ、はからす刑に望て命終りなんとせん事呪□に身を害  
 し、又は火災をまぬかれ、怨賊無量の苦に身をせめらるゝ

にも、煩惱ぼんのうのほのほをも滅めつし、祈いのるに刹しやくあらずと云事いふことなし、  
 現世安隠げんせあんおん加被護念かびごねんの利益りやくを蒙かうむり、六趣しゆ四生しやうとも共に成じやう  
 菩提心ぼだいしんの宝雨ほううに濡者ひ必ひせり、其靈徳そのれいとく感応かんおう挙あげてかぞへがたし、  
 仍よちて縁起えんぎのあらまし梓あづさにちりばめて、遠近えんきんの信男女しんなんによに知しら  
 しめ、ともに功徳くどくの縁えんを結むすぶといふこと爾しかり。

法皇山法然寺

三、禅隆寺無縫塔供養案内(仮題)



来ル廿三日午前第十時無縫塔供養仕候間右時刻御参詣可被下  
 候

三月

禅隆寺

四、本堂造立有志連名帳

本堂造立有志連名帳

本堂造営百分一之図

本尊

大照堪忍尊天

ヲハリナゴヤ

元中下

摩利支天

陀喜呢天

毘沙門天

不動明王

三尺坊大士

善光寺如来

觀世音菩薩

地藏大菩薩

聖徳太子

弘法大師

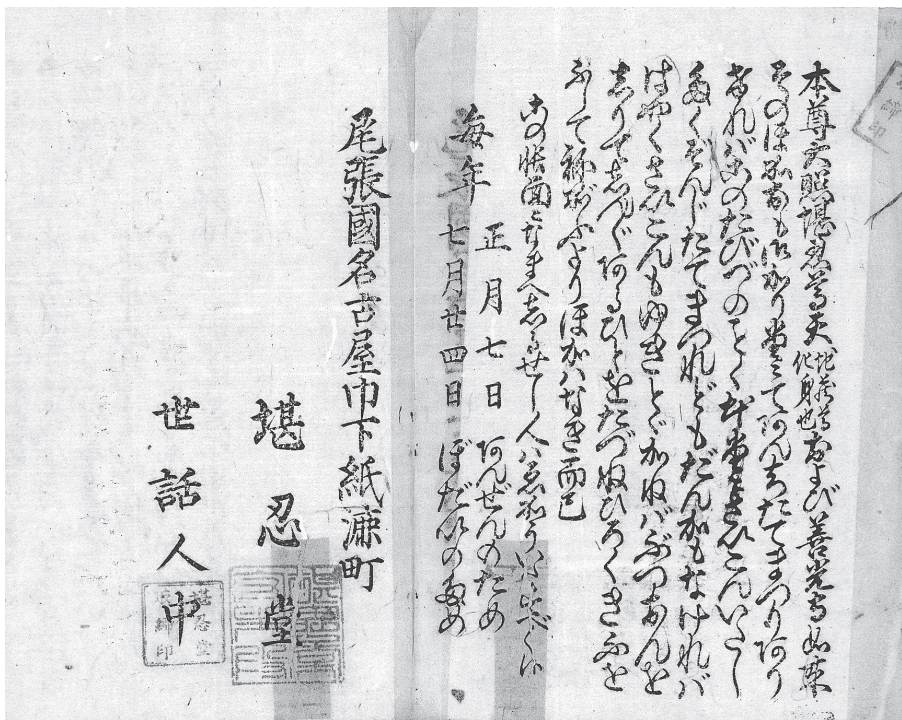
右奉安置度

志願而已

カミスキ丁 堪忍堂

編纂兼	出版人	尾張国	愛知郡	紙漉町	五番地	齊木惟貞
-----	-----	-----	-----	-----	-----	------

明治十五年  
三月十九日  
御届



本尊大照堪忍尊天地蔵尊化身也。および善光寺如来そのほかおも、御かり堂にてあんちたてまつりありければ、このたびづのことく、本堂をさいこんいたしたくぞんじたてまつれども、だんかもなければ、はやくさいこんもゆきとゝかねば、ぶつおんをしりてしんぐあるひとをたづね、ひろくきふをふしてねがふよりほかはなき而已。

この帳面になまへしるせし人は、ゑかういたすべく候。

毎年 正月 七日 あんぜんのため

七月廿四日 ぼだいのため

尾張国名古屋巾下紙漉町

堪忍堂印



五、円通寺縁起（仮題）

秋葉出現道場羽休三尺坊大権現

大祭 陰曆十一月十五日十六日

午後二時御輿発殿祝祭式

午後子ノ刻七十五膳献備式

小祭 新曆一五九月十五日十六日  
旧曆正五九月十五日十六日

奥院毘沙門天王

大祭 新曆一月三日 初寅日  
旧曆正月三日

小祭 同二ノ寅三ノ寅日

右ノ祭日中大祈禱執行儀ニ付是非御参詣有之度候猶御最寄ノ信徒諸君エ御吹聴ヲ希望ス

尾張国熱田町

圓通寺

○當山開闢暨ヒ三尺坊縁起并ニ勸

募緒言

抑モ當山ノ創起ハ人皇五十二代 嵯峨天

皇ノ御宇弘仁年間弘法大師熱田神宮ノ境  
内ニ仏寺ヲ構造セラレシ因ミ自ラ十二面  
観音ノ尊像ヲ彫刻シテ一字ヲ創建シ補陀

山圓通寺ト称シテ観音ノ靈像ヲ安置シ玉  
フ世ニ伝エテ松下ノ観音ト云フモノ是ナ  
リ然リ而シテ凡五百八十余年ヲ経テ人皇  
百一代 後花園天皇ノ御宇永享年間畏ク  
モ熱田皇大神宮ノ靈心ニヨリ當寺開祖敕  
特賜大明禪師誓海義本大和尚更ニ改造開  
闢セラレシ靈地尾張誌等ニ尾州禪林最初  
ノ道場トアリ開祖ノ化儀盛ナルニヨリ人  
皇百二代 後土御門天皇御帰依ノ余リ敕  
シテ大明禪師トノ諡号ヲ賜ハル爾後 三  
尺坊開祖ノ道風ヲ慕ヒ僧形ト化シ開祖ニ  
随從シテ参禅修道マシマセシ事十余年間  
ナリ遂ニ参禅ノ道奥ニ達ス就テ仏祖正伝  
ノ金剛宝戒及ヒ法脉ヲ授カリ開祖ト師弟  
ノ義ヲ結び鎮防火燭ノ秘呪ヲ呈シ及ヒ十

二ノ大願アル旨ヲ啓白シ尽未來際當山守護不退ノ誓ヲ為ス茲ニ開祖親シク羽休ノ神号ヲ奉ラル(羽休トハ信者ノ屋宅ニ羽ヲ休メテ其祈願ヲ達セシムル義ナリ)

実ニ知ル當山ハ 三尺坊出現ノ道場海内無比ノ名藍神仙無比ノ靈境ナリ矧ンヤ七十五神ノ大眷属出現応化ノ靈地ハ扶桑国始メテ當山ニ限り世ニ比類ナキ国家鎮護ノ道場ナリ是ヲ以テ茲歲明治三十年七月小松宮陸軍大将大勲位功二級彰仁親王殿下ヨリ秋葉出現道場トノ御額御下賜ヲ蒙レリ

蓋シ惟ルニ 三尺坊大権現ハ本地毘沙門天王ノ垂跡内証法身福智圓滿如意宝珠ノ御身体ニマシマス上下齊シク感応ヲ蒙リシ者<sup>スナハチ</sup>尠シトセズ豈ニ啻火災ヲ救ヒ給フノミナランヤ専ラ貧苦ヲ救ヒ家ヲ富シ無量ノ福寿ヲ与エ能ク商業ヲ栄エ五穀ヲ豊カニ饒ラシ盜賊ノ難風水ノ難ヲ救ヒ疫病

ヲ除キ産婦ノ難ヲ救ヒ訴訟ニ利ヲ与エ軍戦ニハ億万ノ眷属ヲ誘ヒテ先鋒トナリ大勝利ヲ得セシムル等ノ靈驗數フベカラザル事ハ古來伝ヘテ疑ナキ所ナリ然ルニ當

寺二代已降三百余年ノ久シキ輪住ノ僧疎カニシテ海内屈指ノ名藍モ殆ント地ニ墜ツ痛哉去ル明治廿四年震害ノ悲境ニ遇シ神殿本堂共ニ全敗シ諸堂悉ク半覆ニ帰シタリ誠ニ遺憾ニ堪エサル所ナリ且ソレ靈場古跡ハ国家ノ美術ナリ此地忝クモ繁華勝景聊カ両都ニ異ラン壯觀奇絶中都ト称スルモ可ナリ今ヤ外人ノ雜居近キニアリ進ンテ回復策ヲ為サズンバ笑ヲ大方ニ取

ラン幸茲ニ有信者ノ贊衷ヲ得ル既ニ時機ノ熟スルヲ感シ祭主信叟仙受及ヒ山門ノ大衆放身捨命ノ誓ヲ発シ 三尺坊毘沙門天ノ冥助ヲ仰キ今回進ンテ寺門復古ノ深策ヲナサント欲ス謹ンテ寄附委員ヲ以テ

勸進シ慈善ノ悲愍ヲ仰キ願望成就致度伏シテ翼クハ御愛顧ヲ垂レ応分ノ淨財ヲ喜捨シ給ワン事ヲ希望シ奉ル千祈万禱

### ○諸堂閣再建新築改造目的

一本堂觀音堂奥院毘沙門堂及ヒ坐禪ノ大堂閣鐘樓堂并ニ大庫裡ヲ建テ直シ客席ノ大書院兩所ニ玄關ヲ造リ順次ニ御神殿ヲ繼キ出シ唐破風ニ改造シ山門ヲ新築シ弁天堂ヲ変地シテ蓮池ヲ掘リ四庭ニ神園ヲ開キ奇巖妙石數万ノ草花樹木ヲ植エ立テ微妙ノ風致ヲ成シ神仙ノ靈境海内ノ名藍ヲ挽回セント欲スル企図ニ有之候也

### ○寄附者人講社ニ対スル要点

金壹千圓以上  
一 壹戸ニシテ右ノ金額又右金額ニ相当スル物品ヲ寄附セラル、人ニハ寄附金皆納ノ節神前ニ於テ太々祈祷ヲ修

<p>シ第一等御分体ノ御神像ト祭主自筆ノ御神号ヲ授附シ毎歳祭典ト正五九月ニ祈祷ヲ修シ御札ヲ呈送ス暨ヒ祠堂殿ニ別壇ヲ設ケ厨司入りノ大位牌ニ祖先ノ法名ヲ記シテ安置ス日供回</p> <p>向永代怠ルヲナシ</p>	<p>右以上ノ特権ハ永ク子孫ニ伝承スル事ヲ得ル</p> <p>金二百圓以上ヨリ百圓以上</p> <p>一壹戸ニシテ右ノ金額又ハ右金額ニ相当スル物品ヲ寄附セラル、人ニハ寄附金皆納ノ節神前ニ於テ祈祷ヲ修シ</p> <p>甲ノ寄附者ニハ第一号ノ御分体ノ御神像乙ノ寄附者ニハ第二号御分体ノ御神像甲乙トモニ祭主自筆ノ御神号ヲ授附シ毎歳祭典ト一月初寅ノ日ニハ祈祷ヲ修シ御札ヲ呈送ス暨ヒ祠堂殿ニ厨司入りノ大位牌ニ祖先ノ法名ヲ記シテ安置ス日供回向永代怠ル事ナシ</p>	<p>物品ヲ寄附セラル、人ニハ寄附金皆納ノ節神前ニ於テ祈祷ヲ修シ甲ノ寄附者ニハ第参号ノ御神像乙ノ寄附者ニハ第四号甲乙トモニ祭主自筆ノ御神号ヲ授附シ毎歳祭典ト一月初寅ノ日ニハ御祈祷ヲ執行ス暨ヒ大位牌ニ祖先ノ法名ヲ記シ祠堂殿ニ安置ス日供回向永代怠ルヲナシ</p> <p>金二十圓以上ヨリ拾圓以上</p> <p>一壹戸ニシテ右金又ハ右金ニ相当スル物品ヲ寄附セラル、人ニハ寄附金皆納ノ節神前ニ於テ御祈祷ヲ修シ甲ノ寄附者ニハ祭主自筆ノ御神号乙ノ寄附者ニハ大神影ヲ授附シ毎歳祭典ト二ノ寅ノ日御祈祷ヲ執行ス暨ヒ合併大位牌ニ法名ヲ記ス祠堂殿ニ安置シ永代回向怠ル事ナシ</p>
<p>金五百圓以上ヨリ三百圓以上</p> <p>一壹戸ニシテ右ノ金額又ハ右ノ金額ニ相当スル物品ヲ寄附セラル、人ニハ寄附金皆納ノ節神前ニ於テ太々祈祷ヲ修シ甲ノ寄附者ニハ第二等御分体ノ御神像乙ノ寄附者ニハ第三等御分体ノ御神像甲乙トモ祭主自筆ノ御神号ヲ授附シ毎歳祭典ト一月初寅ノ日ニハ御祈祷ヲ修シ御札ヲ呈送ス暨ヒ祠堂殿ニ別壇ヲ設ケ厨司入りノ大位牌ニ祖先ノ法名ヲ記シテ安置ス日供回</p> <p>向永代怠ルヲナシ</p>	<p>一壹戸ニシテ右金又ハ右金ニ相当スル</p>	<p>金一圓以上</p>

一 壹戸ニシテ右金又ハ右金ニ相当スル  
物品ヲ寄附セラル、人ニハ寄附金皆  
納ノ節神前ニ於テ御祈禱ヲ執行シ御  
札ヲ授与ス

一 今回復古ノ事業ニ付特大講ヲ發起ス  
向フ二十四ヶ月間ヲ期シ毎日三厘宛ノ  
喜捨アルヲ一口ト定ム謂ユル喜捨金ノ  
多少ニヨリ祭主ヨリ御授附ノ品物及ヒ  
御祈禱ノ顛末ハ前キニ詳細ヲ尽ス  
右各通ニ祈禱ノ定メアルハ大旨総則ニシ  
テ専ラ寺門ノ大衆毎晨日課大般若經ヲ転  
ジ無量ノ経呪ヲ誦ジ家門繁栄火災消除ノ  
御祈禱ヲ執行シ及ビ祖先亡靈ノ為ニハ朝  
暮日供回向万世怠ル事ナク執行スル規定  
ヲ設ク

### ○募集金報告

今回諸堂再建改造ニ付寄附及ヒ講社募集  
金ハ都テ愛知銀行或ハ熱田銀行ニ預ケ置

信徒發起者二名講社大取締二名ヲ選出シ  
惣金取扱委員ニ請任シテ惣轄スルコトヲ  
得最モ諸帳簿精算堅ク厳密ナルヲ主目ト  
ス

### ○圓通講規約

一本講ノ総名ヲ圓通講ト称ス  
但寺務取扱所ヲ事務局トス  
一 信徒五百名以上ヲ大講社トシ百人以上  
ヲ中講社トシ五十人以上ヲ小講社トシ  
十人以上ヲ分講社トス  
但シ寺納物ヲ二葉ニ分ツ  
一 講社壹口ニ付金納ナラバ十五錢米麦一  
舛宛寺納ノ方八十名中ヨリ毎歳二名宛  
ノ代参ト相定ム  
一 講社一口ニ付金十錢或ハ米一舛寺納ノ  
方八十名中ヨリ毎年一名宛ノ代参ト定  
ム  
右両講トモ当日午前第十時参着十二時

太々御祈禱次ニ祝膳了テ随意退散

一 大講社ハ正副大取締各一名宛ヲ選舉シ  
及ヒ周旋員十名ト定メ当局へ通知アル  
ヘシ

一 中講社ハ大取締一名ヲ選舉シ及ヒ周旋  
員三名ト定メ当局ニ通知アルベシ  
一 小講社ハ大取締一名ヲ選舉シ及ヒ周旋  
員一名ト定メ当局へ御通知ヲ乞フ  
一 分講社ハ周旋員一名ヲ選定シ当局ニ御  
通知ヲ乞フ  
一 大取締及ヒ周旋員囑托任期滿五ケ年ト  
ス  
但シ退任後再選セラル、ヲ得  
一 正副大取締周旋員相定リシ上ハ講社連  
名簿ヲ造リ現在ノ人員当局ニ送附セラ  
レント乞  
但講社員ノ増減アル時ハ当局ニ通知  
ヲ希候事

右ハ一般ノ通則ニ付地方ノ適宜ニ仍リ當局ト協議ノ上細則ヲ設ケ結社スル事ヲ得

○積善会々則

第一條 本会ヲ積善会ト称ス常ニ當山ノ

大書院ヲ以テ会所ト定ム慈善ノ君士百

名ヲ懇請シテ一団隊トス謂ユル寺門ノ

協議員特別大取締ナリ年中兩度ノ会参

日ハ春秋トモ彼岸ノ入りヨリ第三日目

ト定ム午前第十一時ニ参着正午ニ太々

御祈祷ヲ執行順次ニ祝膳了テ大協議ヲ

開伸シ専ラ御神徳ヲ盛ニシ寺門ヲ興隆

ナラシムルヲ主目トス

第二條 當山ハ會員諸賢士ノ祈願所ト定

ム豈ニ春秋二期ノ太々祈祷ノミナラン

ヤ日課毎朝大般若經ヲ転読シ祭主三密

加持ノ密法ヲ修シ専ラ火災ヲ除キ五穀

ヲ豊ニ饒ラシ家ヲ富シ子孫ヲ長シ商業

ヲ栄工疫病ヲ除キ軍戦ニハ百万ノ眷属

ヲ領シ先鋒トナリ大勝利ヲ得百事如意

満足ヲ得セシムルノ御祈念万世怠ルコ

トナシ是ニ仍リ毎会各會員金一圓宛ヲ

奉納スル者ト定ム

第三條 會員中ヨリ事務惣督二名ヲ選出

シテ大小ノ事務一切ノ會計ヲ主理セシ

ム但シ会金ハ愛知銀行ニ預置キ御神殿

ノ営繕費暨ヒ寺門必用ノ際之ヲ事弁ス

大事ハ會員過半数ノ協議ニ決ス小事ハ

事務惣督ノ議定ニ随フ且ツ会席費ハ臨

機応用ニ一任ス

第四條 會員諸君ニ病患者アルトキハ直

チニ葉書ヲ以テ通知アルベシ御神前ニ

於テ御祈祷ヲ修シ御宝贖ヲ送附ス若シ

一死亡者アルトキハ法名并ニ月日ヲ詳

カニ記シ御通知ヲ請フ當山永代過去帳

ニ記シ百ヶ日マテ毎朝ノ御回向春秋兩

度ノ彼岸中日大施餓鬼ヲ修シ回向スル

ヲ永世寺門ノ規定トス

第五條 満会ニ至リ御分体ノ御神像ヲ授

ケ家門ヲ鎮護ス謹テ三尺坊大神ノ昭鑑

ヲ仰キ祭主ト會員主君ト骨肉兄弟ノ契

ヲナシ輪次順環シテ永ク三尺坊ノ大壇

護トナリ玉ハンコトヲ約定シ奉ル右伏

シテ昭亮ヲ乞フ

○奥院毘沙門天略縁起

抑モ當山奥院毘沙門天ハ畏クモ 聖徳皇

太子御彫刻ノ御尊像ナリ其由縁ヤ貴シ人

皇三十二代 崇峻帝ト謀リ皇太子大軍ヲ

率ヒテ河内国渋河ニ御出陣物部守屋ト戦

ヒ玉フ官軍大二敗ル皇太子信貴山ニ登リ

四天王ヲ專念シ毘沙門天ノ小像ヲ刻ミ官

兵各ノ髻リニ安シテ進発セシム山川震動

ス空中ニ声アリ此ハ是四天王ノ箭ナリト

神箭雨ノ如ク守屋ヲ射討ス官軍大勝利凱

歌ヲ奏ス皇太子御歡感斜ナラス毘沙門天

ノ御神像ニ軀ヲ刻ミ大神像ヲ信貴山ニ奉  
 ジ小神像ヲ宮中ニ祭り玉フ其像今伝エテ  
 當山ニ安置シ奉リシハ 三尺坊夢想ノ御  
 神通ニヨリ拝請シ奉ル誠ニソレ稀世ノ御  
 神像ナリ按スルニ阿薩婆抄ニ曰ク大海中  
 ニ須弥山アリ須弥ノ中層ニ毘沙門宮ヲ現  
 ス宮内七宝莊嚴ノ台ニ福德大自在毘沙門  
 天在シマス億万ノ夜叉羅刹ヲ眷属トナシ  
 無量ノ妙供ヲ弁備ス福德才智武勇敬愛望  
 ニ随ヒ降魔調伏除病延寿願願ニ充テズト  
 云フコトナシ日ニ諸天ノ福ヲ以テ人天ノ  
 貧苦ヲ救ヒ国土ノ万福ヲ成就ナサシメ玉  
 フトアリ矧ンヤ唐ノ玄宗皇帝天宝元年西  
 蕃ノ寇安西ヲ困ム帝自ラ香炉ヲ捧ゲ信敬  
 ヲ凝シ毘沙門天ヲ專念シ玉フ帝ノ而タリ  
 甲冑ヲ帶シ劔戟ヲ横タル神兵五百騎宮殿  
 ニ顯ハル而シテ攻鼓大ニ起リ天地ヲ動ス  
 神兵数万騎北方ヨリ現ズ蕃軍恐レテ四方

名古屋の寺院に関する木版資料について(八)

ニ迹散セリ斯テ毘沙門天大光明ヲ放テ楼  
 上ニ現シ玉フ帝叡感斜ナラズシテ各国  
 良<sup>ウシト</sup>ノ偶ニ毘沙門ノ像ヲ安シ祭ラシムト  
 僧史略ニ詳ナリ又田村麻呂東征ノ時勝敵  
 毘沙門法ヲ修セシム惣チ高丸ヲ射斃ス田  
 村大勝利ヲ得從三位ニ補セラルト王代一  
 覽ニ見ユ誠ニソレ感応靈驗著明哉必ズ求  
 メニ応セズト云フコトナシ豈ニ信セザル  
 ベケンヤ穴賢

○双身毘沙門天略縁起

當山奥院御同壇ニ安置シ奉ル双身毘沙門  
 天ハ加藤清正公ノ守護神黄金ノ印度作ナ  
 リ公常ニ大国ノ王侯ニ及第セント誓フ其  
 誓ヒ空カラズ肥後国熊本ノ城主トナル公  
 本城ヲ築キ御神像ヲ城内ノ天守ニ納ム然  
 ルニ明治維新反籍ノ際往昔ノ由緒ヲ以テ  
 其像摂津国兵庫市北風氏ニ賜ル同氏威靈  
 ヲ恐怖シ祭祀ニ憂ヒテ當山ニ奉納セラレ

シ御神像ナリ  
 按スルニ双身トハ毘沙門天ト吉祥天女ト  
 御夫婦神ニテ和合背立在シマシテ七宝輪  
 ヲ懷妊シ日ニ如意珠ヲ産ミ出シテ人間ノ  
 貧苦ヲ救ハント誓ヒ玉エル御神像ナリ最  
 勝王経ニ吉祥天女仏ニ告テ曰ク世尊北方  
 ニ薜室羅末拏天王ノ城ヲ有財ト名ク城ヲ  
 去ルコト遠カラズシテ園アリ妙華福光ト  
 云フ中ニ七宝莊嚴ノ宝殿アリ我常ニ彼コ  
 ニ住スト又吉祥天女経ニ吉祥宝莊嚴世界  
 ニ於テ等正覚ヲ成シ吉祥宝生如来トアリ  
 況ンヤ江ノ諸世<sup>モロヨ</sup>ハ年久ク信ズ或モ途途中ニ  
 天女ヲ拝ス布囊ニ精<sup>シラケルンシテ</sup>粳一斗ヲ授ク諸  
 世生涯炊キ食シ尽ルコトナシ故ニ大福貴  
 トナル若シ能ク精進結齋シテ供養シ奉ラ  
 バ福智愛敬一切ノ養生皆具足シ諸願成就  
 セスト云フコトナシト諸天ノ贊偈ニアリ  
 豈ニ諦信シテ疑フベクンヤ穴賢

○年中毎月祭日

十六日 羽休三尺坊大権現

三日 毘沙門天王

七日 七十五天神 大祭五月

二十四日 吉祥天女 大祭旧七月

十八日 松下観音大士 大祭旧正月

十五日 弁財天女 大祭旧四月巳ノ日  
十月亥ノ日

○御祈祷御膳料常夜燈料

一金七圓 一周間御祈祷

一金五圓 別座太々御祈祷

一金三圓 太々御祈祷

一金一圓 恒規御祈祷

一金三十六圓 永代毎月七十五膳献供

一金三圓六十銭 七十五膳特別献供

一金三圓以上 献膳一供

一金一圓 一ヶ月間毎日献供

一金二銭以上 一回御神酒献供

一金三十圓 永代常夜燈

○追 吊 祭

當山信徒諸講中ノ亡靈ノ為メニハ永代過  
去帳ヲ備置キ盆中及ヒ春秋両度ノ彼岸ノ  
中日ト毎月十八日ニ有縁無縁各家門先祖  
代々ノ大施餓鬼会ヲ執行シ毎日課ニハ誂  
經追善供養仕候ニ付死亡者有之信徒講中  
諸君ハ戒名俗名死亡者ノ年月日及ヒ宗旨  
等記載必ス御申越有度候事

○諸堂再建造

今般諸堂再建造寄附勸募及ヒ講社結集  
ノ為メ派出役僧或ハ派出委員ヲ以テ相伺  
ヒ候條自然拜趨ノ上ハ諸般御配慮ニ預リ  
度尚勸募方等精々御尽力ヲ蒙度伏テ奉懇  
願候也

秋葉出現道場

大祭主 信 叟 仙 受

○謝 祠

謹啓今般諸堂再建新築改造ニ付講社結集

寄附勸募ノ為メ役僧派出為致候処各地到  
処非常ノ御尽力ヲ以テ御寄附并ニ講社結  
集被成下尚役僧及ヒ派出委員迄モ不一方  
御待遇ヲ蒙リ候趣役僧等ノ上申将ニ感涙  
ノ至リ當山ノ面目コレニ不過奉深謝候就  
テハ爾来一層ノ御尽力ヲ以テ諸堂閣改造  
ノ竣工ヲ見ルニ至ラン事ヲ伏テ奉懇願上  
候先ハ不取敢役僧巡回地方御仁君ニ奉深  
謝候敬白

秋葉出現道場

大祭主 信 叟 仙 受





哉今又有志の人々と相ばかり結縁のため地藏講中を結び普  
 く利益を得んと菩薩の御縁日毎月廿四日に別時念仏を修行  
 し宗意安心并ニ地藏菩薩の功德等を説ひて共に一蓮同生の  
 樂を得んとす願くハ速に入講ありて我等の素志を果さ  
 しめ給わんことを乞

明治廿九年五月廿四日

遍照院 廿九世

願 譽 成 満 謹 誌

## 七、福満寺ノ由来（仮題）

夫レ當山ノ由来ヲ尋ルニ往昔高野山ノ出家救世観音ノ尊像ヲ  
 護持シ来リテ是レ仏縁ノ勝地ナリト錫ヲ此地ニ止メ草庵ヲ結  
 ヒ勤修シテ年月ヲ送ル或時何国共ナク老翁来リ頓死ス故ニ土  
 中ニ埋ム不思議ナル哉其服中ヨリ榎樹生ジタリ之レニ依テ即  
 チ榎本山ト号セリ文禄年間客殿ヲ創立シ内仏ニ安置ス正徳年  
 中観音堂ヲ造営シ遷座ス抑観世音菩薩ハ三十三身ニ尊影ヲ化  
 シテ一切世間ノ苦難ヲ救ヒ當来世ニハ極楽国土ニ往生セシメ  
 玉フ大悲ノ誓願皆克ク世人ノ知ル処ナリ中ニモ當本尊ハ一切  
 女人ノ難産ヲ憐ミ子孫長久ヲ守ラセ玉フ故ニ子安観音ト称シ  
 奉ル然ルニ文明九年當国ノ太守斯波氏義廉清洲ニ在城ノ時加  
 賀国白山権現ヲ信仰アリ或夜夢中ニ我ハ白山ノ靈ナリ當国  
 鴛鴦喜里ノ沼野ニ勧請スベシ武門ヲ守護セント見テ夢覚タリ  
 依レ之宮社ヲ勧請シ彼榎樹ヲ神木トシ則榎権現ト通称ス承応  
 年中ニ神事ヲ始ム元禄年中ニ社殿ヲ修繕シ神輿ヲ造成シテ專  
 ラ社殿ノ隆盛ヲ図リタリ然ルニ明治維新ノ際社寺分離ノ后隆

盛ヲ図リ修繕ヲ尽シタル社殿ハ氏子ト共ニ神官奉事ス之レニ依テ當寺ハ無檀無祿ナルヲ以テ赤貧ノ地トナリ終ニ無住ノ不幸ニ至リ尚ホ其上去ル廿四年ノ大震災ニ罹リ破損ヲ生ジ今ヤ廢寺ノ異域ニ臨ミ実ニ見聞スルニ忍ヒサル処ナリ經ニ曰ク堂塔ヲ營建シ佛像ヲ安置スル其功德須彌滄海ヨリモ猶ホ広シト云々觀仏三昧經ノ註ニ曰ク伽藍ヲ營建シ佛像ヲ安置シ仏跡ヲ画キ人ヲシテ見セシメ歡喜ノ心ヲ起サシメハ能ク恒河沙劫ノ生死ノ罪ヲ滅スト云々は故ニ余深ク仏ノ教勅ヲ信シ化益ノ道場トナサンコトヲ欲ス蓋シ旧寺ヲ補ヒ廢寺ヲ興シ寺門興隆ハ僧侶ノ本分ナレハ當寺中興ノ志願ヲ起シ共同特志ノ諸氏ト共ニ広ク力ヲ尽シ興隆ノ本懷ヲ達シ仏祖ノ深恩ニ酬ヒ奉リ彼恒河ノ滅罪滄海ノ功德ヲ諸衆ト共ニセン伏テ仰ク有縁ノ信男信女一紙半錢モ皆是其結縁機ナリ故ニ多少ニ論ナク白淨ノ施財ヲ以テ余カ志願ヲ資ケ滅罪生善離苦得樂ノ善縁ナレハ其機ヲ結ヒ給ハンコトヲ深ク信ス矣 現住第二十九世 苾芻法淨敬誌

一本尊子安觀世音菩薩 御丈一寸一分 三重厨子安置也

鰐口ニ正長申九月九日ノ彫刻アリ已ニ五百五年ナリ●白山

權現勸請文明九年ヨリ四百五十五年ナリ●文祿年中客殿創

名古屋の寺院に関する木版資料について(八)

立ヨリ三百四十一年ナリ●寛永年中ヨリ西国諸大名琉球人等當社ニ休憩ス(今ノ客殿)之レニ依テ本郷ヨリ出テ始メテ家作ヲ造リ終ニ繁榮トナル已ニ三百一年ナリ●承応年中熱田大薬師医王院日源僧都當寺ノ住職ト成リ夫ヨリ神事ヲ始ム依テ中興開山ノ誉崇位セリ已ニ二百七十年ナリ●日源僧都ノ弟子相統シテ元禄年中社殿ヲ修覆ス已ニ二百廿七年ナリ●正徳四年春觀音堂ヲ建立ス已ニ二百九十九年ナリ●享保七年神輿ノ造成ヲ発願シ翌卯年成就ス已ニ二百八十七年ナリ

#### 高野山金剛三昧院末

名古屋押切町榎權現旧別當

#### 榎本山福満寺

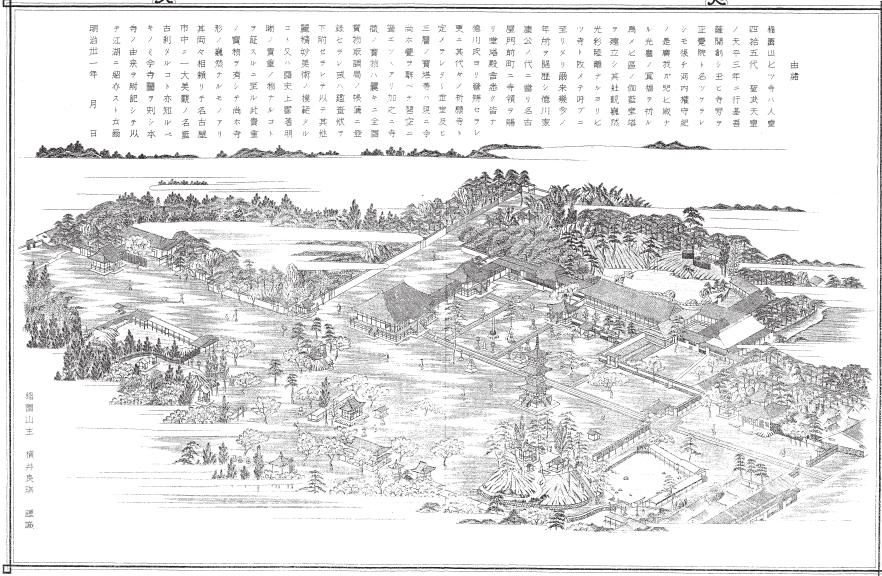
明治二十九年十二月

一 毎年正月十七日 大般若修行 一 毎年旧七月九日 大施

餓鬼修行

八、稲園山七寺境内之図

稲園山七寺境内之図



稲園山七寺境内之図

由緒

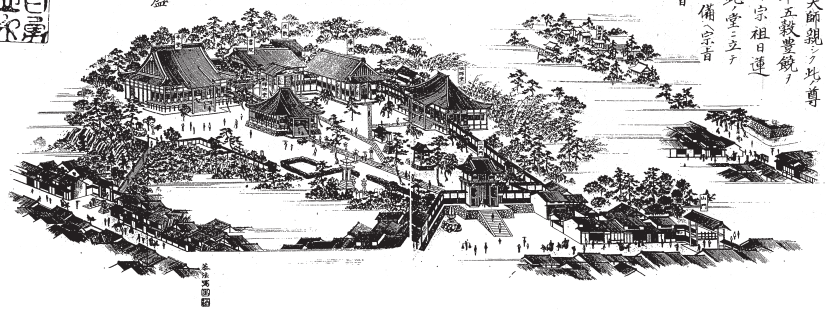
稲園山七ツ寺ハ人皇四拾五代 聖武天皇ノ天平三年ニ行基菩薩開創シ玉ヒ寺号ヲ正覚院ト名ツケラレシモ後チ河内権守紀ノ是広我が兒七歳ナル光磨ノ冥福ヲ祈ル為メ七区ノ伽藍堂塔ヲ建立シ其壯觀巍然光彩陸離ナルヨリ七ツ寺ト改メテ呼ブニ至リタリ爾來幾多ノ年所ヲ閱歴シ徳川家康公ノ代ニ當リ名古屋門前町ニ寺領ヲ賜リ堂塔殿舎悉ク皆ナ徳川氏ヨリ營弁セラレ更ニ其代々ノ祈願寺ト定メラレタリ金堂及ヒ三層ノ宝塔等ハ現ニ今尚ホ薨ヲ駢ベテ碧空ニ聳エツ、アリ加之ニ寺蔵ノ宝物ハ曩キニ全国宝物取調局ノ帳簿ニ登録セラレ或ハ鑑査状ヲ下附セラレテ以テ其壯麗精妙美術ノ模範タルコト又ハ国史上顯著明晰ノ貴重ノ物ナルコトヲ証スルニ至ル此貴重ノ宝物ヲ有シテ尚ホ寺形ノ巍然ナルモノアリ其両々相頼リテ名古屋市中ニ一大美觀ノ名藍古刹タルコト亦知ルベキノミ今寺図ヲ刻シ本寺ノ由来ヲ附記シテ以テ江湖ニ紹介スト云爾

明治卅一年 月 日

### 九、尾州熱田本遠寺境内図

抑モ當山安置奉天聖釋迦牟尼世尊定曆年中桓武天皇敕命  
 因傳教大師熱田神社境内出張法華堂建立大師親シ此尊  
 像彫刻シ法華經勸請ヲ為シ寶祿無窮天下泰平五穀豐饒ノ  
 祈除厄祈願ヲ為シ玉野三ヲ其後弘長元年百年宗祖日蓮  
 本遊學トシテ京都吉田兼益カ家ニ往復初シ此堂ニ立テ  
 寄リ玉野百日間法華經ヲ誦誦シ釋尊法華備宗言  
 建立祈願ノ龍ノ玉野宗祖寂後當山開山九光僧  
 澄上人正安庚子年春社司ノ請ニ由リ鎌倉ヨリ來テ  
 當山開キ此堂ヲ移シ釋尊ヲ安置奉リル  
 所シテ創建ヨリ本年ニ至ルマデ壹千壹百  
 有餘年現今ノ地ヘ移セヨリ六百年余ノ  
 經誠ニ國家鎮護ノ尊像ニシテ日本国内本宗  
 無雙ノ靈場ナリ因テ先年當寺保存ノ為メ  
 發省ヨリ保存金壹百圓ヲ下テ賜リシナリ  
 大ニ哉大悟大聖釋迦牟尼世尊垢無ク深無ク  
 所著無ク大衆馬調御師道風德香切重  
 甚深無ク妙花以テ春霞鬢鬚タル中天笠  
 羅尼尼國政キ初シテ天上天下唯我獨尊  
 ル獅子吼以テ初衆生ヲ教化シ玉野其識以テ  
 百世ヲ照シ其德以テ億兆ヲ呼ビ傳大ナル釋  
 迦牟尼世尊今也將ニ二千八百五拾年ノ御  
 遠忌ヲ修行セント欲シ即カ寺内ニ修繕ヲ加ヘ三  
 十五年五月ヨリ今七ノ迄此尊像ヲ開扉シ  
 奉リ恭シ大恩恩ヲ勤ム以テ德海ニ滴シ其鴻  
 恩聖德ヲ拝謝シ玉野希クハ十方有志ノ信徒諸氏  
 幸ニ淨財ヲ喜捨シテ吾カ此修行ヲ輔ケ之レラズ  
 本ラシメラレニテ

尾州熱田本遠寺境内圖



愛知縣愛知郡熱田町大字田中  
 中本山法華堂妙光山本遠寺三十八嗣法  
 明治三十三年一月 日 勇 敬 白  
 十方施主 隨喜之 諸氏

名古屋の寺院に関する木版資料について(八)

### 尾州熱田本遠寺境内図

抑モ當山ニ安置シ奉ル大聖釈迦牟尼世尊ハ延曆年中桓武天皇  
 ノ敕命ニ因リ伝教大師熱田神社ノ境内ニ出張シ法華堂ヲ建立  
 シ大師親シク此ノ尊像ヲ彫刻シ法華經勸請ヲ為シ宝祿無窮天  
 下泰平五穀豐饒ヲ祈リ除厄ノ祈願ヲ為シ玉野所ニシテ其後弘  
 長元年<sup>辛酉</sup>年宗祖日蓮大士遊學トシテ京都吉田兼益カ家ニ往復  
 ノ砌リ此ノ堂ニ立チ寄り玉野壹百日ノ間法華經ヲ誦誦シ積尊  
 ヘ法味ヲ備ヘ宗旨建立ノ祈願ヲ籠メサセ玉野宗祖寂後當寺開  
 山九老僧日澄上人正安二庚子年春社司ノ請ニ由リ鎌倉ヨリ來  
 ツテ當山ヲ開キ此ノ堂ヲ移シテ積尊ヲ安置シ奉リタル所ニシ  
 テ創建ヨリ本年ニ至ルマデ壹千壹百有餘年現今ノ地ヘ移セシ  
 ヲリ六百年余ヲ經誠ニ國家鎮護ノ尊像ニシテ日本国内本宗無  
 雙ノ靈場ナリ因テ先年當寺保存ノ為メ内務省ヨリ保存金壹百  
 圓ヲ下ダシ賜リシナリ大ナル哉大悟大聖釈迦牟尼世尊垢無ク  
 染無ク所著無ク天人象馬ノ調御師道風德香一切ニ薰シ甚深無  
 上ノ妙花ヲ以テ春霞鬢鬚タル中天笠羅尼尼國ニ咲キ初メシヨ  
 リ天上天下唯我独尊タル獅子吼ヲ以テ一切衆生ヲ教化シ玉野  
 其識以テ百世ヲ照シ其德以テ億兆ヲ服ス嗚呼偉大ナル釈迦牟

尼世尊今也將ニ二千八百五拾年ノ御遠忌ヲ修行セント欲シ聊カ寺内ニ修繕ヲ加ヘ三十三年五月一日ヨリ全七日迄此尊像ヲ開扉シ奉リ恭シク大恩忌ヲ勤メ以テ徳海ノ一滴ニ報セントス教恩海ニ沐浴スル緇素来ツテ稽首作礼以テ其鴻恩聖徳ヲ拝謝シ玉ヘ殊ニ希ク八十方有志ノ信徒諸氏幸ニ浄財ヲ喜捨シテ吾カ此ノ修行ヲ輔ケ之ヲシテ盛大ナラシメラレンコトヲ

愛知県愛知郡熱田町大字田中

中本山法華堂妙光山本遠寺三十六嗣法

明治三十三年一月

日勇敢白

十方施主随喜之諸氏

## 十、七寺略縁起

七寺畧縁起

### 七 寺 金 堂 之 図

愛知県名古屋  
屋市門前町 稲園山七寺縁起

我稲園山七寺は今を去ること一千百余年のむかし天平七年に行基菩薩の尾張国に來化して今の中島郡萱津の里に一字を建立し正覚院と号して親から八尺五寸の阿弥陀仏と五尺五寸の觀音勢至二菩薩の像を作りて安置したまふ此三尊は明治二十四年八月一日附にて全国宝物の鑑査状を内務省より下附されたるを以て考ふるも亦た如何に此等此靈像の貴きものなるかを知るに足らん又た多聞天持国天の兩像も行基菩薩の勸請したまひしもの是れも内務省より登録状を下附せられたり其七寺と呼ぶに至りしは秋田城の介たりし河内權守維広の任満ちて關東より帰洛の途次萱津の里まで來かゝる折から京都に遣せし其七歳の愛児光麿は父の維広を慕ふて下国せんと此里ま

で来りて重き病ひに罹り居り遂に死去しければ維広は甚く之を哀むで七堂伽藍を建立し死児光磨の冥福をとむらひたるにはしまりたるものにて是れ今を去る一千年あまり昔しの延暦六年十二月の事なり其後ち仁和年間我七寺は水災に罹り天慶年中また兵乱の爲め堂宇いたく損じすたれたるを六條天皇の御宇尾張権守大中臣朝臣安長は勝幡城に在つて寵愛せる女兒の歿せしを悲むあまり其菩提をとむらはん爲め堂宇を再建して長福寺と称えを改め且つ能筆の人を広く天下に探りもとめて四年あまりの間に五千余巻の大藏經を写さしめ經函を作り輪法輪藏を建て、此処に納む是れ今より幾んと七百余年前の事にて政府も近年この經卷のいと尊きものなる由を聞き屢々東京より官吏を遣はし取調べられたる後ち三十三年四月七日内務大臣西郷従道侯は之を国宝に指定されたり天正十九年清洲の住人鬼頭孫左衛門吉久は豊太閤の命を受け清洲に移し後ち名古屋移城の時今の所に地を賜はりて移転し是れより尾張侯代々の御祈願所となり年々御材木を下賜はり又た御祈禱料及御靈屋回向料を賜はり尚ほ御供養の爲め春日井郡小松寺三百石をも兼帯し本堂観音堂聖天堂十王堂鐘樓影堂輪藏鎮守弁

名古屋の寺院に関する木版資料について(八)

天堂等の伽藍儼然として立ちならび尾參濃勢地方には幾んと無類の名刹と称せらるかの三層塔の如きは元禄年間尾張国君瑞龍院殿が多くの資財を擲ちて之を建立し且つ京都の仏師運長に命じて五智如来と八大菩薩の像を彫まして塔中に安置せしめられしものなるを以て考ふるも亦た如何に我七寺の靈場なるかを知るに足るべく將た本堂内陣の莊嚴なるに對しては二十四年八月一日附にて内務省が宝物鑑査状を与ひられたるを以て考ふるも亦た如何に我七寺の貴重なるかを知るに足らん此他我七寺の所有する多くの宝物に付き云ハんと欲する処ありと雖も今之を略す

一 国宝辛櫃入一切經

明治三十三年四月七日内務大臣西郷侯爵ハ内務省告示第三十二号ヲ以テ国宝ノ資格アルモノト定メテ且ツ辛櫃修理費金壹千九拾圓七拾五錢貳厘御下賜

第五八八六号 鑑査状写

名古屋市

七 寺

一 阿弥陀仏坐像 木 丈八尺五寸 壹 体

右美術上ノ参考トナルヘキモノト認定ス

明治二十四年八月一日

臨時全国宝物取調局鑑査掛 山名貫義<sup>印</sup>

臨時全国宝物取調局鑑査掛 正七位 八木 雕印

第五八八八号 鑑査状写

名古屋市

臨時全国宝物取調局書記兼鑑査掛 川崎千虎印

七 寺

臨時全国宝物取調掛 正七位 岡倉覚 三印

一須 弥 檀 獅子彫刻

壹 台

臨時全国宝物取調委員 從四位 濱尾 新印

右美術工藝上ノ参考トナルヘキモノト認定ス

臨時全国宝物取調委員長 正三位勲二等 九鬼隆 一印

明治二十四年八月一日

臨時全国宝物取調局鑑査掛 山名貫 義印

第五八八七号 鑑査状写 名古屋市

臨時全国宝物取調局書記兼鑑査掛 川崎千虎印

一観音勢至像 木 丈各三尺五寸 貳 体 七 寺

臨時全国宝物取調掛 正七位 黒川真 頼印

右美術上ノ参考トナルヘキモノト認定ス

臨時全国宝物取調委員 從四位 濱尾 新印

明治二十四年八月一日 臨時全国宝物取調委員長 正三位勲二等 九鬼隆 一印

臨時全国宝物取調局臨時鑑査掛 山名貫 義印

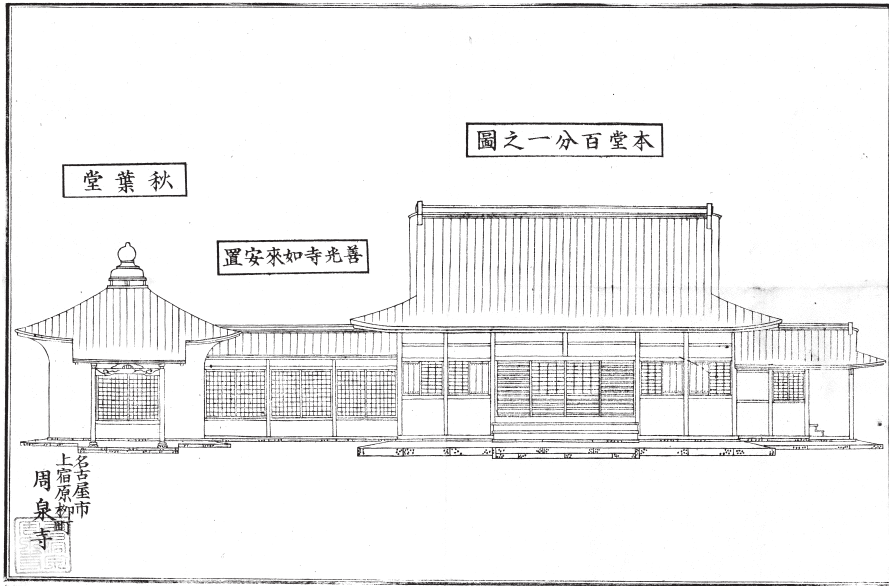
臨時全国宝物取調局臨時鑑査掛 正七位 八木 雕印

臨時全国宝物取調書記兼鑑査掛 川崎千虎印

臨時全国宝物取調掛 正七位 岡倉覚 三印

臨時全国宝物取調委員 從四位 濱尾 新印

臨時全国宝物取調委員長 正三位勲二等 九鬼隆 一印



十一、周泉寺秋葉堂・本堂百分一之図

十二、當寺子安地藏大菩薩略縁起

當寺子安地藏大菩薩略縁起

謹ついでて當寺地藏菩薩の由来を尋たづぬるに人皇七十七代じんわうしじゅうしちだい 後白川ごしらかわ 法皇は 鳥羽院第四の皇子にして十善の帝位を継つがせ給たまひ仁沢徳風四海に洽かひく又深く三宝さんぼうに帰依きゑいし宝祚ほうそ延長えんじやう万民豊樂ばんみんほうらくを祈いのらせ給たまふに或時皇后あるときこうごう 建春門院御懷妊けんしゆんもんいんごくわいにん在いましければつららえりよ 叡慮めぐらを回たまし給たまひ菩薩の大悲だいひ区々くくなりと雖殊いへどもことに女人の難産なんさんを憐愍れんみんし給たまふは地藏菩薩ぢざうぼさつに如しくはなし即ち彼の形像ぎやうざうを造立ざうりふして皇后の安産あんさんを祈いのらんと辱かたじけなくも御手おんてづから此の形像ぎやうざうを彫刻てうこくし給たまひ法然上人ほふねんしやうにんに勅ちやくして開眼かいげん供養くやうせしめ日々信敬しんけうし給たまひしに感応かんおう空むなしならず太子たいし 憲仁親王安々御誕生のりひとしんのうやすくごたんじやう在いましければ叡信えいしん弥いよく 深くやがて御飾おんかざりを下をささせ給たまひ更に上人じやうにんを請せうじて圓頓戒えんどんかいを請うけさせ給たまふ之れを行真法皇ぎやうしんほふわうと号ごうして奉ほうる法皇即ち彼の尊像そんざうを上人じやうにんに附つして洽かひく都鄙遠近とひゑんじゆんの衆生しゆじやうを結縁けちゑんせしめ給たまひければ上人京都押小路の辺しやうにんけうとをしこじ ほとりに一字ごうを造立ざうりふして此尊像このそんざうを安置あんちし給たまふに洛陽らくやうの男女貴賤なんによきせんを問とはず袖そでをつら



ね踵をつゐで参詣絶ゆることなし

茲に當寺開山深空信立上人行徳高く慈悲深かりしかば諸人の崇敬淺からず或夜一人の高僧枕上に立ち吾はこれ無仏世界の衆生を濟度する六道遊戯の能化なり久しく洛陽に在て有縁を利益すと雖又辺土に至つて広く結縁せんとす汝急ぎ此地に迎來せよと西に向て去り給ふと夢みて京師に上り彼の寺に至つて靈夢を語りければ住持驚き吾も亦靈夢を感じること斯の如し尊像に別れ奉ること最悲しと雖仏意如何ともせん術なしと則ち靈像を譲りければ深空上人辱く守護し來りて一字を造立し安置し奉りぬ夫より遠近の男女願をこむるに菩薩の靈験日々に新にして難産することなし遂に子安地藏菩薩と稱し今日に至れり此寺古へは法成寺と号せしかと法皇の御彫刻法然の御開眼なることを知らしめん為め法皇山法然寺とは改められたりとなり是の如く実に地藏大菩薩の御誓願は不可思議にして一切衆生の拔苦与樂は申迄もなく種々無量の身形を現して一切受苦の衆生を濟度し特に重苦の衆生あらば吾代りて其苦を受けんと誓ひ給ふ今や該の靈験諸所に現はる冀くば有

縁の衆生此の菩薩を尊崇し現當二世の妙樂を皆共に圓滿せられんことを

名古屋市中区旅籠町

法皇山法然寺

十三、清水吒枳尼真天略縁起

清水吒枳尼真天略縁起

抑当山に安置し奉る鎮守清水吒枳尼真天は人皇五十二代嵯峨天皇の御宇弘仁十二年丑二月弘法大師熱田神宮に御駐錫の時靈夢に依り呼続の浜に七堂伽藍を建立され真言宗に属し往古は戸部道場寛蔵寺と称し一山十二坊ありて大伽藍なりしと云ひ伝ふ建久元年八月右大将源頼朝公御上洛の時武運長久を祈り給ふ後文明六甲午年二月義山禪師当山を再興し明谷禪師を請して中興の開祖とし曹洞宗に改め長楽寺と改称す永正五戊辰年五月今川氏親公深く尊天を帰依し、御学頭、蓮花王院、慈照院、福寿院、善海院、可笑軒、槃陸庵の六院を再建して寺領宝物等をも寄附し玉へり其後文禄年中豊臣秀吉公朝鮮征伐の時武運長久を祈り大勝利を得られた慶長八年癸卯八月当国の城主徳川忠吉公（徳川家康公四男）御悩のをり尊天に祈誓をこめ給ひしに不思議にも七日を出すして平癒したまへり然るに寛永十一年乙亥の夏祝融の災に罹り流石結構美麗の諸堂も

一朝烏有に帰せり時の住持永久和尚寢食を忘れて正保三年丙戌九月大書院を慶安四年十二月客殿を再建し寛文六年八月山門再建後元禄十七甲申年十二月石崖和尚先師の意志を嗣ぎ真天堂及諸堂再建あり明治六年春当山に寺子屋として児童を集め呼続小学校開設まで児童教育に勉めたり明治四十三年二月初午の折従一位侯爵久我通久卿、従二位子爵前田利鬯卿をはじめ多くの信徒の發起により昇格大祭を執行せりあはれ大方の善男善女たちこの尊天を祈らば無量の福宝雲の如くに集り風の如くに來ると言ひ伝ふ

昇格	發願主	久喜機外
現住	職	久喜風外
昇格發起人	従一位侯爵	久我通久
從二位勲四等子爵	前田利鬯	
名譽贊助員		

從一位公爵	徳大寺実則殿	從二位勲二等子爵	松平乗承殿
正二位公爵	二条基弘殿	從三位子爵	三宅康寧殿
正二位侯爵	松方正義殿	從三位子爵	諏訪忠元殿
正二位侯爵	鍋島直大殿	正四位子爵	清岡長言殿

正二位侯爵 蜂須賀茂韶殿 従三位男爵 藤枝雅之殿

従四位侯爵 徳川義親殿 正五位男爵 石河光熙殿

従二位伯爵 渡辺千秋殿 正四位文学博士 萩野由之殿

正二位伯爵 津軽承昭殿 御歌所主事 阪 正臣殿

従二位子爵 黒田清綱殿 前石川県知事  
従三位勲二等 村上義雄殿

従二位子爵 長谷信成殿 従四位勲三等 戸田敬一郎殿

名古屋市南区呼続町 稻荷山

日本名勝 稲荷出  
現道場 清水閣

名鉄名古屋本線桜駅前  
市電桜本町二丁目下車西二丁

## 現代の仏教各宗の五条衣

川口 高風

### 一、現代の僧侶の服装

僧服は仏法服を略した法服ともいわれ、広い意味では袈裟のみならず坐具、褌衫、裙子、それに中国で成立した直裰（綴）や我が国で生まれた改良衣、作務衣など、僧侶の身につけるものすべてをさすようになった。しかし、本来は積尊が制定した仏弟子の衣服すなわち袈裟を意味する。

袈裟は、インドでは身体をおおい寒熱を防ぐものであったが、仏教が中国に伝わると、寒熱を防ぐ衣服はすでにあるところから、その上に搭けて仏弟子の威儀を整えるものとなった。日本では朝廷を中心に受容せられ、僧侶も国家の規制下に入り、法服も宮廷の貴族の服装に準じて規定せられた。さらに仏教の宗派が生まれるや法衣の形態も宗派によって異なるようになった。

このように、元来は大きな布を細かく裁断して縫い合わせ、壞色に染めた五、七、九条の三衣が仏弟子の衣服であった。仏教が

中国や日本に伝来し氣候、風土、風俗が異なるのに従って、袈裟の下に着るものも法衣の一種とみなされるようになった。

現代日本の僧侶の服装は正装（正服）と略装（略服）に分けられる。正装とは司祭者の地位を表現するものであり、正式の法要時に被着する袈裟や直裰（綴）を着た姿である。略装は明治期以後に定まったものが多く、改良衣、改良服とも称された。洋服の形式がとり入れられたものもあり、戦後は洋僧衣、洋行衣、洋服法衣などとも呼ばれていた。略装は宗派による名称や形式は統一されておらず、各宗派で自由に拡大解釈して独自の形式が整えられていった。しかし、略装（略服）という概念は各宗派ともに共通している。

### 二、現代の仏教各宗の五条衣

現在、袈裟の着用方法や形が最も変わったのは、五条衣であろう。略装の五条衣をみれば、宗派が一目でわかるぐらいの相違がみられ、宗派の特徴を出している。これは明治期になって交通機関の利用や従軍僧の袈裟として案出されたともいわれている。これが改良服と併用されて今日の仏教各宗僧侶の最も省略された装束となった。しかも、それが今日でも変化が続いている。たとえば、宗紋とか寺紋を白く染め抜いたり、刺繍をしたり、織り込んだりしている。さらに一層コンパクトにしたり、新しい形の五条衣が誕生しつつあるといっても過言でない。

本来の五条衣は梵語のアントラヴァーサカで、安陀会と訳され

る。下衣とも訳され、下半身をおおう下着である。中国では院内道行作務衣ともいい、室内で着る部屋着とか仕事着であったところから呼ばれた。それが後には縮小され、首から前につるして両肩から胸間に、あるいは左肩から右肩へ威儀でつるして胸をおおう形のものになった。さらに、それを縮小して五条衣を輪の形に折って作った折五条、輪袈裟ともなっていた。掛け方は改良衣、改良服を着用した上から搭けるのが一般的であるが、縮小されていない五条衣（五条袈裟）は直綴（綴）や素絹、空衣、色衣、黒衣などの上から搭ける。なお、改良衣や改良服は宗派によつて特徴がみられ、名称も異なっている。たとえば、天台宗と日蓮宗では道服といわれ、浄土真宗本願寺派では布袍、真宗大谷派は間衣（かんえ、まごろも）という。

次に上座仏教の五条衣から奈良時代に生まれた法相、華嚴、律宗などの奈良仏教、平安時代に生まれた天台宗、真言宗、鎌倉期の浄土宗、時宗、融通念仏宗、浄土真宗、また、臨済、曹洞などの禅宗、それに日蓮宗の五条衣に分類してながめてみる。最初に井筒雅風「僧侶の服装」(上)(下)〔大法輪〕第四十六巻第一号、第四号、第五号 昭和五十四年一月、四月、五月)にあるイラストから関係ある部分のみとりあげ、次に写真によって各種の五条衣を紹介してみよう。なお、江戸期に明から伝えられた黄檗宗は禅宗の分類に入れて考察した。

### 〔上座仏教〕

現在の上座仏教の袈裟は五条衣がほとんどである。筆者が所持している六枚の五条衣の大きさは、

- |                     |                 |
|---------------------|-----------------|
| (1) 縦一八〇センチ<br>メートル | 横二六八センチ<br>メートル |
| (2) 縦一八五センチ<br>メートル | 横二三八センチ<br>メートル |
| (3) 縦二三七センチ<br>メートル | 横二〇五センチ<br>メートル |
| (4) 縦一〇二センチ<br>メートル | 横二〇三センチ<br>メートル |
| (5) 縦一五三センチ<br>メートル | 横二〇三センチ<br>メートル |

である。この中(1)(2)(3)は、ウツタラーサング(中衣)と同じ扱いで上半身をおおうものであった。そのため(4)(5)がアンタラヴァーサカ(下衣)とされており、縦九〇センチ、横二〇七センチの縷衣(条相のない袈裟)もアンタラヴァーサカと同じにみなされている。

これはバングラディッシュより愛知学院大学大学院へ留学していたギヤナ・ラタナ・テラー氏よりの御教示であるが、条はミシンで縫われており、日本の袈裟よりもかなり大きい。本来、五条衣は三衣のみの着用の場合、一番下に着けるものであった。そのため腰に巻きつけて下半身をおおう役目をもっていた。その後、涅槃僧(裙子)が作られたところから、涅槃僧が下半身をおおうものになっていった。

## 〔奈良仏教系〕

法相、華嚴、律宗などの南都六宗の僧は、紐部を左肩に掛けて右脇へタスキ掛けとする加行袈裟で統一している。名称は奈良袈裟、禪袈裟、南都袈裟ともいわれ、律宗では敬護袈裟ともいつている。加行袈裟は戦後に統一して制定されたもので、略儀の法要などでは五条衣（緋紋白）が用いられている。道中の装いとして金襴の五条衣も用いるが、真言律宗の西大寺では興福寺の迷企羅大将像が着装しているものと同じ前五条を使用している。

## 〔天台宗系〕

金襴などで輪にした輪袈裟や折五条、三千院門跡（梶井宮）より特許された由来による梶井袈裟といわれる畳袈裟を搭げる。信徒は半袈裟を用いる。法要では紋白の大五条（五条袈裟）や有職五条（山門五条）、看経には小五条を搭けており、回峰行者は、白木綿の小五条を搭げる。なお、紐は丸打ちの緒である。寺院内の常服として高位の僧は三緒の五条袈裟（三緒袈裟）が許されている。

## 〔真言宗系〕

輪袈裟または折五条とか折袈裟とも呼ばれる畳袈裟を搭げる。信徒は種子袈裟、咒字袈裟ともいわれる輪袈裟の半分を切りとった半袈裟を用いている。折五条は、紐が下部と胸前の二カ所につ

現代の仏教各宗の五条衣

けられて重複した形となっている。豊山派では、大正時代に小野塚幾澄氏が創案した小野塚五条を搭げる。禅宗の絡子と似ているが、紐の細いのが特徴である。法要によっては紋白の五条や威儀五条、割切五条が用いられ、高野山では学道の昇進によって墨袈裟、白袈裟、それに精好（甲）袈裟を着用している。

## 〔浄土宗系〕

輪袈裟を二つ折りにして両端を紐で結んだ折五条や伝導（道）袈裟（種子袈裟・種子衣）を搭げ、信徒は半袈裟を用いる。また、禅宗の絡子に似た威儀細（小五条）も搭げる。ただし、絡子とは異なり環がついていない。後背の表には米、裏は△が縫い取りされている。

法要によっては大師五条、大師衣とも呼ばれる五条袈裟を搭げる。これは天台宗系、真言宗系と同じもので、元祖大師法然上人が在世当時に着用されていたことから呼ばれる。また、威儀細の大きなものの大五条は、禅宗の大掛絡と同じようなもので、左肩上に五条衣を搭げ、右腕に威儀と後背を横にして搭げる。しかし、法要の配役によつては、脇掛けにする場合もある。なお、大五条は肩五条ともいわれる。現在では用いられていないが、大五条ほどの大きさで、威儀は小五条より細くて長い木蘭地の五条袈裟である廬山衣（現在、東京都・一行院蔵）もあった。

時宗は禅宗の絡子に似た前五条を搭げる。法要によつては前五条を大きくした横五条を搭げる。これは左肩から右脇下に搭げる

ところからカバン掛けにするともいわれる。前五条も横五条も環はついておらず、外側の威儀は田相の裏側へ、内側の威儀は田相の表側についている。また、左右の威儀の間は威儀幅分ほどをあけ、内側の威儀は前後ともに白い糸で膝かげた飾りがある。後背はなく、威儀はタスキ状になって背後で縫いつけられている。

融通念仏宗は前袈裟を搭ける。これは時宗の前五条と似ているが、外側の威儀は丸打ちの緒になっている。後背は内側の威儀が結びつけられており、外側の丸打ちの緒は縫いつけられていない。なお、模様の縫い取りはない。時宗の横五条に似た小五条や浄土宗の大師五条と同じ大五条も用いており、輪袈裟である折五条も搭けている。

### 〔浄土真宗系〕

本願寺派では畳袈裟を用いるが、正式には輪袈裟と称している。形は天台宗の梶井袈裟と類似している。法要には大五条を用いるが、小五条袈裟は通常の晨朝しんじょう勤行の時に着用する。その他の小五条には墨袈裟や黄袈裟がある。門徒は門徒式章を搭ける。

真宗大谷派は畳袈裟か輪袈裟を用いる。勤行などの礼式には五条袈裟を用いるが、晨朝の内陣出仕の時のみは青袈裟を搭ける。




これは晨朝袈裟ともいわれる。また、平常に常服として用いる墨袈裟もある。ただし、黄袈裟はない。門徒は略肩衣りやくかたぎぬを搭ける。

浄土真宗の各派の御門主は、帰敬式において三緒袈裟を着用する。これは天台宗の高位の僧が用いていたものと同じで、親鸞聖

人が青蓮院で得度し、叡山に登って修学したところから浄土真宗の御門主にも勅許されることになった。しかし、浄土真宗各派の三緒袈裟の威儀は、天台宗の三緒袈裟よりも短いようである。

### 〔禅宗系〕

臨済、曹洞、黄檗の各宗では絡子を搭ける。絡子は掛絡ともいわれる五条衣で、吊り紐（棹）には環がついている。高位の僧は正装時に大掛絡を肩に搭けるが、搭け方は妙心寺派では背後に、大徳寺派、相国寺派は正面（前に搭ける）に、東福寺派、南禅寺派は横に搭ける。曹洞宗も同じく横に搭けるが、両肩の外側に搭けている。黄檗宗は妙心寺派と同じく背後に搭けており、大掛絡は宗派によって搭け方が異なっている。

臨済宗と曹洞宗では棹の長さ、太さ、後背の縫い取りが異なっている。棹の長さは臨済宗の方が長く、太くて田相も大きい。黄檗宗は臨済宗よりもやや短くて細く、田相も少し小さい。後背の縫い取りは臨済宗が、曹洞宗は、黄檗宗はである。田相の裏面は、臨済宗が同色の一枚布を帖はっているのに対し、曹洞宗は白布で額装となっている。黄檗宗も同じ白布で額装である。黄檗宗は近年まで絡子はなかったが、臨済宗妙心寺派の影響によって制定されたといわれる。そのため大きさや棹の太さなどは臨済宗と曹洞宗の間ほどである。なお、臨済宗では盆経などの時に五条衣を小さくした執事衣しゅうじいを搭けることもある。在家の参禅者には居士絡子が制定されている。

〔日蓮宗系〕

普段は五条衣を折り畳んだ折五条を左肩より右脇へ掛ける。これは明治八年に青森県の蓮華寺住職角田堯現氏が考案したものといわれたり、日露戦争の時、従軍布教のために創案された肩袈裟ともいわれている。法要では五条袈裟を掛けるが、その他に修法五条、清浄五条、小五条などもある。なお、信徒は襷袈裟たすき、または半袈裟（輪袈裟）を用いている。

本稿を執筆するにあたり、各宗の法衣店様より多くの御教示を得た。また、写真やイラストは「中外日報」や著作・論稿・商報などから転載させていただいた。ここに厚くお礼を申し上げます。

〔著作〕・〔論稿〕

- 中山玄雄 『天台宗法式作法集』（昭和四十四年七月 金聲堂）
- 『天台宗実践叢書』第五卷（平成四年三月 大蔵舎）
- 『図説天台宗の法式』第一卷（平成十六年二月 齋々坊）
- 『真言宗実践双書』第六卷（昭和五十七年十一月 大蔵舎）
- 『真言宗荘厳全書』（平成九年三月 四季社）
- 『図説真言宗の法式』基礎篇 坤（平成十八年九月 齋々坊）
- 『写真図解浄土宗の行儀』（昭和四十九年五月 浄土宗東京教区教務所）
- 宍戸栄雄 『本堂の荘厳——付法服と執持——』（昭和五十二年八月 浄土宗近畿地方教化センター）
- 『浄土宗荘厳全書』（平成八年六月 四季社）
- 『新任職必携』（平成十八年十月 西山浄土宗宗務所）

現代の仏教各宗の五条衣

『図説浄土宗の法式』第一卷（平成二十三年二月 齋々坊）

『本願寺史』第二卷（昭和四十三年三月 浄土真宗本願寺派）

『浄土真宗本願寺派の荘厳全書』（平成八年八月増補改訂 四季社）

『浄土真宗本願寺派 法式規範（改訂版）』（平成十一年一月 本願寺出版社）

『真宗大谷派の荘厳全書』（平成六年七月 四季社）

『図説日蓮宗の法式』第一卷（平成八年七月 齋々坊）

『日蓮宗荘厳全書』（平成十三年四月 四季社）

『日蓮宗実践叢書』第四卷（平成十五年四月 大蔵舎）

井筒雅風 『袈裟史』（昭和四十年二月 文化時報社）

井筒雅風 『法衣史』（昭和四十九年十月 雄山閣出版）

『仏具大事典』昭和五十七年九月 鎌倉新書

『幕末・明治服装で綴る日本の風俗史』（昭和六十二年十月 中央文化出版株式会社）

井筒雅風 『僧侶の服装』（大法輪）第四十六卷第一号、第四号、第五号

昭和五十四年一月、四月、五月

井筒雅風 『法衣のいろいろ』（大法輪）第六十九卷第四号 平成十四年四月

月）

『商報』・『カタログ』

『安藤商報』（法衣と仏具）

『池澤法衣仏具店商報』

『井筒商報』（御法務の栞）

『大西商報』（浄土荘厳）

『川勝法衣商報』

『北六法衣店商報』

『後藤利商報』

『さつま屋法衣店商報』

『澤部法衣店商報』

『柴田法衣店商報』

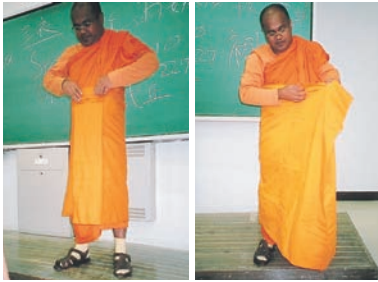
『御法衣・京仏具』（松本屋）

『湯浅興七商店商報』（御法衣と御仏具）



〔上座仏教〕

愛知学院大学 教養部紀要 第59巻第3・4合併号



五条衣を腰に巻きつけて着用する順序

②

①



タイの五条衣



袈裟を搭けたタイの比丘



⑤



④



③



五条衣を搭けた姿(東大寺)



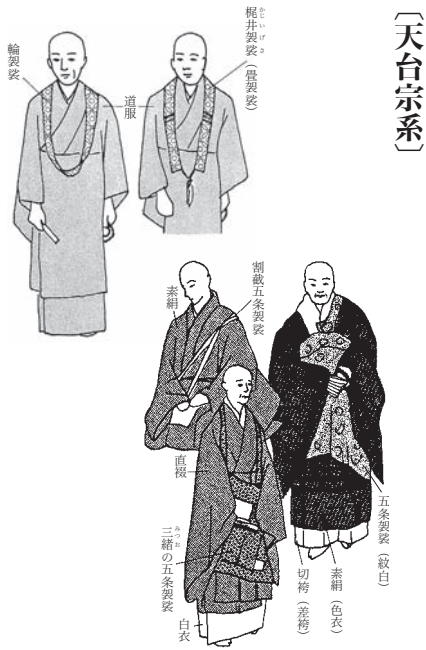
加行袈裟



加行袈裟を搭けた姿



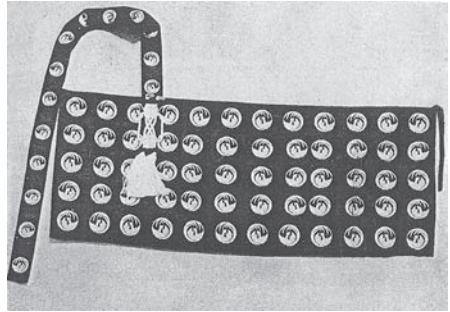
〔奈良仏教系〕



〔天台宗系〕



五条衣を搭けた横と後姿 (法隆寺)



紋白の五条衣 (法隆寺)



輪袈裟



梶井袈裟



半袈裟



折五条



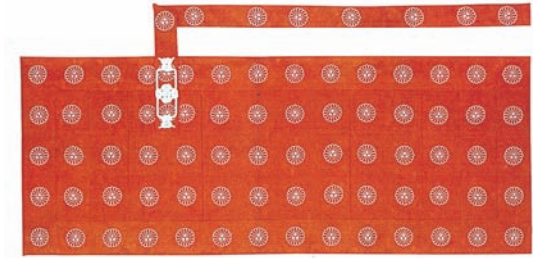
前五条を搭けた迷企羅大将彫像 (興福寺)



前五条 (西大寺)



小五条を搭けた回峰行者



紋白大五条



有職五条



小五条 (白木綿)



大五条 (加行得度用)

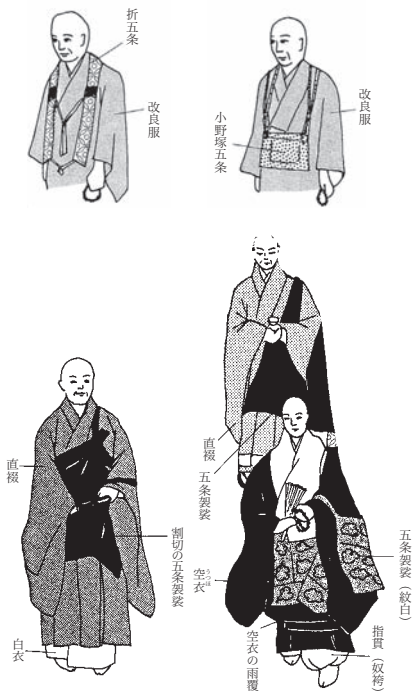


三緒の五条袈裟



小五条

現代の仏教各宗の五条衣



紋白の五条

〔真言宗系〕



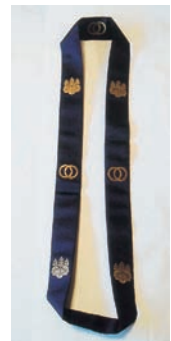
三緒の五条袈裟を搭げた後姿



略袈裟



半袈裟



輪袈裟



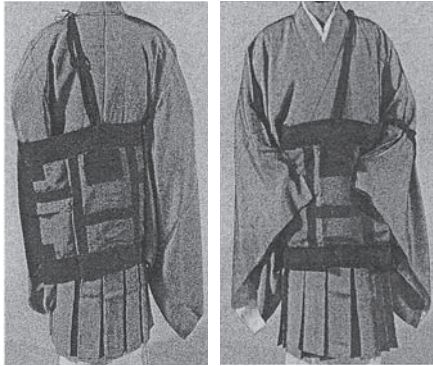
威儀五条を被着した姿



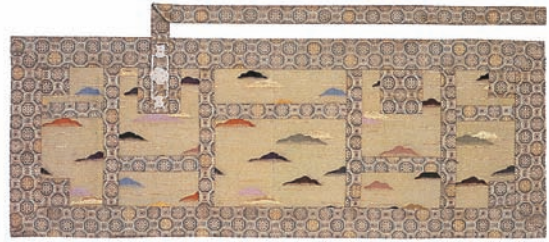
小野塚五条



折五条



割切五条を搭けた正面と後姿



威儀五条



割切五条



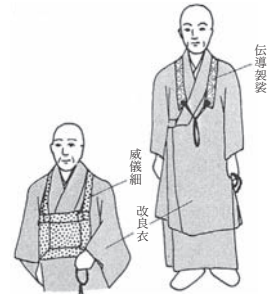
威儀細



半袈裟



伝導袈裟(種子袈裟・種子衣)



〔浄土宗系〕



后背の表の  
縫い取り



后背の裏の  
縫い取り



折五条





大師五条



大五条



大師衣



大五条を搭けた姿



時宗の前五条



廬山衣の表



廬山衣の裏



大五条の脇掛け



融通念仏宗の小五条



融通念仏宗の前袈裟と折五条



時宗の横五条



融通念仏宗の御回在の途中で  
(平成3年10月「融通念仏宗  
—その歴史と遺宝—」より)

大五条の着用

小五条の着用

折五条の着用



時宗の横五条を搭けた姿



伝導袈裟



折五条



威儀細

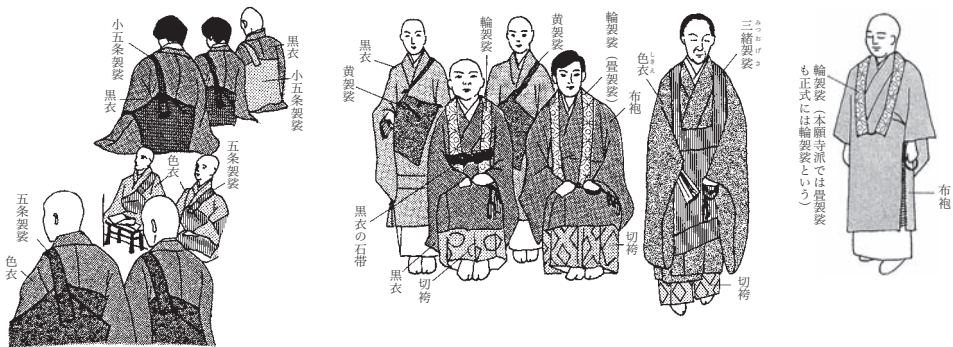


大師五条

現代の仏教各宗の五條衣

【浄土真宗本願寺派】

〔浄土真宗系〕



黄袈裟を搭けた姿



黄袈裟



墨袈裟を搭けた姿



輪袈裟を搭けた姿



浄土真宗本願寺派輪袈裟(黄袈裟)



墨袈裟(浄土真宗本願寺派)



墨袈裟の威儀





門徒式章



五条袷袢を搭けた姿



五条袷袢



小五条



門徒略肩衣



畳袷袢



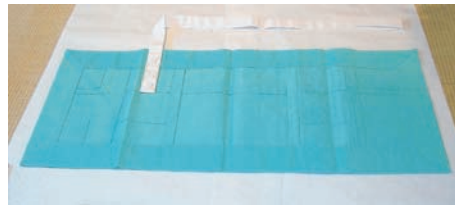
輪袷袢

真宗大谷派

【真宗大谷派】



五条袷袢 (部分)



青袷袢 (晨朝袷袢)



墨袷袢 (真宗大谷派)



墨袷袢の威儀



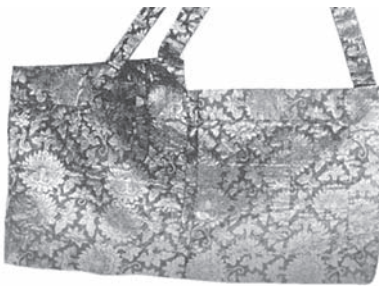
東本願寺の大谷光見法主の三緒袈裟の姿



大谷本願寺の大谷光道当主の三緒袈裟の姿  
(「中外日報」平成18年1月1日より)



三緒袈裟をかけた大谷光道当主の横の姿



正親町天皇御下賜三緒袈裟  
(『本派本願寺 真宗写真宝典』より)



真宗興正寺第三十世本賢上人の帰敬式  
(平成23年4月 特別展観「興正寺展」より)



臨濟 曹洞 黄檗 各宗の絡子の裏面



臨濟宗の絡子



〔禪宗系〕



曹洞宗の絡子



黄檗宗の絡子



臨濟宗の大掛絡





臨濟宗の執事衣



臨濟宗の居士絡子



執事衣を搭けた姿と後姿



後背の縫い取り(臨濟宗)



後背の縫い取り(曹洞宗)



曹洞宗の大掛絡を搭けた姿



後背の縫い取り(黄檗宗)



天龍寺派佐々木容道管長晋山式に参列した  
臨黄各派管長、師家、宗務総長ら  
(平成21年10月17日「中外日報」より)



博多・大徳寺派崇福寺の岩月海洞住職晋山式に  
参列した各派の管長、師家ら  
(平成22年10月7日「中外日報」より)



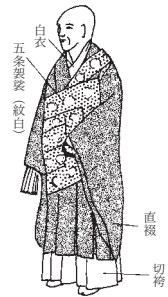
半袈裟  
(輪袈裟)



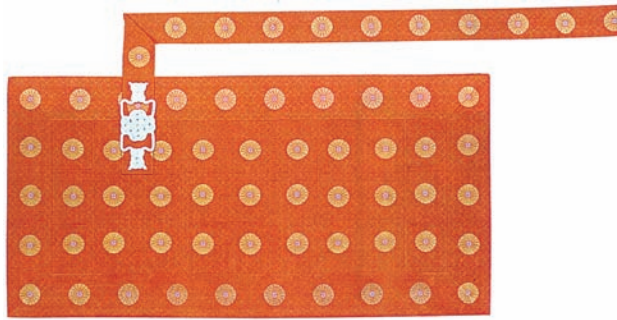
たすき  
襷袈裟



折五条



〔日蓮宗系〕



五条袷袋



五条袷袋を搭けた姿



修法五条



小五条



清浄五条

## 『三才図会』草木八巻〜十一巻の出典

——『救荒本草』『茹草編』からの引用——

河野敏宏

## 【目次】

- 1 はじめに（本稿の目的と結論）
- 2 『証類本草』と一致しない条目
- 3 『救荒本草』からの引用
- 4 『茹草編』からの引用
- 5 おわりに（今後の課題）

## 1 はじめに（本稿の目的と結論）

『三才図会』草木一巻〜十一巻の大部分の条目の植物名・配列・注文は、「証類本草」収録条目のうちの、図及び『図経本草』注文を掲載している条目のそれとよく一致していることから、それらの条目は「証類本草」当該条目を引用したと考えられる。<sup>(2)</sup>しかし、この草木一巻〜十一巻のうち、草木八巻〜十一巻においては、草木一巻〜七巻とは異なり、「証類本草」からの引

『三才図会』草木八巻〜十一巻の出典

用に加えて、「証類本草」以外の書から引用したとみられる条目・注文もある。

本稿は、『三才図会』草木八巻〜十一巻における、「証類本草」と一致しない注文を収録している全条目を明示するとともに、それらの条目・注文の多くがどのような書から引用されているのかを明らかにしようとするものである。<sup>(3)</sup>

本稿の結論を予め示せば次のようである。

1. 草木八巻〜十一巻においては、「証類本草」に加えて、『救荒本草』や『茹草編』からも条目・注文を引用している。
2. 両書はいずれも、「証類本草」同様、図を多数掲載している本草書であるから、この引用実態は、『三才図会』の編纂方針の一つが「図を多数掲載する本草書を重視する」というものであったことをよく示している。
3. 『三才図会』は、「証類本草」の如き伝統的な本草書を引用すると同時に、『茹草編』の如き最新の本草書も引用している。

これらの点について、以下、詳述する。

## 《使用テキスト》

『三才図会』……………『三才圖會』上中下（上海古籍出版社。一九八八年六月。）

『証類本草』……………『重修政和經史證類備用本草』（晦明軒

本政和本草』(南天書局有限公司。中華民國六五「一九七六」年八月。)

『經史證類大觀本草(大觀本草)』(國立中國醫藥研究所。中華民國六〇「一九七一」年十二月。)

『救荒本草』……………明嘉靖四年山西太原重刻本。『中國古

代版画叢刊2』(鄭振鐸編。上海古籍出版社。一九八八年八月。)所収の影印。

『茹草編』……………夷門廣牘本。『叢書集成初編 筍譜(及其他兩種)』(中華書局。一九九一年。)所収の影印。

『野菜譜』……………借月山房彙鈔本。『叢書集成初編 救

文淵閣四庫全書……………「四庫全書電子版」全文檢索版(迪志文化出版有限公司。二〇〇四年。)

## 2 「証類本草」と一致しない条目

『三才図会』草木八卷く十一卷には全一八八条の条目が収録されているが、これらの中には「証類本草」と一致しない条目・注文が含まれている。この事実を明示するため、『三才図会』草木八卷く十一卷の全一八八条を「証類本草」当該条目と対照させ、

【表1】『三才図会』全条目と他書との比較」として示す。

【表1】『三才図会』全条目と他書との比較

【表1】の項目は、上から順に次のようである。

- (A) 『三才図会』条目の序数。<sup>(4)</sup>
- (B) 『三才図会』各条目の植物名。
- (C) その条目の『三才図会』における所在。すべて草木部。
- (D) 『三才図会』条目に該当する「証類本草」条目、の序数。<sup>(5)</sup>「証類本草」に該当する条目が無い場合には、「※証類無し」と記す。
- (E) 「証類本草」各条目の植物名。(D)(E)が複数あるものは、それらの各条目の注文をとりあわせることによって『三才図会』注文と一致することを示す。

(F) 『三才図会』の注文と「証類本草」注文との一致度。○は一致・△は部分的に一致・×は一致せず。『三才図会』条目に、「証類本草」の注文と『救荒本草』の注文とが引用されていて、両注を合わせると一致する場合には、「『救荒本草』と合わせて○」と記す。

311	310	309	308	307	306	305	304	303	302	301	300	299	298	297	296	(A)
石南	橡	梓	南燭	枕榔	白楊	榲若	黄蘗	莽草	椿樗	棟	柳	巴豆	訶梨勒	皂莢	椒	(B)
八卷木類	八卷木類	八卷木類	八卷木類	八卷木類	八卷木類	八卷木類	八卷木類	八卷木類	八卷木類	八卷木類	八卷木類	八卷木類	八卷木類	八卷木類	八卷木類	(C)
736	735	734	732	725	724	723	721	719	717	716	715	711	714	713	712	(D)
石南	橡實	梓白皮	南燭枝葉	枕榔子	白楊皮	榲若	黄蘗根	莽草	椿木葉	棟實	柳華	巴豆	訶梨勒	皂莢	蜀椒	(E)
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	(F)
																(G)
																(H)
																(I)

(G) 「証類本草」以外の書から注文が引用されている場合の、その書における当該条目の植物名。  
 (H) その書名。ただし、当該書が特定できない場合、あるいは『三才図会』に典注があっても、当該書が佚書であったりして、その注文の一致を確認できない場合には、「(出典を特定できない)」と記す。  
 (I) 『三才図会』条目の注文と当該書注文との一致度。○は一致・△は部分的に一致。  
 なお、〳〳〳〳は、『三才図会』の巻の切れ目を示す。



333	332	331	330	329	328	327	326	325	324	323	322	321	320	319	318	317	316	315	314	313	312	(A)
菌桂	楮桃樹	棠梨樹	桑樹	刺楸	東青樹	夜合樹	茶樹	芫花	櫻櫚	賣木子	欒華	釣藤	木鼈子	欒荊	接骨木	杉木	南藤	椰子	鼠李	益智	木天蓼	(B)
八卷木類	八卷木類	八卷木類	八卷木類	八卷木類	八卷木類	八卷木類	八卷木類	八卷木類	八卷木類	八卷木類	八卷木類	八卷木類	八卷木類	八卷木類	八卷木類	八卷木類	八卷木類	八卷木類	八卷木類	八卷木類	八卷木類	(C)
548 / 549 / 550	563	※証類無し	620	734 / 785	572	655	632	783	781	769	764	763	761	759	753	752	750	742	741	739	737	(D)
桂／牡桂／菌桂	楮實		桑根白皮	梓白皮／楸木皮	女貞實	合歡	茗苦椽	芫花	櫻櫚子	賣子木	欒華	釣藤	木鼈子	欒荊	接骨木	杉材	南藤	椰子皮	鼠李	益智子	木天蓼	(E)
○	○		△ 〔救荒本草〕と合わせて○	○	○	△ 〔救荒本草〕と合わせて○	△ 〔救荒本草〕と合わせて○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	(F)
		棠梨樹	桑椹樹			夜合樹	茶樹															(G)
		〔救荒本草〕	〔救荒本草〕			〔救荒本草〕	〔救荒本草〕															(H)
	○	△				△	△															(I)

354	353	352	351	350	349	348	347	346	345	344	343	342	341	340	339	338	337	336	335	334	(A)
落鴈木	金櫻子	藿香	沈香	丁香	麩樹	楓	杜仲	蔓荊	牡荊	五加皮	漆樹	藥木	酸棗	榆	柏	槐實	五倍子	松	蜜蒙花	伏牛花	(B)
九卷木類	九卷木類	九卷木類	九卷木類	九卷木類	九卷木類	九卷木類	九卷木類	九卷木類	九卷木類	九卷木類	九卷木類	九卷木類	九卷木類	九卷木類	九卷木類	九卷木類	九卷木類	九卷木類	八卷木類	八卷木類	(C)
589	585	579	576	575	574	571	570	567	566	565	564	562	561	560	556	552	657	551	660	658	(D)
落鴈木	金櫻子	藿香	沈香	丁香	麩核	楓香脂	杜仲	蔓荊實	牡荊實	五加皮	乾漆	藥木	酸棗	榆皮	栢實	槐實	五倍子	松脂	蜜蒙花	伏牛花	(E)
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	○	○	(F)
																			(G)		
																			(H)		
																			(I)		

(出典を特定できない)

375	374	373	372	371	370	369	368	367	366	365	364	363	362	361	360	359	358	357	356	355	(A)
冬葵子	薑	虎杖	海桐皮	衛矛	菴摩勒	沒藥	烏藥	白棘	猪苓	山茱萸	秦皮	厚朴	枳樹〔枳實〕	蕪荑	龍腦香	騏驎竭	山梔	檳榔	吳茱萸	竹	(B)
十卷蔬類	十卷蔬類	九卷木類	九卷木類	九卷木類	九卷木類	九卷木類	九卷木類	九卷木類	九卷木類	九卷木類	九卷木類	九卷木類	九卷木類	九卷木類	九卷木類	九卷木類	九卷木類	九卷木類	九卷木類	九卷木類	(C)
911	142	656	652	651	649	643	642	641	640	635	633	631	629 / 630	628	626	625	624	623	622	621	(D)
冬葵子	生薑	虎杖	海桐皮	衛矛	菴摩勒	沒藥	烏藥	白棘	猪苓	山茱萸	秦皮	厚朴	枳殼／枳實	蕪荑	龍腦香	紫鑛騏驎竭	梔子	檳榔	吳茱萸	竹葉	(E)
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	(F)
																					(G)
																					(H)
																					(I)

397	396	395	394	393	392	391	390	389	388	387	386	385	384	383	382	381	380	379	378	377	376	(A)
蕨	茄	馬蘭頭	戟菜	繁婁	蒜	葫	薄荷	香薷	水蘇	蘇	假蘇	白襄荷	薤	韭	葱	龍葵	菘菜	芥菜	瓜	蕪菁	莧	(B)
十巻蔬類	十巻蔬類	十巻蔬類	十巻蔬類	十巻蔬類	十巻蔬類	十巻蔬類	十巻蔬類	十巻蔬類	十巻蔬類	十巻蔬類	十巻蔬類	十巻蔬類	十巻蔬類	十巻蔬類	十巻蔬類	十巻蔬類	十巻蔬類	十巻蔬類	十巻蔬類	十巻蔬類	十巻蔬類	(C)
938	961	※証類無し	967	962	956	955	951	950	949	948	946	947	944	943	942	933	928	926	919	918	912	(D)
蕨	茄子		戟菜	繁婁	蒜	葫	薄荷	香薷	水蘇	蘇	假蘇	白襄荷	薤	韭	葱實	龍葵	菘	芥	瓜蒂	蕪菁	莧實	(E)
△	○		○	○	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	○	△	○	○	(F)
		馬蘭頭																				(G)
		『救荒本草』																				(H)
		(出典を特定できない)																				(I)
																						○

419	418	417	416	415	414	413	412	411	410	409	408	407	406	405	404	403	402	401	400	399	398	(A)
芋	鐵掃帚	蛇葡萄	仏指甲	鷺児腸	藺蒿	薺菜	地瓜児	水斬	苦賣	刀豆	紫豇豆	甜菜	扁豆	瓠	蓴	鹿角菜	萵苣菜	苜蓿	胡荽	菠稜	同蒿	(B)
十卷蔬類	十卷蔬類	十卷蔬類	十卷蔬類	十卷蔬類	十卷蔬類	十卷蔬類	十卷蔬類	十卷蔬類	十卷蔬類	十卷蔬類	十卷蔬類	十卷蔬類	十卷蔬類	十卷蔬類	十卷蔬類	十卷蔬類	十卷蔬類	十卷蔬類	十卷蔬類	十卷蔬類	十卷蔬類	(C)
※証類無し	※証類無し	※証類無し	※証類無し	※証類無し	※証類無し	937	※証類無し	959	972	※証類無し	※証類無し	945	889	954	958	973	964	936	913	971	915 /914	(D)
						薺		水斬	苦賣			苳菜	扁豆	苦瓠	蓴	鹿角菜	白苳	苜蓿	胡荽	菠稜	同蒿 /邪蒿	(E)
						△ 〔救荒本草〕と合わせて○		△ 〔救荒本草〕と合わせて○	△ 〔救荒本草〕と合わせて○		△ 〔救荒本草〕と合わせて○	○	○	△	○	○	△	○	○	○	○	(F)
芋根	鐵掃帚	蛇葡萄	仏指甲	鷺児腸	藺蒿	薺菜	地瓜児苗	水斬	苦賣菜	刀豆苗	紫豇豆苗	枸杞										(G)
〔救荒本草〕	〔救荒本草〕	〔救荒本草〕	〔救荒本草〕	〔救荒本草〕	〔救荒本草〕	〔救荒本草〕	〔救荒本草〕	〔救荒本草〕	〔救荒本草〕	〔救荒本草〕	〔救荒本草〕	〔救荒本草〕										(H)
○	○	○	○	○	○	△	○	△	△	○	○	△										(I)

440	439	438	437	436	435	434	433	432	431	430	429	428	427	426	425	424	423	422	421	420	(A)
荔枝	胡桃	龍眼	燈鷺兒	碎米薺	烏藍擔	狗脚跡	水菜	牛尾温	浮薺	眼子菜	野落籬	天藕兒	芋	慈菰	甘露	老鴉蒜	絲瓜	雞腿兒	野山菜	野胡蘿蔔	(B)
十一卷菓類穀類	十一卷菓類穀類	十一卷菓類穀類	十卷蔬類	十卷蔬類	十卷蔬類	十卷蔬類	十卷蔬類	十卷蔬類	十卷蔬類	十卷蔬類	十卷蔬類	十卷蔬類	十卷蔬類	十卷蔬類	十卷蔬類	十卷蔬類	十卷蔬類	十卷蔬類	十卷蔬類	十卷蔬類	(C)
829	842	644	※証類無し	※証類無し	※証類無し	※証類無し	※証類無し	※証類無し	※証類無し	※証類無し	※証類無し	※証類無し	826	469	※証類無し	※証類無し	※証類無し	※証類無し	※証類無し	※証類無し	(D)
荔枝子	胡桃	龍眼											芋	剪刀草							(E)
○	△	○											○	○							(F)
	胡桃樹		燈蛾兒	碎米薺	烏藍擔	狗脚跡	水菜	牛尾温	浮薺	眼子菜	野落籬	天藕兒			甘露子	老鴉蒜	絲瓜苗	雞腿兒	野山菜	野胡蘿蔔	(G)
	『救荒本草』		『茹草編』	『茹草編』	『茹草編』	『茹草編』	『茹草編』	『茹草編』	『茹草編』	『茹草編』	『茹草編』	『茹草編』			『茹草編』	『救荒本草』	『救荒本草』	『救荒本草』	『救荒本草』	『救荒本草』	(H)
△			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○	○	○	○	○	(I)

462	461	460	459	458	457	456	455	454	453	452	451	450	449	448	447	446	445	444	443	442	441	(A)	
林檎	甘蔗	枇杷	柿	木瓜	鶏頭	櫻桃	菱	覆盆子	栗	葡萄	棗	橘柚	蓮	桐	榴	李	桃	杏	梅	郁李	梨	(B)	
十一卷菓類穀類	十一卷菓類穀類	十一卷菓類穀類	十一卷菓類穀類	十一卷菓類穀類	十一卷菓類穀類	十一卷菓類穀類	十一卷菓類穀類	十一卷菓類穀類	十一卷菓類穀類	十一卷菓類穀類	十一卷菓類穀類	十一卷菓類穀類	十一卷菓類穀類	十一卷菓類穀類	十一卷菓類穀類	十一卷菓類穀類	十一卷菓類穀類	十一卷菓類穀類	十一卷菓類穀類	十一卷菓類穀類	十一卷菓類穀類	(C)	
839	832	828	825	824	822	821	819	817 / 818	816	815	813	812	811	728	837	840	835	836	823	718	838	(D)	
林檎	甘蔗	枇杷葉	柿	木瓜	鶏頭實	櫻桃	芡實	蓬蘽／覆盆子	栗	葡萄	大棗	橘柚	藕實莖	桐葉	安石榴	李核人	桃核人	杏核人	梅實	郁李人	梨	(E)	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	△	△	△	△	△	○	△	(F)	
																					梨樹	(G)	
																						『救荒本草』	(H)
																						△	(I)

483	482	481	480	479	478	477	476	475	474	473	472	471	470	469	468	467	466	465	464	463	(A)
雀麥	菘豆	豆	油麻	麻蕒	稷米	麥	丹黍米	薏苡仁	梁米	稻米	胡麻	乳柑	榧子	松子	楊梅	柰	榛	橙	榲桲	橄欖	(B)
十一卷菓類穀類	十一卷菓類穀類	十一卷菓類穀類	十一卷菓類穀類	十一卷菓類穀類	十一卷菓類穀類	十一卷菓類穀類	十一卷菓類穀類	十一卷菓類穀類	十一卷菓類穀類	十一卷菓類穀類	十一卷菓類穀類	十一卷菓類穀類	十一卷菓類穀類	十一卷菓類穀類	十一卷菓類穀類	十一卷菓類穀類	十一卷菓類穀類	十一卷菓類穀類	十一卷菓類穀類	十一卷菓類穀類	(C)
※証類無し	891	870 / 871	320	865	895	884	879	21	877	894 / 876	863	830 / 812	758	844	841	845	849	820	848	847	(D)
	菘豆	生大豆 /赤小豆	白油麻	麻蕒	稷米	小麥	丹黍米	薏苡仁	青梁米	稻米 /粳米	胡麻	乳柑子 /橘柚	榧實	海松子	楊梅	柰	榛子	橙子	榲桲	橄欖	(E)
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	×	○	○	△	○	△	○	○	(F)
雀麥																					(G)
『救荒本草』												(出典を特定できない)	(出典を特定できない)			(出典を特定できない)		(出典を特定できない)			(H)
○																					(I)



この【表1】からわかるように、『三才図会』草木八巻く十一巻に収録されている全一八八条のうち、二八条（二四・九%）が「証類本草」には収録されていない条目である（表中(D)において「※証類無し」と記してあるもの<sup>(6)</sup>）。

また、この二八条以外の、「証類本草」にその植物名が条目として収録されている一六〇条においても、そのうちの二六条は、見出しの植物名は『三才図会』と一致するが、その注文は、「証類本草」の当該注文と一部あるいは全部が一致しない（表中(F)においてそれぞれ「△」「×」と記してあるもの<sup>(7)</sup>）条目である。

つまり、『三才図会』草木八巻く十一巻の全一八八条のうち、「証類本草」に植物名そのものが条目として収録されていない条

目（二八条）、及び、注文の一部あるいは全部が一致しない条目（二六条）、を合わせると五四条となり、それらが全一八八条に占める割合は二八・七%にもものぼっている、ということである。この事実は、『三才図会』編者が、草木八巻く十一巻においては、草木一巻く七巻とは異なり、「証類本草」以外の書も積極的に引用しようとしたことを示している。

なお、こうした部分では、『三才図会』と「証類本草」の条目の配列が一致しない。この点を説明するため、【表1】から『三才図会』395「馬蘭頭」く413「薺菜」の一群の条目を取り出し、【表2】「配列が乱れている例」として示す。

【表2】配列が乱れている例

403	402	401	400	399	398	397	396	395	(A)
鹿角菜	萵苣菜	苜蓿	胡荽	菠薐	同蒿	蕨	茄	馬蘭頭	(B)
									(C)
									(D)
973	964	936	913	971	915 / 914	938	961	※証類無し	(E)
鹿角菜	白苣	苜蓿	胡荽	菠薐	同蒿 / 邪蒿	蕨	茄子		
									(F)
○	△	○	○	○	○	△	○		
								馬蘭頭	(G)
								『救荒本草』	(H)
									(I)

(出典を特定できない)

(出典を特定できない)

この直前の394「蕺菜」までの一連の条目の配列が「証類本草」のそれとよく一致しているのは対照的に、これらの条目に該当する「証類本草」条目の配列(D)はかなり乱れている。「証類本草」に収録されていない条目(※証類無し)と表示してあるものがあったり、『救荒本草』等の注文を引用している条目があったりする点から見ても、これらの一群の条目は、その直前の「証類本草」からまとめて引用した条目に続けて、「証類本草」あるいはその他の書によって任意に追加されたものであると考えられる。その結果として、配列が「証類本草」と一致しなくなったのである。

さて、このように、『三才図会』編者は、草木八巻〜十一巻においては「証類本草」以外の書もいくつか引用しているのである

413	薺菜	十巻蔬類	937	薺	△	△	薺菜	△
412	地瓜兒	十巻蔬類	※証類無し		○		地瓜兒苗	○
411	水蘄	十巻蔬類	959	水蘄	△	△	水蘄	△
410	苦蕒	十巻蔬類	972	苦蕒	△	△	苦蕒菜	△
409	刀豆	十巻蔬類	※証類無し		○		刀豆苗	○
408	紫豇豆	十巻蔬類	※証類無し		○		紫豇豆苗	○
407	甜菜	十巻蔬類	945	苳菜	△	△	枸杞	△
406	藟豆	十巻蔬類	889	藟豆	○			
405	瓠	十巻蔬類	954	苦瓠	△			
404	蓴	十巻蔬類	958	蓴	○			

(出典を特定できない)

が、では、それらはどのような書なのであろうか。「証類本草」以外の書からの引用について、以下、詳述する。

### 3 『救荒本草』からの引用

【表1】(D)において「※証類無し」と記してある全二八条目は、そのすべてが、周定王朱櫛編『救荒本草』と周履靖撰『茹草編』から引用されており(その論拠は後述)、それらの過半数(二七条目)を『救荒本草』が占めている。同書は、その書名から明らかなように、飢饉の際などに代用食物となる植物について解説した本草書である。

『救荒本草』の成立年は、初版が永樂四年「一四〇六」、第二版が嘉靖四年「一五二五」、第三版が嘉靖三四年「一五五五」、第四

版が萬曆一四年「一五八六」、であるから、最終版の第四版によったとしても、『三才図会』（萬曆三十七年「一六〇九」頃刊行）に引用することは十分可能である。

『救荒本草』諸本は三系統に分類できる。<sup>(10)</sup>

(1) 永樂四年初刻本「佚書」及び嘉靖四年蔡天佑重刻本。これらは原本の姿を最もよく伝えており、『救荒本草』の祖本である。

(2) 節略本

(3) 『農政全書』に収録された本。和刻本『救荒本草』はすべてこの系統である。この系統本は、内容に脱落があったり、巻帙の順序、植物の順序が原本と異なっている。また、図も異なっている。

従って、『三才図会』と比較するには、(1)系統の本によらねばならない。本稿では「嘉靖四年山西太原重刻本」によった。<sup>(11)</sup> さて、「証類本草」と一致しない『三才図会』注文の一部は、この『救荒本草』の注文と極めてよく一致する。

その具体例を挙げれば次のようである。『救荒本草』注文の太字になっている部分が『三才図会』注文と一致する注文である。

棠梨 棠梨樹葉似蒼朮葉亦有團葉者有三叉葉者葉邊皆有鋸齒又

似女兒茶葉其葉色白開白花結棠梨如小棟子大味甘酸花葉味微苦。 (『三才図会』草木八巻 三七丁ウ)

棠梨樹 今處處有之生荒野中葉似蒼朮葉亦有團葉者有三叉葉者葉

邊皆有鋸齒又似女兒茶葉其葉色頗黦白開白花結棠梨如小棟子大味甘酸花葉味微苦。

(『救荒本草』木部「花葉實皆可食」)

さらに、【表1】において、『救荒本草』の注文を連続して引用している条目のうちの414「藺蒿」〜424「老鴉蒜」の一一条は、その注文だけではなく、配列までもが『救荒本草』とよく一致している。その実態を【表3】『救荒本草』と配列が一致している例として示す。

【表3】『救荒本草』と配列が一致している例

414	藺蒿	十卷蔬類	※証類無し	(A)	(B)	(C)	(D)	(E)	(F)	(G)	(H)	(I)
415	鷺兒腸	十卷蔬類	※証類無し	○						藺蒿	『救荒本草』	○
416	仏指甲	十卷蔬類	※証類無し	○						鷺兒腸	『救荒本草』	○
417	蛇葡萄	十卷蔬類	※証類無し	○						仏指甲	『救荒本草』	○
										蛇葡萄	『救荒本草』	○

【表3】の『救荒本草』条目の配列は、『救荒本草』該当部分の条目を適宜抜粋した順序とよく一致している。この事実と、前述の、注文内容が極めて良く一致している事実とを考え合わせれば、『三才図会』における『救荒本草』と一致する条目・注文は、『救荒本草』から引用されたものであると考えられる。また、『救荒本草』から引用されたと考えられる条目には、上

これらの『救荒本草』条目(G)の、『救荒本草』そのものにおける配列は以下のようである。

418	鐵掃帚	十巻蔬類	※証類無し	鐵掃帚	『救荒本草』	○
419	苧	十巻蔬類	※証類無し	苧根	『救荒本草』	○
420	野胡蘿蔔	十巻蔬類	※証類無し	野胡蘿蔔	『救荒本草』	○
421	野山菜	十巻蔬類	※証類無し	野山菜	『救荒本草』	○
422	鷄腿兒	十巻蔬類	※証類無し	鷄腿兒	『救荒本草』	○
423	絲瓜	十巻蔬類	※証類無し	絲瓜苗	『救荒本草』	○
424	老鴉蒜	十巻蔬類	※証類無し	老鴉蒜	『救荒本草』	○

……藺蒿……(27)……鷺兒腸……(67)……仏指甲……(2)……蛇葡萄……(11)……鐵掃帚……(12)……芋根……(3)……野胡蘿蔔……(2)……野山菜……(2)……鷄腿兒……(1)……老鴉蒜……(16)……絲瓜苗……『上巻・草部』「……(数字)……」は、当該条目の間に掲載されている無関係な他の条目を省略した部分。数字は省略した条目数。」

記の「※証類無し」と記してある一七条目以外に、「証類本草」の注文に加える形でその注文が引用されているものが九条目ある【表1】(F)で『救荒本草』と合わせて○と表示<sup>(12)</sup>。これらとりあわせの際には、『救荒本草』の注目をまず引用し、その後「証類本草」の注文を引用していることが多く、『救荒本草』注目を「証類本草」のそれに優先させていることがうかがえる。なお、これらの条目においては、『救荒本草』の注文と「証類本草」の注文とを合わせた注文が、『三才図会』当該条目の注目のすべてとなっており、それ以外の書は引用されていない。

#### 4 『茹草編』からの引用

【表1】(D)において「※証類無し」と記してある二八条目のうち、『救荒本草』から引用されたと考えられる一七条目を除く一条目(425「甘露」、428「天藕兒」〜437「燈鷺兒」)は、周履靖撰『茹草編』(四巻。萬曆二五年「二五九七」の識語)から引用され

たと考えられる条目である。『茹草編』は、一〇一種の食用植物の図を掲げて、その採取時期・食用方法を注するとともに（巻一、二）、種々の先行文献の食用植物に関する記事を多数収録した（巻三、四）本草書である。これらの一一条目の注文は、『茹草編』の注文と極めてよく一致する。<sup>(13)</sup>

その具体例を挙げれば次のようである。『茹草編』注文の太字になっている部分が『三才図会』注文と一致する注文である。

眼子菜 六七月採生水澤中青葉背紫色莖柔滑而細長可數尺湯淖晒乾再泡醃醬拌食。  
 （『三才図会』草木十巻）

眼子菜 六七月採生水澤中青葉背紫色莖柔滑而細長可數尺湯淖晒乾再泡醃醬拌食。  
 （『茹草編』巻二）

『三才図会』の注文は『茹草編』の注文と一字違わず一致している。

特に、連続してひとまとまりに引用されている条目のうちの428「天藕児」〜435「烏藍擔」の八条目は、その注文だけではなく、配列までもが『茹草編』とよく一致している。その実態を【表4】『茹草編』と配列が一致している例」として示す。

【表4】『茹草編』と配列が一致している例

(A)	(B)	(C)	(D)	(E)	(F)	(G)	(H)	(I)
428	天藕児	十巻蔬類	※証類無し			天藕児	『茹草編』	○
429	野落籬	十巻蔬類	※証類無し			野落籬	『茹草編』	○
430	眼子菜	十巻蔬類	※証類無し			眼子菜	『茹草編』	○
431	浮蕎	十巻蔬類	※証類無し			浮蕎	『茹草編』	○
432	牛尾温	十巻蔬類	※証類無し			牛尾温	『茹草編』	○
433	水菜	十巻蔬類	※証類無し			水菜	『茹草編』	○
434	狗脚跡	十巻蔬類	※証類無し			狗脚跡	『茹草編』	○
435	烏藍擔	十巻蔬類	※証類無し			烏藍擔	『茹草編』	○

これらの『茹草編』条目の、『茹草編』そのものにおける配列

は以下のものである。（太字が『三才図会』と一致する条目）

……天藕児、野蘿菔、掃帚蒿、野落籬、眼子菜、浮薺、採菱  
菓、牛尾温、水菜、狗脚跡、烏藍擔、……《卷二》

『三才図会』のこれらの条目の配列は、『茹草編』該当部分の配列とよく一致しているから、前述の、注文内容が極めてよく一致している点と考え合わせれば、『三才図会』における『茹草編』と一致する条目・注文は、『茹草編』から引用されたものであると考えられる。

ところで、『茹草編』から引用されたと考えられる『三才図会』の一条目のうち、連続してひとまとまりになっている一〇条目（428「天藕児」く437「燈鶯児」）の記載形式は、『茹草編』の記載形式をそのまま引き継いでおり、『三才図会』草木部の一般的な条目のそれとは大きく異なっている。残りの一条目である425「甘露」の記載形式は、「証類本草」から引用されたと考えられる他の一般的な条目のそれと同様であるが、その注文は『茹草編』の当該注文と一致する。すなわち、この「甘露」の条目は、本来、「天藕児」以下のグループと同様、『茹草編』の形式で記載されるべきものであったのを、何らかの理由により、一般的な形式で記載されたものと考えられる。『茹草編』から引用された条目のうち、一般的な形式で記載されている条目はこの一条目だけである、という事実は、逆に言えば、『三才図会』編者は『茹草編』から引用する際には、一般的な記載形式ではなく、『茹草編』に合わせた形式にしようとしたということを示している。

『三才図会』草木八巻く十一巻の出版

また、『茹草編』は、萬曆三十五年（一五九七）の成立であるから、『三才図会』編者は、『三才図会』刊行のわずか一二年前に成立した「できたて」の書である『茹草編』を引用しているということになる。この事実は、『三才図会』が「証類本草」の如き伝統的な本草書を引用すると同時に、『茹草編』の如き最新の本草書をも引用しようとしていたことを示している。

なお、明代に編纂され、現存する植物図譜は、王磐編『野菜譜』、周履靖編『茹草編』、鮑山編『野菜博録』、周定王朱櫛編『救荒本草』であるとされているが、これら四書のうち、『三才図会』編纂以前に成立していたのは『野菜譜』『茹草編』『救荒本草』の三書であり、『三才図会』編者はそれらのうちの二書（『茹草編』『救荒本草』）を引用していることになる。<sup>15)</sup>

両書は、ともに図を多数掲載している本草書であるため、図を重視する『三才図会』編者は、「証類本草」を補完する目的でこれらを引用したのと考えられる。

## 5 おわりに（今後の課題）

以上の調査により、『三才図会』草木八巻く十一巻においては、「証類本草」に加えて、『救荒本草』及び『茹草編』からも多くの条目・注文を引用していることが明らかとなった。両書はいずれも、「証類本草」同様、図を多数掲載している本草書であるから、この引用実態は、『三才図会』の編纂方針の一つが「図を多数掲載する本草書を重視する」というものであったことをよく

示している。

今回までの一連の『三才図会』出典調査により、『三才図会』草木一卷く十一巻の大部分の条目の出典が明らかになった。しかし、『三才図会』草木八巻く十一巻における、「証類本草」と完全には一致しない条目五四条の中には、未だなお、その出典が明らかではない一七条目がある。これらの出典を明らかにすることを今後の課題としたい。

## 注

- (1) 『三才図会』においては、各巻ともに、個々の事物ごとに、その名称・図・注文を一セットにして掲載している。本稿では、この一セットを「条目(あるいは条)」と称する。ひとつの条目は、巻によって複数丁にわたる場合もあるが、草木部においては、それぞれ一丁が割り振られている。なお、名称・図・注文を一セットにして掲載することは、本草書においても同様であるので、同じく「条目(あるいは条)」という語を使用する。
- (2) 拙稿『三才図会』草木部収録項目の出典について(田島毓堂編『日本語学最前線』二〇一〇年五月。和泉書院)及び『三才図会』草木八巻く十一巻の出典——「証類本草」からの引用——(『愛知学院大学教養部紀要』第五九巻第三・四号「合併号」。二〇一二年三月)参照。
- (3) 『三才図会』草木部は全二二巻であり、その内訳は、草木一卷く七巻「草類」・八巻く九巻「木類」・十巻「蔬類」・十一巻「菓類穀類」・十二巻「花卉類」である。しかし、花卉類は薬用植物としてではなく

観賞用植物として扱われることも多く、その属性の相違故に別途論ずるべきであると考えられるため、この草木十二巻「花卉類」は、今回の、本草書との比較調査対象からは除外する。

- (4) 『三才図会』条目の序数は、同書草木一卷「草類」の条目から順に付したものである。

- (5) 『証類本草』条目の序数は、同書巻六「草部上品之上」の条目から順に付したものである。

- (6) ちなみに、別稿(注2の『三才図会』草木部収録項目の出典について)で調査対象とした『三才図会』草木一卷く七巻においては、『証類本草』に収録されていない条目は、全二九五条中わずか三条(一%)に過ぎなかった。つまり、草木一卷く七巻においては、『三才図会』の条目と『証類本草』の条目とみなすことができる。

- (7) これら二六条のうち九条は『救荒本草』と合わせて〇となる。

- (8) 『証類本草』の配列に従い、同書の条目の中から、図及び「図経本草」を掲載している条目だけを抜粋して引用しているため、「証類本草」の序数(D)は、引用されなかった条目の序数を除き、昇順で並んでいる。

- (9) 岡西為人『本草概説』(創元社。昭和五二年二月)。二三五〜二三六頁。

- (10) 以下の『救荒本草』の書誌的解説は、『救荒本草校釈与研究』(伊藤謙責任編輯。中医古籍出版社。二〇〇七年一月)。四一〇〜四三八頁による。

- (11) 『中国古代版画叢刊2』所収の影印による。なお、文淵閣四庫全書にも『救荒本草』は収録されているが(第七三〇冊)、一部、嘉靖四十年本と異なるところもあるので、やはり嘉靖四十年本によらなければならない。

- (12) 326「茶樹」、327「夜合樹」、330「桑樹」、407「甜菜」、410「苦蕒」、411「水斬」、

413「薺菜」、439「胡桃」、441「梨」の九条目。これらの九条目を前述の一七条目と合わせると、『救荒本草』からの引用は全二六条目となる。

(13) 『叢書集成初編 筍譜(及其他両種)』所収の萬曆二十五年「二五九七」版本の影印による。

(14) 『中国古代版画叢刊2』「救荒本草」後記(五六九頁)。

(15) 王磐編『野菜譜(救荒野譜)』の注文は『三才図会』と全く一致しないので、何らかの理由により利用されなかったと考えられる。鮑山編『野菜博録』の成立は天啓二年「一六二二」であり、『三才図会』への引用は不可能である。



# 『三才図会』草木八巻〜十一巻の出典

——「証類本草」からの引用——

河野 敏 宏

## 【目次】

- 1 はじめに（本稿の目的と結論）
- 2 『三才図会』と「証類本草」との一致
  - 2・1 中国主流本草書の概略
  - 2・2 「証類本草」中の「図経本草」部分との一致
  - 2・3 草木一巻〜十一巻と「証類本草」との一致
- 3 「証類本草」以外の書からの引用
- 4 おわりに（今後の課題）

## 1 はじめに（本稿の目的と結論）

『三才図会』（明の王圻<sup>おうき</sup>及びその子、王思義編。萬曆三十七年「一六〇九」頃刊行。）は、各種分野の事物をひとつひとつ条目<sup>じ</sup>として立て、それぞれについて図を掲載して解説を記した類書である。その構成は、天文四巻・地理一六巻・人物一四巻・時令四

『三才図会』草木八巻〜十一巻の出典

巻・宮室四巻・器用一二巻・身体七巻・衣服三巻・人事一〇巻・儀制八巻・珍宝二巻・文史四巻・鳥獸六巻・草木一二巻であり、収録されている条目は多岐にわたっている。これらの条目には、多種多様な典籍から引用された注文が収録されているが、その出典はほとんど付せられていないため、個々の注文内容だけでなく、その出典を特定することは極めて困難である。ちなみに「三才」とは「天地人」すなわち森羅万象を指している。

本書は、我が国で編纂された図説事典『和漢三才図会』（全一〇五巻。寺島良安撰。正徳三年「一七一三」〜同五年「一七一五」頃刊行）の範とされた書であるが、『和漢三才図会』がその序文において『本草綱目』を主たる参考書とした旨を記しているのに対し、本書の序文には参考文献の名は記されていない。しかし、その序文には「図絵以勸之于先、論説以綴之于後。」と記されているから、本書が事物の解説にあたって「図」を掲げるところを重視していることは明らかであり、従って、本書に引用された典籍の中心をなすのは、図を豊富に掲載している典籍である可能性が高い。

図を豊富に掲載している典籍には様々なものがあるが、本草書もその一つである。本草書は各種動植物の薬効を解説した薬物書であり、それらの中には、薬物原料となる動植物を同定する一助として図を豊富に掲載しているものもある。前述の『本草綱目』にも多くの図が掲載されており、おそらくそれ故に『和漢三才図会』は同書を重要な参考文献としたと考えられる。従って、

『和漢三才図会』同様、図を多数掲載する『三才図会』もまた『本草綱目』の如き、図を多数掲載する何らかの本草書を重視した可能性は高い。

この推論に基づき、かつて、『三才図会』の草木一巻く七巻「草類」(全二九五条)の出典を調査し、以下の結論を得た(別稿<sup>2)</sup>)。

1. 『三才図会』の「草木一巻く七巻」の各条目の配列及びその注文は、「証類本草」収録条目のうち、図及び「図経本草」注文を掲載している条目のそれと極めてよく一致する。

2. 『三才図会』のこれらの条目は、「証類本草」(あるいはその内容をそのまま取り込んだ書)からまとめて引用されている。

3. 『三才図会』に引用された「証類本草」は「政和本草」以降のものである。

本稿は、上記結論をふまえた上で、未調査であった草木八巻く十一巻「木類・蔬類・菓類穀類」(全一八八条)の出典を調査し、『三才図会』編者がこれらの巻においてどのような書を主要参考文献としたかを明らかにしようとするものである<sup>3)</sup>。

本稿の結論を予め示せば次のようである。

1. 『三才図会』草木一巻く十一巻に該当する「証類本草」各巻の条目のうち、図及び『図経本草』注文を掲載している条目のほとんどが、『三才図会』のこれらの巻に引

用されている。「証類本草」は図を多数掲載している本草書であることから、図を重視する『三才図会』編者は同書に大きく依拠したものと考えられる。

2. 類書は、一般的に多様な書を引用することが多いが、『三才図会』草木一巻く十一巻においては、「証類本草」一書からの引用が、その条目・注文の大部分を占めている。

3. ただし、草木八巻く十一巻においては、次のような、草木一巻く七巻と異なる点がある。すなわち、

① 「証類本草」の注文に加えて他書の注文を引用している条目がある。

② 「証類本草」の注文を全く引用せず、それ以外の書の注文のみを引用している条目がある。

ということである。

これらの点について、以下、詳述する。

#### 《使用テキスト》

『三才図会』……………『三才圖會』上中下(上海古籍出版社。一九八八年六月。)

「証類本草」……………『重修政和經史證類備用本草』(晦明軒

本政和本草)』(南天書局有限公司。中華民國六五「一九七六」年八月。)

『經史證類大觀本草(大觀本草)』(國

立中国医薬研究所。中華民國六〇「一九七二」年十二月。）

『本草綱目』第一冊〜第四冊（人民衛生出版社。一九七五年十二月〜一九八一年九月。）

文淵閣四庫全書……「四庫全書電子版」全文檢索版（迪志文化出版有限公司。二〇〇四年。）

## 2 『三才図会』と「証類本草」との一致

### 2・1 中国主流本草書の概略

別稿で述べたことのくり返しになるが、説明の都合上、中国主流本草書の概略を示せば次のようである。

中国においては、古くから数多くの本草書が編纂されており、それらは、基幹をなす主流本草書とその周縁に位置づけられる傍流本草書とに大別される。各種主要典籍において本草書が引用される場合、その多くは主流本草書である。本草書においては薬品解説に際して、図を大量に掲載することがある。たとえば、『新修本草』編纂の際には「図経」「薬図」が編纂されたようであるし（佚）、『嘉祐補注神農本草』編纂の際には、「姉妹編」として『図経本草』が編纂された。主流本草書編纂の流れを示せば次のようである。<sup>(4)</sup>

『神農本草』四卷

（年代・編者とも不明）

『三才図会』草木八卷〜十一卷の出版

『名医別録』三卷

（年代・編者とも不明）

『神農本草経』三卷 齊 陶弘景撰（四九二〜五〇〇頃）

『神農本草経集注』七卷

齊 陶弘景撰（『神農本草経』とほぼ同時期）

『新修本草』二十卷 唐 蘇敬等奉勅撰（六五九）

『開宝重定本草』二十卷 宋 劉翰等奉勅撰（九七四）

『嘉祐補注神農本草（嘉祐本草）』二十卷

宋 掌禹錫等奉勅撰（一〇六一）

『図経本草』二十卷 宋 蘇頌等奉勅撰（一〇六二）

『重広補注神農本草併図経』二十三卷 宋 陳承撰（佚）

『経史証類備急本草（証類本草原本）』三十一卷

宋 唐慎微撰（一〇九七以後）

『経史証類大観本草（大観本草）』三十一卷

宋 艾晟増訂（一一〇八）

『政和新修経史証類備用本草（政和本草）』三十卷

宋 曹孝忠等奉勅撰（一一一六）

『重修政和経史証類備用本草（晦明軒本政和本草）』三十卷

蒙古 張存恵撰（一二四九）

『本草綱目』五十二卷 明 李時珍撰（一五九六）

これらの主流本草書のうち、『新修本草』から「証類本草」<sup>(5)</sup>までの各本草書における個々の薬品条目の解説文の体裁は、いずれも次のようである。すなわち、まず『神農本草経』の文を大字で

掲げ、その後、当該本草書以前に編纂された主流本草書（あるいは傍流本草書）に付されていた注文をそのまま引用し、その末尾に新たな注文を追加する、というものである<sup>(6)</sup>。この結果、後代の本草書にはそれ以前の本草書の本文及び注文がそのまま温存されることになる。ただし、ここで注意しなければならないことは、前代の本草書の内容がそのまま温存されるのは、あくまでも個々の薬品条目内に限られているということである。複数の薬品条目をどのように配置するかという、分類方針・配列は本草書によって大きく変わることがあるし、また、後代の本草書には、前代までの本草書には収録されていない新たな薬品条目が追加収録されることも多い。例えば、薬品条目の分類方針・配列は、『新修本草』以後「嘉祐本草」「図経本草」まではほぼ同様であったが、「証類本草」では大きく変わり、さらに『本草綱目』において再び大きく変わっている。また、収録薬品条目もこの過程で徐々に増加している。

本草書のこうした特徴は、ある典籍に引用された本草書を明らかにする上で重要な手がかりとなる。すなわち、ある典籍が本草書からいくつもの条目をまとめて引用している場合、その本草書名を明記していなくても、引用された薬品名及びその薬品条目の配列や注文内容を分析することによって、それらの条目の出典となった本草書を特定できる場合があるということである。

## 2・2 「証類本草」中の「図経本草」部分との一致

本稿冒頭で別稿の結論として紹介したように、『三才図会』草木一巻く七巻の条目は、その植物名・配列・注文内容のほとんどすべてが、「証類本草」収録条目のうちの、図及び『図経本草』注文を掲載している条目のそれと極めてよく一致する。同様のことは、本稿で調査対象とする『三才図会』草木八巻く十一巻においても言いうる。

「証類本草」に収録されている、図及び『図経本草』注文を掲載している条目の植物名と配列が、『三才図会』草木八巻く十一巻のそれとよく一致する実態を、「証類本草」巻十二「木部上品」を例にとり、【表1】「証類本草」と『三才図会』との一致」として示す。

558	琥珀	名医別録	無	無				(A)
557	茯苓	神農本經	○	○				(B)
556	栢實	神農本經	○	○	339	栢	草木九巻木類	
555	枸杞	神農本經	○	○	502	枸杞	草木十二巻花卉類	
554	槐花	新補	無	無				
553	槐膠	新定	無	無				
552	槐實	神農本經	○	○	338	槐實	草木九巻木類	
551	松脂	神農本經	○	○	336	松	草木九巻木類	
550	菌桂	神農本經	無	無	333	菌桂	草木八巻木類	
549	牡桂	神農本經	無	無	333	菌桂	草木八巻木類	
548	桂	名医別録	○	○	333	菌桂	草木八巻木類	(H)

【表1】「証類本草」と『三才図会』との一致

【表1】の項目は、上から順に次のようである。

(A) 「証類本草」条目の序数。<sup>(7)</sup>

(B) 「証類本草」各条目の植物名。

(C) 当該植物名の初出本草書名。

(D) 図の有無。○は有。

(E) 『図経本草』注文の有無。○は有。

(F) 「証類本草」条目に該当する『三才図会』条目、の序数。<sup>(8)</sup>

(G) 『三才図会』各条目の植物名。

(H) 当該条目の『三才図会』における所在。

580	579	578	577	576	575	574	573	572	571	570	569	568	567	566	565	564	563	562	561	560	559	(A)
詹糖香	藿香	雞舌香	薰陸香	沈香	丁香	麝核	木蘭	女貞實	楓香脂	杜仲	桑上寄生	辛夷	蔓荊實	牡荊實	五加皮	乾漆	楮實	藥木	酸棗	榆皮	壁	(B)
新分條	新分條	新分條	新分條	名醫別録	今附	神農本經	神農本經	神農本經	唐本先附	神農本經	神農本經	神農本經	神農本經	名醫別録	神農本經	神農本經	名醫別録	神農本經	神農本經	神農本經	新分條	(C)
無	○	無	無	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	無	(D)
無	○	無	無	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	無	(E)
	352			351	350	349		328	348	347		505	346	345	344	343	332	342	341	340		(F)
	藿香			沈香	丁香	麝樹		東青樹	楓	杜仲		辛夷	蔓荊	牡荊	五加皮	漆樹	楮桃樹	藥木	酸棗	榆		(G)
	草木九卷木類			草木九卷木類	草木九卷木類	草木九卷木類		草木八卷木類	草木九卷木類	草木九卷木類		草木十二卷花卉類	草木九卷木類	草木九卷木類	草木九卷木類	草木九卷木類	草木八卷木類	草木九卷木類	草木九卷木類	草木九卷木類		(H)

602	601	600	599	598	597	596	595	594	593	592	591	590	589	588	587	586	585	584	583	582	581	(A)
緬木	靈寿木皮	浮爛囉勒	鼠藤	阿勒勃	蜜香	臯蘆葉	含水藤中水	乾陀木皮	奴會子	無名木皮	柵木皮	紗木	落鴈木	海紅豆	返魂香	藤黃	金櫻子	蘇合香	降真香	乳香	檀香	(B)
陳葳器餘	陳葳器餘	陳葳器餘	陳葳器餘	陳葳器餘	陳葳器餘	陳葳器餘	陳葳器餘	陳葳器餘	海菜餘	海菜餘	海菜餘	海菜餘	海菜餘	海菜餘	海菜餘	海菜餘	今附	名医別録	唐慎微統補	新分條	新分條	(C)
無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	○	無	無	無	○	無	無	無	無	(D)
無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	○	無	無	無	○	無	無	無	無	(E)
													354				353					(F)
													落鴈木				金櫻子					(G)
													草木九卷木類				草木九卷木類					(H)

619	618	617	616	615	614	613	612	611	610	609	608	607	606	605	604	603	(A)
黄屑	那耆悉	朗榆皮	木蜜	檀桓	河邊木	帝休	木麻	震燒木	牛妳藤	石松	放杖木	龍手藤	曼遊藤	不彫木	阿月渾子	班珠藤	(B)
陳蔵器餘	陳蔵器餘	陳蔵器餘	陳蔵器餘	陳蔵器餘	陳蔵器餘	陳蔵器餘	陳蔵器餘	陳蔵器餘	陳蔵器餘	陳蔵器餘	陳蔵器餘	陳蔵器餘	陳蔵器餘	陳蔵器餘	陳蔵器餘	陳蔵器餘	(C)
無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	(D)
無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	(E)
(F)																	
(G)																	
(H)																	

この表からわかるように、「証類本草」に収録されている、図及び『図経本草』注文を掲載している条目〔D〕〔E〕の欄に○が付してある条目〕の植物名と配列は、『三才図会』のそれと極めてよく一致している。<sup>(9)</sup>

この一致の実態を『三才図会』草木八巻〜十一巻全体でみると次のようである。

『三才図会』草木八巻〜十一巻に該当する「証類本草」の巻は、卷十二「木部上品」〜卷十四「木部下品」及び卷二十三「果部」〜



卷二十九「菜部下品」であり、これらの巻に収録されている「証類本草」の全条目数は、

卷十二「木部上品」	～	卷十四「木部下品」	二六二条
卷二十三「果部」			五三条
卷二十四「米穀部上品」	～	卷二十六「米穀部下品」	四八条
卷二十七「菜部上品」	～	卷二十九「菜部下品」	六五条
		合計	四二八条

である。これらの条目のうち、図及び『図経本草』注文を掲載しているものは一五八条であり、それらの植物名及び注文が『三才図会』に条目として収録されているか否かを調べると、その内訳は、

『三才図会』の草木八巻～十一巻に収録されているもの	一三六条
『三才図会』の草木一巻～七巻に収録されているもの	一条
『三才図会』の草木十二巻に収録されているもの <sup>(10)</sup>	三条
『三才図会』に条目としては収録されているが、その注文が全く一致しないもの <sup>(11)</sup>	一条
『三才図会』のいずれの巻にも条目として収録されていないもの <sup>(12)</sup>	一七条

『三才図会』草木八巻～十一巻の出版

となる<sup>(13)</sup>。ただし、この内訳の最後の『三才図会』のいずれの巻にも収録されていないもの一七条のうち四条は、「証類本草」において他の条目の注文を参照するように指示してある条目であり、その指定先の条目の注文が「証類本草」から「三才図会」に引用されていることにより、事実上収録されているとみなしてよいものである。従って、上記一五八条のうち、『三才図会』に収録されている条目の割合は、 $(一三六+一三十四) \div 一五八 = 九一・一\%$ ということになる。この事實は、『三才図会』編者が、同書草木八巻～十一巻において、これらの巻に該当する「証類本草」各巻の条目のうち図及び『図経本草』注文が掲載されている条目のほとんどを条目として立て、その注文を引用しようとしたことを示している。

なお、ここで注意すべきことは、別稿でも述べたように、これらの条目が「証類本草」に引用されている『図経本草』条目とよく一致していることをもって、それらの条目が「証類本草」に先行する主流本草書『図経本草』そのものから引用されたと考えることはできない、ということである。なぜならば、『三才図会』のこれらの条目は、その植物名・注文内容が「証類本草」当該部分と一致しているだけでなく、配列までもが一致しているからである。

本稿2・1で述べたように、主流本草書の薬品条目の配列は、『新修本草』以後「嘉祐本草」「図経本草」まではほぼ同様であったが、「証類本草」では大きく変わったから、『三才図会』条目の

配列が「証類本草」のそれとよく一致するという事実は、それらの条目が、『図経本草』ではなく、『証類本草』から引用されたものであることを示している。<sup>(15)</sup>

### 2・3 草木一卷く十一巻と「証類本草」との一致

以上の『三才図会』草木八巻く十一巻と「証類本草」との比較結果を、別稿の『三才図会』草木一卷く七巻の比較結果と総合し、『三才図会』草木部全体（二巻く十一巻）における「証類本草」との一致実態を鳥瞰する。

まず、草木一卷く七巻における「証類本草」との一致度は次のようである（別稿参照）。

『三才図会』草木一卷く七巻に該当する「証類本草」の巻は、	
巻六「草部上品之上」く巻十一「草部下品之下」及び巻三十「本草図経本経外草類・木蔓類」であり、これらの巻に収録されている全条目数は、	
巻六「草部上品之上」く巻十一「草部下品之下」	四四七条
巻三十「本草図経本経外草類」	七五条
巻三十「本草図経本経外木蔓類」	二五条
	合計五四七条

である。これらの条目のうち、図及び『図経本草』注文を掲載しているものは三一八条であり、それらの植物名及び注文が『三才

図会』に条目として収録されているか否かを調べると、その内訳は、

『三才図会』の草木一卷く七巻に収録されているもの	二九一条
『三才図会』の草木八巻く十一巻に収録されているもの	三条
『三才図会』の草木十二巻に収録されているもの <sup>(16)</sup>	一条
『三才図会』のいずれの巻にも収録されていないもの	二三条

となる。ただし、この内訳の最後の『三才図会』のいずれの巻にも収録されていないもの「二三条のうち四条は、「証類本草」において他の条目の注文を参照するように指示してある条目であり、その指定先の条目の注文が「証類本草」から『三才図会』に引用されていることにより、事実上収録されているとみなしてよいものである。従って、その条目の一致度は、 $(291 + 3 + 14) \div 318 = 94.0\%$ ということになり、極めて高いことがわかる。ちなみに、これらの条目においては、その注文は「証類本草」だけからの引用で成り立っており、他書からの引用はない。

この引用実態を、上記の草木八巻く十一巻における比較結果と総合し、【表2】「草木一卷く十一巻における「証類本草」からの

引用」として示す。同表の、「証類本草」該当巻」とは、「証類本草」諸巻のうち、『三才図会』草木一卷〜七巻に該当する巻六「草部上品之上」〜巻十一「草部下品之下」・巻三十「本草図経本経外草類」・同「本草図経本経外木蔓類」、及び、『三才図会』八巻〜十一巻に該当する巻十二「木部上品」〜巻十四「木部下品」・

巻二十三「果部」・巻二十四「米穀部上品」〜巻二十六「米穀部下品」・巻二十七「菜部上品」〜巻二十九「菜部下品」、を指す。また、「図経掲載条」とは、「証類本草」各条目のうち、図及び『図経本草』注文を掲載しているもの、を指す。

【表2】 草木一卷〜十一巻における「証類本草」からの引用

「証類本草」該当巻	図経掲載条	『三才図会』に引用	別条の注文として引用
草木一卷〜七巻該当巻	三一八条	二九五条	四条
草木八巻〜十一巻該当巻	一五八条	一四〇条	四条
計	四七六条	四三五条	八条

【表2】からわかるように、『三才図会』草木一卷〜十一巻に該当する「証類本草」各巻における、図及び『図経本草』注文が掲載されている条目全四七六条のうち四三五条（九一・四％）が『三才図会』に引用されており、別条に掲載された注文として引用されているもの八条を含めると、その引用の割合は全四七六条中四四三条（九三・一％）の高率となっている。すなわち、『三才図会』編者は、同書草木一卷〜十一巻に該当する「証類本草」各巻の当該条目のほとんどを引用しているということになる。「証類本草」は図を多数掲載している本草書であることから、図を重視する『三才図会』編者は同書に大きく依拠したものと考える

られる。

また、類書は、一般的に多様な書を引用することが多いが、『三才図会』草木一卷〜十一巻の全四八三条（二九五・一八八）では、「証類本草」から四四三条を引用しているわけであり、「証類本草」一書からの引用が、その条目・注文の大部分を占めているということになる。

### 3 「証類本草」以外の書からの引用

以上のように、『三才図会』草木一卷〜十一巻においては、これらの巻に該当する「証類本草」各巻の『図経本草』注文を引用

した条目のほとんどを引用しており、また、それらが『三才図会』草木一卷く十一巻の条目・注文の大部分を占めているのであるが、しかし、草木八巻く十一巻においては、草木一卷く七巻とは異なり、「証類本草」から引用した条目・注文に加えて、「証類本草」以外の書から引用したとみられる条目・注文も収録されている。

『三才図会』八巻く十一巻には、全一八八条が収録されているが、これらのうち五四条は、「証類本草」から引用した注文にそれ以外の書から引用した注文が加えられている条目や、「証類本草」以外の書から引用した注文だけで成り立っている条目である。これら五四条が全一八八条に占める割合は、二八・七％となる。

つまり、『三才図会』草木八巻く十一巻の条目においては、「証類本草」該当巻の図及び『図経本草』注文を掲載している条目のほとんどを引用する一方、その三割弱の条目においては「証類本草」以外の書も引用している、ということである。三割弱という割合からすれば、『三才図会』編者は、草木八巻く十一巻においては、「証類本草」を重視しつつ、それ以外の書も積極的に引用しようとしたことがうかがえる。

ちなみに、これら五四条のうち三七条は、『救荒本草』『茹草編』という本草書から引用されたと考えられるが、紙幅の都合により、この点については別に論ずることとする。

#### 4 おわりに(今後の課題)

以上の調査により、『三才図会』草木八巻く十一巻は、草木一卷く七巻同様、「証類本草」に大きく依拠していることが明らかとなった。しかし、これらの巻においては、草木一卷く七巻とは異なり、「証類本草」以外の書も積極的に引用していることがうかがえるため、今後、これらの書がどのような書であるのかを具体的に明らかにする必要がある。

さらに、これまでの調査によって、『三才図会』の植物に関する巻は、「証類本草」とよく一致することが判明したが、動物に関する巻・鉱物に関する巻は「証類本草」とどのような関係があるのかについては未だ明らかではないため、この点についても、今後、明らかにする必要がある。

以上の諸点を今後の課題としたい。

#### 注

(1) 『三才図会』においては、各巻ともに、個々の事物ごとに、その名称・図・注文を一セットにして掲載している。本稿では、この一セットを「条目(あるいは条)」と称する。ひとつの条目は、巻によって複数丁にわたる場合もあるが、草木部においては、それぞれ一丁が割り振られている。なお、名称・図・注文を一セットにして掲載することは、本草書においても同様であるので、同じく「条目(あるいは条)」という語を使用する。

(2) 『三才図会』草木部収録項目の出典について(田島毓堂編『日本語学最前線』。二〇一〇年五月。和泉書院)。ちなみに、『三才図会』草木部全一二巻の内訳は、草木一巻く七巻「草類」・八巻く九巻「木類」・十巻「疏類」・十一巻「菓類穀類」・十二巻「花卉類」である。なお、本稿において「別稿」と称する論文は、すべてこの論文を指す。

(3) 草木十二巻に収録されている「花卉類」は、草木部の他の巻に収録されている植物とは異なり、薬用植物としてではなく観賞用植物として扱われることが多く、その属性の相違故に別途論ずるべきであると考えられるため、今回の、本草書との比較調査の対象からは除外する。

(4) 岡西為人『本草概説』(創元社。昭和五二年二月)。五四く五六頁による。なお、本稿における中国本草書の書誌的解説は、すべて同書よっている。

(5) 本稿では、『経史証類備急本草』『経史証類大観本草』『政和新修経史証類備用本草』『重修政和経史証類備用本草』を「証類本草」と総称する。

(6) 『神農本草経』は『神農本草』の文と『名医別録』の文とを合体させた本草書であり、その合体された文がそれ以後の本草書においては大字で示される本文となる。このとき、『神農本草』からとった文を朱字(後代の本草書においては陰刻の白字)で、『名医別録』からとった文を墨字(同、陽刻の黒字)で、雑書して記す(朱墨雑書という)。ちなみに、この『神農本草経』に初めて注を加えたのが陶弘景撰『神農本草経集注』であり、『神農本草経』の文を大字で掲げた後に陶弘景による注を小字で示している。『新修本草』以後の歴代主流本草書では、この『神農本草経集注』の陶弘景注の後にさらに注を加えていくこととなる。

『三才図会』草木八巻く十一巻の出版

(7) 『証類本草』条目の序数は、同書巻六「草部上品之上」の条目から順に付したものである。

(8) 『三才図会』条目の序数は、同書草木一巻「草類」の条目から順に付したものである。

(9) ただし、「証類本草」555「枸杞」568「辛夷」のように、「証類本草」では「木部」に収録されている条目を、『三才図会』では他の類目(この場合であれば「花卉類」)に移動させている場合もあるので、『三才図会』の条目序数が一部乱れている。また、「証類本草」の548「桂」549「牡桂」550「菌桂」の三種の条目すべてに『三才図会』333「菌桂」があらわれているのは、『三才図会』333「菌桂」の条目が、「証類本草」のこれら三種の条目の注文を合体させて引用していることを示している。

(10) 『三才図会』草木十二巻の各条目は本稿では調査対象としていないが、例外的に同巻に収録された条目が三条あったので、これらの条目も『証類本草』から『三才図会』に引用された条目に含めた。

(11) 『三才図会』草木十一巻470「榧子」(「証類本草」では巻十四木部下品758「榧実」)

(12) 例えば【表1】の557「茯苓」、569「桑上寄生」、573「木蘭」、など。

(13) これらの条目には、その注文のすべてが「証類本草」からの引用であるもののほか、「証類本草」から引用した注文に他書から引用した注文が加えられているものも含まれている。

(14) 【表1】には入っていないが、例えば、774「水楊葉」など。

(15) 『三才図会』に引用されている『図経本草』注文が「証類本草」からの引用であるとする論拠については、別稿で詳述した。

ちなみに、『三才図会』の条目配列・注文内容は、「証類本草」の次代の主流本草書である『本草綱目』とは全く一致しないから、同書から引用したとは考えられない。なお、「証類本草」の後に作られた主

流本草書としては、『本草綱目』の前に劉文泰等奉勅撰『本草品彙精要』（弘治一八年「二五〇五」）があるが、その原本は宮中の秘庫に中華民国になるまで死蔵されたままだったので、『三才図会』編者がこれを参照することはできなかった。仮に、参照できたとしても、その注文の内容は「証類本草」とは大きく異なっているため（注4文献一九一頁～二〇二頁）、『三才図会』に収録されているような注文にはならなかったであろう。

(16) 注10同様、『三才図会』草木十二巻の各条目は本稿では調査対象としていないが、例外的に同巻に収録された条目が一条あったので、この条目も『証類本草』から『三才図会』に引用された条目に含めた。

## 研究業績 (2011年1月～12月)

### 石川雅健

#### 〈学会発表〉

ロールシャッハ・テスト 思考・言語カテゴリーからみたシャーマンのパーソナリティ 日本人間性心理学会 第30回大会発表論集 2011年10月 58

### 糸井川 修

#### 〈論文〉

ベルタ・フォン・ズットナーの『武器を捨てよ!』と『マルタの子供たち』(単) 『愛知学院大学教養部紀要』第58巻第4号 2011年3月 1-20

#### 〈その他〉(翻訳・資料・その他)

ベルタ・フォン・ズットナー『武器を捨てよ!』〈上〉〈下〉(ズットナー研究会訳)(共) 新日本出版社 2011年4月、6月 〈下〉140-273  
「解説」275-298

「ベルタ・フォン・ズットナーの生涯と反戦小説」(単) 「ベルタ・フォン・ズットナー展」公開記念講演会 2011年8月20日 口頭発表 20分  
会場：立命館大学国際平和ミュージアム

### 稲垣正巳

#### 〈論文〉

不死身の身体から生身の身体へー「タンタンの冒険」における人物描写ー 『ユリイカ』平成23年12月号(青土社) 2011年12月 85-93

### 岩佐宣明

#### 〈論文〉

日本の伝統からの企業倫理学ー『企業行動憲章』の共感概念 ドイツ応用倫理学研究会編『ドイツ応用倫理学研究』第2号 2011年1月 111-118

豊かさの質ー〈人間の尊厳〉とCSR 『愛知学院大学教養部紀要』第59巻第2号 2011年11月 155-163

#### 〈その他〉(翻訳・資料・その他)

翻訳  
ディーター・ビルンバッハー「自然保護における取り換え可能性にたいする制限」 ドイツ応用倫理学研究会編『ドイツ応用倫理学研究』第2号 2011年1月 86-99

### 上原宏行

#### 〈論文〉

Influence of Optical Purity on Stability of Chiral Smectic-C Phase in Antiferroelectric Liquid Crystal under Pressure (単) Japanese Journal of Applied Physics Vol. 50 2011年9月 09NE13

〈学会発表〉

圧力下における反強誘電性結晶の強誘電相  
SmC\*の安定性に及ぼす光学純度の影響(単)  
第28回強誘電体応用会議 (京都) 2011年  
5月27日

**岡島秀隆**

〈論文〉

終末期の生き方—宗教・哲学からの発言—  
(単) 『愛知学院大学禅研究所紀要』第39号 2011年  
3月 197-213

**尾崎孝之**

〈論文〉

雨の「ものうさ」と雪の「悲しみ」—ポー  
ル・ヴェルレーヌと中原中也— (単) 『愛知学院大学教養部紀要』第59巻第2号 2011年  
11月 1-13

**勝股高志**

〈論文〉

小説から評書へ—新評書『暴風驟雨』を聴く  
(単) 『未名』第二十九号 (中文研究会) 2011年  
3月 25-58

〈その他〉(翻訳・資料・その他)

紹介 『敦煌作品研究』第二号 (敦煌作品研究会) 2011年  
1月 30-40

李并成主編『敦煌学教程』、李正宇著『敦煌  
学導論』(単)

訳注 『敦煌作品研究』第二号 (敦煌作品研究会) 2011年  
1月 78-86

菩薩蛮「婦不婦」、南歌子「風情問答」、南歌  
子「長相憶」(単)

**G. D. ガニエ (Glenn D. GAGNE)**

〈論文〉

Improving Language Acquisition Through Better  
Task Design 『愛知学院大学教養部紀要』第59巻第1号 73-80

Overseas Homestay Experiences in Canada: AGU  
Study Tour Report 『知の旅立ち』教養セミナー学生論集  
No. 15 2011年  
3月 26

**河合泰弘**

〈その他〉(翻訳・資料・その他)

講演 (法話) 大本山永平寺名古屋別院土曜法話の会 2011年  
3月

**川口高風**

〈論文〉

法持寺の門葉寺院について (単) 『愛知学院大学禅研究所紀要』第39号 2011年  
3月 135-179

「白鳥町家並帳」における法持寺の不動産に  
ついて (単) 『愛知学院大学教養部紀要』第59巻第2号 2011年  
11月 1-14



〈その他〉(翻訳・資料・その他)				
明治期以降曹洞宗人物誌 (三) (単)	『愛知学院大学教養部紀要』第58巻第3号	2011年 2月	1-11	
明治期以降曹洞宗人物誌 (四) (単)	『愛知学院大学教養部紀要』第58巻第4号	2011年 3月	19-28	
名古屋の寺院に関する木版資料について(七) (単)	『愛知学院大学教養部紀要』第59巻第1号	2011年 7月	21-43	
法持寺史関係略年表 (単)	『愛知学院大学教養部紀要』第59巻第2号	2011年 11月	15-48	
生かされている命に感謝	『熱田区仏教会物故者追弔法要』葉	2011年 6月	1	
曹洞宗の袈裟の知識	平成23年度全国曹洞宗法衣同業会総会 (講演)	2011年 3月25日		
名古屋の寺院と名僧のエピソード	愛知学院大学モーニングセミナー (講演)	2011年 4月12日		
各宗の正装から略装への変遷	京都法衣事業協同組合講演会 (講演)	2011年 6月24日		
志は老いず	第5回龍穩寺文化講演会 (講演)	2011年 10月1日		

## 来住準一

### 〈著書〉

歯科予防処置論・歯科保健指導論 (共)	医歯薬出版	2011年 5月	45-59
---------------------	-------	-------------	-------

### 〈その他〉(翻訳・資料・その他)

講演 クイズで学ぶ歯の健康	平成23年度衣浦東部保健所 地域歯科保 健推進研修会	2011年 7月8日	
講演 クイズで学ぶ歯の健康	岡崎市立葵中学校 学校保健委員会	2011年 11月12日	
科学とマジック	愛知学院大学 大学祭ミニセミナー	2011年 11月3日	

## 北田豊治

### 〈論文〉

大学生における飲酒行動と態度に関する研究 (単)	『愛知学院大学教養部紀要』第59巻1号	2011年 7月	81-90
-----------------------------	---------------------	-------------	-------

## 北村伊都子

### 〈著書〉

高齢者検査基準値ガイド (体脂肪率、BMI、 内臓脂肪、安静時代謝量) (共)	中央法規出版株式会社	2011年 10月	314-5、 316-7、 321-2、 346-7
--	------------	--------------	-------------------------------------

〈論文〉

高齢者における運動効果と糖尿病の運動処方  
ガイドライン (共) 月刊糖尿病 第3巻8号 2011年 44-53  
8月

〈学会発表〉

Longitudinal effects of menopause on obesity in  
community-living Japanese Women. (共) 18th European Congress on Obesity. Istanbul,  
Turkey. 2011年 5月

## 久馬栄道

〈論文〉

デーデキント無限と型理論 (単) 『愛知学院大学教養部紀要』第58巻第4号 2011年 73-109  
3月

## 小出龍郎

〈論文〉

A role naofen in apoptosis of  
hepatocytes induced by lipopoly-  
saccharide through mitochondrial  
signaling in rates.  
(共) Hepatology  
Research  
(in press) 2011

〈学会発表〉

腫瘍細胞によって吸着される  
血清中の細胞増殖因子  
(共) 第70回日本癌学会  
学術総会 2011年  
(名古屋国際会議場) 10月4日

## 佐々木 真

〈論文〉

iPadを用いた語学教育の現状と展望 (単) 『愛知学院大学教養部紀要』第59巻第2号 2011年 15-34  
11月

〈学会発表〉

SFL on iPad: On Development of EFL Software  
in the Framework of SFL (単) The 38th International Systemic Functional  
Congress, University of Lisbon, Lisbon,  
Portugal. 2011年  
7月27日

SFL on Mobile Gadgets: On Development of  
Composition Program in the Framework of  
Systemic Functional Linguistics (単) MUST-4: 4th Finnish Symposium on  
Functional Linguistics and Multimodality,  
University of Lapland, Rovaniemi, Finland 2011年  
11月28日

〈その他〉(翻訳・資料・その他)

講演  
I'm glad I had my iPad. ~iPadを活かす語  
学教育~ (単) 名古屋発! 【iPad×教育】iPadを教育で  
どう使う?  
主催: (株)三谷商事、(株)デジタル・ナレッ  
ジ、(株)名古屋教育ソリューションズ  
(名古屋ルーセントタワー) 2011年  
2月25日

講演  
I'm glad I had my iPad. ~iPadを活かす語  
学教育~ (単) 「iPad×教育 iPadを教育でどう使う?」  
主催: (株)デジタル・ナレッジ、(株)名古屋  
教育ソリューションズ  
(デジタルハリウッド 東京) 2011年  
5月18日

講演 iPadによる語学教育の展開：可能性と問題点（単）	「名古屋発！【iPad×教育】iPadを教育でどう使っているのか？」 主催：(株)三谷商事、(株)デジタル・ナレッジ、(株)名古屋教育ソリューションズ (名古屋ルーセントタワー)	2011年 8月29日
講演 英語の7不思議（単）	「タブレットを講義にどう使う？“佐々木教授の模擬講義～英語の7不思議～” 主催：(株)デジタル・ナレッジ (株)デジタル・ナレッジ本社 東京)	2011年 10月21日
講演 iPadによる語学教育の展開：可能性と問題点（単）	「iPadを教育でどう使う」 主催：(株)デジタル・ナレッジ、(株)名古屋教育ソリューションズ (大阪大学中之島センター)	2011年 10月26日

## 柴田哲雄

### 〈著書〉

中国民主化・民族運動の現在—海外諸団体の動向（単）	集広舎（中国書店）	2011年 12月	全242 ページ
---------------------------	-----------	--------------	-------------

## 清水義和

### 〈著書〉

寺山修司海外ヴィジュアルアーツ（単）	文化書房博文社	2011年 4月	総頁数 267
--------------------	---------	-------------	------------

### 〈論文〉

アントン・チャーホフの『桜の園』と寺山修司の『田園に死す』に於ける創造的なアバンギャルド芸術の可能性（単）	『愛知学院大学教養部紀要』第58巻第3号	20011年 2月	23-51
アメリカの前衛芸術ジョン・ケージとアンディ・ウォーホル（単）	『愛知学院大学語研紀要』第36巻第1号	2011年 11月	65-102
寺山修司の『邪宗門』とルイジ・ピランデッロの『あなたがそう思うならばそのとおり』に於ける創造的虚構世界（単）	『愛知学院大学教養部紀要』第58巻第4号	2011年 3月	21-50
ヴァン・ゴッホと寺山修司— M. C. エッシャーによって“ひまわり”を『田園に死す』の中に読む（単）	『愛知学院大学教養部紀要』第59巻第1号	2011年 7月	23-57
寺山修司と W. シェイクスピアの“未知の国”—『花札伝綺』と『マクベス』—（単）	『愛知学院大学教養部紀要』第59巻第2号	2011年 11月	35-92

### 〈その他〉（翻訳・資料・その他）

「寺山修司とヴァン・ゴッホ」（単）	国際寺山修司学会第11回春季大会 (愛知学院大学)	2011年 5月15日	口頭発表
「『さんせう太夫』と寺山修司の『身毒丸』」（共）	遊行フォーラム第16回 (藤沢市遊行寺)	2011年 9月11日	口頭発表
「寺山修司と天野天街の“未知の国”をシェイクスピア劇から読み解く」（単）	国際寺山修司学会第12回秋季大会 (愛知学院大学)	2011年 10月29日	口頭発表

## 城 貞晴

### 〈論文〉

Two-Dimensional Phase Diagram of Lead on Mo (110) Substrate (共)	J. Phys. Soc. Jpn. Vol. 80 (2011)	2011年 1月	0350011- 0350012
Growth Modes of Ba/Mo (110) System (共)	J. Surf. Anal. Vol. 18 (2011)	2011年 5月	7-12
Quality of Naphtacene Single Crystals Obtained by Physical Vapor Transport Method (共)	Jpn. J. Appl. Phys. Vol. 50 (2011)	2011年 6月	0655011- 0655013

### 〈学会発表〉

Current-Voltage Characteristics of a kind of PDA LB Film Measured by Conductive Mode AFM (共)	The 6th International Conference on Molecular Electronics and Bioelectronics	2011年 3月	
Hopping Conduction on a kind of PDA LB Film surface Investigated by Using Conductive Mode AFM (単)	International Symposium on Surface Science-towards Nano-, Bio-, and Green Innovation-	2011年 12月	
グラファイト基板上に成長したアントラセン結晶の形態評価 (単)	文部科学省 先端研究施設共用イノベーション創出事業 ナノテクノロジー・ネットワーク中部地区ナノテク総合支援ナノ材料創製加工と先端機器分析 平成22年度研究成果報告会	2011年 3月	

### 〈その他〉(翻訳・資料・その他)

報告書 グラファイト基板上に成長したアントラセン結晶の形態評価 (単)	文部科学省 先端研究施設共用イノベーション創出事業 カーボンナノプローブ・カーボンナノチューブ及び金属微粒子の形成と評価支援 平成22年度研究成果報告書	2011年 5月	
--	--	-------------	--

## 清 忠師

### 〈その他〉(翻訳・資料・その他)

公開講座記録 温暖化と私たちの未来	『愛知学院大学教養部紀要』第59巻第1号	2011年 7月	91-99
----------------------	----------------------	-------------	-------

## 田中泰賢

### 〈著書〉

Modern Zen Poems of Toshi Tanaka (1916-1996) (共訳)	株式会社あるむ	2011年 1月	
---	---------	-------------	--

### 〈論文〉

欧米名詩選集『海辺の歌』Thalatta 1853—ロングフェロー、ブライアント詩篇—	ジャパン ポエトリー・レビュー (第16号)	2011年 3月	5-13
---	------------------------	-------------	------

### 〈学会発表〉

G. スナイダー : Mountains and Rivers Without End について	日本英米詩歌学会第24周年記念大会 (椋山女学園大学星が丘キャンパス)	2011年 10月	口頭発表
--	-------------------------------------	--------------	------

## ダニエル・ダンクリー (Daniel Dunkley)

〈論文〉

Vocabulary testing: perspectives and prospects 『愛知学院大学語研紀要』第36巻第1号 2011年 103-119  
2月

〈その他〉(翻訳・資料・その他)

資料 *The Language Teacher* 35, 6 2011年 17-19  
6月  
Language Learning and Testing in Australia: An interview with Dr. Cathie Elder, Director of the Language Testing Research Centre, University of Melbourne

## 都築正喜

〈論文〉

Some Phonetic Rules Regarding the Adaption of Foreign Loan Words into Japanese (単) 日本英語音声学会刊行『英語音声学』第14・15合併号 2011年 10-20  
3月  
John Wells ロンドン大学名誉教授古希祝賀特別号

Recorded Voice Data の音声的考察 (単) 『愛知学院大学教養部紀要』第59巻第2号 2011年 93-127  
11月

〈その他〉(翻訳・資料・その他)

『英語の読みの指導と応用音声学』(単) 日本英語音声学会中部支部第18回研究大会 2011年 口頭発表  
3月  
(東京第一ホテル錦)

Issues on Teaching English Segments and Prosody to Japanese Learners (単) 第12回日韓合同英語音声学セミナー 2011年 口頭発表  
3月  
(ソウル大学)  
日本英語音声学会・韓国音声学共催

## 中村 綾

〈著書〉

『日本近世 白話小説受容の研究』(単) 汲古書院 2011年 12月

## ラッセル・ノテスタイン (Russell Notestine)

〈論文〉

Forrest Gump vs. The Graduate: Contrasting Views of the 1960's 『愛知学院大学語研紀要』第36巻第1号 2011年 121-130  
1月

## 藤田淳志

〈学会発表〉

「Geoffrey Nauffts の *Next Fall* が提示する新世代ゲイ演劇の政治性」 日本アメリカ文学会中部支部9月例会 2011年 9月  
(愛知淑徳大学)

「Geoffrey Nauffts の *Next Fall* に見るゲイ／エイズ演劇の現在」 日本アメリカ文学会全国大会 2011年 10月  
(関西大学)

「家族崩壊の再演—アメリカ家族劇の系譜に見る August: Osage County」	全国アメリカ文学会中部支部特別例会 ワークショップ (愛知淑徳大学)	2011年 12月	発表者 兼司会
--	--	--------------	------------

## 文 嬉眞

〈その他〉(翻訳・資料・その他)

北朝鮮における言語政策—「第2次金日成教示」の全文翻訳—(単)	『愛知学院大学語研紀要』第36巻第1号	2011年 1月	191-228
---------------------------------	---------------------	-------------	---------

## 松浦國弘

〈論文〉

名古屋市宮屠場開設に至るまでの経緯と部落問題	『愛知学院大学教養部紀要』第59巻第1号	2011年7月	
------------------------	----------------------	---------	--

〈研究発表〉

戦前に見る結婚差別問題	第6回「戦後の人権問題及び部落問題研究会」 愛知人権ネット主催 (於ウイנק愛知)	2011年 3月21-22日	
-------------	--	-------------------	--

〈その他〉(翻訳・資料・その他)

愛知県・部落及びスラム関連年表 No. 33	「地域と人権」愛知地域人権連合機関紙 (No. 431)	2011年 1月	
愛知県・部落及びスラム関連年表 No. 34	「地域と人権」愛知地域人権連合機関紙 (No. 432)	2011年 2月	
愛知県・部落及びスラム関連年表 No. 35	「地域と人権」愛知地域人権連合機関紙 (No. 433)	2011年 3月	
愛知県・部落及びスラム関連年表 No. 36	「地域と人権」愛知地域人権連合機関紙 (No. 434)	2011年 4月	
愛知県・部落及びスラム関連年表 No. 37	「地域と人権」愛知地域人権連合機関紙 (No. 435)	2011年 5月	
愛知県・部落及びスラム関連年表 No. 38	「地域と人権」愛知地域人権連合機関紙 (No. 436)	2011年 6月	
愛知県・部落及びスラム関連年表 No. 39	「地域と人権」愛知地域人権連合機関紙 (No. 437)	2011年 7月	
愛知県・部落及びスラム関連年表 No. 40	「地域と人権」愛知地域人権連合機関紙 (No. 438)	2011年 8月	
愛知県・部落及びスラム関連年表 No. 41	「地域と人権」愛知地域人権連合機関紙 (No. 439)	2011年 9月	
愛知県・部落及びスラム関連年表 No. 42	「地域と人権」愛知地域人権連合機関紙 (No. 440)	2011年 10月	
愛知県・部落及びスラム関連年表 No. 43	「地域と人権」愛知地域人権連合機関紙 (No. 441)	2011年 11月	
愛知県・部落及びスラム関連年表 No. 44	「地域と人権」愛知地域人権連合機関紙 (No. 442)	2011年 12月	

## 八谷芳樹

### 〈論文〉

学校改革の戦略経営に関する方法論モデル— 『愛知学院大学教養部紀要』第59巻第2号 2011年 129-154  
校長は襷を繋ぐ駅伝走者— (共) 11月

### 〈その他〉(翻訳・資料・その他)

平成23年度愛知県学校経営講座 日本教育 企画、コーディネーター、ファシリテーター  
会愛知県支部主催 (蒲郡荘) 2011年 11月

### 講義

「学校改革を手法化する」 平成23年度愛知県学校経営講座 2011年  
主催 日本教育会愛知県支部 11月  
(蒲郡荘)

フォローアップ講座、フォローアップ研修会 企画、コーディネーター 2011年  
(平成23年度愛知県学校経営講座修了者対象) (ルブラ王山) 7月

日本キャリア教育学会中部地区部会委員 ~2011年  
5月

愛知県県政支援員

公益財団法人河合記念奨学財団理事

## 山下秀康

### 〈論文〉

Phase-space path integral and Brownian motion Journal of Mathematical Physics 52 2011年 022101  
2月

## 山名賢治

### 〈その他〉(翻訳・資料・その他)

科学的な考え方を学びながら楽しむ化学(科学) 独立行政法人 科学技術振興機構 2011年  
実験教室(熟年向け) 科学コミュニケーション連携推進事業 6月25日

科学的な考え方を学びながら楽しむ化学(科学) 独立行政法人 科学技術振興機構 2011年  
実験教室(中学生向け) 科学コミュニケーション連携推進事業 7月2日

青少年のための科学の祭典: 演示実験 豊橋大会 2011年  
1月22日

## 山野明男

### 〈著書〉

地理学の視点 株式会社あるむ 2011年 138  
3月

わたしのフィールドノート—熱帯・亜熱帯の 株式会社あるむ 2011年 139  
農業と農村— 6月

### 〈論文〉

長崎県諫早湾干拓地における営農展開II 『愛知学院大学教養部紀要』第58巻第4号 2011年 51-71  
(2009年~2010年) 3月

東日本大震災を通して東海地域の防災を考える 『愛知学院大学教養部紀要』第59巻第1号 2011年 1-21  
7月

〈学会発表〉  
 ナイル川に依存するエジプト農業の一考察 東海地理研究会第391回例会 2011年  
 (愛知学院大学栄サテライトセンター) 10月22日

〈その他〉(翻訳・資料・その他)  
 東日本大震災を通して東海地域の防災を考える 愛知学院大学教養部春学期 2011年  
 公開講演会 6月15日  
 水田農業の優位性 名古屋市高年大学鯉城学園講師 2011年  
 2月25日  
 地域への観察眼 名古屋市高年大学鯉城学園講師 2011年  
 5月25日  
 高等学校教科用図書選定協議会委員 名古屋市教育委員会 2011年度  
 学校評議員 名古屋市立名東高等学校 2011年度

## 吉井浩司郎

〈論文〉  
*The Woodlanders* の中にラディカルさを読み込むことは可能か? (単) 『愛知学院大学教養部紀要』第58巻第3号 2011年 53-67  
 2月

## 吉田道興

〈著書〉  
 古代中世日本の内なる「禪」「日本文化と禪僧たち―「禪文化」の成立と展開―」(共著) 勉誠出版〔アジア遊学142〕 2011年 263-276  
 5月

〈論文〉  
 高祖伝の形成と道正庵―策謀家道正庵十九世徳幽ト順― 曹洞宗総合研究センター 学術大会紀要 2011年 407-412  
 (第12回) 6月

〈学会発表〉  
 「新到列位問題」―安易な是認論を否定する 曹洞宗総合研究センター 第13回学術大会 2011年 10月

## 鷺嶽正道

〈論文〉  
 学生が「読める」英文の測定法：語彙密度、名詞化、節どうしの関係 『愛知学院大学教養部紀要』第59巻第1号 2011年 59-72  
 7月  
 マクロ・ジャンルとしての新聞 『Proceedings of JASFL』 Vol. 5 2011年 53-60  
 10月

〈学会発表〉  
 Multimodal Comparison of Print-Media News: Front-Page Stories in Japanese and English Newspapers The 38th International Systemic Functional Congress 於：リスボン大学 (ポルトガル・リスボン) 2011年 口頭発表  
 7月  
 日本語と英語の天気予報におけるマルチモダリティー 第19回日本機能言語学会秋期大会 2011年 口頭発表  
 10月



# 『教養部紀要』第59巻総目次

第1号（通巻第171号）平成23年7月発行

〈論文〉

- 山 野 明 男：東日本大震災を通して東海地域の防災を考える……………（1）  
Akio YAMANO : Consideration for Prevention of Disasters in Tokai Area through the Great Earthquake  
Disaster in East Japan
- 清 水 義 和：ヴァン・ゴッホと寺山修司  
—— M. C. エッシャーによって“ひまわり”を『田園に死す』の中に読む——……………（23）  
Yoshikazu SHIMIZU : Van Gogh and Shuji Terayama—Decode *Le soleil at Death in the Country* by M. C. Escher—
- 鷲 嶽 正 道：学生が「読める」英文の測定法——語彙密度、名詞化、節どうしの関係——……………（59）  
Masamichi WASHITAKE : Quantifying Students' Reading Ability:  
Lexical Density, Nominalization and Grammatical Intricacy
- Glenn D. GAGNE : Improving Language Acquisition Through Better Task Design……………（73）
- 北 田 豊 治：大学生における飲酒行動と態度に関する研究……………（81）  
Toyoharu KITADA : A Study on the Drinking Behavior and Attitude in College Students
- 松 浦 國 弘：名古屋市営屠場開設に至るまでの経緯と部落問題……………（144）  
Kunihiro MATSUURA : The Process of a Municipal Butchery having being Established in Nagoya and Buraku Problems

〈資料〉

- 川 口 高 風：名古屋の寺院に関する木版資料について(七)……………（124）  
Kōhū KAWAGUCHI : A Study of Wood Engraving Materials in Respect of Temples in Nagoya (7)

〈公開講座記録〉

- 清 忠 師：温暖化と私たちの未来……………（91）  
Tadanori SEI : Global Warming and Our Future

第2号（通巻第172号）平成23年11月発行

〈論文〉

- 尾 崎 孝 之：雨の「ものうさ」と雪の「悲しみ」——ポール・ヴェルレーヌと中原中也——……………（1）  
Takayuki OZAKI : “Langueur” de la pluie et “Tristesse” de la neige—Paul Verlaine et Choya Nakahara—
- 佐 々 木 真：iPadを用いた語学教育の現状と展望……………（15）  
Makoto SASAKI : Language Education on iPad: the Current Situations and the Future Prospects
- 清 水 義 和：寺山修司と W. シェイクスピアの“未知の国”——『花札伝綺』と『マクベス』——…（35）  
Yoshikazu SHIMIZU : “The Undiscovered Country” of Shuji Terayama & William Shakespeare  
—*The Folklore of Flower Card & Macbeth*—
- 都 築 正 喜：Recorded Voice Data の音声的考察（試論）……………（93）  
Masaki TSUDZUKI : Phonetic Analysis and Observation of Recorded Voice Data (Tentative)
- 八谷芳樹・池田輝政：学校改革の戦略経営に関する方法論モデル——校長は襷を繋ぐ駅伝走者——……………（129）  
Yoshiki YATSUYA and Terumasa IKEDA : A Methodological Model on School Change Management :  
A School Leader as an Ekiden Runner Carrying a Tasuki
- 川 口 高 風：「白鳥町家並帳」における法持寺の不動産について……………（212）  
Kōhū KAWAGUCHI : Houjiji Temple Property Recorded in the *Shiratori-cho Yanamicho*

〈資料〉

- 川 口 高 風：法持寺史関係略年表……………（198）  
Kōhū KAWAGUCHI : An Abridged Chronological Table Dealing with the History of Houjiji Temple

〈講演記録〉

- 岩 佐 宣 明：豊かさの質——「人間の尊厳」と CSR ——……………（155）  
Nobuaki IWASA : Human Dignity and CSR—Ethical Ways to Enjoy Affluence—

第3・4合併号（通巻第173号）平成24年3月発行

〈特別寄稿〉

- 稲垣正巳：教養教育——過去・現在・未来——……………（1）  
 Masami INAGAKI：General Education—Its Past, Present and Future
- 吉田道興：愛知学院大学の宗教教育試論——「建学の精神」のルーツを探して——……………（9）  
 Dōkō (Michioki) YOSHIDA：An Essay of Religious Education at Aichi Gakuin University  
 —Seeking for the Origin of the Spiritual Legacy of Our University’s Foundation—
- 山口正人：自然科学・化学と教養教育……………（27）  
 Masahito YAMAGUCHI：Natural Science, Chemistry and General Education
- 近藤勝志：教養部の英語教育……………（37）  
 Katsushi KONDO：English Education in Division of Liberal Arts

〈論文〉

- 山野明男：石川県河北潟干拓地における営農展開の一考察……………（43）  
 Akio YAMANO：A Consideration on Development of Agricultural Management in Kahoku-gata (Lagoon)  
 Reclaimed Land, Ishikawa Pref.
- 久馬栄道：数学における数の実在論について……………（65）  
 Eido KYUMA：The Realism of the Number in Mathematics
- 清水義和：マルセル・デュシャンと寺山修司  
 ——レディ・メイドとコンセプチュアル・アート——……………（73）  
 Yoshikazu SHIMIZU：Marcel Duchamp and Shuji Terayama—Ready-made and Conceptual Art—
- 清水義和：吉増剛造と寺山修司——詩人がイメージする映像論——……………（103）  
 Yoshikazu SHIMIZU：Gozo Yoshimasu & Shuji Terayama—On the picture by poets’ images—
- 都築正喜・神谷厚徳：A Study of Isochrony Theories in English……………（127）  
 Masaki TSUDZUKI and Atsunori KAMIYA：A Study of Isochrony Theories in English
- 都築正喜：Palatalness and Palatalization of Sounds for Speech Therapists (Part 1)……………（137）  
 Masaki TSUDZUKI：Palatalness and Palatalization of Sounds for Speech Therapists (Part 1)
- 河野敏宏：『三才図会』草木八卷～十一巻の出典——「証類本草」からの引用——……………（236）  
 Toshihiro KONO：The Authority of “SAN CAI TU HUI” Plant Volumes No. 8-11  
 —Quotation from “ZHENG LEI BEN CAO”—
- 河野敏宏：『三才図会』草木八卷～十一巻の出典——『救荒本草』『茹草編』からの引用——……………（222）  
 Toshihiro KONO：The Authority of “SAN CAI TU HUI” Plant Volumes No. 8-11  
 —Quotation from “JIU HUANG BEN CAO” & “RU BEN BIAN”—
- 川口高風：現代の仏教各宗の五条衣……………（202）  
 Kōhū KAWAGUCHI：On the *Gojōe* of Each Buddhist Denomination in the Modern Period
- 〈資料〉
- 川口高風：名古屋の寺院に関する木版資料について(Ⅳ)……………（184）  
 Kōhū KAWAGUCHI：A Study of Wood Engraving Materials in Respect of Temples in Nagoya (8)

## 執筆者紹介

稲垣 正 巳 (本学教授…………… フランス語)  
INAGAKI Masami

吉 田 道 興 (本学教授…………… 宗 教 学)  
YOSHIDA Dōkō (Michioki)

山 口 正 人 (本学教授…………… 化 学)  
YAMAGUCHI Masahito

近 藤 勝 志 (本学教授…………… 英 語)  
KONDO Katsushi

山 野 明 男 (本学教授…………… 地 理 学)  
YAMANO Akio

久 馬 栄 道 (本学准教授…………… 数 学)  
KYUMA Eido

清 水 義 和 (本学教授…………… 英 語)  
SHIMIZU Yoshikazu

都 築 正 喜 (本学教授…………… 英 語)  
TSUDZUKI Masaki

神 谷 厚 徳 (岩手県立大学准教授… 英 語)  
KAMIYA Atsunori

河 野 敏 宏 (本学教授…………… 文 学)  
KONO Toshihiro

川 口 高 風 (本学教授…………… 宗 教 学)  
KAWAGUCHI Kōhū

## 教 養 教 育 研 究 会 委 員

(会長) 稲垣正巳 (副会長) ※岡島秀隆

(会計) 北村伊都子

※糸井川修 河合泰弘 ※小林秀一

城貞晴 ※前山慎太郎 松浦國弘

※八谷芳樹 山口均 ※山下秀康

鷲嶽正道

※本号編集委員

## 編 集 後 記

今年度の最終号となる『教養部紀要』第59巻第3・4合併号を、お届けします。本学の教養部設立から40周年の佳節を迎え、今号は記念特集号とさせていただきます。巻頭には、教養部の歴史、建学の理念、教養教育の特色等について、現教養部長と教養部長経験者の先生方の貴重な寄稿が掲載されています。また、合併号となったこともあり、力作の論文9本と資料1編という、読みごたえのある紀要となりました。ご寄稿、ご投稿下さった先生に御礼申し上げます。

昨年は、東日本大震災という過酷な試練が日本を襲い、だれもが自身の生活を振り返り、生きることの意味や尊さ、人間の絆の大切さを考える年となりました。この未曾有の震災に関連させて、教養教育研究会の講演会も、春学期は本学教養部教授の山野明男先生による「東日本大震災を通して東海地域の防災を考える」(平成23年6月15日)、秋学期は東北大学教育学部准教授の李仁子(イ・インジャ)先生による「東日本大震災の被災地における『死と供養』」(平成23年11月22日)という、意義深いテーマで開催することができました。あらためて講師の先生に御礼申し上げます。

本誌が発刊されるのは、大震災から一年が過ぎ、二度目の春が近づく頃と思われます。被災地における力強い復興を心よりお祈り申し上げます。(糸井川)

平成24年3月25日 印刷  
平成24年3月30日 発行

(非売品)

愛知学院大学論叢  
教養部紀要第59巻  
第3・4合併号 (通巻第173号)

編集責任者  
稲垣正巳

---

発行者 愛知学院大学  
教養教育研究会  
〒470-0195

愛知県日進市岩崎町阿良池12  
電話 〈0561〉(73) 1111 (代表)

印刷所 株式会社あるむ  
電話 〈052〉(332) 0861

# THE JOURNAL OF AICHI GAKUIN UNIVERSITY

## *Humanities & Sciences*

Vol.59 No.3, 4  
(Whole Number 173)

The Memorial Issue for the 40th Anniversary of Division of General Education

### CONTENTS

#### Special Contributions

- Masami INAGAKI : General Education—Its Past, Present and Future ..... ( 1 )  
Dōkō (Michioki) YOSHIDA : An Essay of Religious Education at Aichi Gakuin University  
—Seeking for the Origin of the Spiritual Legacy of Our University’s Foundation— ..... ( 9 )  
Masahito YAMAGUCHI : Natural Science, Chemistry and General Education ..... ( 27 )  
Katsushi KONDO : English Education in Division of Liberal Arts ..... ( 37 )

#### Articles

- Akio YAMANO : A Consideration on Development of Agricultural Management in Kahoku-gata (Lagoon)  
Reclaimed Land, Ishikawa Pref. .... ( 43 )  
Eido KYUMA : The Realism of the Number in Mathematics ..... ( 65 )  
Yoshikazu SHIMIZU : Marcel Duchamp and Shuji Terayama—Ready-made and Conceptual Art— ..... ( 73 )  
Yoshikazu SHIMIZU : Gozo Yoshimasu & Shuji Terayama—On the picture by poets’ images— ..... (103)  
Masaki TSUDZUKI and Atsunori KAMIYA : A Study of Isochrony Theories in English ..... (127)  
Masaki TSUDZUKI : Palatalness and Palatalization of Sounds for Speech Therapists (Part 1) ..... (137)  
Toshihiro KONO : The Authority of “SAN CAI TU HUI” Plant Volumes No. 8- 11  
—Quotation from “ZHENG LEI BEN CAO”— ..... (236)  
Toshihiro KONO : The Authority of “SAN CAI TU HUI” Plant Volumes No. 8- 11  
—Quotation from “JIU HUANG BEN CAO” & “RU BEN BIAN”— ..... (222)  
Kōhū KAWAGUCHI : On the *Gojoue* of Each Buddhist Denomination in the Modern Period ..... (202)
- #### Materials
- Kōhū KAWAGUCHI : A Study of Wood Engraving Materials in Respect of Temples in Nagoya (8) ..... (184)
- #### Achievements (2011)
- ..... (237)
- Vol. 59 The Total Contents ..... (247)

Published  
by

Aichi Gakuin University  
Nagoya, Japan  
2012